

上信越自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅢ

小野沢西遺跡

2 0 0 4

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

上信越自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅢ

おの^のざわ^{にし}西遺跡

2004

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上信越自動車道は、首都圏と上越地方を結ぶ幹線道路として、群馬県藤岡ジャンクションから分岐し、群馬県・長野県を経て新潟県上越市に至る全長203kmの高速自動車国道です。これによって、関越・磐越自動車道と並び、日本海側と太平洋側を結ぶ大動脈として、沿線地域の発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

新潟県教育委員会は、昭和63年度から建設用地内の埋蔵文化財について調査を開始し、平成7年度には長野県境～中郷インターチェンジ間の発掘調査を、平成9年度には中郷インターチェンジ～上越ジャンクション間の発掘調査を終了して、県内全線の調査業務を完了しました。

本書は上信越自動車道建設用地内において、平成5年度から7年度に行った小野沢西遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、妙高山麓を流れ下る数条の沢跡が発見され、中から縄文時代～古墳時代の遺物が大量に出土しました。とくに弥生時代後半の土器には信州地方の影響を受けた土器をはじめとして様々な地域の土器が出土し、北国街道沿いにある当遺跡を含む県境一帯が越後と信濃を結ぶ交通上の要地であったことが推定されます。

今回の調査成果が、歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助を賜った妙高村教育委員会ならびに地元の方々をはじめ、日本道路公団新潟建設局（現・北陸支社）・同上越工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

新潟県教育委員会

教育長 板屋越 麟一

例 言

- 1 本書は新潟県中頸城郡妙高村大字関山字大峯・小野沢西ほかに所在する小野沢西遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は上信越自動車道の建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。
- 3 発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委）が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が平成5～7年度に調査を実施した。
- 4 整理および報告にかかる作業は平成15年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。
- 5 出土遺物と整理にかかる資料はすべて県教委が保管・管理している。遺物の註記記号は「オノ西」とし、出土地点・層位などを併記した。
- 6 グリッド杭の打設は有限会社中郷測量に委託した。
- 7 本書で示す北方位は日本平面直角座標Ⅷ系（旧測地系）のX軸方向を指しており、真北から0度10分9秒西偏している。
- 8 作成した挿図・図版のうち、既存の図を使用した場合にはそれぞれにその出典を記した。
- 9 掲載した遺物の番号は、縄文土器、縄文時代の石器、弥生～古墳時代の遺物、古代・中世の遺物でそれぞれ通し番号を付し、遺物実測図版と写真図版の番号は一致している。
- 10 文中の注釈はページごとの脚注とした。また、引用参考文献は著者および発行年を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 11 本書の編集・執筆は土橋由理子（埋文事業団調査課班長）が担当した。ただし、第Ⅱ章は県教委・埋文事業団の既刊報告書等を一部改変して転載した。詳細は第Ⅱ章文末に記す。
- 12 本書作成作業の一部は株式会社セビラスに委託した。詳細は第Ⅰ章に記す。
- 13 本遺跡については『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』[土橋1995、武田1996]、『埋文にいがた』[武田1995、土橋2003]に記載されているが、本書の記述をもって正式な報告とする。上記『年報』等と本書に齟齬がある場合は、本書の記述をとるものとする。
- 14 中部高地系土器については千野浩氏（長野市教育委員会）に御教示をいただいた。
- 15 縄文土器・弥生土器については石川日出志氏（明治大学文学部）・渡邊朋和氏（新津市教育委員会）に御教示をいただいた。
- 16 発掘調査から本書の製作に至るまで、下記の方々から多大な御教示を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略・五十音順）
相田泰臣 石川日出志 赤澤徳明 甘粕 健 伊藤秀和 遠藤恭雄 川村浩司 小島正巳
坂井秀弥 笹澤 浩 笹澤正史 高橋 勉 高橋春栄 千野 浩 辻 秀人 橋本博文
早津賢二 久田正弘 渡邊朋和

目 次

第 I 章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	2
A 一次調査	2
B 二次調査	2
C 調査体制	4
3 整理の方法と経過	5
第 II 章 遺跡を取りまく環境	6
1 地質的環境	6
2 地理的環境	6
3 歴史的環境	7
A 弥生時代	7
B 古墳時代	8
第 III 章 層序と遺構	11
1 グリッドの設定	11
2 層 序	11
A 基本層序	11
B 自然流路	11
3 遺 構	16
A ピ ッ ト	16
B その他の遺構	16
第 IV 章 遺 物	18
1 概 要	18
2 縄文時代	18
3 弥生時代中期～古墳時代	19
A 土器の調整	19
B 土器分類	20
C 各 説	35
4 古代・中世	39
第 V 章 ま と め	42
1 弥生時代中期	42

2 弥生時代後期～古墳時代	42
---------------	----

《要 約》	47
-------	----

《引用文献》	47
--------	----

《観察表》	52
-------	----

挿図目次

第 1 図 上信越自動車道路線図	1	第 13 図 弥生時代後期～古墳時代前期 (区分 2) の土器 (2)	25
第 2 図 一次調査トレンチ位置図	2	第 14 図 弥生時代後期～古墳時代前期 (区分 2) の土器 (3)	26
第 3 図 調査範囲の区割	3	第 15 図 弥生時代後期～古墳時代前期 (区分 2) の土器 (4)	27
第 4 図 周辺の遺跡	9	第 16 図 古墳時代中期～後期 (区分 3) の土器 (1)	31
第 5 図 主な自然流路の名称	11	第 17 図 古墳時代中期～後期 (区分 3) の土器 (2)	32
第 6 図 グリッド設定図	12	第 18 図 古墳時代中期～後期 (区分 3) の土器 (3)	33
第 7 図 基本層序	13	第 19 図 底部径組成図 (1)	40
第 8 図 縄文土器分布図	18	第 20 図 底部径組成図 (2)	41
第 9 図 石器分布図	18		
第 10 図 弥生時代中期の土器	21		
第 11 図 弥生時代後期～古墳時代の土器 各部名称	23		
第 12 図 弥生時代後期～古墳時代前期 (区分 2) の土器 (1)	24		

表目次

第 1 表 周辺の遺跡一覧表	8	第 4 表 土器組成表 (2)	41
第 2 表 土器組成表 (1)	40	第 5 表 底部調整集計表 (2)	41
第 3 表 底部調整集計表 (1)	40	第 6 表 編年対応表	46

図版目次

[図 面]	
図版 1 遺構全体図	図版 14 弥生～古墳時代の遺物 (5) SD1・SD2
図版 2 分割図 (1)	図版 15 弥生～古墳時代の遺物 (6) SD2
図版 3 分割図 (2)	図版 16 弥生～古墳時代の遺物 (7) SD2
図版 4 個別図 (1)	図版 17 弥生～古墳時代の遺物 (8) SD2
図版 5 個別図 (2)	図版 18 弥生～古墳時代の遺物 (9) SD2
図版 6 個別図 (3)	図版 19 弥生～古墳時代の遺物 (10) SD3・SX1
図版 7 個別図 (4)	図版 20 弥生～古墳時代の遺物 (11) SD3・SX1・SX2
図版 8 縄文時代の遺物 (1)	図版 21 弥生～古墳時代の遺物 (12) SD3・SX2・SD5・沢 1
図版 9 縄文時代の遺物 (2)	図版 22 弥生～古墳時代の遺物 (13) 包含層ほか
図版 10 弥生～古代時代の遺物 (1) SD1	図版 23 弥生～古墳時代の遺物 (14) 包含層ほか
図版 11 弥生～古墳時代の遺物 (2) SD1	図版 24 弥生～古墳時代の遺物 (15) 包含層ほか
図版 12 弥生～古墳時代の遺物 (3) SD1	
図版 13 弥生～古墳時代の遺物 (4) SD1	

図版 25 弥生～古墳時代の遺物 (16) 包含層ほか
図版 26 弥生～古墳時代の遺物 (17) 包含層ほか
図版 27 弥生～古墳時代の遺物 (18) 包含層ほか

図版 28 弥生～古墳時代の遺物 (19) 包含層ほか
図版 29 弥生～古墳時代の遺物 (20) 包含層ほか
図版 30 古代・中世の遺物

[写 真]

図版 31 遠景・調査区完掘 (1) '94、'95 I・II①・II②区
図版 32 調査区完掘 (2) '95 II③・II④区・基本層序・沢1・SD1
図版 33 SD1・遺物出土状況
図版 34 SD2・SD3・SD5・SX1・SX2
図版 35 SX1・SX2・小礫集中域
図版 36 Pit7・8・17～19、'94小礫集中域周辺完掘、SD14
図版 37 縄文時代の遺物 (1)
図版 38 縄文時代の遺物 (2)・弥生～古墳時代の遺物 (1) SD1
図版 39 弥生～古墳時代の遺物 (2) SD1
図版 40 弥生～古墳時代の遺物 (3) SD1
図版 41 弥生～古墳時代の遺物 (4) SD1・SD2

図版 42 弥生～古墳時代の遺物 (5) SD2
図版 43 弥生～古墳時代の遺物 (6) SD2
図版 44 弥生～古墳時代の遺物 (7) SD2
図版 45 弥生～古墳時代の遺物 (8) SD2・SD3・SX1
図版 46 弥生～古墳時代の遺物 (9) SD3・SX1
図版 47 弥生～古墳時代の遺物 (10) SX2・SD5・沢1・包含層ほか
図版 48 弥生～古墳時代の遺物 (11) 包含層ほか
図版 49 弥生～古墳時代の遺物 (12) 包含層ほか
図版 50 弥生～古墳時代の遺物 (13) 包含層ほか
図版 51 弥生～古墳時代の遺物 (14) 包含層ほか
図版 52 弥生～古墳時代の遺物 (15) 包含層ほか
古代・中世の遺物

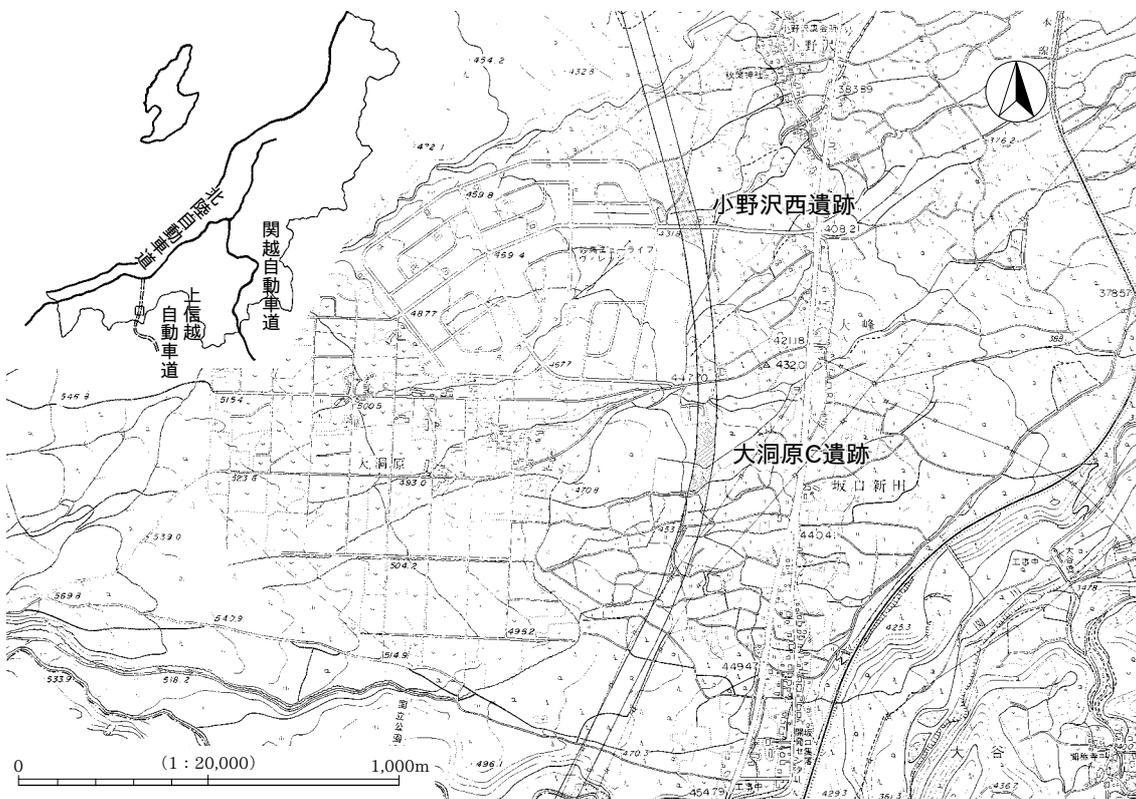
第I章 序 説

1 調査に至る経緯

上信越自動車道（以下、上信越道）は、群馬県藤岡ジャンクションから新潟県上越ジャンクション間の延長203kmにわたる高速自動車国道であり、関越自動車道と長野自動車道を結んでいる。

小野沢西遺跡にかかる上信越道第10次施工命令区間（長野県中野市～新潟県中頸城郡中郷村）は昭和63年9月に施工命令が出され、これ以後、用地内の遺跡分布調査・試掘調査などに関する協議が本格化した。新潟県教育委員会（以下、県教委）は日本道路公団（以下、公団）の依頼を受けて同年11月14日から同月19日に、第10次施工命令区間3町村（妙高高原町・妙高村・中郷村）の踏査を行い、周知の14か所、新発見の遺跡2か所、遺跡推定地7か所、総計848,000m²について確認調査や試掘調査が必要である旨、公団新潟建設局に回答している（昭和63年12月21日付け、教文第1002号）。

本報告書の遺跡はこの時点では存在が確認されていなかったが、新発見の遺跡（調査地点No.14）として取り上げられ、平成5年10・11月に27,400m²を対象に一次調査が実施された。調査の結果土師器片が出土したため、小野沢西遺跡として県教委の遺跡台帳に登録した。平成6年6月には前年度に未伐採のため調査できなかった8,200m²を対象として追加の一次調査を行い、二次調査必要範囲を確定した。県教委は一次調査の結果を受けて13,870m²について二次調査が必要であると公団に通知した。二次調査は平成6年9～11月と平成7年4～10月の2か年に分けて実施した。



第1図 上信越自動車道路線図

〔原図：妙高村都市計画図2 昭和58年9月調整〕

2 調査の方法と経過

A 一次調査

平成5年度と平成6年度に27,400m²を対象に調査を実施した(第2図)。調査は対象地の任意の位置に試掘坑(トレンチ)を設定し、バックホーを使用して徐々に掘り下げながら、調査員による精査を併行して行い、遺構・遺物の有無、土層の堆積状況を確認する方法で行った(第2図)。

平成5年度は高速道路法線センター杭STA436+80～STA441+70の間で27か所(1,370m²)のトレンチを調査した。そのうち8か所から土師器が出土し、1か所で古墳時代とみられる土坑が検出された。村道大京線以北の一部は雑木未伐採のため十分な調査ができなかったが、土師器が表面採集されることからSTA438～439に遺構・遺物が集中すると推定され、STA437+60～440+20の範囲について二次調査が必要であると判断した。

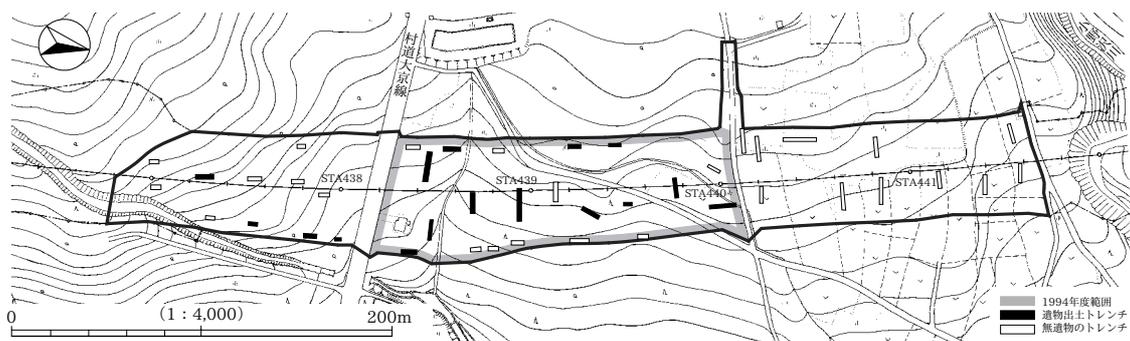
平成6年度は、前年度に調査ができなかったSTA438+20～440+10の範囲を対象として、二次調査範囲の北限を再確認する目的で調査を実施した。16か所のトレンチを調査した結果、9か所で遺物が出土し、3か所で溝状の遺構、1か所で自然流路が検出された。自然流路では焼山火山灰(KG-c)の堆積が確認された。調査の結果、対象範囲内ではほぼ一様に遺物の出土を見たため、前年度に二次調査が必要とした範囲を変更することはせず、STA437+60～440+20の間13,870m²を二次調査対象範囲とすることとした。

B 二次調査

二次調査は平成6(1994)年度と平成7(1995)年度に実施した。6年度は村道大京線の南側2,300m²を、7年度は村道以北11,570m²を調査した(以下、調査区を示す際には6年度を「94」、7年度を「95」と略す)。6・7年度ともに、包含層および自然流路出土遺物は層位別に小グリッド一括で取り上げ、地形測量・遺構平面実測は平板測量で行った。出土した遺物量は浅箱換算で6年度が4箱、7年度が130箱である。

6年度

表土除去は9月26日からバックホー1台で行った。後に沢1と呼称する範囲は、調査前からすでに浅い沢となっており、底の方の土は水分を多く含んでいた。この部分は表土より下の土層もバックホーで掘削し、遺物が出た場合には作業員による精査を行った。



第2図 一次調査トレンチ位置図

遺構は土坑数基が検出されたほか、小礫を敷き詰めた道状に見える部分が2か所検出されたため、「道状遺構」と仮称し調査を進めた。小礫に混じり珠洲焼製円盤も出土したため、該当範囲の小礫を採取し、調査終了後に土器等を選別した。11月18日までにすべての記録作業を終え、現場を撤収した。

7年度

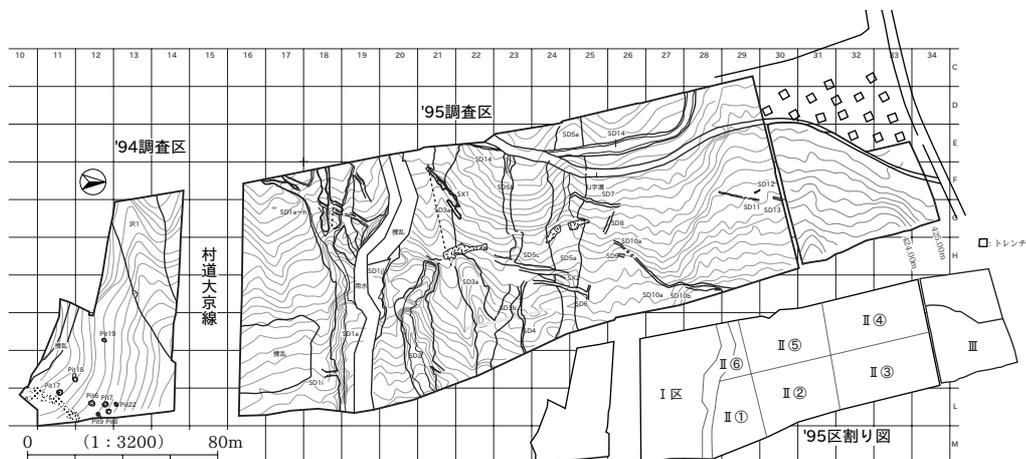
7年度は調査区をⅠ～Ⅲ区に分け、Ⅱ区をさらに6分割して調査を進めた(第3図)。4月17日から表土除去を開始し、Ⅰ～Ⅲ区の順に進めた。Ⅰ区ではこの段階でも大量の遺物が出土したが、Ⅱ③・④区以北ではほとんど遺物が出土しなかった。そのためⅢ区は表土除去に先立ち人力でトレンチ掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認した。この結果、ともに検出されなかったため、バックホーを用いて地山上面(第Ⅲ章2A参照)まで掘削した。Ⅱ③・④区にもトレンチを入れたが、Ⅱ④区で遺物が5点出土したのみであったので、ここもバックホーで地山上面まで掘削した。

表土除去と併行してⅠ区から作業員による発掘調査を開始した。Ⅰ区ではⅡ層から大量の遺物が出土し、7月に入り検出されたSD1でも、Ⅱ層やその下の砂層・砂層に挟まれた黒色土から土器が出土した。出土土器はⅡa・Ⅱb層以外は堆積土の中ほどに見られた焼山火山灰層(KG-c)を目安に、その上下等を記録して取り上げたため、セクション図に記載された層位番号とは一致しない。これはⅡ区で検出された自然流路に関しても同様である。なお、Ⅰ区村道際は最近の建物の基礎により攪乱されており、遺物の残存状況は良好とは言えない状況であった。

Ⅱ区では表土掘削の段階でSD2・SD3・SD5が検出された。SD3・SD5では遺物の出土する範囲に限られていたので、始めに流路の輪郭を確定し、流路に直交する方向で2m幅のトレンチを4m間隔で掘削し、遺物が出土するとその周辺を面的に掘り広げるという方法で調査を進めた。遺物の出土が希薄で人力精査を行わなかった部分については、最終的にバックホーを用いて地山上面まで掘削した。

7年度調査区においても6年度調査区で道状遺構と仮称した小礫を敷き詰めたような箇所が何か所か検出され、「SX」あるいは「石敷」として記録を作成した。しかし、SD1e等自然流路の底面でも同様のものが検出されたため、これらは遺構ではなく自然の堆積によるものと考えた方が妥当と判断するに至った。最終的に遺構と判断されたのは近世の溝SD14と時期不明の溝SD10～13のみであった。

9月下旬までにⅡ区②・③、10月上旬には残るⅡ区⑤・⑥の調査を終え、10月16日に現場を撤収した。



第3図 調査範囲の区割

2 調査の方法と経過

C 調査体制

平成5（1993）年度

一次調査 調査期間 平成5年10月25～29日 11月8～11日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管 理	藍原 直木（事務局長） 渡辺 耕吉（総務課長）
庶 務	藤田 守彦（総務課主事）
調査総括	茂田井信彦（調査課長）
調査指導	藤巻 正信（調査課調査第一係長）
調査担当	小池 義人（調査課専門員）
調査職員	佐藤 正知（調査課主任） 藤田 豊明（調査課主任） 武田 孝昭（調査課専門員）

平成6（1994）年度

一次調査 調査期間 平成6年6月20～28日

二次調査 調査期間 平成6年9月7日～11月18日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管 理	藍原 直木（事務局長） 渡辺 耕吉（総務課長）
庶 務	泉田 誠（総務課主事）
調査総括	茂田井信彦（調査課長）
調査指導	藤巻 正信（調査課調査第一係長）
調査担当	土橋由理子（調査課文化財調査員）
調査職員	大滝 良夫（調査課主任調査員）

平成7（1995）年度

二次調査 調査期間 平成7年4月24日～10月18日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

調 査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 平野清明）

管 理	藍原 直木（事務局長） 山上 利雄（総務課長）
庶 務	泉田 誠（総務課主事）
調査総括	亀井 功（調査課長）
調査指導	藤巻 正信（調査課調査第一係長）
調査担当	武田 孝昭（調査課文化財調査員）
調査職員	星 奈津子（調査課文化財調査員） 山田 昇（調査課嘱託員）

3 整理の方法と経過

出土遺物の水洗・註記作業は、発掘調査と並行して調査現場および埋文事業団曾和分室で行った。註記は手書きのほか、インクジェット方式による註記機械を併用した。接合・復元作業の一部は平成8年度に同分室で行った。

報告書作成作業は、平成8年度に新津市に新設された新潟県埋蔵文化財センターにおいて平成15年度に実施した。作業内容は以下の通りである。

遺物 事業団職員が、接合および実測遺物の選出・図化・トレース・写真撮影（デジタルカメラ ニコン D100を使用）を行った。

遺構 遺構の製図作業は、原図および仮版作成を事業団職員が行い、トレース・版組みを株式会社セビアスに委託した。

版下作成・印刷製本 版下作成から印刷製本にかかる作業については、デジタル化に適応して従前の手法を転換し、トレースの一部と版構成作業を株式会社セビアスに委託するとともに、印刷業者の作業を印刷・製本に限定した。委託した業務は遺構図面などのコンピュータトレースと従来印刷業者が行っていた版構成作業一般であり、埋文事業団は本文・図版のレイアウトを含む編集作業を行い、以下の資料を支給した。

本文・挿図：テキスト形式・Microsoft社Excel形式のデータ、貼り込み版下

遺構図面図版：原図コピー・レイアウト図案・文字データ

遺物図面図版：個々のトレース図・レイアウト図案・拓影・文字データなど

遺構写真図版：遺構写真のCD-R・レイアウト図案

遺物写真図版：遺物写真のCD-RW・レイアウト図案

整理期間 平成15年4月1日～平成16年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

整 理 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 板屋越麟一）

総 括	黒井 幸一（事務局長）
管 理	長谷川二三夫（総務課長）
庶 務	高野 正司（総務課班長）
整理総括	藤巻 正信（調査課長）
整理指導	高橋 保（調査課整理担当課長代理）
整理担当	土橋由理子（調査課班長）
作 業	和泉 裕子 小熊 洋子 小倉 睦子 中川 祥子 吉原 智子（以上、嘱託員）

第Ⅱ章 遺跡を取りまく環境

1 地質的環境

妙高山は噴火活動によって形成された火山体であり、外輪山である神奈山、赤倉山などと共に「妙高火山」と総称される。この周辺には多くの火山体が集中しており、妙高山の南側には黒姫山、飯綱山が一直線に並び、西側には佐渡山と焼山が南北に位置する。野尻湖を挟んで東側には斑尾山が位置し、これら6つの成層火山の集まりを妙高火山群と呼んでいる〔早津1985〕。

今から数十万年前に始まった妙高火山の活動によって噴出された噴出物は、周辺地域の地形形成に大きな影響を及ぼしている。

小野沢西遺跡周辺の地形を規定しているのは、今から約4,000～4,500年前に噴出された「大田切川火砕流」の堆積物である。この火砕流は北地獄谷から大田切川に沿って流れ、片貝川と小二俣川に挟まれた地域に分布し、妙高村北東側の隅にまで達した〔早津前掲〕。これ以降大幅に地形を変えるような噴火は起こっていないので、約4,000年前には現地形に近い様相を呈していたものと考えられる。

確認できる妙高火山の最後の活動は約2,600～3,000年前に起きたと考えられる水蒸気爆発で、同じ頃焼山でも噴火活動が開始された。

焼山火山東方の火打山から妙高山にかけて点在する天狗の庭・高谷池・黒沢池などの湿原の堆積物中には、高谷池火山灰層グループ(KG)〔早津・新井1985〕と呼ばれる火山灰層が何枚も挟まれている。これらの火山灰層のうち、その分布と岩質から焼山起源であることが明らかな火山灰層を、上位のものからKG-a～KG-eと呼称している〔早津1994〕。本遺跡でも自然流路中でKG-cの二次堆積物が検出された。

KG-cは焼山起源の火山灰層の中では最も分布範囲が広く、焼山の東方一帯、新井市の周縁部まで広がっている。層相は遠方では土壌の挟みは認められず、灰白色～桃灰色を呈する1層の火山灰層として産出する。噴出時期は、考古遺物との層位関係と¹⁴C年代値より、今から約1,000年前の平安時代であることが確認されている。さらに新井市杉明遺跡〔高橋勉1989〕で10世紀後半の遺物包含層の直下に産出することから、10世紀後半ないしその直前に限定できると考えられている。

2 地理的環境

小野沢西遺跡の所在する新潟県中頸城郡妙高村は妙高山東麓に位置する。村域の南西部は、村名の由来ともなっている妙高山(標高2,454m)をはじめ、西側は火打山などの山々が西頸城山地を形成している。村域の東側は東頸城郡松之山町の天水山から西へ弧を描くように延びる関田山脈の南端にあたり、長野県飯山市方面との境をなす。

妙高村の中央部付近には関川が北流する。関川は火打山・焼山の山腹に源を発し、妙高山と黒姫山の間を谷を刻みながら東流し、妙高山の南東側、妙高原町関川付近で北に進路を変える。この後、大田切川や矢代川等の河川と合流しながら穀倉地帯である高田平野を潤し、日本海に注ぐ。

この関川を境に、妙高村域の両岸の地形は異なった様相を見せている。関川右岸は東頸城丘陵に続く関

田山脈の広い丘陵地となっているが、左岸は妙高火山の活動によって形成された広大な緩傾斜地が広がる。

本遺跡は関川の左岸、妙高山東側の緩傾斜地に位置し、標高は423～427mを測る。遺跡の南側約1.7kmには妙高山北地獄谷に源を発する大田切川が深い谷を刻んで東流し、南東約1.8kmの地点で関川に合流する。

遺跡の東側約300mの所には日本海側と長野盆地を結ぶ国道18号が南北方向に走っている。現在の路線に改築整備される以前の国道18号は、かつての北国街道にあたる。縄文時代においても、信州産黒曜石が頸城地方に搬入されていることなどから、街道として整備される以前から人々の往来があったと推測される。本遺跡はその交通路と距離をおかない場所に位置していたものと考えられる。

3 歴史的環境

A 弥生時代

弥生時代の遺跡の分布域は、新潟県側では関川流域の沖積地・西頸城丘陵東縁・妙高山麓、長野県側では野尻湖周辺・長野盆地（善光寺平）・飯山盆地に大別される。長野県側、特に長野盆地に比べて、新潟県側のそれは希薄である。

関川流域の沖積地では、中島廻り遺跡・子安遺跡・本郷新田遺跡・池山遺跡・上百々遺跡・吹上遺跡がある。上百々遺跡では中期の栗林式・後期の箱清水式がややまとまって出土している〔高橋勉1985a〕。吹上遺跡では弥生中期の銅鐸形土製品や、玉作り関係の資料が一括出土した。大規模な集落であった可能性があるが、弥生後期には墓域へと転換しており、方形周溝墓群が検出された〔上越市教育委員会2002〕。

丘陵部には高地性集落の斐太遺跡・裏山遺跡・下馬場遺跡等がある。斐太遺跡は弥生時代末期～古墳時代初頭の比較的短い期間に営まれた遺跡である〔駒井・吉田1962〕。近年の分布・確認調査で、沢を挟んで隣接する丘陵でも埋没住居が多数発見され、地域の拠点集落であったことを窺わせる〔佐藤ほか2002〕。裏山遺跡は標高92mの山頂に築かれた弥生時代後期の高地性集落で、8基の竪穴建物跡が確認された〔小池ほか2000〕。下馬場遺跡では後期後半の竪穴建物14基などが検出され〔小池1998〕、これに隣接する下馬場古窯跡群でも尾根上の舌状台地で埋まりきっていない竪穴建物4基が確認され、2号住居とその周辺から弥生時代後期の土器が出土している〔小島1989〕。

妙高山麓では中部高地系の土器を出土した遺跡が散見される。中期では栗林式土器を出土した上中島遺跡〔飯坂ほか2000〕、後期では箱清水式土器を出土した伏見遺跡〔新潟県埋蔵文化財包蔵地カード（妙高原町）〕・籠峰遺跡〔親跡・野村編2000〕・大洞原C遺跡〔三ツ井ほか1997〕・上中島遺跡・野林遺跡〔飯坂ほか前掲〕がある。籠峰遺跡に隣接する和泉A遺跡では縄文時代晩期～弥生時代前期のまとまった資料が出土している〔加藤・荒川1999〕。

野尻湖周辺の弥生時代の遺跡は集落跡は検出されていないが、大平B遺跡で箱清水式土器4個体が集中して出土し、善光寺平から日本海へ抜けるルートのキャンプ地点であったと推定されている〔中島2000〕。

長野盆地の高丘丘陵では、中期～後期の遺跡として栗林遺跡、七瀬遺跡、西条・岩船遺跡群、安源寺遺跡、間山遺跡などがある。このうち栗林式土器の標識遺跡である栗林遺跡では中期後半～後期にかけての集落跡が検出された。七瀬遺跡では在来の箱清水系土器に伴って、北陸・東海地方を中心とする外来系土器が多量に出土した〔関・中島ほか1994〕。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の時期ではがまん淵遺跡と牛出古窯遺跡で集落跡、沢田鍋土遺跡で粘土採掘坑群が検出された。がまん淵遺跡は長野県内では

じめて検出された高地性集落である〔鶴田・中島^{ほか}1997〕。

飯山盆地では千曲川左岸の長峰丘陵上に遺跡が多く存在する。中でも小泉遺跡では中・後期の集落跡や、中期の木棺墓群などが検出されている。照丘遺跡では栗林式土器・建築用材と推定される木製品等が出土した〔小林1994〕。

B 古墳時代

(1) 古墳

高田平野は新潟県内最大の古墳集中域であり、平野周辺の丘陵上を中心に中・後期の群集墳が密集している。また、近年上越市域および南部の沖積地調査が相次いだ結果、地表下1m以下の遺跡の存在が確認された。沖積層に埋没した前期の集落、古墳・周溝墓の存在は、時期による集落域・墓域の変遷を示す。

沖積面の古墳あるいは周溝遺構 子安遺跡では弥生時代末～古墳時代初頭の周溝遺構が2基検出された〔上越市教育委員会1993〕。中島廻り遺跡では古墳2基〔小島1991〕、月岡遺跡では5世紀中頃の古墳3基が検出された〔高橋勉1985b〕。杉明遺跡では直径4mの円弧状の溝が検出され、小円墳と推定されている〔高橋勉1993〕。

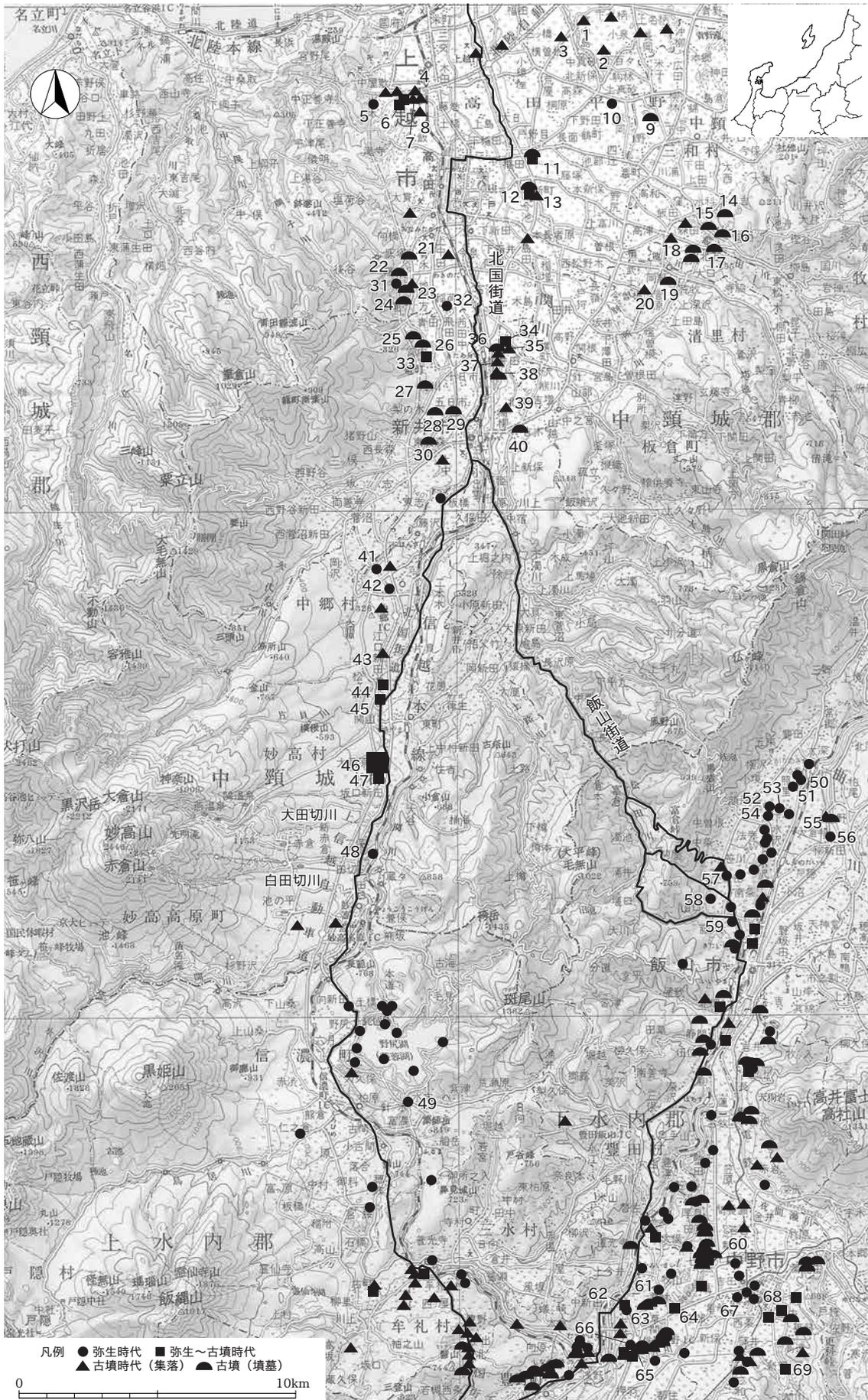
西頸城丘陵東縁 西頸城山地から広がる丘陵の東縁には7群、総計190基前後の古墳が分布しており、矢代川中流域の古墳群と合わせて「頸城西部古墳群」と総称される〔金子・高橋保・秦^{ほか}1980〕。古墳群は北から灰塚古墳群、黒田古墳群、南山古墳群、稲荷山古墳群、青田古墳群、観音平古墳群、天神堂古墳群と呼ばれている。これらの大半が径10m前後の小規模墳で、径20mを超えるものが若干存在するとされてきたが、最近の観音平古墳群における確認調査〔佐藤^{ほか}2002〕で、4号墳が主軸長33.6mの前方後円墳であることが明らかとなった。頸城平野では菅原古墳を凌ぐ最大規模のものである〔橋本博文2002〕。

矢代川中流域の古墳 新井市の南西部にあり、妙高山の火山性堆積物が形成した緩斜面上に立地する。梨ノ木古墳群、谷地林古墳群、小丸山古墳群がある。

飯田川・櫛池川扇状地の古墳群 「頸城東部古墳群」と総称される〔金子・高橋保・秦^{ほか}前掲〕。これには水吉古墳群、宮口古墳群、水科古墳群、高士古墳群、菅原古墳群、北方古墳群があり、総計200

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	北割遺跡	19	菅原古墳群	36	杉明遺跡	54	東長峰遺跡
2	前田遺跡	20	岡嶺遺跡	37	栗原遺跡	55	上野遺跡
3	津倉田遺跡	21	灰塚古墳群	38	月岡遺跡	56	大倉崎遺跡
4	一之口遺跡	22	黒田古墳群	39	宮ノ本遺跡	57	北原遺跡
5	裏山遺跡	23	南山古墳群	40	西俣1号墳	58	鍛冶田遺跡
6	山畑遺跡	24	稲荷山古墳群	41	野林遺跡	59	須田ヶ峯遺跡
7	池山遺跡	25	青田古墳群	42	上中島遺跡	60	七瀬遺跡
8	本郷新田遺跡	26	観音平古墳群	43	横引遺跡	61	栗林遺跡
9	大野古墳群	27	天神堂古墳群	44	籠峰遺跡	62	牛出遺跡
10	下割遺跡	28	梨ノ木古墳群	45	和泉A遺跡	63	牛出古窯遺跡
11	中島廻り遺跡	29	谷地林古墳群	46	小野沢西遺跡	64	安源寺遺跡
12	子安遺跡	30	小丸山古墳群	47	大洞原C遺跡	65	がまん淵遺跡
13	今池遺跡	31	下馬場遺跡	48	伏見遺跡	66	沢田鍋土遺跡
14	水吉古墳群		下馬場古窯跡群	49	大平B遺跡	67	岩船遺跡
15	水科古墳群	32	吹上遺跡	50	光明寺前遺跡	68	西条遺跡
16	宮口古墳群	33	斐太遺跡	51	照丘遺跡	69	間山遺跡
17	北方古墳群	34	上百々遺跡	52	柳町遺跡		
18	高士古墳群	35	倉田遺跡	53	小泉遺跡		

第1表 周辺の遺跡一覧表



第4図 周辺の遺跡

(原図：国土地理院 1：200,000 地勢図「高田」 平成10年2月発行)

基以上が存在すると言われる。古墳群は飯田・櫛池両河川の上流域に位置し、約3kmの範囲内に近接している。菅原古墳群内の前方後円墳1基は「菅原古墳」と呼ばれ、長軸約30mを測る。

頸城東部古墳群から3kmほど下流の飯田川右岸に大野古墳群が位置する [吉川2001]。

上記の古墳群のほか、これまで後期古墳が未発見であった関川右岸の新井市吉木地区において、石室をもった古墳が新たに検出されており、頸城地方における古墳文化の受容とその後の展開を考える上で重要な発見と言える [佐藤・高橋勉2000]。

長野盆地から飯山盆地にかけては、千曲川沿いの丘陵上に古墳が密集する。

(2) 集落遺跡の調査

古墳時代の集落遺跡の確認例は、新潟県側では平野部・丘陵ともに少ない。

前期の遺跡は、一之口遺跡東地区で竪穴住居2基、多数の土坑・溝が [鈴木・春日ほか1994]、山畑遺跡で竪穴住居2基と土坑1基が [小島1979]、前田遺跡では土坑・溝・井戸のほか、円形周溝状遺構が検出された [小島・中西ほか1996]。北割遺跡では、土坑・溝のほか、多数の土器が出土した [小島・笹澤1995]。津倉田遺跡では古墳前期から古代へ至る、竪穴建物・平地式住居・掘立柱建物・溝・土坑・方形周溝墓が検出された [笹澤・小島1999]。妙高山麓では大洞原C遺跡に前期のまとまった資料があり、東海系・畿内系など多系統の土器が交錯している [三ツ井ほか前掲]。籠峰遺跡・横引遺跡でも東海系S字甕・畿内系布留式甕が出土している [川村1988a、親跡・野村編前掲、立木(土橋)1996]。

中期の遺跡は少なく、月岡遺跡では井戸・土坑から5世紀前半の土器が出土している [高橋勉前掲]。北割遺跡においても中・後期の土器が出土している [小島・笹澤前掲]。

後期では杉明遺跡、倉田遺跡、栗原遺跡、宮ノ本遺跡など新井市栗原周辺での遺跡集中心が見られる。杉明遺跡では竪穴建物30基が検出され、大規模な集落の存在が推測されている [高橋勉前掲、新井市教育委員会1996]。上越市域でも山畑遺跡、一之口遺跡遺跡東地区で6～7世紀の竪穴建物が検出されている [小島前掲、鈴木・春日ほか前掲]。頸城東部古墳群周辺の唯一の集落跡に岡嶺遺跡がある。菅原古墳群と同一段丘状に立地し、同時期であることから古墳群との関連が注目される。

長野県側においても古墳時代の集落遺跡は少ないが、長野盆地では牛出古窯遺跡とがまん淵遺跡で弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の集落跡が検出された [鶴田・中島ほか前掲]。

飯山盆地では上野遺跡で北陸系の土器を伴った前期の竪穴建物と方形周溝墓が検出された [常盤井・望月・高橋桂ほか1994]。

本章は県教委・埋文事業団により既刊の一之口遺跡東地区 [高橋一功1994]、大洞原C遺跡 [武田1997、星1997]、裏山遺跡 [小池ほか前掲]、黒田古墳群 [尾崎2002] の報告書をもとに加筆・修正したものである。長野県側の遺跡については長野県飯山市教育委員会により既刊の上野遺跡 [小林前掲]、北町遺跡Ⅱ [高橋桂・望月2001] と長野県埋蔵文化財センター既刊の牛出遺跡ほか [鶴田1998]、貫ノ木遺跡ほか [大竹2000] を参考にした。街道については北国街道 [新潟県教育委員会1991・1993、長野県教育委員会1980]、飯山道 [長野県教育委員会1982] をもとに作図した。

第Ⅲ章 層序と遺構

1 グリッドの設定

グリッドは日本平面直角座標第Ⅷ系（旧測地系）のX軸を主軸に設定した（第6図）。設定にあたっては、高速道路法線センター杭STA438+20（X=101847.881200, Y=-25075.462890）とSTA439+00（X=101926.281890, Y=-25091.355770）を基準として座標計算を行った。グリッド主軸に対する磁針方位は西偏約7°、真北方向角は0°-10'-09"である。本報告書で示す北は座標のX軸方向を指す。

10m方眼を大グリッドとし、南北方向は南から算用数字を付し、東西方向は西からアルファベットを付して「19H」のように組み合わせて大グリッド名とした。各大グリッドを示す杭はグリッド南西隅に打設した。大グリッドを2m方眼に25分割したものを小グリッドとし、1～25の算用数字を付し、大グリッド表示に続けて「19H1」のように表記した（図版1）。

2 層 序

A 基本層序（図版32）

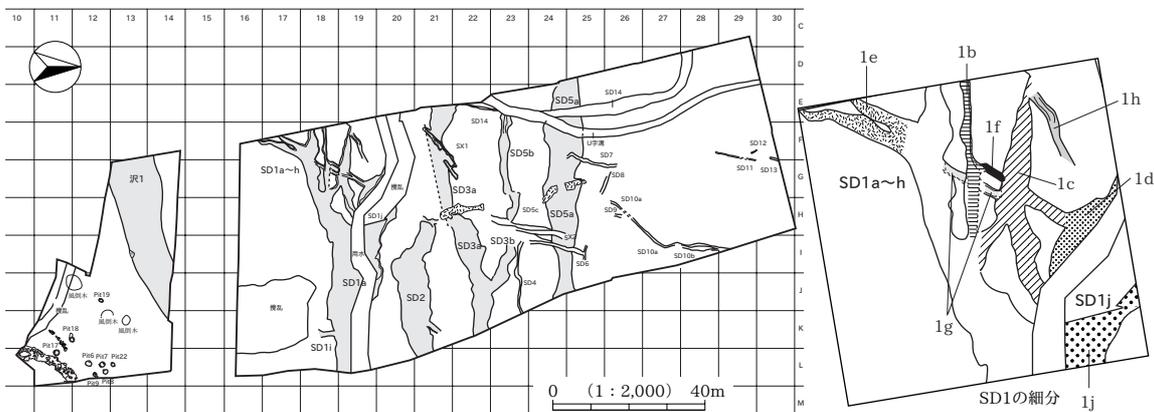
遺跡は妙高山東麓の標高423～427mの緩斜面に位置する。調査着手前の現況は山林および畑地であった。

基本的には上位から表土・黒色土（遺物包含層）・漸移層・地山（大田切川火砕流堆積物・遺構確認面）という堆積状況を示すが、自然流路の影響等で若干の変化がある。地山面には大田切川火砕流堆積物に含まれる大小の礫が多数表出していたが、沢1周辺では礫は少なかった。なお、'94・'95の各調査区では層名が異なるので、詳細と各年度の対応関係を第7図に示す。

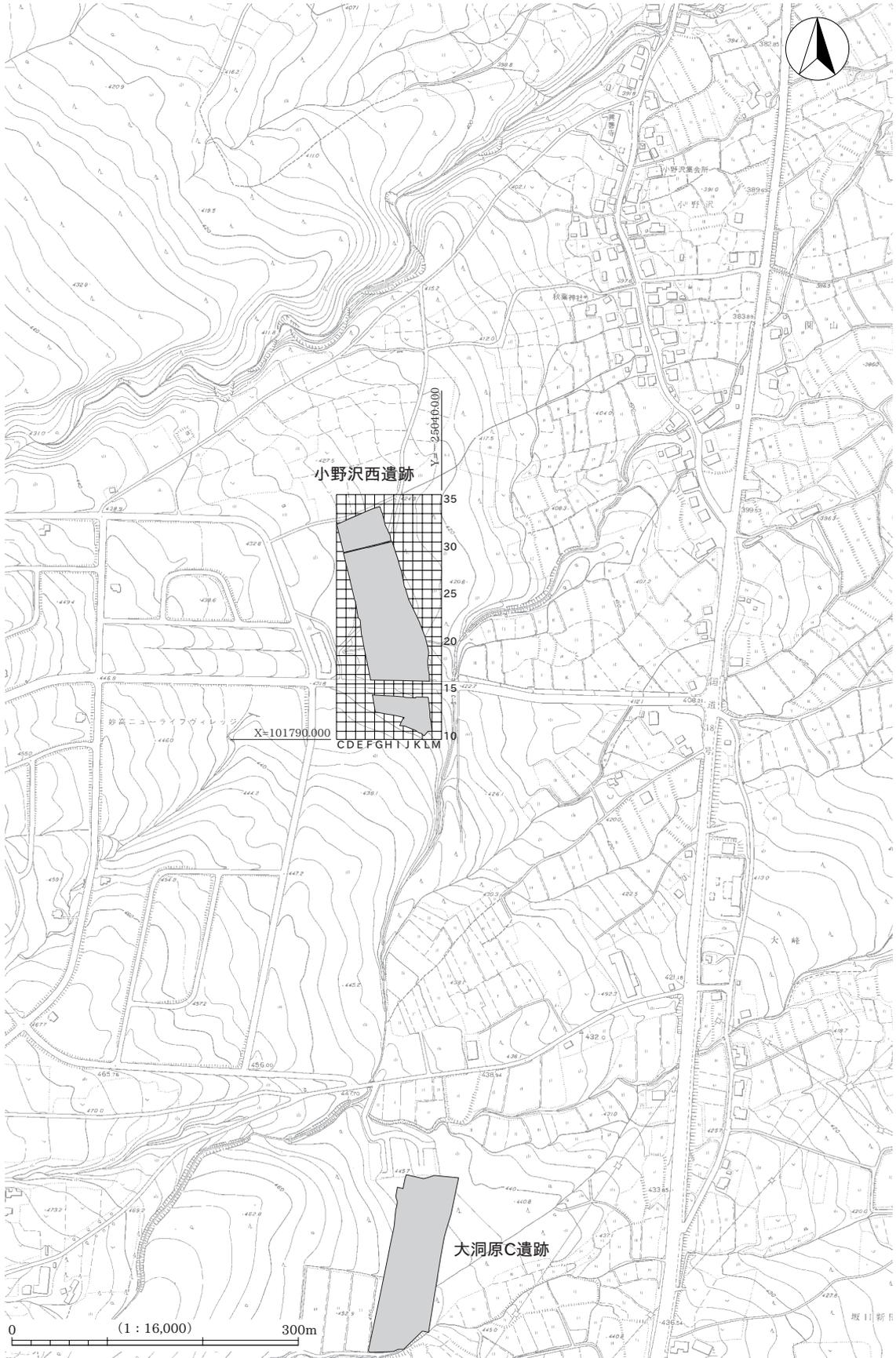
B 自然流路（図版1～5・31～34）

(1) 概 要

調査区では複数の自然流路（沢1、SD1～9）が検出された（第5図）。幅10m前後の自然流路は地形の



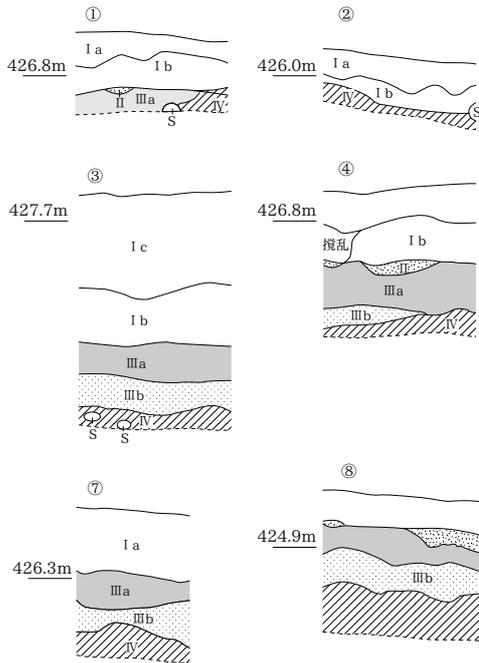
第5図 主な自然流路の名称



第6図 グリッド設定図(旧測地系に基づく)

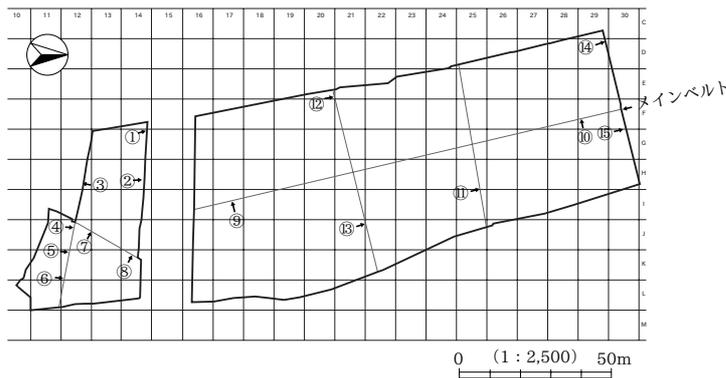
(原図: 妙高村都市計画図6 1:2,500 昭和58年測図)

'94調査区

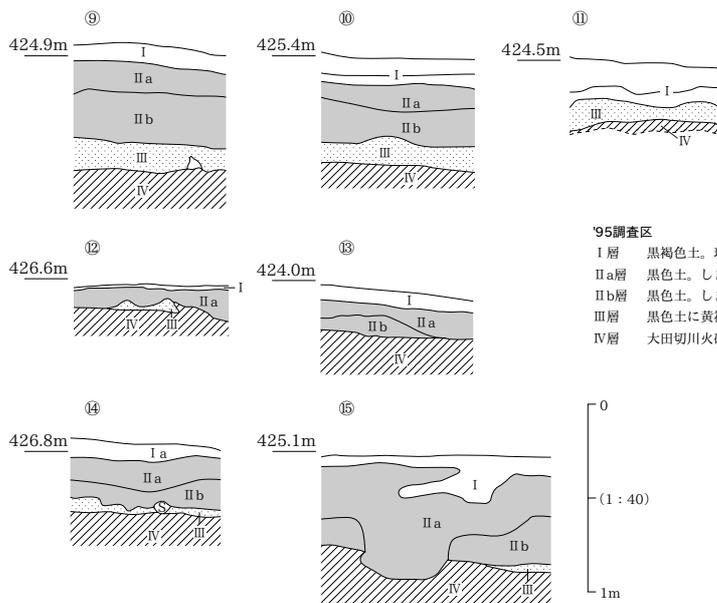


'94調査区

- I a層 黒褐色土。しまりあり。粘性なし。極細粒。現表土。攪乱されている部分が多く、調査区西側は盛土である。
- I b層 I a層の下位にある安定した土層。局所的に存在する。やや茶色味が濃い。
- I c層 黒色土。粘性なし。しまり弱。にぶい褐色土のブロックを含む。盛土。
- II層 焼山火山灰 (KG-c) を含む黒色土。しまりあり。粘性なし。局所的に存在する。
- III a層 黒色土。しまりあり。粘性弱。遺物包含層。
- III b 黒色土。締まり強。粘性なし。白色粒子を多く含む。
- IV層 大田切川火砕流堆積物。黄褐色土。非常に堅緻で径10~30cmの角礫を多く含む。遺構確認面。



'95調査区



'95調査区

- I層 黒褐色土。現表土。
- II a層 黒色土。しまりあり。粘性弱・遺物包含層。
- II b層 黒色土。しまり・粘性あり。白色礫を含む。遺物包含層。
- III層 黒色土に黄褐色土ブロックを含む。IV層との漸移層。
- IV層 大田切川火砕流堆積物。鈍い黄褐色土。径5~20cmの礫を含む。遺構確認面。

'94と'95の対応関係

'94調査区	'95調査区	備考	凡例
I a	I	現表土	
II		焼山火山灰を含有	
III a	II a・II b	遺物包含層	
III b	III	漸移層	
IV	IV	地山・遺構確認面	

第7図 基本層序

傾斜に従って調査区外の東西へ連続する。幅2mほどの自然流路の多くはほぼ南西―北東方向に走るが、地山面から浅いため全体を検出することはできなかった。調査区外に目を転じると、遺跡周辺の妙高山東麓裾にあたる当地域には現在でも西から東へと下る沢や河川が数多く見られる。当遺跡でも、'94調査区の沢1が検出された場所は調査時点でも葦が生育する沢であり、地山から突き出た巨礫が頭を覗かせていた。'95調査区のSD1が検出された場所にはコンクリート製の用水路が敷設されていた。

'94調査区の沢1および、'95調査区のSD1～3・5では焼山火山灰(KG-c；第二章1参照)の二次堆積層が認められた(以下、焼山火山灰層と略す)が、これらの焼山火山灰層が同時期の所産かどうかは不明である。SD1～3・5の調査では、焼山火山灰層を目安にその上下を区別して遺物を取り上げ、併せてセクション図も作成したが、遺物の取り上げで記録した土層名(註記)とセクション図に記した土層番号は一致していない。

各説では出土遺物がある自然流路の概要と出土遺物の註記について説明する。遺物の註記とセクション図中の土層番号の対応関係が明らかなものについては、図版4・5の土層説明文文末尾に()で対応する註記を示した。

(2) 各 説

沢1 (図版2・4・32)

13Gから14Jにかけて流れる幅約10m、確認面からの深さ約1mの自然流路である。4層に火山灰層がある。8層から弥生時代中期～古墳時代の土器が出土したが、出土量は少ない。

SD1 (図版2・4・32・33)

17Fから19Lにかけて流れる幅約10m、深さ約1mの自然流路である。西側は複雑に枝分かれしている。なお、SD1と流路方向を同じくするコンクリート製用水路と、これを作るときに攪乱された部分により全体の3分の1程度が破壊されている。調査にあたってはSD1をa～jに細分し、この細分名称に基づいて遺物の取り上げと記録類の作成を行った(第5図)。出土遺物の註記は焼山火山灰層を指標として上を「灰上」「灰上黒」、下を「灰下」とした。このほかメインベルト東側では、焼山火山灰層より下の砂層から出土した遺物について「砂」「灰下砂」、その上の層を「砂上」とし、地山直上から出土したものを「地上」とした。

SD1a メインベルト東側では、SD1aの検出に至る前のⅡa層・Ⅱb層でも大量の土器が出土した。検出後は表土から70～80cmほどの深さまでのⅡa層・Ⅱb層、その下の砂層や砂層に挟まれた黒色土からも遺物が多く出土した。地山面から約1m掘り下げたが、湧水のため完掘できなかった。

メインベルト西側は比較的浅く、遺物量も少なかった。礫が非常に多く、SD1eでみられた小礫が底面に敷き詰められたような状態の部分も確認された。SD1a東側セクション中の焼山火山灰層より上で古墳時代の土師器が出土しているので、これを二次堆積層と考えた。

SD1c 東西方向に約25m流れ、東端は三股に分かれてSD1a・1dに合流する。南側の支流の底面では礫が敷き詰められたようになっていた。西端は非常に浅く、輪郭を捉えることはできなかった。

SD1d 大部分がコンクリート製用水路に破壊されており、詳細は不明。南側がSD1cと合流する。

SD1e 底面には小礫が敷き詰められたような状態で並んでいた。似たような状態はほかのSDでも確認されているが、一定の距離で確認されたのはSD1eのみである。小礫は径3～5cm程度でそろって

るが、中には15～20 cmほどの大きな礫も含まれている。

SD1i SD1aの南側に流れ込む幅約1.3m、長さ約4mの自然流路である。

SD1j SD1aの北側を並行して流れるが、コンクリート製用水路が間を攪乱しており、SD1aとの関係は不明である。おそらくSD1aと同一流路であり、コンクリート製用水路のあたりに最深部があったと推定される。発掘途中で湧水があり、完掘できなかった。遺物は5層の砂層からの出土が多い。

SD2 (図版3・5・34)

21Hから21Lにかけて検出された幅約9m、深さ約90 cmの流路である。遺物は流路際の肩部から底部の砂礫にかけて出土した。出土遺物の註記は火山灰層より上を「灰上」「灰上黒」「黒色灰上」とし、下を「灰下」「灰下黒」「灰下砂」とした。地山直上の層位については「地上砂」「地上」「地上黒」とした。流路際の肩部付近出土のものについては、「カタクロ」「カタ」とした。

SD3 (図版3・5・34)

21Eから22Kにかけて幅約5mにわたって検出された部分をSD3a、北側でこれに流れ込む部分をSD3bとした。

SD3a II区②では遺構確認面まで掘り下げ、流路の範囲を確定した。その後、2m幅のトレンチを4mおきに設定して覆土を掘削した。遺物は焼山火山灰を含む1層から主に出土した。遺物の註記は火山灰層を指標に「灰上」「灰下」とした。21・22Hグリッドでは硬い砂層に石が詰められた状態の部分が確認されたため、これを「石敷き①」として調査を進めた。

II区⑤では、中央部が深く東西がやや浅くなっており、遺物は中央部の窪んだ所から西側にかけて多く出土した。21F3・4付近では径約3mの範囲に赤褐色と白色の火山灰が入り混じった堆積が見られたが、この火山灰中から遺物は出土しなかった。

SD3b 幅約4m、確認面からの深さ約30 cmで、23I・JでSD3aの北岸に合流する。出土遺物僅少。

SD5 (図版3・5・34)

24Dから24Jにかけて幅約10mで延びるSD5aと、これに並行して23Eから23Hに幅約3mで延びるSD5b、南北方向に走りSD5aとSD5bを結ぶSD5cに細分される。遺物は焼山火山灰層より上位から出土し、「灰上」「灰上黒」と註記した。

SD5a II区②では輪郭を確定した後、幅2mのトレンチを4m間隔で設定し、覆土の掘削を行った。遺物出土範囲が限られていたので、遺物出土の可能性が低い24Hグリッドではトレンチを設定しなかった。24Iグリッドで南北方向に横切るSD6とSX2に切られるが、遺物が出土したのはこの周辺に限られていた。II区⑤では全面的に掘り上げたが、出土遺物はなかった。24FグリッドでSD14に切られる。

SD5b 尾根上を枝分かれすることなく東西方向に延びる、幅約2～3.5m、深さ30～60 cmの自然流路である。底に径10～30 cmの礫が多く含まれる。礫は流されたり、投棄されたりしたものではなく、水流が地山の土砂を流した結果そこに残された、洗い出しの礫と考えられる。

3 遺 構

地山上面を確認面として、ピット8基、溝5条が検出されたほか、性格不明のSXが2か所、小礫集中域が4か所検出された。

A ピ ッ ト (図版7・36)

'94調査区において8基検出された。掘り形はいずれも円形の皿型を呈し、覆土は黒色土である。周囲には地山由来の巨礫が多数存在した。遺物が出土したのはPit8・13・19・22である。Pit8は覆土から古墳時代の甕の体部破片が1点出土したが、磨耗している。Pit13の表面からは古墳時代の甕体部片、Pit19・22では覆土から土師器細片が出土した。

B その他の遺構

(1) 溝 (図版3・5・7・36)

溝は'95調査区Ⅱ③・④区で検出された。自然流路のない、比較的平坦な場所での検出である。構築時期はSD10～13が不明、SD14が近世である。

SD10a (図版3・5)

26Hから28Iにかけて途中緩やかに屈曲しながら連続する、幅約30cm、深さ約8cmの溝である。底面の凹凸が激しい。出土遺物はない。自然流路の可能性もあるが、覆土に自然流路には見られない地山の土がブロック状に混じっていることから、人為的に掘られたと判断した。

SD11 (図版3・5)

29F・Gにおいて南北方向に直線的に延びる幅約30cm、深さ約15cmの溝である。底面は比較的平坦で、壁面もしっかりしている。出土遺物はない。同方向に延びる溝としてSD13があるが、1.5mほど西にずれている。土地を区切る区画溝の可能性はある。

SD14 (図版3・7・36)

22Eから28Dにかけて検出された幅約1.7m、深さ約1mの溝である。検出当初は大きく弧を描く平面形から、古墳あるいは塚の周溝の可能性も視野に入れて調査を進めた。土層観察の結果、古墳あるいは塚の盛土がなく、古墳時代の包含層より上から掘り込まれていることが確認された。平面形も円形を描くものではなく25Eより南では直線的に延びることが明らかとなり、周溝の可能性は否定された。また、覆土から江戸時代後期の陶器や泥面子が出土したことから、構築時期は江戸時代以降と推定される。

(2) SX (図版3・5・34)

SX1・2が検出された。両者ともに自然流路上面で検出され、幅約1mの範囲に小石と土器片が混じった覆土が道状に連続する。土器の出土層位は、SX1が1層、SX2が1～3層である。底面には凹凸があり、深いところは約20cmである。SD1e底面にも似たような小礫の堆積が見られることから、非人為的

なものの可能性が高いが、成因は不明である。

(3) 小礫集中域 (図版2・3・6・35・36)

'94調査区では「道状遺構」、'95では「石敷」と呼称して調査を進めた場所である。

地山上面で、径約1～3cmの小礫が黒色土とともに敷き詰められたような状態で検出された。小礫と黒色土は非常に硬く固結しており、掘ると板状に割れた。'94小礫集中域1では2～5cmの珠洲焼製円盤や珠洲焼片(図版30-1～5)が出土した。'95小礫集中域1・2が自然流路の底面で検出されたことや、固結した土層を除去した下に土坑などが認められないことから非人為的なものである可能性が高いが、成因は不明である。

第IV章 遺物

1 概要

遺物の大半は自然流路である沢1・SD1～3・5と包含層から出土し、遺構から出土したものは僅少である。自然流路出土遺物の所属時代は縄文時代～古代までの幅があるが、出土層位が時代・時期を反映してはなかった。以下の記載は時代ごとに項を分けて行い、その中で遺構・自然流路・包含層の順に記述を進める。

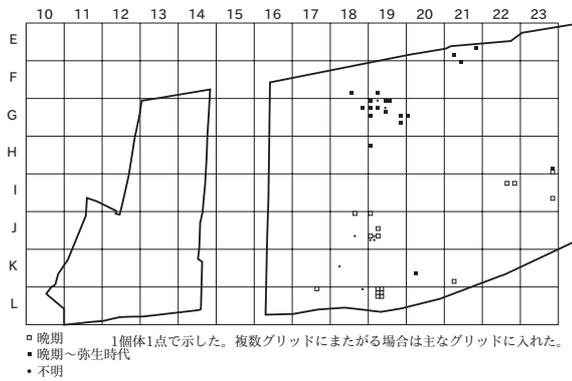
2 縄文時代 (図版8・9・37・38)

縄文時代の遺物には土器と石器がある。土器はおよそ44個体が出土し、晩期に属するもの17個体、晩期～弥生時代にかけてのもの19点、細片で時期不明のもの8個体に分類される。晩期～弥生時代にかけてとしたものの中には、縄文施文の弥生土器の可能性もあるものも含まれる。この他に、一次調査トレンチ出土資料・表面採集資料がある。

石器は所属時期の細分が困難だったため、縄文時代～弥生時代に属すると推定される石器をここで報告する。11点が出土し、石鏃2点、両極石器2点、不定形石器〔鈴木1996〕4点、剥片3点に分類される。この他に、表面採集の剥片・不定形石器各1点がある(第9図)。

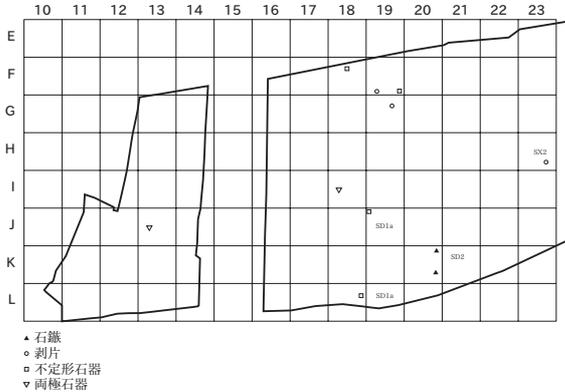
a) SD1

縄文時代晩期～弥生時代にかかる土器が出土した。1は波状口縁の突起部分で、口縁に沈線が引かれている。3は浮線網状文が施文される、晩期



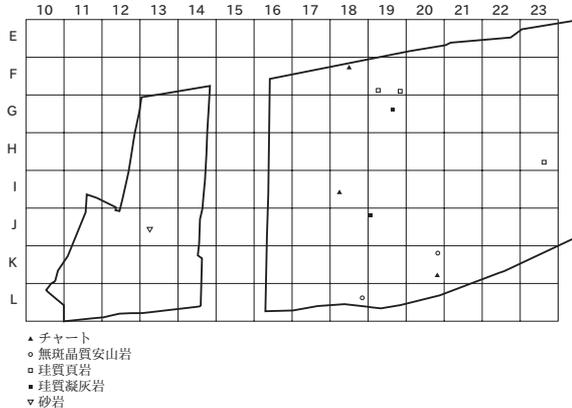
第8図 縄文土器分布図

器種別分布図 (縄文～弥生)



第9図 石器分布図

石材別分布図 (縄文～弥生)



末葉水Ⅰ式の浅鉢である。4は器面ミガキの後沈線が引かれ、沈線間に列点が施文されている。晩期前葉と考えここに置いたが、コの字重ね文が施文された弥生時代中期栗林式土器の可能性も残る。5～7は輪積み痕が明瞭に残る。5は佐野Ⅰ式並行、6は水Ⅰ式並行の粗製深鉢である。7は壺の可能性もあり、所属時期は縄文晩期末～弥生時代前期の時期幅を考えておきたい。8は浅く幅広い沈線が引かれる。

石器は不定形石器2点が出土した。1は石匙状の挟り部が作り出されているが、刃部の加工は見られない。図示していない1点は微細剥離が認められる。

b) SD2

晩期水Ⅰ式の土器が出土した。9は口縁端部に突起がある。口縁部はミガキ、体部は条痕の調整後、沈線が斜位に施文される。10は口縁部に2本の幅広い沈線が引かれ、体部には細密条痕が施される。

石器は凹基無茎石鏃1点(2)がある。

c) SD3a

後期佐野Ⅱ式あるいは水式並行の土器と時期不明の細片が出土した。14は小型の粗製土器で口縁に2本の沈線が引かれる。15は口縁端部に突起がある。残存するのは5か所だが、配置から7単位の突起が付されていたと推定される。口縁部に補修孔があげられている。11～13は所属時期不明である。11は撚糸Rの付加条が施文される。12・13は縄文が施文される。13は弥生時代に属する可能性がある。

d) SX2

後期佐野Ⅰ式並行の土器が出土した。16の浅鉢は、沈線で三叉文が施文される。17は口縁部の並行沈線間に刺突が施され、体部にかけて逆U字の沈線が引かれる。

石器は図化していないが、珪質頁岩製の剥片1点がある。

e) 包含層ほか

中期～晩期の土器がある。18・19は厚手の器壁に半截竹管文が施文される。ともに中期前葉の深沢式に属する。20・21は晩期水Ⅰ式に属する。20は条痕地文に沈線が施文される。21は口縁端部に刺突が施され、突起状を呈している。残存するのは2か所であるが、角度から9単位と推定される。22は口縁端部に茸状の突起があり、突起を含めた口縁端部に沈線が引かれる。口縁部の文様は工字文的である。飛騨地方晩期後半のいわゆる阿弥陀堂式〔藤田・上嶋1993〕に類する土器である。

石器は石鏃1点(3)、両極石器2点(5)、不定形石器2点(4)、剥片1点が出土した。石材は石鏃がチャート、不定形石器が珪質頁岩2点、チャート1点、剥片が珪質頁岩である。

3 弥生時代中期～古墳時代 (図版10～29・38～52)

A 土器の調整

土器の器面調整には、ハケメ調整・ヘラナデ調整・ヘラケズリ調整・ヘラミガキ調整・ナデ調整・ヨコナデ調整・タタキ調整などがあるが、以下の記述では「調整」を省略し、単に「ハケメ」・「ヘラミガキ」・「ナデ」などと表す。主な調整の内容は次の通りである。

3. 弥生時代中期～古墳時代

ハケメ 板の小口面を使い土器の表面を調整するもので、器面には平行する条線が残される。

ヘラナデ 工具の幅のみ残り、ハケメのような条線は認められない。ハケメと同じ工具で使用頻度が少なく、木目の凹凸が明瞭でないもの、もしくは作業面を木目に平行する方向で切ったものを想定している [春日 1994]。

ヘラケズリ 調整時に生じた砂礫の移動痕が明瞭に残るもの。

ヘラミガキ 幅の狭い工具で器面を磨いているもので、工具痕が明瞭に残るものと残らないものがある。工具痕が明瞭な場合はそれを図示し、それ以外はミガキの方向を矢印で示した。

ナデ 不定方向のナデ。

ヨコナデ 回転を用いるナデ。

B 土器分類

弥生時代中期から古墳時代の土器については、弥生時代中期中頃、弥生時代中期後半、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期～後期の4時期に大別し、それぞれの時期ごとに分類を行う。土器分類は図示した個体をもとに行った。なお、時期については観察表・挿表中では便宜的に、「弥生時代中期中頃＝区分0」、「弥生時代中期後半＝区分1」、「弥生時代後期～古墳時代前期＝区分2」、「古墳時代中期～後期＝区分3」として表示した。

分類に先立ち、図示した遺物の抽出方法について説明する。遺物の抽出は、まず自然流路・遺構単位で行った。自然流路は範囲が広いこともあり、大グリッド単位で器種・器形の抽出を行った。次に包含層の大グリッド単位で抽出を行った。包含層のうち、自然流路にかかる部分については自然流路出土遺物で見られなかった器種・器形のものを中心に選んだ。それ以外の大グリッドでは大グリッド単位で器種・器形の異なるものを抽出した。

記述にあたっては「甕形土器」「壺形土器」等の呼称を「甕」「壺」のように省略して用いる。土器の部位名称および分類図は第10～18図に示す。

(1) 弥生時代中期

弥生時代中期の土器には中期中頃の条痕文系土器と中期後半の土器がある。中期後半の多くは栗林式土器である (第10図)。

a) 中期中頃

中期中頃の土器には、条痕文が施文された甕体部片がある。細分は行わない。概ね栗林式直前か栗林 I 式の段階である。262 は条痕の下に点列が施文されることから栗林 I～II (古) 式まで下る。

b) 中期後半

中期後半の土器には甕・壺がある。

甕 甕は器形・文様等で7類に分類した。

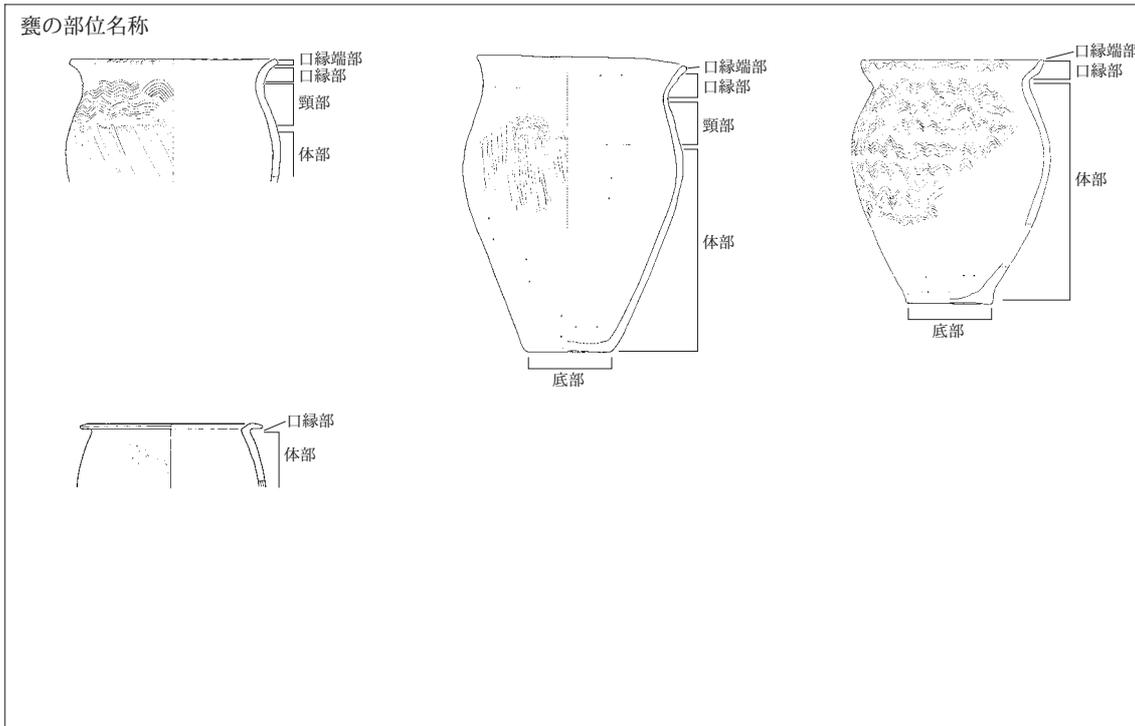
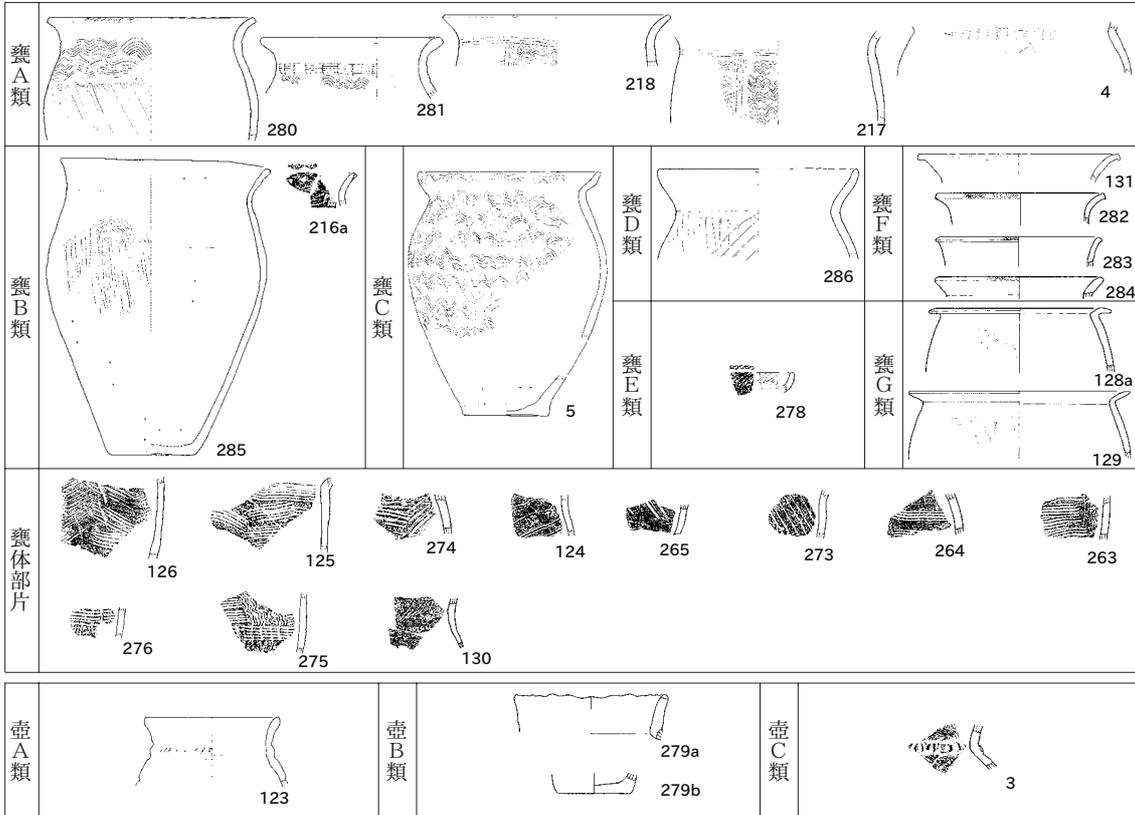
A 類 口縁部が外反し、頸部がほとんどくびれない。口縁部は無文、口縁端部には縄文が施文される。頸部以下は櫛描文が施文される。

280 頸部と 281 体部の櫛描波状文はコンパス文状を呈し、他の櫛描波状文とは施文方法が異なる。

弥生時代中期中頃（区分0）



弥生時代中期後半（区分1）



第10図 弥生時代中期の土器

3. 弥生時代中期～古墳時代

217・218は一見すると同様の文様構成であるが、施文順序が異なる。218が始めに頸部の横走櫛描直線文を施文、その後体部に施文するのに対して、217では始めに体部に施文、最後に頸部の横走櫛描直線文を施文している。

B 類 口縁部が外反し、頸部がややくびれ胴部上半部に最大径をもち、直線的に底部に至る。口縁部は無文、頸部～体部上半部には櫛描文が施文される。

285は体部の単斜条痕の隙間に部分的に櫛描波状文がのぞき、単斜条痕より上位にある1か所のみ明瞭に確認できる。土器の正面観〔上田1995〕を意識している可能性がある。

C 類 口縁が短く外反して立ちあがる。5のみ確認された。

5は口縁部に2本組の篋描波状文、体部に櫛描波状文が施文される。体部の櫛描波状文は弥生時代後期の櫛描波状文と比較して施文単位が長い。

D 類 口縁部がくの字にやや長く緩やかに外反し、内弯気味になる。口縁端部に篋刻み、体部に複合鋸歯文が施文される。後期まで下る可能性がある。286のみ確認された。

E 類 口縁部が内弯する。縄文地文に沈線が施文される。壺の可能性もある。278のみ確認された。

F 類 口縁端部に縄文が施文されるが、全体の器形が不明なものを一括した。

G 類 口縁部が強く外反する、薄手で精緻な作りの甕。山陰系の甕の搬入品・模倣品。

128は胎土が緻密で雲母が少ない。焼成も良好である。胴部最大径から底部にかけて徐々に薄くなり、底部の薄さは特徴的である。口縁部の強い屈曲は模倣品では見られないことから搬入品と考えられる。129は128に似るが口縁端部が丸く、口縁部のヨコナデがやや粗雑であることから模倣品と考えられる。体部片 文様には櫛描縦羽状文・直線文・簾状文・波状文等がある。275は甕の体部上半部の可能性がある。130は甕の頸部で半截竹管刺突列の上下に縄文が施文される。ここでは弥生中期に含めたが、所属時期の詳細は不明である。

壺は器形・文様で3類に分類した。

A 類 小型広口壺で、頸部に横位沈線を巡らし、間に縄文を施文する。

B 類 短頸壺で、口縁端部に大ぶりの刺突が行われる。

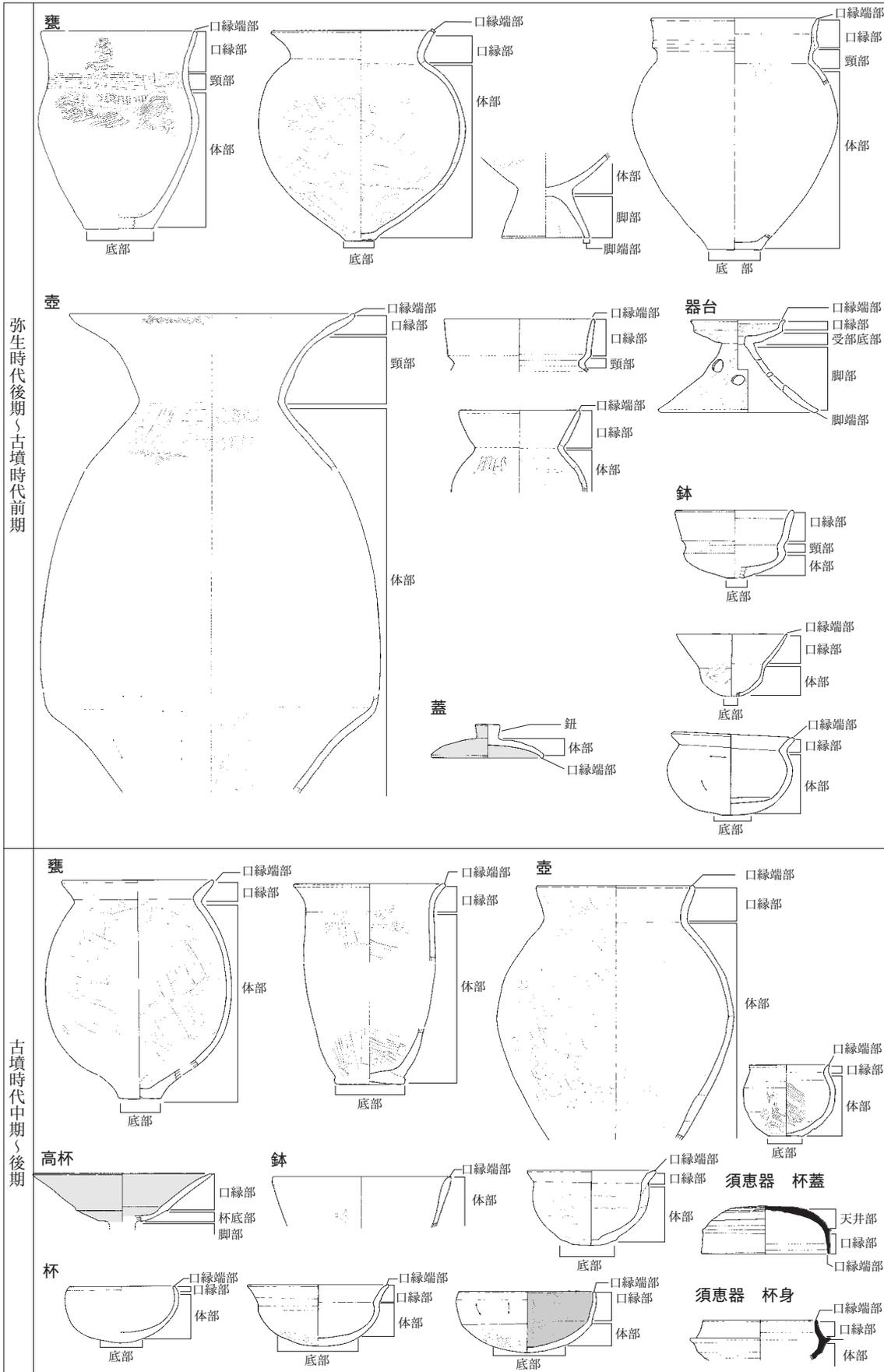
C 類 鋭く屈曲する頸部に隆帯が貼り付けられ、隆帯上にヘラ状工具による刺突が施される。弥生中期に含めたが、所属時期の詳細は不明である。

(2) 弥生時代後期～古墳時代前期

弥生時代後期～古墳時代前期の土器には甕・壺・器台・高杯・鉢・有孔鉢・蓋がある(第12～15図)。

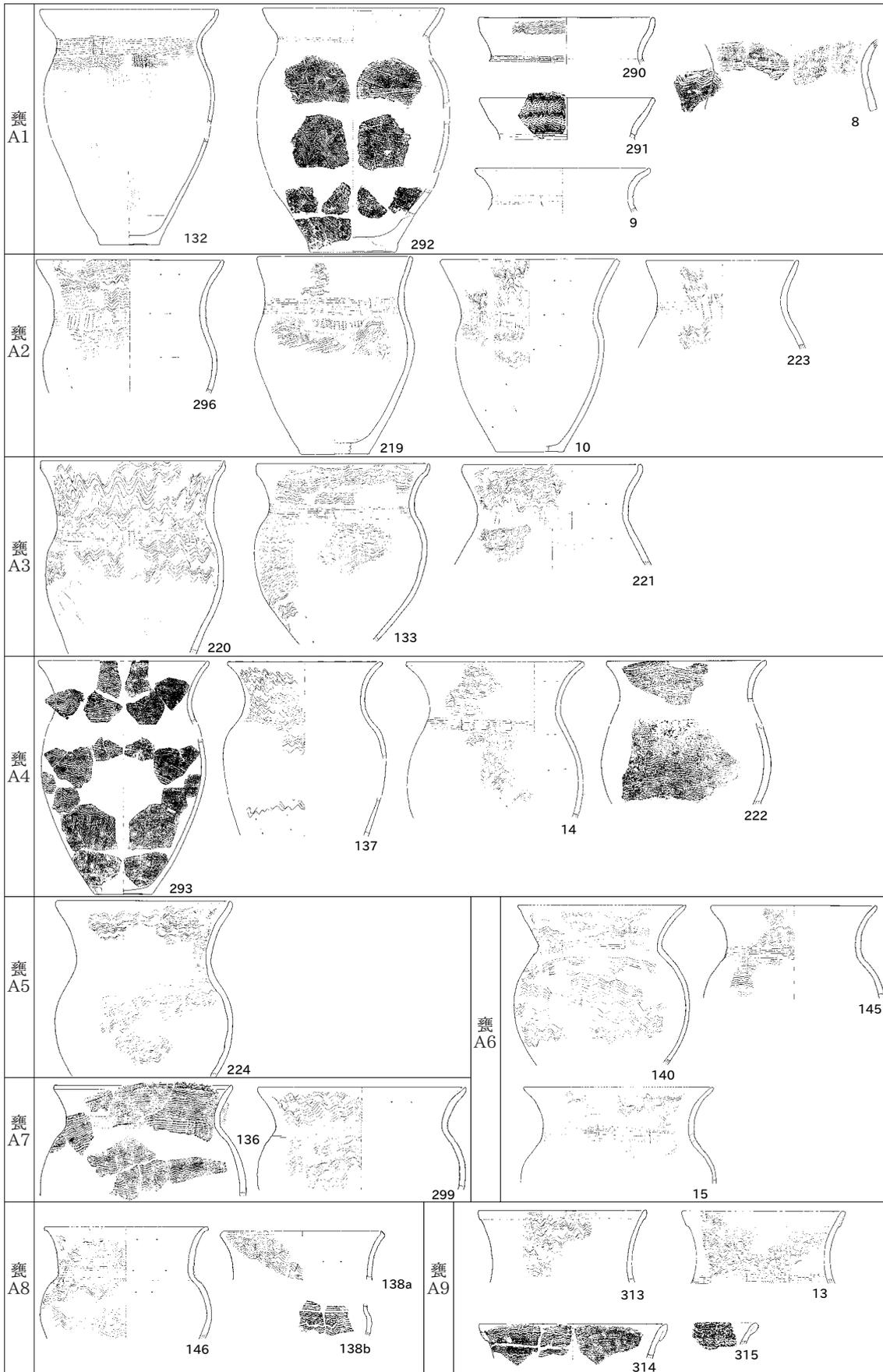
以下に分類を示すが、各器種内での細分は全形のわかる個体が少ないため部分的な違いに着目して行った。このため全体として統一を欠いた分類となっていることをあらかじめ断っておく。また、破片の図化にあたっては、器形・法量とも十分検討しているが、小破片などは資料の制約上、正確さを欠く面もあるかもしれないことを付け加えておく。

甕 12類に分類した。分類は形態上の系譜関係を重視して行ったが、全形がわかる資料が少ないこともあり、実際には口縁部の形態に主眼を置いた分類となっている。このため、系譜については必ずしも適切とは言えない面もある。各分類の比率は計量を行っていないため詳細なことは言えないが、口縁部破片数でいえばA・C類が多く、次いでD・G類が一定量存在し、B・E・F・H～K類は図示したもの

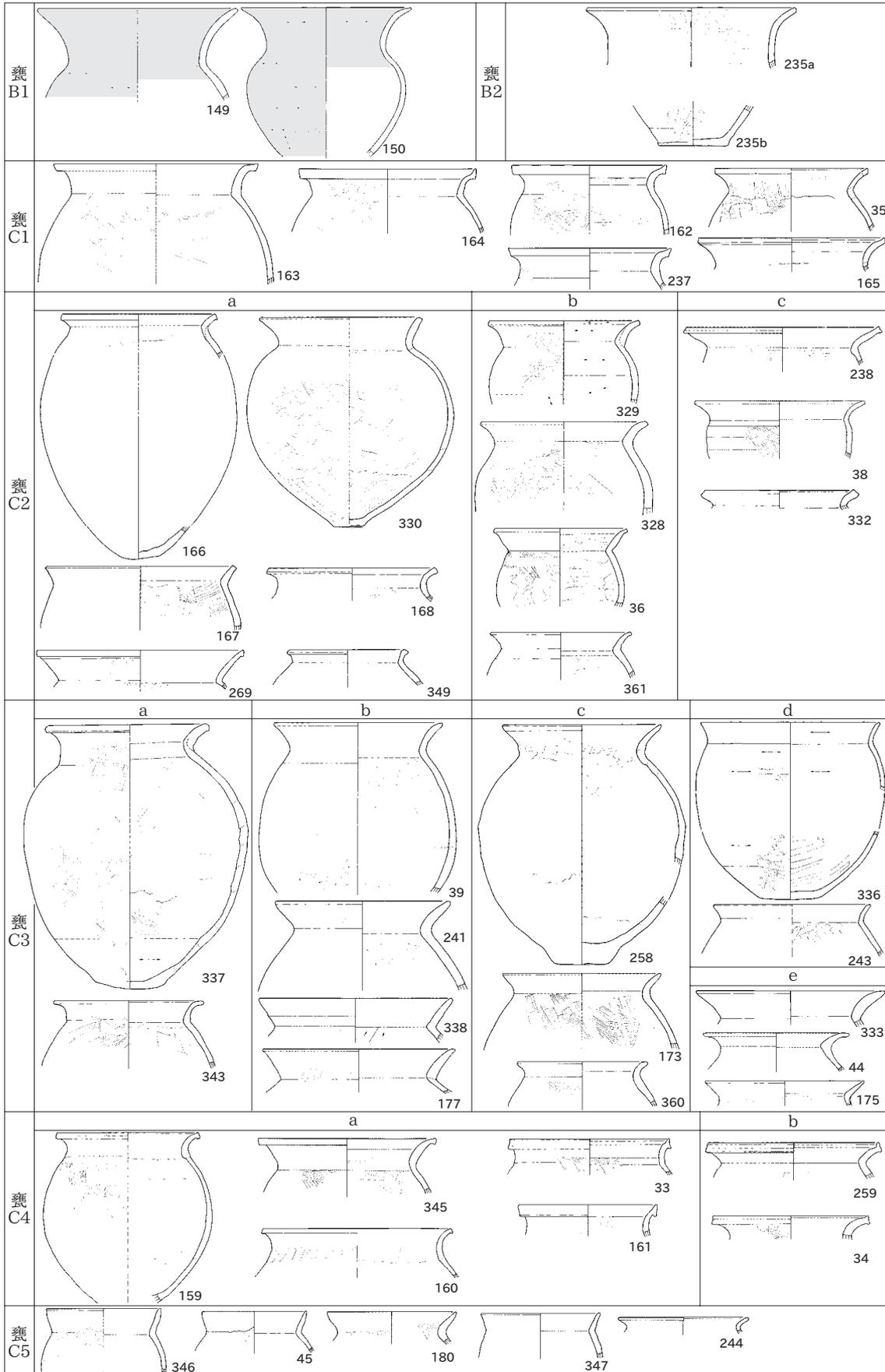


第11図 弥生時代後期～古墳時代の土器 各部名称

3. 弥生時代中期～古墳時代

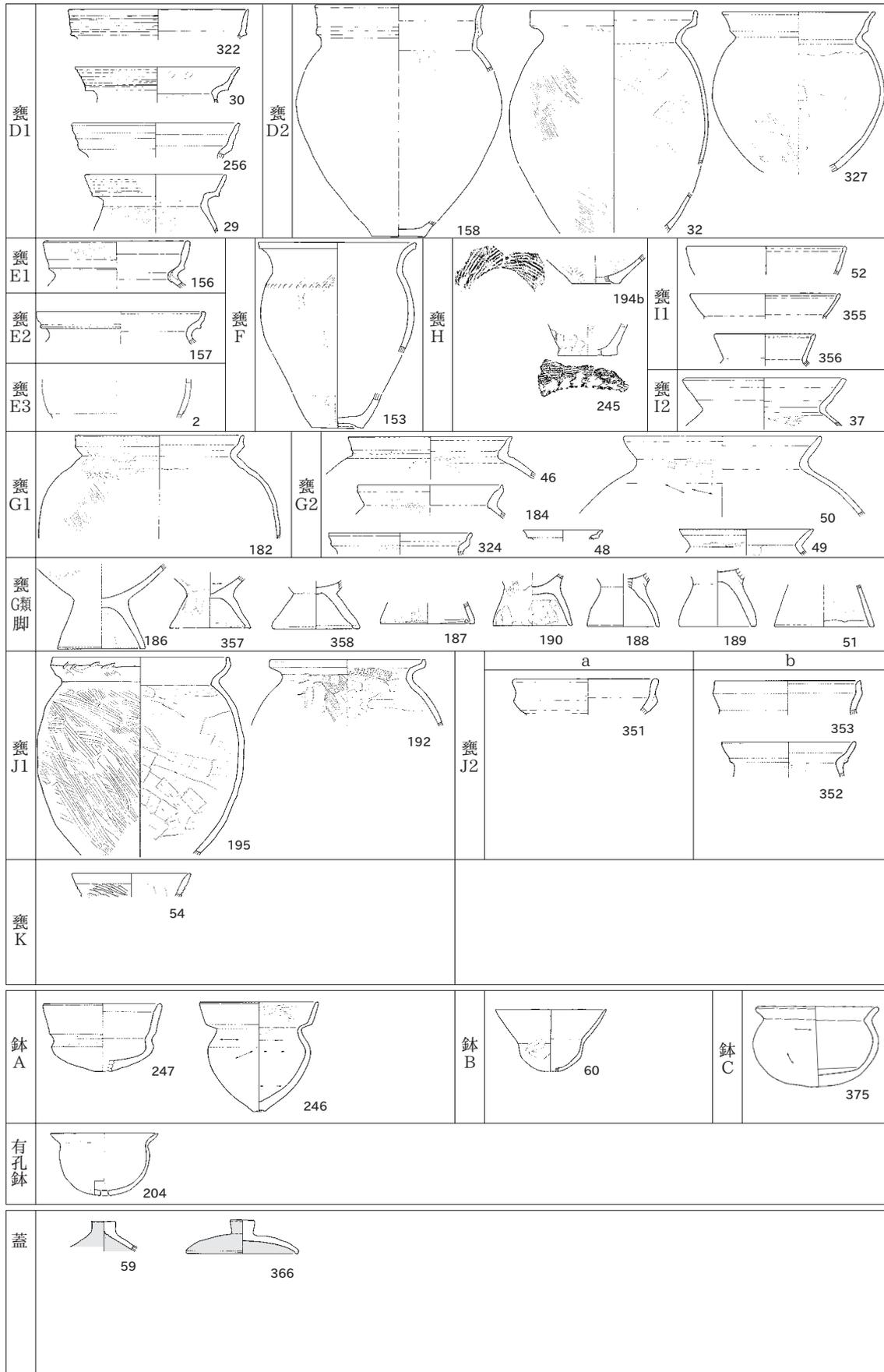


第12図 弥生時代後期～古墳時代前期（区分2）の土器（1）

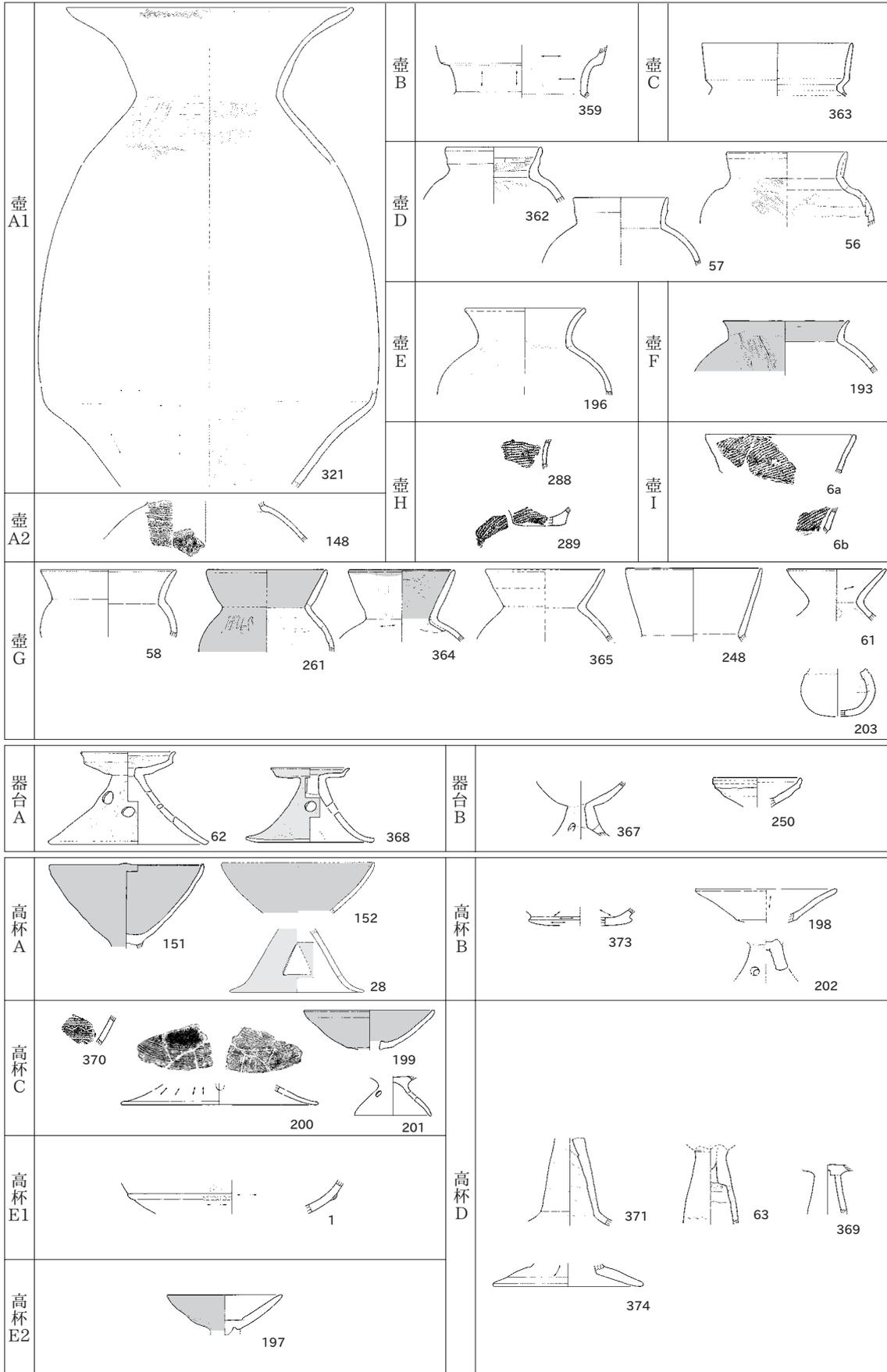


第13図 弥生時代後期～古墳時代前期（区分2）の土器（2）

3. 弥生時代中期～古墳時代



第14図 弥生時代後期～古墳時代前期（区分2）の土器（3）



第15図 弥生時代後期～古墳時代前期（区分2）の土器（4）

3. 弥生時代中期～古墳時代

がほぼすべてである。

A類 箱清水式土器のうち、櫛描文が施文される平底の甕。基本的に、外面は頸部に櫛描簾状文、体部上半部に櫛描波状文が施文され、体部下半部に縦方向のミガキが行われる。内面調整はハケメのものもあるが、多くは最終的にミガキが行われる。器形で9細分した。

A1類 口縁部が内弯気味に開く。口縁部は基本的に無文だが、櫛描波状文が施文されるものもある。

A2類 口縁部が伸長しつつ開く。体部は上位に最大径をもち、体部の櫛描波状文は2～3段程度。

A3類 口縁部が伸長し、端部がつまみ上げられる。胴部は上位に最大径をもつ倒卵形となる。頸部・口縁部との境は不明瞭である。

A4類 口縁部が伸長しつつ外反する。胴部は上～中位に最大径をもつ。

A5類 口縁部が外反し、口縁端部は弱くつまみ上げられる。胴部は球胴化傾向を示し、頸部・口縁部の境が比較的明瞭となる。

A6類 口縁部が外反し、口縁端部が丸く収められる。胴部は球胴化する。

A7類 口縁部が外反し、口縁端部が面取りされる。胴部は球胴化する。

A8類 口縁部が伸長し、外反する。口縁端部は面取り後、施文される。胴部は球胴化し、体部との境が明瞭となる。

A9類 口縁部が伸長し、口縁端部が折り返される。口縁端部の折り返しは口縁部の櫛描波状文施文後に行われ、折り返しによって生じた口縁端部には櫛描波状文が施文されるのが基本である。

B類 箱清水式土器のうち、外面ミガキで仕上げられる無文のもの。赤彩の有無で2細分される。

B1類 口縁部が伸長・外反し、無文・赤彩のもの。

B2類 口縁部が外反し、無文・非赤彩のもの。

C類 口縁部が「く」字あるいは「コ」字を呈するもの。調整は口縁部がヨコナデ、体部内外面がハケメ・ヘラナデされる。口縁端部の形態差で5細分した。

C1類 口縁端部がつまみ上げられる。

C2類 口縁端部が面取りされる。C2類はさらに口縁形態で以下のように細分される。

C2a類 単純な「く」字あるいは「コ」字。

C2b類 口縁上部が若干外側に引き出される。

C2c類 強く外反。

C3類 口縁端部が丸く収められる。C3類は口縁形態で以下のように細分される。

C3a類 口縁上部が若干外側に引き出される。

C3b類 口縁部と体部との境が明瞭。

C3c類 口縁部と体部との境が不明瞭。

C3d類 短く立ち上がる。

C3e類 強く外反。

C4類 口縁端部を外側に垂下させ、正面から見ると有段口縁に見える。口縁形態で2細分される。

C4a類 口縁部が「コ」字を呈する。

C4b類 口縁部が「く」字を呈する。

C5類 口縁部が「く」字あるいは「コ」字を呈する小型の甕。

D類 北陸に通有な有段口縁の甕。胎土が白色を呈するものが多い。2細分した。

- D1類 口縁部に擬凹線が施されるもの。
- D2類 口縁部の調整がヨコナデのみのもの。
- E類 有段口縁でやや内弯気味に立ち上がるもの。3細分した。
- E1類 口縁部外面にハケメが施される山陰系の甕。
- E2類 口縁部の調整がヨコナデのみのもの。
- E3類 有段部下端に列点刺突が行われるもの。
- F類 口縁部が外反し、体部上位に列点刺突が行われるもの。
- G類 台付甕。口縁部から脚部までが接合した個体は皆無であったが、短く外反する口縁部形態や強く張り出す胴部形態、ハケメのあり方などからみて台付甕と推定されるものをこれに分類した。2細分した。
- G1類 東海系のS字状口縁台付甕。
- G2類 S字状口縁台付甕に似るが、口縁部形態が明瞭な「S」字状を呈さないもの。
- H類 体部外面調整にタタキが行われるもの。ハケメも併用されるが、他の分類の甕にみられるハケメに比べて原体の幅が狭く、中の条線も細かい。
- I類 内弯気味の「く」字口縁のもの。
- I1類 口縁端部が玉縁状を呈する。所謂「布留甕」。
- I2類 口縁が玉縁状ではない、「布留系甕」。
- J類 口縁部が受け口状のもの。2細分した。
- J1類 近江系の受け口甕。体部や口縁部にハケメ原体による列点刺突が行われる。
- J2類 近江系以外の受け口甕。2細分される。
- J2a類 山陰系と推定される甕。口縁部外面下側に粘土が付加され厚みを増す。
- J2b類 系譜不明の受け口の甕。
- K類 外面を2本1組の篋状あるいは丸棒状工具のもので調整するもの。
- 鉢 3類に分類した。
- A類 北陸系の有段口縁鉢。器面はミガキにより仕上げられる。浅いものと深いものがある。
- B類 半球形の体部に内弯気味に伸びる比較的長い口縁部がつく畿内系の小型丸底鉢。
- C類 口縁部が外反する丸底鉢。
- 有孔鉢 1点出土した。口縁部が外反する丸底鉢の底部中央に焼成前の穿孔が認められる。
- 蓋 つまみと天井部の境が明瞭なものと不明瞭なものがある。いずれも内外面ミガキ、赤彩されている。図示したものがすべてである。
- 壺 9分類した。G類以外は図示したものがほぼすべてである。
- A類 箱清水式の壺。器形で2細分される。
- A1類 口縁部が朝顔の花状に大きく発達し外反する太頸の壺で、胴最大径を下位にもち下膨れ状をなす。口縁部上端と肩部に櫛描文が施文される。
- A2類 球胴化の進んだ壺で、肩部に櫛描文が施文される。
- B類 長頸壺。口縁部が段をもち、頸部と明瞭に分かれる。
- C類 北陸系の有段口縁壺。
- D類 短頸壺。口縁部が短く直立し、球胴を呈する。調整は内外面にハケメを施すものと、内面に強く指頭圧痕が残るものの2者が認められる。

3. 弥生時代中期～古墳時代

E類 外反する比較的長い口縁部をもつ壺。

F類 短頸壺。口縁部が短く外反し、球胴を呈する。赤彩される。

G類 小型壺を一括した。球胴で、口縁部が外反し、赤彩されるものもある。

H類 天王山式の縄文施文の壺。

I類 十王台系の縄文施文の壺。

器台 小型器台。2類に分類した。

A類 杯部の口縁部が短く外反し、皿状を呈する。

B類 杯部がA類に比べて深く、椀形を呈する。

高杯 5類に分類した。

A類 中部高地型赤彩高杯 [青木一男 1998]。全面にミガキ、赤彩が施される。

B類 北陸系の高杯。口縁部は杯底部との境に稜線をもち、外反して伸びる。

C類 東海系の高杯。櫛描文が施文されるものもある。

D類 畿内系の高杯。杯部は平坦な杯底部から直線的に伸びる口縁部がつく。脚部は直線的な上半部が裾部で屈曲して外側に開く。

E類 系譜不明の高杯。2類に分類される。

E1類 杯屈曲部に貼り付けられた低い隆帯上に丸棒状工具側面圧痕が連続する。

E2類 杯部が椀形を呈する。杯部外面はハケメ後、口縁部にナデを行う。東北系の可能性がある。

(3) 古墳時代中期～後期

古墳時代中期～後期の土器には土師器の甕・壺・高杯・鉢・杯、須恵器の杯蓋・杯身がある。甕・杯が多く、その他の器種は図示したものがほぼすべてである（第16～18図）。

土師器

甕 形態・調整の違いで7分類した。

A類 口縁部が「く」字あるいは「コ」字を呈し、体部が張り出すもの。調整は口縁部がヨコナデ、体部内外面がハケメ・ヘラナデされる。口縁部の形状等で4細分した。

A1類 口縁部上半を外側へ引き出す。

A2類 口縁部と体部との境が明瞭。

A3類 口縁部と体部との境が不明瞭。

A4類 口縁部が強く外反する。

B類 口縁部が「く」字を呈し、体部が張らないもの。口縁端部の面取りの有無で2細分した。

B1類 口縁端部に面取りあり。

B2類 口縁端部に面取りなし。体部の張り方で2細分した。

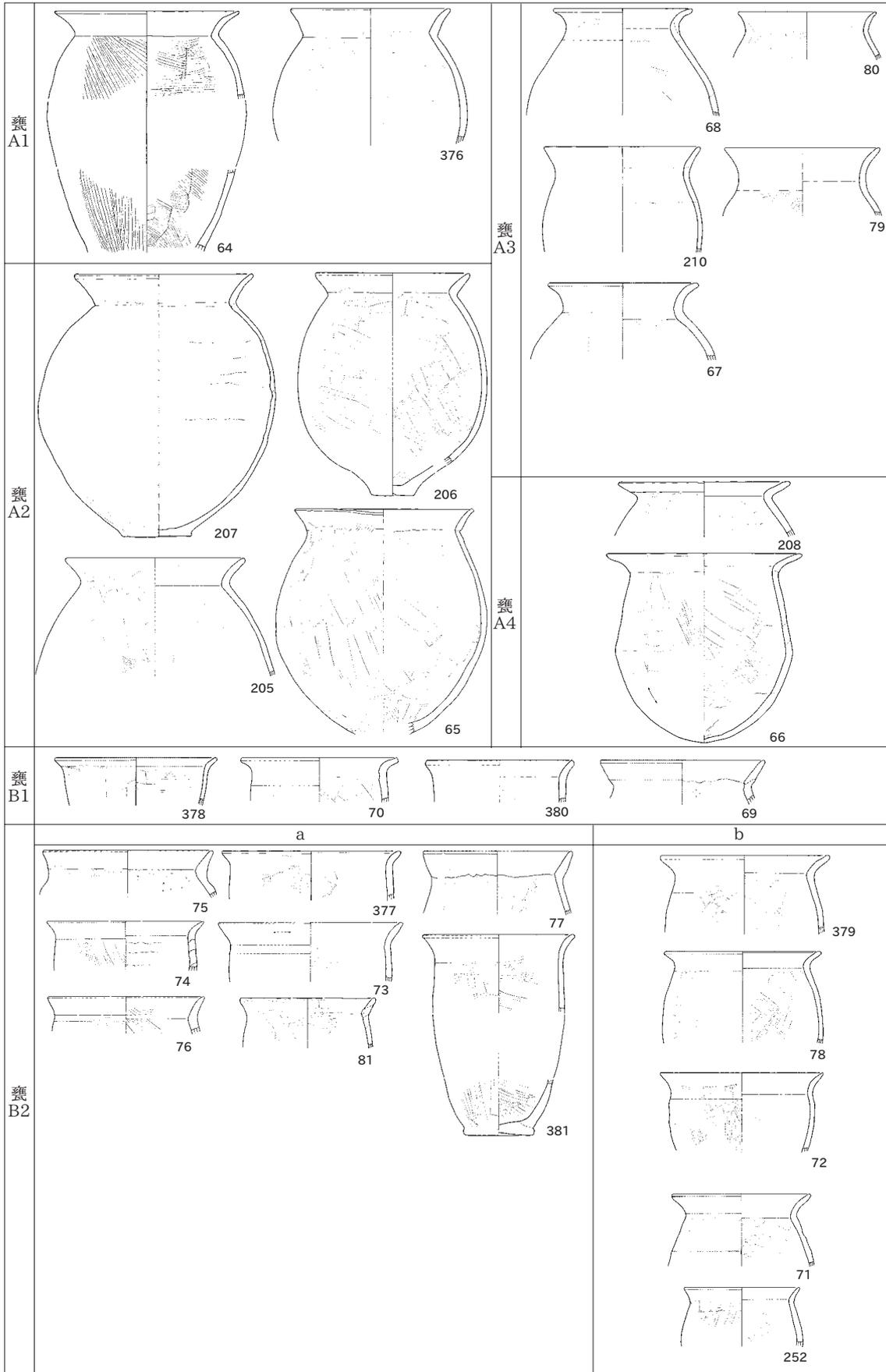
B2a類 体部が張らず、ほぼまっすぐに底部に至るもの。

B2b類 A類ほどではないが、やや体部が張るもの。

C類 長めの口縁部をもち、体部が張らないもの。

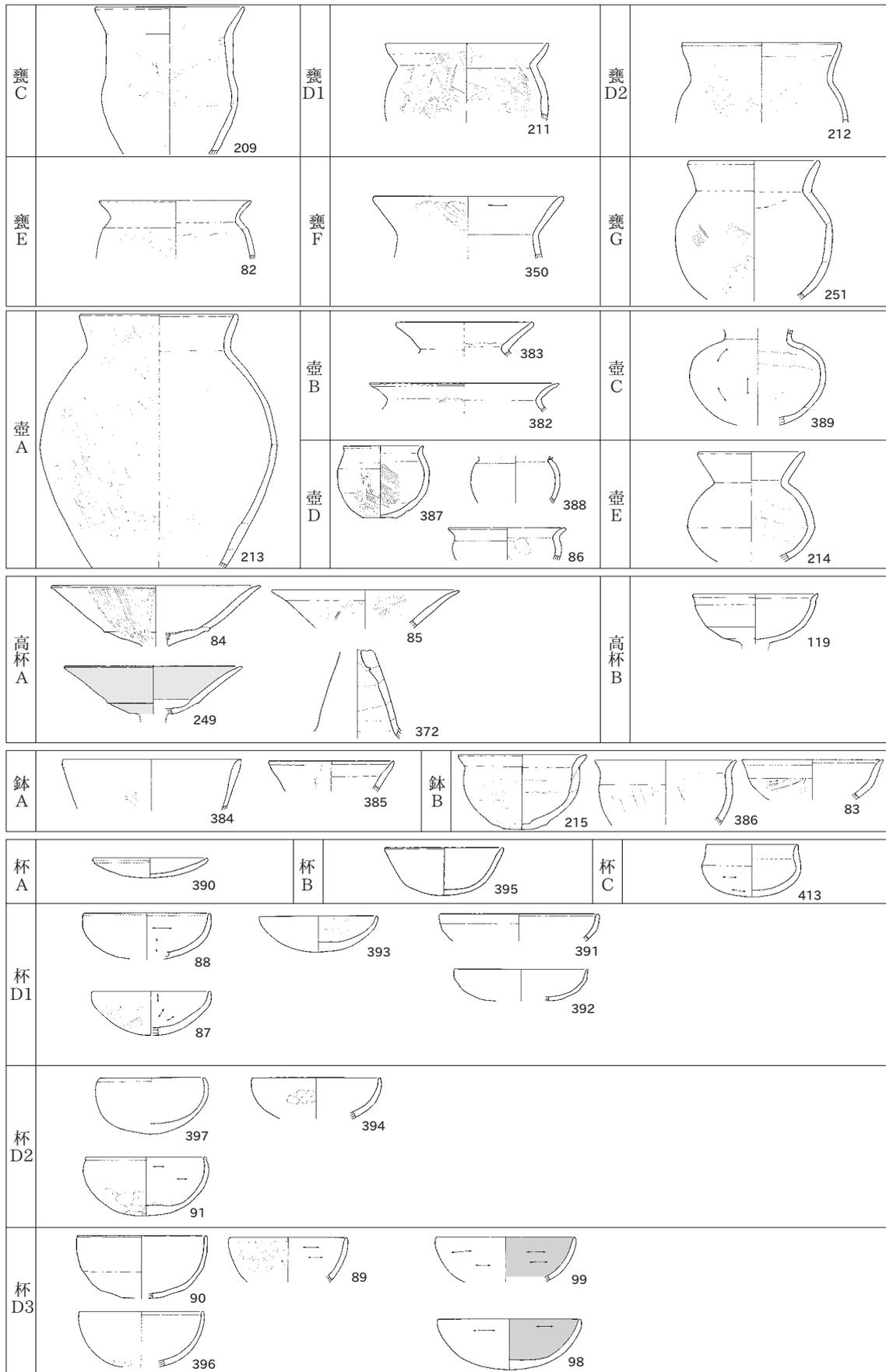
D類 口縁部が内弯気味のもの。2細分される。

D1類 口縁部が短い。

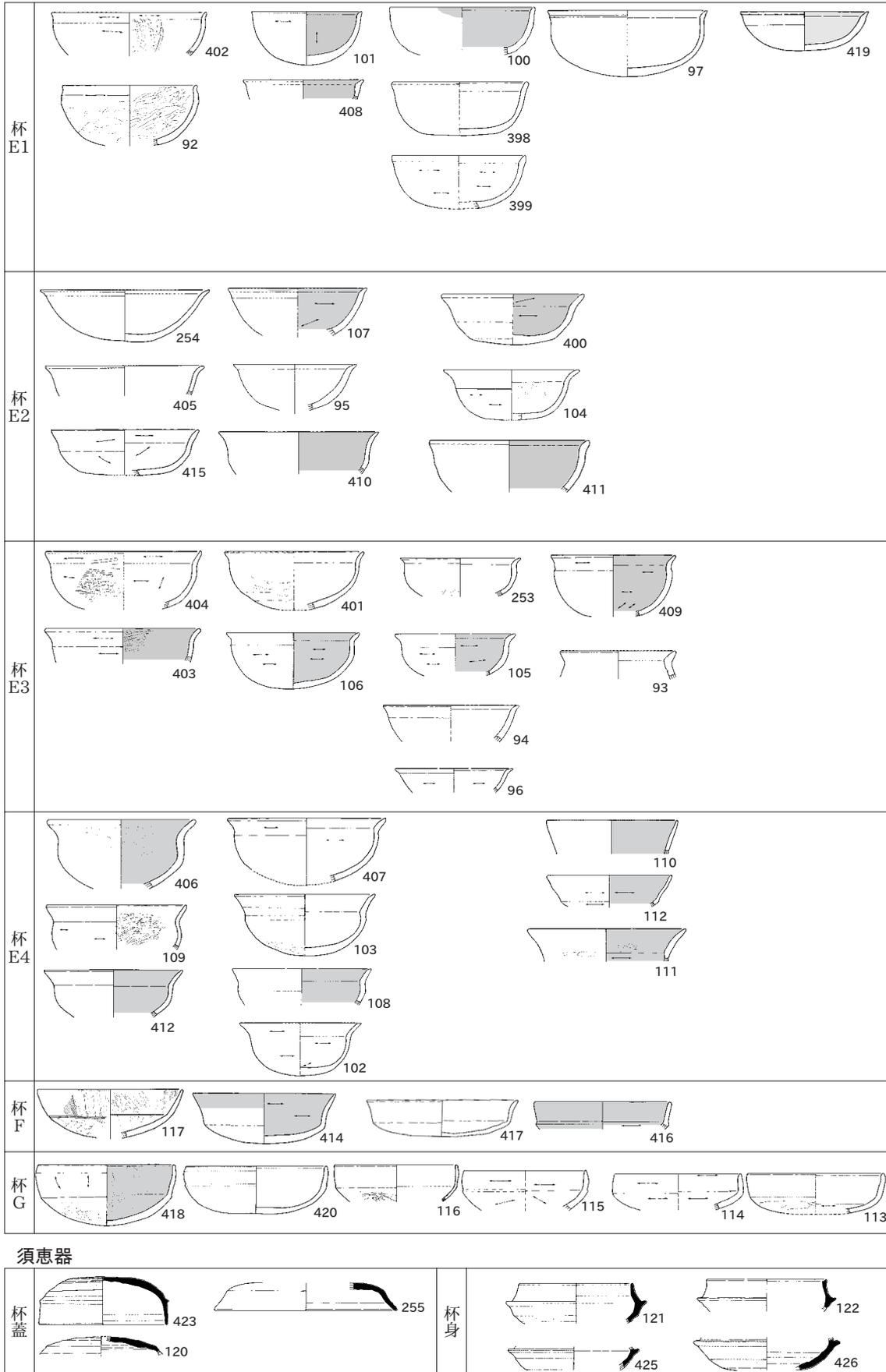


第16図 古墳時代中期～後期（区分3）の土器（1）

3. 弥生時代中期～古墳時代



第17図 古墳時代中期～後期（区分3）の土器（2）



第18図 古墳時代中期～後期（区分3）の土器（3）

3. 弥生時代中期～古墳時代

D2類 口縁部が長く、口縁端部が丸く収められる。

E類 鋭く「く」字に外反する口縁部をもち、体部との境が明瞭。関東系と推定される。

F類 「く」字に伸長する口縁部をもち、内外面にミガキが行われる。東北系と推定される。

G類 小型・球胴の甕。

壺 器形で5分類した。

A類 口縁部が直立気味に開き、口縁端部が丸く収められる。

B類 口縁部が鋭く「く」字に開く。

C類 やや扁平な球胴形の体部をもつ。

D類 短頸壺。

E類 小型丸底壺。

高 杯 器形で2分類した。

A類 畿内系の高杯。杯部は平坦な杯底部から直線的に伸びる口縁部がつく。脚部は直線的な上半部が裾部で屈曲して外側に開く。

B類 内弯する体部に外側に屈曲する比較的短い口縁部が付くもの。

鉢 器形で2分類した。

A類 口縁部から体部にかけて直線的に開く。

B類 内弯気味の体部に外側に開く短い口縁部が付くもの。

杯 基本的に丸底で、器面にミガキが施される。底部にはミガキの前段階に行われたケズリの痕跡が残るものもあるが、輪台技法の痕跡が明瞭に認められるものはなかった。器形により7分類した。

A類 皿状のもの。

B類 体部から口縁部にかけて直線的に伸びるもの。

C類 半球形の体部に口縁部が直立して付くもの。

D類 体部が内弯気味のもの。口縁部形態で3細分した。

D1類 口縁部が直立するもの。

D2類 口縁部が内弯するもの。

D3類 口縁部と体部の境が不明瞭なもの。

E類 口縁部が外側に屈曲するもの。4細分した。

E1類 内弯気味の体部に短い口縁部が引き出される。

E2類 体部と口縁部の境が不明瞭なもの。

E3類 体部と口縁部の境が明瞭で、口縁部が短いもの。

E4類 体部と口縁部の境が明瞭で、口縁部が長いもの。

F類 須恵器杯蓋を模したもの。体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部が外側へ伸びる。

G類 須恵器杯身を模したもの。体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部が内弯する。

須 恵 器

杯 蓋 体部と口縁部との境に稜をもつものと、扁平なものがある。

杯 身 体部と口縁部との境に稜をもつ無台杯。

C 各 説 (図版10～29・38～52)

SD1・SD2・SD3・SD5・沢1・SX1・SX2出土土器については時期幅があり、出土状況も決して良好とはいえない状況であったが、遺物分布にある程度の粗密があるようなので、参考までに弥生時代後期～古墳時代後期(区分2・3)の土器を対象として大グリッド単位の器種組成を示す(第2・4表)。

計量の方法は、口縁部破片の個体識別で行った。同一個体の破片が複数ある場合は1点として数えた。なお、弥生時代後期～古墳時代前期の甕Aについては、胎土・櫛描文原体によって個体の識別が比較的容易であったため、体部破片も1個体1点として数えた。そのため他のものより数が増える結果となっている。弥生時代後期～古墳時代前期の甕C・古墳時代中期～後期の甕Bは、口縁部の屈曲部が残存していなくても調整からその可能性が高いものも含めたので、他の分類に属するものも混じっている可能性がある。ほかに、口縁部破片以外でも器種・個体の識別ができたものについては数に含めた。なお、口縁部破片以外の点数は()として別記した。ここに示す数値はあくまでも器種・分類の有無や多寡を把握するためのもので、厳密な組成比として他の遺跡と比較するには問題があることを付記しておく。

上記組成表には、底部破片の数量も併記した(第3・5表)。時期が混在しているが、個体数の目安として掲載する。多くは甕の底部と考えているが、壺をはじめとするその他の器種もふくまれている可能性がある。底部破片のうち約4分の1以上が残っているものについては、底径を測りグラフ化した(第19・20図)。

個々の遺物の説明は基本的に観察表に記すとして、特記事項のあるものについて本文中で説明を加える。

a) SD1

SD1a～e・SD1h～jから、弥生時代中期後半～古墳時代後期の土器が出た。自然流路出土のため水磨しているものも多く、18J・19H～Lグリッド出土土器で顕著であった。19I出土の体部片の多くは胎土中のチャートが表面に突出するほど水磨していた。その反面、水磨していない土器もあり、土器の埋没時期や過程に違いがあったと推定される。ただし、遺物の時期・出土層位と水磨の度合いに強い相関関係はみられないので、遺跡の上流にあった遺物包蔵地が洪水等で何回か押し流され、ここに堆積したと考えられる。磨耗のないものについては直接投棄された可能性もある。遺物量が多かったのは19Jグリッドである。その中でも19J1～3・6に集中がみられ、特に19J1では顕著であった。

弥生時代中期(3～5)

4体部の縦羽状文は右回りの施文である。

弥生時代後期～古墳時代前期(1・2・6～63)

1は隆帯の下に強いヨコナデを加え、隆帯を際立たせている。2は口縁部下端に丸棒状工具による刺突が連続する。一部交互刺突のようにになっているが意識的なものではない。口縁端部は磨耗のため破断面として図示したが、現存部分が口縁端部である可能性もある。6は大きく開く口縁部と縄文の直下に引かれた沈線から十王台系の壺と推定される。7は斜位回転の縄文のあり方から天王山式と推定される。10は口縁部の櫛描波状文施文後、口縁端部をヨコナデし、施文している。これに対して11は口縁端部の櫛描波状文施文後、口縁部に施文している。13は口縁端部に強いナデによる沈線が1条巡る。20は櫛描文原体の結束が緩いのか、条の間隔が広く、不規則である。28は三角形の透かし部分にも赤彩されている。33は付加状口縁である。37は器壁が薄く、口縁端部の面取りがきっちりしている。63脚部下端にはミ

3. 弥生時代中期～古墳時代

ガキに伴う砂粒の移動跡が残る。

古墳時代中期～後期 (64～122)

65外面のハケメは粗い。68口縁部には体部へのヘラナデの末端部が凹みとして残る。81の口縁端部にはごく浅い指押さえが連続する。82は体部外面にケズリが行われるが、方向が上から下であり、ほかの甕とは逆方向である。口縁部と体部との間には稜線が明瞭にできている。これらの特徴から、上野地方の鬼高期に見られる甕と推定される。87は大きさの割に重量感のある土器である。91は胎土が白色で表面の色調が赤橙色を呈する。他の杯とは異質である。96は器壁が薄く堅緻である。97は胎土が灰色、表面は橙色を呈する。103は内面の稜線が明瞭で作りが丁寧である。杯F・G類(113～117)は、117のように稜線が明瞭なものとそうでないものがある。高杯Bの119は一見すると杯E1に脚が付くようにみえるが、坏底部となる円盤に口縁を継ぎ足しており、高杯Aの作りと共通する。須恵器坏121は明褐色を呈し特異である。

90・121はSD1aとSD2から出土した破片が接合したものである。

b) SD2

弥生時代中期後半～古墳時代後期の土器が出土した。SD1と比較して、各時代・時期を通じて多系統の土器が出土している点、古墳時代中期～後期に杯が少ない点などに違いが認められる。また、水磨している土器もSD1と比べると少ない。

土器は20・21Iグリッド、20・21Jグリッドでそれぞれまとまって出土し、21I1・20I15・20J5グリッドに特に集中していた。水磨も少ないこともあり、投棄された可能性がある。

弥生時代中期 (123～131)

123は口縁端部が磨耗しているため、本来は図示した形状と若干異なるかもしれない。その場合でも口縁が長く伸びることはなさそうである。128・129は弥生時代中期甕G類としたものである。128は体部にヘラナデを行った後、縦方向に下から上にミガキを行う。口縁部は折り返しではなく別の粘土紐を接合し、最後に口縁部をきっちりヨコナデする。内面は縦方向のハケメののち、ミガキを行う。器面にはハケメによって生じた凹凸が残存する。底部は体部に蓋をするようにふさぎ、底部と体部の境に補強の粘土を貼り付けている。雲母が少なくかっちりした胎土で焼成は良好、そして作りの精緻さから、山陰からの搬入品と考えられる。これに対し129は体部外面がミガキではなく下から上へのハケメで調整され、口縁部の作りも128ほどきっちりしていない。胎土は東海西部のものであることから、山陰系の土器が東海西部で模倣され、搬入された可能性がある。両者の出土地点は近接しており、共伴の可能性が高い。

弥生時代後期～古墳時代前期 (132～204)

153は体部上位にハケメ原体とは異なる角棒状工具による連続刺突が行われる。154は口縁部の立ち上がりが垂直に近いので、壺の可能性もある。156の口縁部ハケメは細かくはつきりしている。157の口縁部下端部は隆帯状になっているが、貼付けではなく、上下に強いヨコナデを行うことで作出されている。158・159・163・166の胎土はチャート礫が多い。159体部外面のハケメは非常に細かい。161の口縁部の垂加する部分は粘土が付加されている。162の胎土はやや白っぽく、円礫が少ない。内面のハケメは沈線状で明瞭である。163内面のハケメは外面のそれに比べて粗い。175口縁部直下には右回りでヘラ圧痕が連続する。182はS字甕C類〔赤塚1986〕に比定される。口縁部の圧痕は工具痕の可能性が高い。体部のハケメは始めに右下から左上に、次に右上から左下に行き羽状とし、最後に横方向に行

う。体部内面のナデは下から上へ行われる。194は体部にタタキと細かいハケメが行われる。底部はドーナツ状である。192・195は器面が橙色を呈し、器壁が薄く軽い。196は外面口縁部に縦方向、体部に横方向のハケメが行われる。箱清水式壺の末期的なものの可能性がある。197は棒状の脚部が付く可能性が高い。同様の高杯は会津坂下町樋渡台畑遺跡〔吉田1990〕に見られる。203は胎土に石英粒を多く含み全体にキラキラして見える。作りは器壁が厚く、粗雑である。200は櫛描横線文の間に二枚貝の刺突文が施文される。

古墳時代中期～後期（205～215）

205の胎土はチャートが目立つ。206は大きさの割に軽く器壁が薄い。ハケメは浅く、表面を軽くナデている感じである。208は206と対照的に重量感のある土器である。口縁部内面は強いヨコナデにより段ができています。213の口縁端部は内面が丸く肥厚し、布留甕の口縁端部に似る。215はミガキも施されているが、粗雑な作りである。

c) SD3・SX1

SD3出土土器には水磨はほとんどみられなかった。SD3aとSX1は一部重複するため、それぞれから出土した土器が接合する例が複数みられた。

弥生時代中期（216～218）

216は弥生時代中期の甕で、口縁端部に縄文と刺突が行われ、口縁部無文、体部に縦・横の櫛描直線文、横方向の櫛描波状文、文様帯下端に刺突が連続し、体部下半ミガキとなる。

弥生時代後期～古墳時代前期の土器（219～248・250）

219底部には木の実圧痕と推定される円形や楕円形の3～7mmの凹みが点在する。224は他の甕A類の胎土に褐色が多いのに対して白っぽく、異質である。施文も頸部簾状文が水平にならないなど、作りが粗雑である。245体部下端にはハケメ原体によるとみられる連続刺突が巡る。

古墳時代中期～後期（249・251～255）

254は外面に黒斑がある。

d) SX2

弥生時代後期～古墳時代前期（256・257）

256は擬凹線の1本1本の幅が広く、断面樋状を呈する。工具は不明である。

e) SD5

遺物量が少なく、時期幅も限定されている。

弥生時代後期～古墳時代前期（258～261）

258底部は輪台技法が用いられたのか、明瞭なドーナツ状を呈する。

f) 沢1

8層から少量の土器が出土した。時期は弥生時代中期を中心とし、古墳時代前期までのものがある。

弥生時代中期（262～265）

262は横羽状文の下端に列点が施される。

3. 弥生時代中期～古墳時代

弥生時代後期～古墳時代前期 (266～270)

270は外面が赤彩されている。

g) 包含層ほか

ここでは、二次調査包含層資料のほか、表土出土資料・一次調査出土資料・表面採集資料等について説明する。出土位置・層位は観察表に記す。

包含層出土土器は、自然流路の検出された18・19列で多く出土した。17Lグリッドでは被熱した土器がまとまって出土しており、時期も概ね古墳時代後期でまとまっている。検出はできなかったが、遺構が存在した可能性がある。'94調査区ではJ～L列で土師器細片が出土した。

弥生時代中期 (271～276・278～286)

274拓本上部の白丸に見える部分に粉痕がある。275は甕の体部上部破片を想定しているが、天地逆で下部の可能性も残る。280内面のミガキは光沢を帯びるほど丁寧である。281口縁端部は磨耗しているため詳細は不明であるが、弱い凹凸があるので縄文が施文されていた可能性がある。281は胎土に白砂を多く含む。285体部の単斜条痕は左回りに施文されている。286は口径からみて台が付かない甕と推定される。口縁部はくの子にやや長く、緩やかに外反し、短く「く」の字に屈曲して終わる中期のものに比べて新しい様相と考えられる。口縁端部に縄文ではなくヘラ刻みが施されている点も新しい要素と捉えられる。胴部の複合鋸歯文は中期後半の特徴的な文様であるが、台付甕に主に施文されるもので、普通の甕の頸部下に施文される類例は少ない。後期前半吉田式期には波状文や単斜条痕と組み合わせられて施文される例(287)はあるが、それをもって286を後期に位置付けられるか、という判断が難しいところである。

弥生時代後期～古墳時代前期 (277・287～371・373～375)

292は体部下端がミガキ残され窪んでいる。292・293は小破片からの図上復元であるので、実際の器形と図示したものが若干異なる可能性があるので注意を要する。295は口縁端部に篋状工具による刺突が行われている。297は口縁端部に強いヨコナデが施され、沈線状の凹みが1条巡っている。299は口縁部の波状文施文後、口縁端部にナデを行う。304の胎土には径3mmまでの白色礫が多く含まれ、器面に水玉模様のように露出している。他にこのような胎土の土器はない。313は器壁が薄く、胎土がやや黄色味を帯びる。甕A類の胎土の多くが褐色なのに対して異質である。320は壺A類の体部上部破片と推定したが、弥生時代中期栗林式の斜格子文の可能性もある。323口縁の直立部分は粘土を付加することで作り出されている。326・327は器壁が薄い。329内面は非常に平滑である。中期の可能性はある。330底部はドーナツ状を呈し、側面から中央に粘土を寄せ集めるような調整がされている。341の口縁部には粗いハケメが残るが、一見するとタタキに似ている。

344外面のミガキの原体は幅3mmほどと細い。360の胎土には径7mmまでのチャート角礫が含まれる。他の土器に含まれるチャートは円～亜円礫であるので異質である。362は器壁が厚く、重量感のある土器である。366は胎土が白色を呈する。口縁部の一部にススと見られる黒色の付着物が認められる。370は内面に櫛描文が施文されている。東海地方の有段高杯と推定される。375は口縁部と体部の境にハケメの痕跡が認められる。内面は火はじけによるものか、粟粒状に剥落し、外面底部にはススが付着する。

古墳時代中期～後期 (372・376～429)

376は内外面とも平滑に仕上げられる。378は胎土に金雲母が異常に多く、器面がキラキラ光って見

える。内面のハケメは水平に明瞭に施される。外面のハケメは内面と対照的にヘラナデに近い弱いハケメである。379は焼成が堅緻である。381は白色礫が多く含まれる。387底部には爪痕が点々と残る。396は胎土に大粒のチャートを多く含み、比較的粗雑な作りである。398は被熱のためか、表面が剥落している。400は体部中位に弱い屈曲部をもち、杯G類に近い。413は小型だが作りは杯F類に似る。414は内面のミガキが菱形の暗文風になっている。417は体部と口縁部との間に屈曲部があるが、外面では不明瞭である。内面はナデで窪ませることにより、屈曲部を際立たせている。418底部内面中央部は播鉢状に窪んでいる。419は胎土が白色を呈し、内外面は赤彩される。杯で赤彩される例は他にない。420は屈曲部がやや不明瞭で、外面のミガキも418のように装飾的なものではない。400・419～422のように底部に「×」印があるものが散見される。

428は土製品としたが、何かの把手の可能性もあり、詳細や時期は不明である。

429は紡錘車で、側面に磨きの痕跡が矢羽状に残る。時期は不明である。

4 古代・中世 (図版30・52)

古代・中世の遺物は浅箱1箱に満たない程度の遺物量である。古代の遺物については〔坂井1984、春日1999〕の編年をもとに時期を記した。

a) '94小礫集中域1

2・2'層中の礫とともに、珠洲焼製円盤(1～3)やこれと同大の珠洲焼甕破片(4・5)が出土した。

b) SD1

6・7は9世紀中頃の須恵器長頸壺である。7の把手は板状のものが貼り付けられており、穿孔はされていない。8は須恵器壺の底部近くの破片を打ち欠いて成形後、砥石に転用されている。

c) SD2

9は砥石で、上面は節理面である。10は珠洲焼の播鉢である。卸目の細かさから14世紀代と推定される。

d) SD3a

11の土師器無台杯は9世紀後半の所産である。

e) SD5a

12は土師器小皿で、11世紀前葉前後の所産である。このほか、図示していないが内面黒色処理された土師器無台杯がある。

f) 包含層ほか

13・14は須恵器である。14は8世紀後葉～9世紀初頭の所産である。15は10世紀前葉前後～11世紀前葉の所産である。

SD2 区分2

Table with columns: 区分, 器種, 分類, 20I, 20J, 20K, 21H, 21I, 21J, 21K, 21L, 分類計. Rows include 養, 密, 高杯, 鉢, 有孔鉢.

SD2 区分3

Table with columns: 区分, 器種, 分類, 20I, 20J, 20K, 21H, 21I, 21J, 21K, 21L, 分類計. Rows include 養, 密, 高杯, 鉢, 杯, 時期不明.

SD3a 区分2

Table with columns: 区分, 器種, 分類, 20F, 21E, 21F, 21G, 21H, 22E, 22H, 22I, 22G, 分類計. Rows include 養, 密, 器台, 高杯, 鉢.

SD5b 区分2

Table with columns: 区分, 器種, 分類, 23E, 23F, 分類計. Rows include 養, 壺.

SX2 区分2

Table with columns: 区分, 器種, 分類, 23H, 24H, 分類計. Rows include 養, 高杯.

SD3a 区分3

Table with columns: 区分, 器種, 分類, 21E, 21F, 21G, 21H, 22E, 22H, 22I, 分類計. Rows include 古墳中～後期, 時期不明.

SD5a 区分2

Table with columns: 区分, 器種, 分類, 24E, 24H, 24I, 25E, 25F, 25H, 分類計. Rows include 養, 密, 高杯, 時期不明.

沢1 区分2

Table with columns: 区分, 器種, 分類, 13G, 13H, 15G, 分類計. Rows include 養, 不明.

SX1 区分2

Table with columns: 区分, 器種, 分類, 21F, 21G, 分類計. Rows include 養, 壺.

SD3b 区分3

Table with columns: 区分, 器種, 分類, 23I, 分類計. Rows include 養, 須恵器.

SX1 区分3

Table with columns: 区分, 器種, 分類, 21F, 分類計. Rows include 古墳中～後期, 時期不明.

SD5b 区分3

Table with columns: 区分, 器種, 分類, 23E, 分類計. Rows include 養, 時期不明.

SX2 区分3

Table with columns: 区分, 器種, 分類, 23H, 分類計. Rows include 古墳中～後期.

第4表 土器組成表(2)

SD2

Table with columns: ナデ, ケズリ, ハケメ, ミガキ, ドナツ, 丸底, 脚, その他, 計. Rows include 20I, 20J, 20K, 21H, 21I, 21J, 21K, 計.

SD5a

Table with columns: ナデ, ケズリ, ハケメ, ミガキ, ドナツ, 丸底, 脚, その他, 計. Rows include 24H, 25E, 25F, 24I, 計.

SD5b

Table with columns: ナデ, ケズリ, ハケメ, ミガキ, ドナツ, 丸底, 脚, その他, 計. Rows include 23E, 23F, 計.

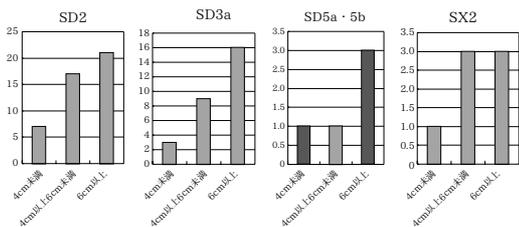
SD3a

Table with columns: ナデ, ケズリ, ハケメ, ミガキ, ドナツ, 丸底, 脚, その他, 計. Rows include 20F, 21E, 21F, 21G, 22E, 22H, 計.

SX2

Table with columns: ナデ, ケズリ, ハケメ, ミガキ, ドナツ, 丸底, 脚, その他, 計. Rows include 23H, 24H, 計.

第5表 底部調整集計表(2)



第20図 底部径組成図(2)

第V章 ま と め

1 弥生時代中期

弥生時代中期の土器には中頃（区分0）の条痕文土器と後半（区分1）の栗林式土器がある。

後半の甕Aの280・281は体部の櫛描波状文がコンパス文のような施文方法であり、中部高地型櫛描文の施文方法とは異なり、注意される。甕Dは器形・施文の点で中期的様相と後期的様相を併せもっており、位置付けについては検討の余地がある。

中期の土器の中で注目されるのは、山陰系¹⁾とした甕G類である。逆L字を呈する口縁形態が、山陰地方の中期中葉とされている土居窪式〔長井1996〕の甕の特徴に似る。おそらく県内初出だと思われるが、搬入品と推定される128と模倣品と推定される129があり、いずれもSD2の20J5灰下砂から出土した。共伴の可能性が高い。129の胎土は東海地方西部の可能性があり、山陰から東海へ土器を持った人が移動し、そこで模倣品を作成し、さらに両者を持って小野沢西遺跡へ至る、という流入経路が思い浮かぶ。今後、中期における東海・山陰との関係を考える上で貴重な事例といえよう。

2 弥生時代後期～古墳時代

(1) 出土土器の概要

土器の多くは自然流路（沢1・SD1・SD2・SD3・SD5）と包含層から出土し、所属時期は弥生時代後期～古墳時代後期までの幅がある。

小野沢西遺跡の所在する上越地方の古墳時代の編年案は川村氏によって示されている〔川村2000b〕（以下、川村編年と略す）。川村編年はそれまでの編年案〔坂井・川村1993、川村1988b、坂井ほか1987〕を基礎として、古墳時代を16段階に細分したものである。1～6段階の土器群の内容については笹澤正史氏によって変遷図が示されている〔笹澤正史2003〕。

弥生時代後期～古墳時代前期の編年については新潟シンポ編年〔田嶋1993〕を軸として、青木氏による長野盆地南部における編年案〔青木1998〕（以下、青木編年と略す）を併用する（第6表）。

出土土器の時期ごとの詳細な器種組成を知ることができないので、上記編年に対する細かな編年的位置付けは行わず、およその時期幅を示す。

(2) 在地および北陸系の土器

区分2

弥生時代後期からのものとして、有段口縁の甕D・E・鉢A・壺C、弥生時代からの形態を引き継ぐ甕F・壺Bがある。これらは川村編年1段階以前を中心として2あるいは3段階まで残存する可能性がある。

1) 器形・胎土・製作技法について赤澤徳明氏・久田正弘氏から御教示いただいた。

口縁が「く」あるいは「コ」字を呈する甕C類は川村編年1段階以前から前期全般にわたり継続するが、口縁部形態により継続期間に違いがみられる。口縁端部を摘み上げる甕C1・C4は5段階、面取りを行う甕C2は6段階までにはなくなると考えられる。

区分3

甕Aは長胴化が顕著ではないのであまり新しい段階まで残るとは考えがたく、概ね川村編年の11段階、下つても14段階までに位置付けられると推定される。甕Bは長胴化の進む12段階以降の所産であろう。

杯は8段階以降、内面黒色処理のものは遅くとも14段階までには出現する、ということから、杯D・Eを当該期の所産とし、中でも黒色処理のものは14段階以降とする。

須恵器は杯蓋(423)がTK47、杯身(425・426)がそれぞれTK10、TK47～MT15に比定されることから、概ね12～14段階に位置付けられる。426についてはもう少し新しい可能性もある。

(3) 外来系の土器

a) 中部高地系(信州系)

中部高地系とするのは区分2の甕A・B、壺A・高杯Aで、これらは箱清水式土器の範疇でとらえられる。長野県北部の千曲川・犀川流域を核として分布する栗林式・箱清水式という地域色の強い土器群は中部高地型櫛描文系土器群と仮称されている〔青木前掲〕。この土器群の特徴である「中部高地型櫛描文」とは、土器を左回りに回転させて文様は右回りに施文した結果、縦構成の文様帯を形成するものである〔佐原1959〕。施文方法は波状文を一回転させるのではなく、手の移動範囲で短く施文を行い、同一点から上下方向に文様を重ねるブロック充填形式である〔橋本裕行1986〕。

小野沢西遺跡出土の甕Aも基本的にはブロック充填形式で施文される。口縁部と体部の櫛描波状文と頸部簾状文の施文順序は各種あるが、簾状文施文後に波状文を施文するもの(I類)主体から波状文施文後に簾状文を施文するもの(II類)主体へという時間的推移が仮説として挙げられている〔青木前掲〕。小野沢西遺跡では全形のわかる土器は多くはないが、推定されるものも含めれば、SD1でI類5点、II類2点、SD2でI類1点、II類4点、その他2点、SD3でI類5点、包含層でI類4点、II類1点である。

器形については成形技法の変化に起因する形態変化〔青木前掲〕のほか、体部形態の球胴化が指標とされている〔中島1999〕。甕AをA1～A9類に細分したが、A9類は別として、A1～A8類はおよそその順番で推移していくと推測する。青木編年との対応関係は、概ねA1類が1～2段階、A2・A3類が3～4段階、A4～A8類が5～6段階に相当すると考える。中でもA5～A8類は6段階の後半に対比できよう。ただ、A3類の133については、体部施文がかなり下の方まできているので、あるいはA5類のほうが適当かもしれない。A1類のうち口縁部無文の9・132・292は吉田式〔千野ほか2001〕の可能性もあるが、ほかの器種組成が判然としないので断定はできない。

壺Aの321は口縁部に波状文をもつ。これは折り返し口縁をもつ甕A9とあわせて「飯山型」〔笹澤浩1986〕と呼ばれるものにみられる特徴である。中部高地型櫛描文系土器群の壺は、通常文様帯以外は赤彩ヘラミガキ手法によって精製されるが、321には赤彩は認められない。頸部と体部下位の屈曲部が明瞭なことから青木編年の5～6段階に位置付けられよう。

高杯Aは全面赤彩研磨されるもので、脚部には三角透し孔をもつ。三角透し孔は青木編年の4段階以降に出現し、5段階で定着、中部高地型櫛描文系土器群の終焉とともに姿を消すという。

以上のように、小野沢西遺跡の甕A・B、壺A・高杯Aという中部高地型櫛描文系土器群は、青木編年

2. 弥生時代後期～古墳時代

の1～6段階の時期幅をもち、とくに5～6段階では甕（櫛描文・赤彩）・壺・高杯というセットが認められる。青木編年の1～6段階は新潟シンボ編年の1～4期に対応するが、箱清水式の系譜を引く甕を主体とする中野市がまん淵遺跡〔鶴田・中島^{ほか}1997〕は新潟シンボ編年3～5期に位置付けられているので、一部は5期、川村編年1段階まで下るかもしれない。

これまでも上越地方では大洞原C遺跡〔三ツ井^{ほか}1997〕、籠峰遺跡〔川村2000a〕、裏山遺跡〔小池^{ほか}2000〕などで中部高地系土器が出土しているが、当遺跡ほどまとまった量が得られたことはない。

b) 東海系

区分2の甕G・高杯Cが東海系である。甕GのうちG1類としたものが広義のS字甕で、赤塚分類〔赤塚1986〕ではC類に分類される。器壁は薄い、胎土は在地の甕と大差ないので搬入品の可能性は低い。S字甕は上越地方でも散見され、大洞原C遺跡〔三ツ井^{ほか}前掲〕、籠峰遺跡〔川村1988a〕、横引遺跡〔立木（土橋）1996〕、新井市斐太遺跡群上ノ平24号住〔滝沢1994〕などに類例がある。S字甕C類は籠峰遺跡に1例あり、漆町編年8群あるいは9群に併行するとされている〔川村前掲〕ので、川村編年では4～5段階に位置付けられよう。

高杯Cのうち200・370は有文で胎土が白色であり、在地の土器と異質なことから搬入品の可能性が高い。200は脚部が大きく外反するので、赤塚分類〔赤塚1990〕の高杯B類に相当する。この高杯の脚部に施文されるのは廻間編年Ⅱ期である。370は赤塚分類の高杯A3類に相当する。この高杯の内面施文に、多条沈線に加え波状文が組み合わされるのは同じくⅡ期である。よって、この2点については川村編年1～2段階に対応させておく。

c) 近江系

区分2の甕J1類が近江系である。底部が残存しないので定かではないが、もし台付甕であれば東海系の可能性もある。J1類で器形がわかるものは少ないが、ハケメ原体による連続刺突がある体部片（55）は数点確認されている。裏山遺跡〔小池^{ほか}前掲〕に類例がある。

d) 東北系

区分2の壺H・高杯E2、区分3の甕Fが東北系である。

壺Hは細片のため、器形・文様構成は判然としないが、斜移回転の特徴的な縄文から弥生時代後期の天王山系土器と推定される。天王山系は近隣の遺跡では裏山遺跡〔小池^{ほか}前掲〕のほか、長岡市横山遺跡3号住居跡〔駒形・岩崎1987〕などに類例がある。横山遺跡3号住居跡は新潟シンボ編年5期以前に位置付けられている。

高杯E2は外面ハケメの小型の杯部である。福島県会津坂下町樋渡台畑遺跡に同様の小型の受部で、中実柱状の脚部をもつ器台が少数ながら存在する。器面調整がミガキである点で相違があるが、参考になろう。山三賀Ⅱ遺跡のⅠ期〔坂井1989〕に位置付けられている〔吉田1990〕ので、川村編年では5段階に相当する。

甕Fは内外面にミガキが行われる。県内での類例は少なく、豊栄市松影A遺跡〔加藤2001〕に同様の甕2点がある。松影A遺跡の甕については青森県八戸市根城東溝地区出土資料〔宇部^{ほか}1983〕を類例として挙げ、7世紀代に位置付けている。よって、川村編年16段階以降の可能性はある。

e) 畿内系

区分2の甕H・甕I・鉢B・高杯D、区分3の高杯Aが畿内系である。

甕Hは底部付近の破片で全形を知ることはできないが、いずれも平底である。194ではドーナツ状になっているのを観察できる。タタキは右上がり、これらは「弥生形（第五様式系）甕」〔寺沢^{ほか}1986〕の特徴である。これに対して285のタタキは水平か若干左上がりである。左上がりのタタキは「庄内大和甕」〔寺沢^{ほか}前掲〕の特徴であるが、内面調整や底部形態はこれと合致しない。庄内大和甕は大洞原C遺跡〔三ツ井^{ほか}前掲〕に類例があり、庄内2式期に位置付けられている。これは新潟シンボ編年で概ね5段階に相当する。県内ではタタキの甕の類例として長岡市横山遺跡〔駒形・岩崎前掲〕、大潟町丸山遺跡〔小野・桑原1988〕、新潟市緒立C遺跡〔渡辺1994〕がある。ほかに近隣では中野市沢田鍋土遺跡〔鶴田・中島^{ほか}前掲〕でも確認されている。

甕IのうちI1類としたのが「布留式甕」である。I2類は内弯気味のくの字口縁から「布留系甕」を想定しているが、全形がわからないので断定はできない。I1類は口縁形態が開き気味のものや急角度で立ち上がるものがあるので、時期幅があると考えられる。細片なので時期の決定は困難だが、籠峰遺跡〔川村前掲〕、上越市津倉田遺跡〔川村・品田2003〕の類例から、川村編年4～6段階に位置付けておきたい。

f) 山陰系

区分2の甕E1・甕J2である。E1類は、外反して開く口縁部下端に鋭い稜をもつという特徴が、漆町遺跡〔田嶋1986〕の山陰系甕「甕形土器B2」と共通する。漆町編年で8群まで存続する器形である。J2類は同じく「甕形土器B3」に類似する。漆町編年で7～10群まで認められる。川村編年では、前者は4期まで、後者は同3～6期に対応すると考えられる。

g) 関東系

区分2の壺I・区分3の甕E・杯F・杯Gである。

区分2の壺Iは口縁部破片だけだが、逆ハの字に開く特徴的な形態から、弥生時代終末の十王台系と判断した。県内の報告例はおそらくこれが初例であろう。

区分3の甕Eの特徴は口縁部がくの字を呈し、体部外面調整がケズリの点にある。このような体部ケズリの甕は中期和泉式期の後半段階、概ねTK47併行期から見られるが〔坂口1987〕、口縁形態がきっちりしたくの字を呈するのは鬼高期に入ってからである。

杯F・杯Gも口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部が直立ないしは内傾して立ち上がるという、鬼高期に特徴的なものである。

よって、区分3の関東系は鬼高期、川村編年では概ね14段階以降に位置付けられる。ただし、鬼高期の初源については、須恵器模倣杯の出現をもって鬼高期のはじめとするかどうか見解の一致を見ていないので〔坂口1987〕、もう少し遡る可能性もある。

(4) おわりに

以上のように、小野沢西遺跡では弥生時代後期から古墳時代後期までの土器がほぼ継続的に認められる

2. 弥生時代後期～古墳時代

が、当遺跡最大の特徴は各期を通じて外来系土器が存在することであろう。

弥生時代後期においては箱清水式土器がほぼ独占する形であり、何をもって外来系とするのか迷うような土器のあり方である。新潟シンボ編年5～6期では中野市沢田鍋土遺跡等において北陸系の土器と箱清水式土器が共存しているが、その前段階のがまん淵遺跡では箱清水式が主体である。がまん淵遺跡は新潟シンボ編年の4期を中心とした時期に展開する高地性の防御的集落とされている。新潟県側の高地性集落としては裏山遺跡〔小池ほか前掲〕、斐太遺跡群〔駒井・吉田1962、滝沢前掲ほか〕が著名である。裏山遺跡は新潟シンボ編年の2～3期、斐太遺跡群は同2～5期に位置付けられる。小野沢西遺跡に最も近い高地性集落は裏山遺跡とがまん淵遺跡であり、どちらも直線距離で25kmを測り、ちょうど中間地点にあたる。また、小野沢西遺跡はこれらの高地性集落と同じ北国街道沿いにあり、なおかつ飯山街道と北国街道の分岐点にも程近く、信州と越後を結ぶ要衝ともいえる立地である¹⁾。裏山遺跡が終焉を迎え、がまん淵遺跡が営まれ始める時期に北陸系の土器とともに箱清水式土器が一定量を占める土器群が残されているのは興味深い。なお、飯山街道の信州側入口である飯山盆地には中部高地型櫛描文系土器群を多出する遺跡が密集しており、飯山街道沿いに土器が流入した可能性を考える一因として挙げられる。次の段階である川村編年1～3段階では、北陸系土器が信州に大量流入し、信州との関係は一方通行的という指摘があるが〔笹澤正史前掲〕、その前段階にはこれとは違った動きがあったことも憶測される。

古墳時代においても様々な地域の土器が流入する状況は続き、この場所が常に交通の要衝であったことを窺わせる。とくに川村編年1段階前後においては、それまでの中部高地系・北陸系に、東海系・近江系・東北系・畿内系が加わり、最も多彩な様相を示す。

これまでのところ近くで古墳時代の集落は発見されていないが、これだけの遺物量を供給できる規模の集落が近くにあることは確実であろう。

上越市史	新潟シンボ	北陸(漆町)	須恵器	中部高地	畿内	東海	関東
川村2000b	田嶋1993	田嶋1986	田辺1981	青木1998	米田1992	赤塚1990	小林1996
	1	1		1 2~3		山中式後期	
	2	2		4~6		廻間I	
	3	(+) 3			庄内I		
	4	4			庄内II		廻間II
1	5	5			庄内III		廻間III
2	6	6		庄内IV			
3	7	7		布留I	松戸式前期		
4	8	8		布留II			
5	9	9		布留III	五領		
6	10	10		布留IV			
7		11				和泉	
8			TK73				
9		12	TK216				
10			ON46 TK208				
11		13	TK23				
12		14	TK47				
13		15	MT15		鬼高		
14			TK10				
15			MT85				
16			TK43				

表中の文献と〔滝沢1999；坂口1987；坂井1989〕を参考に作成

第6表 編年対応表

1) 越後から信濃へ通じるルートについては現国道18号・292号のルートが想定される。これについては川村浩司氏・金子拓男氏の指摘がある〔川村1996〕。

要 約

- 1 小野沢西遺跡は新潟県南西部の中頸城郡妙高村大字関山字大峯・小野沢西ほかに所在し、妙高山東麓の緩斜面に位置する。標高は425m前後であり、現況は山林および畑地であった。
- 2 調査は上信越自動車道の建設に伴い、平成5年から7年の3か年に実施した。二次調査面積は総計13,870m²である。遺跡は上信越自動車道用地内にとどまらず、周辺に広がっていると考えられる。
- 3 調査の結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中世・近世の遺物が発見された。土器が大半を占め、石器などは僅少である。遺構は少なく、遺物の大半は包含層と自然流路から出土した。
- 4 検出されたのは自然流路10条とピット8基、溝5条などがあるが、集落が営まれた場所ではないようである。
- 5 自然流路から縄文時代晩期～古墳時代後期および古代・中世の遺物が出土したが、時代・時期によって出土地点・層位が明確に分離できる状況ではなかった。弥生時代中期～古墳時代後期までほぼ連続する時期の土器が認められるのが特徴である。
- 6 縄文土器の多くは晩期氷式の時期に属する。飛騨地方のいわゆる阿弥陀堂式の破片があるのは注目される。
- 7 弥生時代中期の土器には、中頃の条痕文土器と後半の栗林式土器がある。ほかに山陰地方からの搬入品と推定される土器がある。
- 8 弥生時代後半～古墳時代にかけては、在地および北陸系の土器を主体としつつも、中部高地系（信州系）・東海系・近江系・東北系・畿内系・山陰系・関東系など多地域の土器が見られる。とくに弥生時代後半～古墳時代前半では中部高地型櫛描文系土器群がまとまって出土した。信州との国境近くに立地し、北国街道・飯山街道が至近を通過する当遺跡の立地と相俟って、土器の流入経路を考える上で貴重な資料である。

引用文献

- 赤塚次郎 1986 「S字甕」覚書'85』『財団法人 愛知県埋蔵文化財センター 年報 昭和60年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1990 「V1 廻間式土器」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 青木一男 1998 「第4章 第1節 中部高地型櫛描文系土器群の理解」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 -長野市内 その3- 松原遺跡 弥生・総論6 弥生後期・古墳前期』日本道路公団・長野県教育委員会・（財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
- 新井市教育委員会 1996 『栗原遺跡第10次発掘調査経過現地説明会資料』（パンフレット）
- 飯坂盛泰ほか 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第95集 上信越自動車道関係発掘調査報告書VI 上中島遺跡・野林遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 上田典男 1995 「栗林式土器研究の位置視点-松原遺跡の整理作業から-」『長野県埋蔵文化財センター紀要4』

(財)長野県埋蔵文化財センター

- 宇部則保^{ほか} 1983 『史跡根城発掘調査報告書 V』 青森県八戸市教育委員会
- 大竹憲昭 2000 「第1章 第3節 遺跡周辺の環境」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書48 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15-信濃町内 その1-貫ノ木遺跡・西岡A遺跡 旧石器時代』 日本道路公団・長野県教育委員会・(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
- 尾崎高宏 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第111集 上信越自動車道関係発掘調査報告書VIII 黒田古墳群』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野 昭・桑原陽一 1988 『新潟県中頸城郡大潟町 丸山遺跡発掘調査報告書』 大潟町教育委員会
- 加藤 学・荒川隆史 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉A遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2001 「第VII章 2. B. 東北系の土師器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第106集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書I 松影A遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1994 「第IV章 4. B. 古墳時代後期の遺物」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 北陸自動車道関係発掘調査報告書 一之口遺跡東地区』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会 古志書院
- 金子拓男・高橋 保・秦 繁治^{ほか} 1980 『水科古墳群発掘調査報告書』 三和村教育委員会
- 川村浩司 1988a 「新潟県籠峰遺跡の外來系土師器3例」『新潟考古学談話会会報』 第1号 新潟考古学談話会
- 川村浩司 1988b 「越後の古墳時代中後期の土器について」『新潟考古学談話会会報』 第1号 新潟考古学談話会
- 川村浩司 1996 「弥生後期における北信濃と北陸」『考古学と遺跡の保護』 甘粕健先生退官記念論集刊行会
- 川村浩司 2000a 「第三章 弥生時代～室町時代の遺物」『籠峰遺跡発掘調査報告書II 遺物編』 中郷村教育委員会
- 川村浩司 2000b 「上越市の古墳時代の土器様相-関川右岸下流域を中心に-」『上越市史研究』 第5号 上越市
- 川村浩司・品田高志 2003 「第4章 第2節 5 津倉田遺跡」『上越市史』 上越市史編さん委員会
- 小池義人 1998 「下馬場遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』 平成9年度
- 小池義人^{ほか} 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第96集 裏山遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小島幸雄 1979 『岩木地区遺跡群発掘調査報告書』 上越市教育委員会
- 小島幸雄 1989 『下馬場古窯跡群確認調査報告書』 上越市教育委員会
- 小島幸雄 1991 『中島廻り遺跡発掘調査報告書』 上越市教育委員会
- 小島幸雄・笹澤正史 1995 『北割遺跡発掘調査報告書』 上越市教育委員会
- 小島幸雄・中西聰^{ほか} 1996 『前田遺跡発掘調査報告書』 上越市教育委員会
- 小林三郎 1996 「関東地方の古墳時代の土器」『日本土器事典』 雄山閣
- 小林新治 1994 「第2章 遺跡の位置と環境」『飯山市埋蔵文化財調査報告書 第36集 上野遺跡IV』 飯山市教育委員会
- 駒井和愛・吉田章一郎 1962 『斐太』 慶友社
- 駒形敏朗・岩崎 均 1987 『横山遺跡』 長岡市教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄 1994 『新版標準土色帖』 日本色研事業株式会社
- 坂井秀弥 1984 「第VI章 1 今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第35集 上新バイパス関係遺跡発掘調査報告I 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育

委員会

- 坂井秀弥 1989 「第七章 1 古墳時代の土器と遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 新新バイパス関係遺跡発掘調査報告 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「古墳出現期における越後の土器様相」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』
「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ（研究者代表 甘粕健）
- 坂井秀弥・川村浩司・田中靖・本間桂吉 1987 「越後における古式須恵器と若干の問題」（千曲川水系古代文化研究所ほか1987所収）
- 坂口 一 1987 「群馬県における古墳時代中期の土器の編年－同伴関係による土器形式組列の検討－」『研究紀要－4－』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤 慎・高橋 勉 2000 『平成11年度 新井市遺跡確認調査報告書 上寺遺跡・観音平古墳群・西俣1号墳・田中前2遺跡』新井市教育委員会
- 佐藤 慎^{ほか} 2002 『斐太歴史の里調査報告書 第1集 斐太歴史の里確認調査概要報告書 観音平1号墳・4号墳 矢代山地区』斐太歴史の里調査団・新井市教育委員会
- 笹澤 浩 1986 「箱清水式土器の文化圏と小地域」『歴史手帳』14巻2号 通巻148号 名著出版
- 笹澤正史 2003 「越後における庄内～布留式併行期の土器様相－頸城郡を中心として－」『庄内式土器研究26－庄内式併行期の土器生産とその動き－越の国を中心とした庄内式併行期の土器様相』庄内式土器研究会
- 笹澤正史・小島幸雄 1999 『新潟県上越市 上千原地区ほ場整備事業関連発掘調査報告書 津倉田遺跡』上越市教育委員会
- 佐原 真 1959 「弥生式土器製作技法に関する二三の考察－櫛描文と回転台をめぐる－」『私たちの考古学』5-4
- 上越市教育委員会 1993 「子安遺跡」『新潟県上越市市内調査確認概要報告書』
- 上越市教育委員会 2002 『吹上遺跡発掘調査概要報告書』上越市教育委員会
- 鈴木俊成 1996 「第七章 3 石器」『新潟県新潟県埋蔵文化財調査報告書 第72集 関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書 清水上遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成・春日真実^{ほか} 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 北陸自動車道関係発掘調査報告書 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 関 孝一・中島庄一^{ほか} 1994 『（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19 県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路 一長野県中野市内一 栗林遺跡・七瀬遺跡』長野県・長野県道路公社・（財）長野県埋蔵文化財センター
- 高橋一功 1994 「遺跡の位置と環境」『北陸自動車道関係発掘調査報告書 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 桂・望月静雄 2001 「第I章 遺跡の位置と歴史的環境」『飯山市埋蔵文化財調査報告 第63集 北町遺跡Ⅱ』飯山市教育委員会
- 高橋 勉 1985a 『昭和59年度 新井市遺跡確認調査報告書一上百々遺跡・高柳宮ノ本遺跡一』新井市教育委員会
- 高橋 勉 1985b 『月岡遺跡範囲確認緊急調査報告書』新井市教育委員会
- 高橋 勉 1989 『杉明遺跡発掘調査報告書』新井市教育委員会

- 高橋 勉 1993 『杉明遺跡発掘調査報告書』 新井市教育委員会
- 滝沢規朗 1994 「新井市斐太遺跡群の出土土器について」『新潟考古』第5号 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 1999 「第3章 第3節 集落」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会 古志書院
- 武田孝昭 1995 「平成7年度の発掘成果 小野沢西遺跡」『埋文にいがた』No.13 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 武田孝昭 1996 「小野沢西遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成7年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 武田孝昭 1997 「第II章 1. 地理的環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第85集 上信越自動車道関係発掘調査報告書II 大洞原C遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡』I 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1993 「北陸南西部の古墳確立期前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 千野 浩^{ほか} 2001 『長野市の埋蔵文化財 第97集 長野吉田高校グランド遺跡II』 長野市教育委員会
- 親跡 喬・野村忠司編 2000 『籠峰遺跡発掘調査報告書II 遺物編』 中郷村教育委員会
- 立木(土橋)由理子 1996 「横引遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第74集 上信越自動車道関係発掘調査報告書I 横引遺跡・籠峰遺跡・柳平遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鶴田典昭 1998 「第1章 第3節 遺跡周辺の環境」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書28 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14—中野市内その3・豊田村内一牛出遺跡・葦山遺跡・風呂屋遺跡・対面所遺跡・飛山遺跡・大谷池遺跡・八号堤遺跡』 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 鶴田典昭^{ほか} 1998 『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書28 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14—中野市内その3・豊田村内一牛出遺跡・葦山遺跡・風呂屋遺跡・対面所遺跡・飛山遺跡・大谷池遺跡・八号堤遺跡』 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 鶴田典昭・中島英子^{ほか} 1997 『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書24 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13—小布施町内・中野市内その1・その2—飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡・がまん淵遺跡・沢田鍋土遺跡・清水山窯跡・池田端窯跡・牛出古窯遺跡』 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 寺沢薫^{ほか} 1986 『矢部遺跡—国道24号線樫原バイパス建設に伴う遺跡調査報告(II)—奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊』 奈良県教育委員会
- 常盤井智行・望月静雄・高橋桂^{ほか} 1994 『飯山市埋蔵文化財調査報告書 第36集 上野遺跡IV』 飯山市教育委員会
- 土橋由理子 1995 「柳平遺跡・小野沢西遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成6年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由理子 2003 「報告書作成中の遺跡 小野沢西遺跡」『埋文にいがた』No.44 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 長井数秋 1996 「土居窯式土器」『日本土器事典』 雄山閣
- 中島英子 2000 「第11章 大平B遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書49 上信越自動車道埋蔵文

化財発掘調査報告書 16—信濃町内 その2—星光山荘A・星光山荘B・西岡A・貫ノ木・上ノ原・大久保南・東裏・裏ノ山・針ノ木・大平B・日向林A・日向林B・七ツ栗・普光田遺跡 縄文時代～近世』 日本道路公団・長野県教育委員会・(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

- 中島庄一 1999 「飯山・中野地方における弥生中期後半から後期の編年について」『1998年度長野県考古学会 冬季大会発表資料 99 シンポジウム長野県の弥生土器編年 発表要旨』 長野県考古学会弥生部会
- 長野県教育委員会 1980 『歴史の道調査報告書 III—北国街道—』
- 長野県教育委員会 1982 『歴史の道調査報告書 X—飯山道—』
- 新潟県教育委員会 1991 『新潟県歴史の道調査報告書 第二集 北国街道 I』
- 新潟県教育委員会 1993 『新潟県歴史の道調査報告書 第五集 北国街道 II』
- 橋本博文 2002 「第3章3(7)まとめ」『斐太歴史の里調査報告書 第1集 斐太歴史の里確認調査概要報告書 観音平1号墳・4号墳 矢代山地区』 斐太歴史の里調査団・新井市教育委員会
- 橋本裕行 1986 『奈良地区遺跡群 I 発掘調査報告書 No.11 地点 受地だいやま遺跡 上巻』 奈良地区遺跡調査団
- 早津賢二 1985 『妙高火山群—その地質と活動史—』 第一法規出版
- 早津賢二 1994 「新潟県焼山火山の活動と年代—歴史時代のマグマ噴火を中心として—」『地学雑誌』 Vol.103, No.2 (931)
- 早津賢二・新井房夫 1985 「妙高火山群テフラ地域のテフラ層」『妙高火山群—その地質と活動史—』 第一法規出版
- 藤田英博・上嶋善治 1993 「第5章 第1節 阿弥陀堂遺跡出土の土器について」『岐阜県文化財保護センター調査報告書 第18集 阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡』 (財)岐阜県文化財保護センター
- 星奈津子 1997 「第II章 2. 歴史的環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第85集 上信越自動車道関係発掘調査報告書II 大洞原C遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 三ツ井朋子ほか 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第85集 上信越自動車道関係発掘調査報告書II 大洞原C遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 吉川俊久 2001 「三和村大野古墳群の調査」『新潟県考古学会第13回大会研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会
- 吉田博行 1990 『会津坂下町文化財調査報告書 第17集 福島県営会津南部ほ場整備事業 若宮地区遺跡発掘調査報告書』 会津坂下町教育委員会
- 米田敏峯 1992 「畿内における前半期古墳の土器年代についての予察」『考古学論集』 4 考古学を学ぶ会
- 渡辺ますみ 1994 『緒立C遺跡発掘調査報告書』 黒崎町教育委員会

凡例
 【残存部位】 *は実測した他にも同一個体の破片があることを示す。
 【残存率】 実測部分に対する数値である。
 【残存率(法量)】 口径または底径に対する残存率であり、図化されていない同一個体破片の残存率も含む。() 付きは推定値。
 【磨耗】 程度により3段階に分類した。小：調整・文様の読み取りに支障ない。中：調整・文様の読み取りに支障ない。大：調整・文様の読み取りに支障ない。
 【胎土】 砂礫等の大きさの目安は次のとおりである。砂：径2mm未満の粗粒砂。砂礫：径2mm前後。礫(中)：径3～4mm程度。礫(大)：径6～8mm程度。礫物等は以下の順序で示す。大きさは特記しない限り1mm未満である。英：石英。長：長石。角：角閃石。
 チャ；チャート。雲；雲母。針；海綿骨針。名称不明のものは色調・大きさを記す。
 【色調】 新版標準土色帖1994年版の表記による。特記しない限り、Hue7.5YRに示された色名である。

縄文土器観察表

報告 No.	連構名	グリッド	層位	時期	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色	付着物	調整		備考
															内面	外面	
1	SD1a	19J16	灰下	後	深鉢?	—	口(突起)	—	—	—	なし	英長砂	内：明褐色 外：褐色	外：スス	ミガキ	口：沈線	
2	SD1a	19J12	灰上	晩	—	—	体*	—	—	—	なし	長白砂	内：明褐色 外：黒褐色	なし	ナデ	ミガキ	沈線
3	SD1a	19L2	砂	晩	浅鉢	—	口	—	口：28.5	口：3/36	なし	角	内：褐色 外：褐色	なし	ミガキ	ミガキ、滑線網状文	「水」式
4	SD1a	19J1	II	晩	浅鉢	—	体	—	—	—	中	英長	内：灰白 外：鈍い橙	なし	ミガキ	弥生中期「栗林式」コ字 沈線間に列点	重ね文の可能性あり
5	SD1a	19L6・7・11	II	晩	深鉢	—	口*	—	—	—	なし	長角白砂	内：赤褐色(5YR) 外：暗赤褐色(5YR)	外：スス	ナデ	ナデ	「佐野式」
6	SD1a	19L2	砂	晩	深鉢	—	口～頸*	—	口：20.0	口：4/36	小	白砂～砂礫	内：鈍い褐色 外：暗褐色	なし	ミガキ	同一個体破片では体部 下半も無文のミガキ	「水」式
7	SD1a	19L2	砂	晩	壺?	—	口	—	—	—	なし	雲砂	内：灰褐色 外：暗褐色	なし	ナデ	ナデ	
8	SD1a	18L10	—	—	深鉢	—	体	—	—	—	小	長チャ、角	内：鈍い褐色 外：褐色	なし	ナデ	沈線	
9	SD2	21K22	地上砂	晩	浅鉢	—	口～体	—	—	—	なし	角	内：褐色 外：褐色	外：口～体ター ル状付着物	ミガキ	口縁部：小突起 口～頸：ミガキ 体：条痕→沈線	「水」式
10	SD1a SD2	19L2・3・12 21L1	砂 地上砂	晩	深鉢	—	口～体*	1/18	口：38.0	口：2/36	小	雲砂	内：暗赤褐色 外：明褐色	外：スス	ヨコミガキ	口～頸：ミガキ 体：細密条痕	「水」式
11	SD3a	21E22	灰下	—	—	—	体	—	—	—	小	角、英長、白砂	内：褐色 外：明褐色(5YR)	なし	ナデ	擦糸R(付加条)	
12	SD3a	21F3	灰上	—	—	—	体	—	—	—	小	英角	内：明褐色 外：明褐色	なし	ナデ	細文	
13	SD3a	21E20	灰上	—	—	—	体	—	—	—	なし	英長角針	内：鈍い橙 外：鈍い褐色	外：スス	ナデ	細文	弥生の可能性あり
14	SD3a	22I9	—	後～ 晩	粗製 深鉢	—	口～底	1/4	口：20.0 底：6.6	口：6/36 底：36/36	大	白砂、英長角	内：灰白 外：灰白	内：コガ 外：スス	器面荒れのため不明	器面荒れのため不明 底：細代痕	
15	SD3a	22I10	—	晩	粗製 深鉢	—	口～底	1/2	口：28.4 底：10.5 器高：30.8	口：27/36 底：33/36	なし	角、チャ、白砂	内：鈍い橙 外：鈍い褐色	内：コガ 外：スス	ナデ、ミガキ	ミガキ 底：細代痕	口端：突起?単位? 口：補修孔あり
16	SX2	23H25	—	後	浅鉢	—	体*	—	—	—	中	白砂、英長角、雲	内：鈍い橙 外：鈍い橙	外：スス	ミガキ 三叉文	「佐野式」	
17	SX2	23H25	—	後	深鉢	—	口～体*	—	—	—	なし	白色砂礫雲角	内：鈍い褐色 外：鈍い褐色	なし	ナデ	ナデ	「佐野式」
18	—	95I区トレン チ	—	中	深鉢	—	口	—	—	—	なし	英長、白砂	内：灰褐色 外：灰褐色	外：スス	ナデ	半載竹管文	「深沢式」
19	—	95I区トレン チ	—	中	深鉢	—	口	—	—	—	なし	英白砂	内：明褐色 外：明褐色	外：スス	ナデ	半載竹管文	「深沢式」
20	—	23I20 23I25 23I20・25 23I20	地上	晩	深鉢	—	体	—	—	—	なし	英長、雲角	内：明褐色 外：明褐色	なし	器面荒れのため不明	条痕→二本組み鏡指沈線	「水」式
21	—	20K17	I地上	晩	深鉢	—	口～体	1/10	口：38.0	4/36	なし	雲	内：明褐色 外：明褐色	外：スス	ヨコミガキ	口～頸：ミガキ 体：条痕	「水」式
22	—	95II区表深	—	晩	浅鉢	—	口	—	—	—	中	英長	内：灰白 外：灰白	外：スス	不明	ミガキ	「阿弥陀堂式」

弥生～古墳時代土器観察表 (1)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調査		備考
															内面	外面	
1	SD1a	19L2	砂	2	高杯	E1	杯底部	1/18			なし	白砂,英,長角	内: 鈍い褐 外: 鈍い黄緑 (10YR)	なし	口: ハケメ 底: ミガキ	稜上に丸棒状工具削面正 稜	
2	SD1j	20H21	砂	2	甕	E3	体	1/12			大	英,長	内: 灰白 外: 橙 (2.5YR)	器面荒れのため不明	器面荒れのため不明	稜上に刺突	
3	SD1a	19J4	II	1	壺	C	頸	—			小	英,長角	内: 灰白 外: 灰白	外: 口スス	口: ナデ 肩曲部に隣帯貼付。 隣帯上に連続刺突		
4	SD1a	19I21	灰上クロ	1	甕	A	体	1/4			なし	白砂,英,長,雲	内: 鈍い橙 外: 濁	外: スス	頸: 右回り等間隔止め縹波状文→ 体: 縹波状文	縹原体: 6本/1.3cm	
5	SD1a	19I17	灰下砂一括	1	甕	C	口~体	1/4	口: 14.0 底: 6.6	口: 19/36 底: 36/36	なし	精良	内: 濁 外: 濁	内: コゲ 外: スス	体: ハケメ(ヨコ) → 縹波状 文(上→下)、口: 2本組縹波 状文、底: ミガキ	縹原体: 5本/1.2cm (図 上復元)	
6a	SD1c	19G1 19G2	IIb II	2	壺	I	口~体*	1/6	口: 14.0	口: 4/36	なし	英,角	内: 濁 外: 橙	外: スス	多糸LRヨコ回転以下縹走沈線 →無文帯(?)	「十五台系」?	
6b	—	19G2	II	2	壺	I	口~体*	—			なし	英,角	内: 濁 外: 橙	外: スス	多糸LRヨコ回転以下縹走沈線 →無文帯(?)	「十五台系」?	
7	SD1c	19G12 19G13	灰下 II上	2	壺?	H	体~底	1/6	底: 5.8	底: 6/36	なし	英,長,白砂	内: 明濁 外: 明濁	内: コゲ 外: スス	縄文LR斜位回転施文→ナデ	「天王山式」?	
8	SD1a	19J5 19J1	II II・灰下砂	2	甕	A1	口~体	1/8			なし	英,長,角	口内: 灰濁 口外: 黒濁 体内: 黒濁 体外: スス	口: なし 体外: スス	体: ミガキ→頸: 右回り等間隔 止め縹波状文→口: 縹波状文	(図上復元) 口: 接合部明瞭 縹原体: 5本/1.1cm	
9	SD1d	19G20	灰下	2	甕	A1	口~体	1/8	口: 17.6	口: 5/36	なし	角,白砂	内: 明赤濁 (5YR) 外: 明赤濁 (5YR)	外: スス	口: ヨコナデ 縹波文		
10	SD1a	19J1	灰上クロ	2	甕	A2	口~底	1/6	口: 17.5 底: 7.0	口: 9/36 底: 8/36	なし	精良	内: 橙 外: 明赤濁 (2.5YR)	外: スス	ハケメ→類: 右回り2~3連止 め縹波状文→口: 縹波状文(下 上)、口端: 面取→縹波状 文、体: 縹波状文(上→下)	縹原体: 10本/1.7cm (図 上復元)	
11	SD1a	19I17 19I21 19J1	灰上クロ 灰上黒 灰下砂	2	甕	A	口	1/7	口: 21.0	口: 5/36	なし	白砂,英,長,雲	内: 鈍い褐 外: 濁灰	内: コゲ 外: スス	頸: 縹波状文→口: 縹波状文 (上→下)、口端: 面取	縹原体: 6本/1.3cm	
12	SD1a	18F22	—	2	甕	A	口~体	1/7	口: 16.0	口: 5/36	なし	英,長,角	内: 濁 外: 濁	外: スス	頸: 右回り等間隔?止め縹波状文 →口: 縹波状文(下→上)	縹原体: 6~7本/1.5cm	
13	SD1a	I区 19I2	表土 灰上クロ	2	甕	A9	口~体	1/5	口: 16.4	口: 11/36	なし	英,長,雲	内: 鈍い橙 外: 鈍い褐	外: スス	口: 縹波状文→頸: 右回り等 間隔止め縹波状文、口端折り返し →縹波状文	縹原体: 10本/1.7cm	
14	SD1a	19J1 19J2 19J7	灰上クロ 灰上黒土 灰上	2	甕	A4	口~体	1/9	口: 17.7	口: 1/36	なし	チャ,雲,白砂	内: 赤濁 (5YR) 外: 鈍い褐	外: スス	頸: 右回り等間隔止め縹波状文→ 口: 縹波状文(上→下)、 体: 縹波状文(上→下) → 体 下半ミガキ、口端: 面取	縹原体: 6本/1.3cm	
15	SD1a	18H9	IIb	2	甕	A6	口~体*	7/8	口: 19.0	口: 9/36	大	白砂多,英,長,角,雲	内: 橙 外: 橙	内: コゲ 外: スス	頸: 右回り等間隔止め縹波状文→ 口: 縹波状文(下→上)、 体: 縹波状文(下→上)	縹原体: 10本/1.8cm	
16	SD1j	20H22	砂	2	甕	A	体	1/5			なし	英,白砂	内: 暗濁 外: 赤濁 (2.5YR)	外: スス	ハケメ→縹波状文(上→下) →体下半: ミガキ		
17	SD1j	19H25	砂	2	甕	A	体	1/8			なし	英,角	内: 明濁 外: 濁	内: コゲ 外: スス	縹波状文(上→下)	縹原体: 7本/1.2cm	
18	SD1c	19G1	IIb	2	甕	A	口*	—			なし	白砂,長,チャ,砂,礫	内: 鈍い橙 外: 鈍い橙	外: スス	縹波状文(下→上)		
19	SD1c	19G7 19G6・7 19G6	IIa	2	甕	A4	口* 体*	1/16			大	英,長	内: 橙 外: 橙	口内: コゲ 体外: スス	頸: 右回り2?連止め縹波状文→ 口: 縹波状文(下→上)、 体: 縹波状文(上→下) → 体 下半: ミガキ	(図上復元)	
20	SD1a	19I21	II	2	甕	A	口	—			小	英,チャ	内: 橙 外: 明赤濁 (2.5YR)	なし	頸: 縹波状文→口: 縹波状文		
21	SD1a	19J16	灰下	2	甕	A	口	—			なし	チャ,英,長,角	内: 鈍い橙 外: 鈍い褐	外: スス	縹波状文		
22	SD1j	20H21	砂	2	甕	A	口~体	—			小	英,角,チャ	内: 鈍い褐 外: 濁	なし	口・体: 縹波状文→頸: 縹状 文		
23	SD1j	20H21	砂	2	甕	A	体	—			なし	白砂,英,長,雲	内: 鈍い褐 外: 鈍い褐	外: スス	口: 縹波状文 頸: 縹波状文→体: 縹波状文	縹原体: 7本/1.4cm	

弥生～古墳時代土器観察表(2)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調整		備考
															内面	外面	
24	SD1j	20H22	砂	2	甕	A	体	—			なし	角,チャ,白砂	内:鈍い褐 外:褐	外:スス	ミガキ	頭:右回り藤波文→口:縹波 状文・体:縹波状文(上→下)	細原体:8本/1.9cm
25	SD1b	18G5	—	2	甕	A	体	—			なし	白砂,英,長角	内:褐 外:縹	外:スス	ヘラナデ	体:縹波状文(上→下)	細原体:7本/1.5cm
26	SD1b	18G5	—	2	甕	A	体	—			なし	白砂,英,長角	内:褐 外:縹	外:スス	ナデ	頭:右回り3連止の藤波文→ 口:縹波状文	
27	SD1a	19K12	II	2	高杯	A	底~脚	3/4			なし	白砂,英	内:底赤(10YR) 脚外:赤(10YR) 杯内外:脚外:赤彩	なし	外:ミガキ 脚:ナデ	ミガキ	胎土:白くて信州系に似 る
28	SD1a	18H20 19H16	IIb	2	高杯	A	脚	1/2	底:13.5	底:15/36	中	白砂,英,雲角	内:明褐 外:赤彩(10R)	なし	ヨコナデ	ミガキ	三角形の透かし孔
29	SD1a	19I8	II	2	甕	D1	口~体	1/10	口:14.2	口:2/36	小	チャ,砂礫,英,長 角,雲	内:鈍い黄橙(10YR) 外:灰白	外:スス	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ	口:ヨコナデ(縹四線)	
30	SD1c	19G7	IIa	2	甕	D1	口~体	1/12	口:16.6	口:3/36	なし	英,長,チャ,針	内:灰白 外:灰白	外:スス	口:縹四線 体:ヨコナデ	口:縹四線	
31	SD1j	20H21	砂	2	甕	E2	口~体	1/10	口:17.2	口:4/36	中	チャ,砂礫,英,長	内:鈍い橙 外:鈍い橙	外:スス(鉄分)	口:ヨコナデ 体:ハケメ	口:ヨコナデ	
32	SD1a	18K10	II	2	甕	D2	口~体	1/3	口:16.8	口:22/36	なし	礫(中)多,英,長	内:明褐灰 外:黒褐	外:スス 内:口コゲ	口:ヨコナデ 体:ケズリ 体上半~中ヨコ 下半,ナナメ	口:ヨコナデ 体:ハケメ	(図上復元)
33	SD1a	19I22	不明	2	甕	C4a	口	1/18	口:16.0	口:2/36	なし	英,長,雲	内:灰白 外:スス	内:コゲ 外:スス	口:ヨコナデ 体:ハケメ	口:ヨコナデ	
34	SD1a	19I3	砂	2	甕	C4b	口~体	1/10	口:15.6	口:4/36	なし	白砂多,英,長,角	内:縹 外:スス	内:コゲ 外:スス	口:ヨコナデ 体:ハケメ	口:ヨコナデ	
35	SD1a	19J1	灰上黒 灰下砂	2	甕	C1	口~体*	1/5	口:15.6	口:13/36	なし	白砂,英,長,雲	内:明褐 外:明褐	内:コゲ 外:スス	口:ナデ→ヨコハケメ→ミガキ 体:ミガキ	口:ヨコナデ 体:ハケメ	
36	SD1a	19J16	II	2	甕	C2b	口~体	1/5	口:13.0	口:3/36	小	チャ,砂礫,英,長	内:鈍い褐 外:褐灰	外:スス	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ	口:ヨコナデ 体:ハケメ・ヘラナデ	
37	SD1a	19J16	灰下	2	甕	I2	口~体	1/5	口:15.8	口:7/36	なし	英,角,白砂	内:明褐 外:縹	内:コゲ 外:スス	口:ヨコナデ 体:ケズリ	口~体:ヨコナデ	
38	SD1a	19L12	砂	2	甕	C2c	口~体	1/12	口:17.0	口:3/36	なし	チャ,礫(中),英, 長,白砂	内:鈍い褐 外:鈍い褐	内:コゲ 外:スス	口:ヨコナデ 体:ハケメ	口:ヨコナデ	
39	SD1a	19L7	砂	2	甕	C3b	口~体	1/2	口:17.0	口:18/36	小	英,長,角	内:鈍い褐 外:鈍い褐	内:コゲ(底近 く) 外:スス	口:ヨコナデ 体:ナデ 体下半:ケズリ	口:ヨコナデ	
40	SD1a	19J1	灰上ク口	2	甕	C3b	口~体	1/12	口:13.8	口:3/36	小	英,長,角	内:縹 外:明赤褐	内:コゲ 外:スス	剥落のため不明(ハケメ)	口:ヨコナデ 体:ナデ	
41	SD1a	19K1・11 19K16	砂 II	2	甕	C3b	口~体	1/4	口:16.3	口:8/36	なし	白砂,角,チャ	内:浅黄橙 外:鈍い褐	外:スス	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ナデ	口:ハケメ→ヨコナデ	
42	SD1a	19L1	II	2	甕	C3c	口~体	1/8	口:16.8	口:5/36	なし	赤砂,英,長,チャ	内:縹 外:縹	内:コゲ 外:スス	口:ハケメ→ヨコナデ,体:ハ ケメ,口との境:ヘラナデ	口:ヨコナデ 体:ハケメ	
43	SD1a	18J10	II	2	甕	C3a	口~体	1/6	口:16.4	口:2/36	なし	長,雲,白砂	内:鈍い褐 外:縹	外:スス	口:ミガキ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ハケメ→ナデ	
44	SD1a	19I3	砂	2	甕	C3e	口~体	1/18	口:14.0	口:2/36	小	繊維?英,長	内:不明 外:スス	内:不明 外:スス	器面荒れのため不明	ヘラナデ→ヨコナデ	
45	SD1a	18H20	IIb	2	甕	C5	口~体	1/4	口:10.2	口:13/36	大	英,長,白砂	内:鈍い橙 外:鈍い橙	外:スス	口:ヨコナデ	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ,ケズリ	
46	SD1d	19G20	灰下	2	甕	G2	口~体	1/8	口:16.3	口:1/36	なし	英,長,雲	内:褐 外:褐	内:コゲ 外:スス	口:ヨコナデ 体:ケズリ,ナデ	口:ヨコナデ	
47	SD1a	19J1	II	2	甕	G2	口	1/12	口:13.4	口:3/36	なし	精良	内:鈍い褐 外:鈍い褐	外:スス	ヨコナデ	ヨコナデ	
48	SD1a	18H20	IIb	2	甕	G2	口	1/12	口:7.9	口:3/36	なし	英,長,雲	内:鈍い橙 外:鈍い橙	外:スス	ヨコナデ	ヨコナデ	
49	SD1a	19J1	灰上ク口	2	甕	G2	口~体	1/7	口:13.4	口:5/36	小	チャ,砂礫,英,長,角	内:鈍い橙 外:鈍い橙(5YR)	内:コゲ 外:スス	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ハケメ→ヨコナデ	
50	SD1a	19J6	II	2	甕	G2	口~体*	1/10	口:20.0	口:4/36	小	赤砂,チャ,砂礫~ 礫(中),英	内:鈍い橙 外:スス	内:コゲ 外:スス	口:ミガキ 体:ナデ	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ハケメ→ミガキ	

弥生～古墳時代土器観察表 (3)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色	調	付着物	調		備考
																内面	外面	
51	SD1a	19J16	II	2	G	G	脚	1/5	底：10.0	底：11/36	なし	白砂, 英, 長, 雲	内：縹 外：鈍い橙		外：スス	指頭圧痕	ナデ	
52	SD1a	18G25	IIa	2	II	II	口	1/36	口：16.0	口：1/36	小	英, 長	内：浅黄橙 外：浅黄橙		外：スス	ヨコナデ	ヨコナデ	
53	SD1a	19J17	灰上	2	II	II	口	—			大	英, 長, チャ	内：灰白 外：灰白		不明	器面荒れのため不明	器面荒れのため不明	
54	SD1a	19J8	II	2	K	K	口	1/12	口：12.0	口：3/36	なし	縹 (中), 英, 長, 角	内：縹 外：縹		内：コガ 外：スス	ハケメヨコナデ	ハケメ→連続脚突(ハケメ原体)	
55	SD1a	19H17	IIb	2	J1	J1	体	—			なし	精良	内：鈍い縹 外：鈍い縹		外：スス	ナデ	ハケメ→ミガキ	内：火はしけ?
56	SD1a	19L7	砂	2	D	D	口～体	1/9	口：12.0	口：4/36	小	チャ砂礫～縹 (大), 英, 長, 角	内：褐灰 外：灰白		内：コガ 外：スス	口：ヨコナデ 体：ハラナデ	粘土細接合痕明	
57	SD1a	18H8・9	IIb	2	D	D	口～体*	1/3	口：9.5	口：11/36	小	精良	内：灰縹 外：灰縹		外：スス	口：ミガキ 体：ナデ	ミガキ	(図上復元)
58	SD1a	19K1	砂	2	G	G	口～体	1/12	口：13.6	口：3/36	小	英, 角	内：褐灰 外：縹		なし	器面荒れのため不明 (ミガキ)	器面荒れのため不明 (ミガキ)	
59	SD1j	20H21	砂	2	蓋		踵～体	1/2			なし	チャ砂礫	内：浅黄橙, 一部縹 (2.5YR) 外：明赤縹 (2.5YR) 内外：赤彩		なし	ミガキ	ミガキ	
60	SD1j	20H21	砂	2	B	B	口～底	1/2	口：11.0	口：22/36	大	チャ	内：縹 外：縹		なし	ナデ	口：ヨコナデ 体：ミガキ (工具幅4mm)	
61	SD1a	19K1	II	2	G	G	口～体	1/10	口：10.0	口：4/36	中	白砂	内：褐灰 外：鈍い縹		なし	口：ミガキ 体：ナデ	ミガキ	外面赤彩の剥落顕著
62	SD1a	19H16・17・ 21	IIa・IIb	2	A	A	口～脚*	1/2	口：9.3 底：15.4	口：10/36 底：6/36	小	英, 角, チャ	内：明縹 外：明縹		なし	受部：ミガキ 脚：ヨコナデ	受部：ミガキ 脚：ミガキ	受部内面の中央部分増減
63	SD1a	18J20	II	2	D	D	脚	1/2			なし	精良, 角	内：縹 外：縹		なし	粘土巻き上げ痕明瞭	ミガキ	
64	SD1a	19J1 19J1・6・11 19J7	II 灰下砂 灰上	3	A1	A1	口～体*	1/6	口：18.6	口：12/36	小	チャ縹 (中), 英, 長	内：灰白 外：灰白		内：コガ 外：スス	口：ハケメ→ナデ 体：ハケメ	口：ヨコナデ 体：ハケメ	(図上復元)
65	SD1a	19L2	砂	3	A2	A2	口～体	2/3	口：18.0	口：31/36	なし	白砂, 英, 長, チャ, 雲	内：明縹 外：明縹		内：コガ 外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ・ハラナデ	口：ヨコナデ 体：ハケメ, 下ケズリ・ ハラナデ	
66	SD1j	19I5	黒 砂上 砂	3	A4	A4	口～体*	1/5	口：19.4	口：10/36	小	英, チャ砂礫	内：灰白 外：縹		内：体下半コガ 外：口～体中ス	口：ヨコナデ 体：ハケメ	口：ヨコナデ 体：上半ハケメ, 下半ハケメ→ ミガキ	
67	SD1a	18H15・20	IIb	3	A3	A3	口～体*	1/2	口：14.8	口：9/36	なし	英, 雲, 角	内：鈍い縹 外：縹		内：口スス	口：ハケメ 体：ミガキ	口：ヨコナデ 体：ハラナデ	
68	SD1a	19I16 19I21	灰下砂 灰上黒	3	A3	A3	口～体	1/3	口：13.8	口：10/36	なし	英, 長, 角, 雲	内：明赤縹 (5Y) 外：明赤縹 (5Y)		外：体スス	口：ヨコナデ 体：ハラナデ	口：ヨコナデ (ハラナデ未端の 痕跡あり)	
69	SD1a	19J11	灰下砂	3	B1	B1	口～体	1/12	口：16.5	口：3/36	なし	英, 長, 白砂	内：鈍い縹 外：鈍い縹		外：スス	口：ヨコナデ 体：指頭圧痕 (指押しえ)	口：ヨコナデ 体：ハラナデ→ミガキ	
70	SD1a	19I15	砂	3	B1	B1	口～体	1/10	口：15.6	口：4/36	小	英, 長, 角	内：浅黄橙 外：鈍い縹		内：コガ 外：スス	口：ナデ 体：ヨコナデ	口：ヨコナデ 体：ハラナデ	
71	SD1a	19I22	砂	3	B2b	B2b	口～体	1/9	口：13.8	口：4/36	小	英, 長, 白砂	内：鈍い縹 外：鈍い縹		外：スス	口：ナデ 体：ハラナデ・ケズリ	口：ヨコナデ 体：ハラナデ	
72	SD1a	19L7	砂	3	B2b	B2b	口～体	1/2	口：16.2	口：19/36	大	英, 長, チャ縹 (中)	内：灰白 外：灰白		外：口スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ	口：ヨコナデ 体：ハケメ	
73	SD1a	19L12	砂	3	B2a	B2a	口～体	1/18	口：18.0	口：2/36	中	英, 長, 白砂	内：鈍い縹 外：鈍い縹		外：スス	口：ヨコナデ, 体：ハケメ, 口 との境：ハラナデ	口：ヨコナデ 体：ハケメ	
74	SD1a	19J1	灰上ク口	3	B2a	B2a	口～体*	1/9	口：15.8	口：2/36	小	縹維? 英, 長	内：鈍い縹 外：鈍い縹		外：スス	口：ヨコナデ, 体：(ハケメ)	口：ヨコナデ 体：ハケメ	
75	SD1a	19K6	II	3	B2a	B2a	口～体	1/7	口：17.0	口：5/36	なし	英, 長, 雲	内：鈍い縹 外：縹		外：スス	口：ヨコナデ 体：ケズリ	口：ヨコナデ 体：ハケメ	
76	SD1a	19I2・7	灰上ク口	3	B2a	B2a	口～体*	1/4	口：15.6	口：8/36	なし	縹維? 英, チャ	内：浅黄橙 外：浅黄橙		なし	口：ハケメ→ヨコナデ 体：ハケメ	口：ヨコナデ 体：ハケメ	

弥生～古墳時代土器観察表 (4)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調整		備考
															内面	外面	
77	SD1a	19I22	砂	3	甕	B2a	口～体	1/10	口：15.0	口：4/36	なし	チャ砂礫～礫(中)	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	口：ハケメ→ナデ 体：ハラナデ(ケズリ)		
78	SD1j	19I15	砂	3	甕	B2b	口～体	1/3	口：15.6	口：14/36	なし	長チャ	内：鈍い橙 外：鈍い橙	内：口コゲ 外：スス	口：ナデ 体：ハケメ		
79	SD1a	19K16・17	II	3	甕	A3	口～体	1/4	口：15.0	口：9/36	なし	長白砂,英,チャ針	内：浅黄橙 外：浅黄橙	なし	ナデ 体：ハケメ→ヨココナデ		
80	SD1a	19K16・21	II	3	甕	A3	口～体	1/4	口：13.8	口：9/36	小	チャ礫(大)	内：橙(5YR) 外：鈍い橙	外：スス	ナデ 体：ハケメ		
81	SD1a	19H16	IIb	3	甕	B2a	口～体*	1/7	口：13.5	口：8/36	なし	英	内：鈍い橙 外：鈍い橙	外：スス	口：指押さえ 体：ハケメ		
82	SD1a	19H16・17	IIb	3	甕	E	口～体*	1/7	口：15.3	口：2/36	なし	白砂,白砂礫,英,長	内：鈍い橙 外：鈍い橙	内：口コゲ 外：口スス	口：ヨココナデ 体：ナデ(粘土接合痕明瞭) なので裏面		
83	SD1a	19K21	II	3	鉢	B	口～体	1/9	口：14.2	口：4/36	なし	英,長チャ	内：橙(5YR) 外：灰褐(5YR)	外：スス	ヨココナデ 体：ハケメ→ミガキ		
84	SD1a	19K16 19K22	砂 II I・II	3	高杯	A	杯	3/4	口：21.0	口：25/36	小	英角,チャ	内：明赤褐(2.5YR) 外：明赤褐(2.5YR)	外：口スス	ミガキ 体：ヨココナデ→ミガキ		
85	SD1j	20H21	砂	3	高杯	A	杯	1/15	口：17.6	口：2/36	なし	英	内：明赤褐一部黒 外：明赤褐一部黒	なし	ヨココナデ→ミガキ 体：ミガキ,ハケメ		
86	SD1a	19J1	灰下砂	3	壺	D	口～体	1/12	口：(9.5)	口：3/36	小	白砂,英角	内：灰白 外：灰白	なし	口：ヨココナデ 体：指頭圧痕		
87	SD1a SD2	19L12 21L1	砂 地上砂	3	杯	D1	口～底	4/5	口：12.0	口：31/36	なし	精良	内：明褐 外：明褐	内：口コゲ? 外：スス	ミガキ		
88	SD1j	19I5	砂	3	杯	D1	口～底	1/10	口：12.6	口：4/36	小	英	内：明赤褐(5YR) 外：明赤褐(5YR)	なし	ミガキ		
89	SD1a	19H21	IIb	3	杯	D3	口～体	1/7	口：11.9	口：5/36	小	精良	内：橙(5YR) 外：橙(5YR)	なし	ミガキ(ヨコ) 体：ヨココナデ		
90	SD1a SD2	19L7・12 21L1	砂 地上砂	3	杯	D3	口～底*	1/3	口：13.0	口：4/36	小	チャ	内：赤褐(10YR) 外：赤褐(10YR)	なし	口：ヨココナデ→ミガキ 体：ミガキ		
91	SD1a	19I6 19J11・16	灰下砂 灰下砂	3	杯	D2	口～底*	1/2	口：12.0	口：19/36	小	英,長針	内：赤橙(10R) 外：赤橙(10R)	なし	ミガキ 体：ハラケズリ→ミガキ		
92	SD1a	19J1・2・7 19J1	灰上黒 灰下砂	3	杯	E1	口～体*	1/3	口：13.4	口：10/36	なし	チャ礫(中～大), 英,長	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	ハケメ→ミガキ		
93	SD1a	19J1	灰上黒	3	杯	E3	口～体	1/15	口：11.5	口：3/36	なし	英,長	内：黒 外：褐灰	なし (外：鉄分)	ミガキ		
94	SD1a	19J16	II	3	杯	E3	口～体	1/4	口：13.7	口：8/36	なし	チャ,白砂	内：鈍い橙 外：橙(5YR)	内：口コゲ 外：スス	ヨココナデ 体：ナデ		
95	SD1a	19I1 19I2	IIb 灰上ク口	3	杯	E2	口～体	1/5	口：12.4	口：4/36	大	英,長,チャ	内：橙 外：橙	なし	器面荒れのため不明		
96	SD1a	18H8	IIb	3	杯	E3	口～体*	1/7	口：11.8	口：5/36	なし	角	内：鈍い黄橙(10YR) 外：橙(2.5YR)	なし	口：ヨココナデ→一部ミガキ, 体：ミガキ		
97	SD1a	18I25 19J1・2・6・7 19I1	地上 灰上ク口ロ・II ・IIb	3	杯	E1	口～底*	1/2	口：15.8	口：22/36	大	チャ礫(大)	内：橙(2.5YR) 外：橙(2.5YR)	なし	器面荒れのため不明		
98	SD1a	19H17	IIb	3	杯	D3	口～底	1/2	口：14.2	口：3/36	小	角,チャ,白砂	内：黒色処理 外：明褐	外：底スス	ミガキ		
99	SD1a	19H17	IIb	3	杯	D3	口～体	1/5	口：13.8	口：7/36	なし	角	内：黒色処理 外：明褐	なし	ミガキ		
100	SD1a	19J1	灰下砂	3	杯	E1	口～体	1/20	口：14.4	口：2/36	なし	英,長角	内：黒色処理 外：橙	なし	ミガキ		
101	SD1a	18H14・15・ 19・20	IIb	3	杯	E1	口～底	略完形	口：11.1	口：27/36	小	白砂,英,長角	内：黒色処理 外：灰白	なし	ミガキ		
102	SD1a	19J11	灰下砂	3	杯	E4	口～底	1/3	口：12.1	口：5/36	なし	長角,雲	内：橙 外：明褐灰	なし	ミガキ		
103	SD1a	19L7・12	砂	3	杯	E4	口～底	3/4	口：13.4 器高：6.9	口：18/36	小	長	内：明赤褐(2.5YR) 外：明赤褐(2.5YR)	外：黒斑	口～体：ミガキ 底：ケズリ		
104	SD1a	19H17	IIb	3	杯	E2	口～底	1/4	口：13.6	口：9/36	なし	長	内：褐 外：褐	なし	ミガキ 体：ミガキ		

弥生～古墳時代土器観察表 (5)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調		備考	
															内面	外面		
105	SD1a	19H16	IIb	3	杯	E3	口～体	1/6	口：12.2	口：6/36	小	精良	内：黒色処理 外：橙 (5YR)	なし	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ		
106	SD1a	18H14・15・20	IIb	3	杯	E3	口～底	3/4	口：13.2 器高：5.7	口：11/36	小	白砂, 英長角	内：黒色処理 外：鈍い橙	なし	口：ヨコナデ 体：ミガキ 底：ケズリ	口：ヨコナデ 体：ミガキ 底：ケズリ		
107	SD1a	19J6・11	灰下砂	3	杯	E2	口～体	1/12	口：14.0	口：3/36	なし	英長角	内：黒色処理 外：鈍い橙	なし (外：鉄分)	ハケメ→ミガキ	器面荒れのため不明		
108	SD1a	19J7	灰上	3	杯	E4	口～体	1/20	口：14.0	口：2/36	なし	英長	内：黒色処理 外：橙	なし	ミガキ	ミガキ		
109	SD1j	20H21	砂	3	杯	E4	口～体	1/4	口：14.0	口：8/36	なし	精良	内：黒色処理 外：橙	なし (鉄分)	ヨコナデ	ヨコナデ		
110	SD1j	20H21	砂	3	杯	E4	口	1/18	口：13.0	口：2/36	小	英長, 白砂	内：黒色処理 外：橙	なし	ミガキ	ミガキ		
111	SD1j	20H21	砂	3	杯	E4	口～体	1/18	口：15.6	口：2/36	なし	精良	内：黒色処理 外：橙	なし (鉄分)	ミガキ	ミガキ		
112	SD1j	20H21	砂	3	杯	E4	口～体	1/10	口：12.4	口：4/36	小	英長	内：黒色処理 外：橙	なし	ミガキ	ミガキ		
113	SD1a	18H25	IIa	3	杯	G	口～底	1/4	口：13.5	口：9/36	なし	英長角	内：鈍い橙 (5YR) 外：鈍い橙 (5YR)	なし	口：ヨコナデ→一部ナメナデ 底：ミガキ	口～体：ヨコナデ 体下半：ケズリ→ミガキ		
114	SD1a	19J22 19J6	II 灰下砂	3	杯	G	口～底	1/4	口：12.5	口：1/36	中	英	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	口：ヨコナデ 底：ミガキ	口：ヨコナデ→ミガキ 体：ハケメ→ミガキ		
115	SD1a	19L1	II	3	杯	G	口～体	1/9	口：12.0	口：2/36	なし	英長	内：暗赤褐 外：赤褐 (5YR)	なし	ミガキ	口：ヨコナデ→ミガキ 底：ケズリ→ミガキ		
116	SD1a	19J1	II	3	杯	G	口～体	1/9	口：12.0	口：4/36	なし	精良	内：明褐 外：明褐	なし	ヨコナデ	口：ヨコナデ→ハケメ		
117	SD1a	19J6・11・12	灰下砂	3	杯	F	口～底	1/5	口：14.6	口：8/36	なし	英長角	内：橙 外：橙	なし	口：ヨコナデ→ミガキ (ナメ)	口：ミガキ (工具幅約1.5mm) 底：ミガキ (工具幅約10mm)		
118	SD1a	18H20	IIb	3	杯		底	4/5			なし	英長角	内：鈍い橙 外：橙	なし	ミガキ	ミガキ		
119	SD1a	19J16・17・21 19J1	灰上黒 II	3	高杯	B	杯	1/2	口：12.6	口：11/36	小	英長	内：明褐 外：明褐	なし	ミガキ	ミガキ		
120	SD1a	19J1 19J2	灰上黒 II	3	須恵器 杯蓋		天井	1/5			なし	チャ	内：灰 (N) 外：灰 (N)	なし	口：ヨコナデ	天：口クロケズリ 体：口クロケズリ		
121	SD1a/ SD2	19J22 19J1・2・7・ 12/20, 24	II 灰上/灰下砂	3	須恵器 杯身		口～体	1/2	口：10.7	口：13/36	なし	精良	内：暗赤褐 外：暗赤褐	なし	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ 下半：口クロケズリ	色調の暗赤褐色は真質	
122	SD1a	18H4	IIb	3	須恵器 杯身		口～体	1/8	口：11.3	口：1/36	なし	精良	内：灰 (N) 外：灰 (N)	なし	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ	「MT15」?	
123	SD2	20J10	灰下砂	1	壺	A	口	1/5	口：10.2	口：3/36	なし	チャ礫 (中), 英, 長白砂	内：鈍い橙 外：灰褐	なし	ナデ	横走沈線 L&R細文		
124	SD2	20K20	地上砂	1	壺		体	—			なし	英長角	内：鈍い褐 外：鈍い褐	外：スス	ハケメ→磨削			
125	SD2	21J22 21K7	地上黒 地上	1	壺		体	—			なし	白砂	内：褐 外：灰褐	外：スス	ハケメ→ミガキ			
126	SD2	21K2	地上黒	1	壺		体	—			なし	チャ礫 (大), 白 砂	内：褐 外：褐灰	外：スス	ハケメ→ミガキ			
127	SD2	20K20 21K21	地上砂	0	壺		体	—			なし	英長, チャ角	内：鈍い褐 外：鈍い褐	なし	ナデ	ハケメ→縦指羽状文		
128	SD2	20J15	灰下砂	1	壺	G	口～底	1/15	口：12.5	口：3/36	なし	英長, 雲	内：灰褐 外：灰褐	外：スス	縦方向ハケメ→ミガキ	ヘラナデ→ミガキ→口：ヨコナ デ 底：ナデ		
129	SD2	20J4・5	灰下砂	1	壺	G	口～体	1/6	口：17.4	口：12/36	小	英長 (東海西 部?)	内：鈍い褐 外：鈍い褐	外：スス	ナデ	口：ヨコナデ 体：ハケメ (ヘラナデ)		
130	SD2	20J4・5 20J15 21J6	灰下砂	1	壺	—	頸	—			小	英長, 針	内：鈍い褐 外：鈍い褐	外：スス	ナデ	半截竹管製突列の上下に細文 LR刻回転		
131	SD2	21J22	地上黒	1	壺	F	口	1/10	口：15.8	口：4/36	大	英長角	内：鈍い褐 外：鈍い褐	なし	ヨコナデ	口端：細文LR 口：ヨコナデ		

弥生～古墳時代土器観察表(6)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調		備考
															内面	外面	
132	SD2	20K15・20・25	地上砂	2	甕	A1	口～底*	1/2	口：17.8 底：6.1	口：7/36 底：36/36	大	チャヤ砂～礫(大)	内：褐灰 外：褐灰	内：剥落のため不明 外：コゲ	剥落	口：ヨコナデ、ハケメ→頸：右回り2連止の簾状文→緋描波状文。体下半：ヘラナデ、ナデ、底：ケズリ 口：緋描波状文(下→上)、体：緋描波状文(上→下)→頸：右回り3連止の簾状文、体下半：ミガキ	緋原体：7本/1.2cm(図上復元) 緋原体：7本/1.3cm
133	SD2	20I14・18	灰上	2	甕	A3	口～体	1/5	口：17.4	口：9/36	なし	英、角	内：鈍い橙 外：橙	内：コゲ 外：スス	ミガキ	口：緋描波状文(下→上)、体：緋描波状文(上→下)→頸：右回り3連止の簾状文、体下半：ミガキ	緋原体：7本/1.3cm
134	SD2	20I10	灰下	2	甕	A	口*	1/18	口：16.0	口：2/36	なし	英、長チャ	内：鈍い褐 外：鈍い褐	外：スス	ミガキ	緋描波状文	緋原体：7本/1.3cm
135	SD2	20U5・14・20 20I9・14	灰下砂 灰砂	2	甕	A	口～体*	1/5	口：16.5	口：4/36	なし	英、長角	内：鈍い褐 外：鈍い褐	外：スス	ミガキ	頸：右回り2連止の簾状文→口：緋描波状文(下→上)	緋原体：7本/1.3cm
136	SD2	20I15 20I15 20I15 20I9	灰下砂	2	甕	A7	口～体*	1/4	口：18.0	口：11/36	なし	英、長角、雲	内：褐 外：鈍い褐	外：スス	ミガキ	口：緋描波状文(下→上)→頸：右回り2～4連止の簾状文→体：緋描波状文(上→下)	内外に赤色顔料の付着あり(図上復元)
137	SD2	20J4* 20U5・10	灰上 灰下砂	2	甕	A4	口～体*	1/6	口：15.4	口：19/36	小	白砂、英、長雲	内：鈍い褐 外：鈍い褐	内：コゲ 外：スス	ミガキ	緋描波状文(下→上) 口端：右回り半截竹管押し引き 体：簾状文以下波状文	緋原体：6～7本/0.8～1.4cm(箱裏鑑い) (図上復元)
138	SD2	20K5 20K5	灰上 灰下砂	2	甕	A8	口*	1/5	口：16.0	口：13/36	なし	英、長角	内：鈍い褐 外：鈍い褐	内：コゲ 外：スス	ミガキ	緋描波状文(下→上) 口端：右回り半截竹管押し引き 体：簾状文以下波状文	緋原体：6～7本/1.5cm (図上復元)
139	SD2	20I9 20I10 20I10 20I10	灰砂 灰下砂 灰下	2	甕	A	口* 口* 体*	1/12	口：19.6	口：5/36	なし	英、長角、チャ	内：灰褐 外：鈍い褐	内：コゲ 外：スス	ミガキ	頸：簾状文→口：緋描波状文(上→下)	緋原体：8本/1.8cm
140	SD2	20I15 20I20 21I6 21I11	灰下砂 灰上 灰下 灰上、灰下砂	2	甕	A6	口～体	1/3	口：16.9	口：29/36	なし	英、雲	内：鈍い橙 外：灰褐	内：コゲ 外：口～体スス	口～体：ミガキ ケズリ	口：緋描波状文(下→上)→頸：右回り3連止の簾状文 体：緋描波状文(上→下)	緋原体：5本/1.2cm
141	SD2	20I9 20I15	灰砂 灰下砂	2	甕	A	口*	1/4	口：18.0	口：9/36	小	英、角	内：橙 外：橙	内：コゲ 外：スス	ミガキ	緋描波状文(下→上)、口端：面取り→緋描波状文	緋原体：10本/2cm
142	SD2	20I20	灰下砂	2	甕	A	口*	1/9	口：16.0	口：4/36	小	英、長雲、チャ	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	緋描波状文	緋原体：10本/2cm	
143	SD2	20I10	灰下	2	甕	A	体	—	—	—	なし	チャヤ砂礫、白砂、英、長角	内：コゲ 外：スス	ハケメ→ミガキ	緋描波状文	胎土の色調が赤白く異質	
144	SD2	21I11	灰下	2	甕	A	体	—	—	—	小	白砂、角	内：淡い赤橙(2.5YR) 外：鈍い橙	外：スス	ミガキ	緋描波状文	緋原体：9本/1.6cm
145	SD2	20I25 20K5 21K1	灰下砂 灰上	2	甕	A6	口～体	1/6	口：16.5	口：9/36	なし	角、白砂	内：灰褐 外：褐	内：コゲ 外：スス	ミガキ	頸：右回り3連(?)止の簾状文→口：緋描波状文(下→上) 体：緋描波状文(上→下)	緋原体：9本/1.6cm
146	SD2	21I6・11 21I6	灰下 灰下砂	2	甕	A8	口～体	1/4	口：16.4	口：16/36	小	角、英、チャヤ砂礫	内：鈍い橙 外：鈍い橙	内：コゲ 外：スス	口：ミガキ 体：ナデ(一部ミガキ)	口：緋描波状文(下→上)、体：緋描波状文(上→下)→頸：右回り2連止の簾状文、口端：緋描波状文	緋原体：8本/1.8cm
147	SD2	21H22 21I7	灰下 灰下砂 カタケ口	2	甕	A	口～頸	1/4	口：14.0	口：7/36	なし	英、長角	内：浅黄橙 外：浅黄橙	内：コゲ 外：スス	ハケメ・ヘラナデ ナデ	口：緋描波状文(下→上)→頸：右回り2連止の簾状文	緋原体：7本/1.2cm
148	SD2	20U5 20I10 20I15	灰上 灰下	2	壺	A2	体*	1/12	—	—	なし	白砂、英、長チャ	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	ミガキ	緋描波状文(上→下)→体下半：ミガキ	緋原体：10本/1.2cm
149	SD2	20J4・5・9・14・19	灰下砂	2	甕	B1	口～体*	1/4	口：20.0	口：13/36	なし	英、長	内：赤(10R) 外：赤(10R) 内外：赤彩	外：スス	口：ミガキ 体：ミガキ・ナデ	ミガキ	緋原体：7本/1.2cm
150	SD2	20J4・5・9・10・15	灰下砂	2	甕	B1	口～体*	1/6	口：17.0	口：6/36	なし	英、長角、雲	内：口～体上半赤(10R) 体下半橙(10R) 外：赤(10R) 内外：赤彩	なし	ミガキ	ミガキ	緋原体：7本/1.2cm
151	SD2	20J24・25	灰下砂	2	高杯	A	口～体*	1/2	口：15.4	口：8/36	小	雲	内：赤(10R) 外：赤(10R) 内外：赤彩	なし	ミガキ	ミガキ	緋原体：7本/1.2cm
152	SD2	21I1	灰下	2	高杯	A	口*	1/5	口：15.4	口：7/36	小	雲	内：赤(10R) 外：赤(10R) 内外：赤彩	なし	ミガキ	ミガキ	緋原体：7本/1.2cm

弥生～古墳時代土器観察表 (7)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調		備考
															内面	外面	
153	SD2	2111	灰上 灰下	2	甕	F	口～体	1/5	口：15.8	口：10/36	大	白砂～礫(中), 英長,チャ,角	内：浅黄緑 外：口體,赤(10YR)	なし	口：ナデ 体：ハケメ 底：トーナツ状	(図上復元)	
154	SD2	2117	カタクロ	2	甕	D1	口	1/3	口：16.4	口：12/36	大	英長,雲,チャ	内：浅黄緑 外：浅黄緑	外：口スス	口：ナデ 体：ハケメ 底：トーナツ状		
155	SD2	21H22	灰下黒	2	甕	D1	口	1/10	口：14.0	口：4/36	中	チャ砂礫,英長,針	内：浅黄緑 外：浅黄緑	外：スス	口：ナデ 体：ハケメ 底：トーナツ状		
156	SD2	2111 2117	灰下 カタクロ	2	甕	E1	口～体	1/6	口：14.8	口：6/36	小	英,チャ	内：鈍い緑 外：鈍い緑	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
157	SD2	2045 2049	灰下砂 灰砂	2	甕	E2	口	1/6	口：17.0	口：6/36	中	英長,角,雲	内：鈍い緑 外：明赤褐(2.5YR)	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
158	SD2	2010	灰下砂 灰下	2	甕	D2	口～体	1/5	口：16.9	口：17/36	大	角,チャ,砂礫	内：灰白 外：灰白	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ 底：ケズリ	(図上復元)	
159	SD2	21H12・21 21H22 2117 2111	灰下 灰下 カタクロ	2	甕	C4a	口～体	1/2	口：14.3	口：13/36	中	チャ砂礫～礫(大) 多	内：浅黄緑 外：鈍い緑	外：口～体上半 スス 内：体下半コガ	口：ヨコナデ 体：上半ハケメ、下半ナデ	(図上復元)	
160	SD2	2045	灰下砂	2	甕	C4a	口～体	1/2	口：19.0	口：18/36	大	チャ砂～礫(中), 角	内：灰白 外：灰白	なし	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
161	SD2	20114	灰上 灰下	2	甕	C4a	口	1/7	口：14.0	口：5/36		チャ,白砂	内：緑 外：緑	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
162	SD2	20425	灰下砂	2	甕	C1	口～体	1/4	口：15.4	口：6/36	小	英	内：鈍い緑 外：鈍い緑	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
163	SD2	2020 204	灰下 灰下砂	2	甕	C1	口～体	1/8	口：20.5	口：9/36	中	チャ砂礫～礫(中) 多	内：灰白 外：灰白	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
164	SD2	20415	灰下砂	2	甕	C1	口～体	1/4	口：17.8	口：1/36	中	長,チャ,砂礫	内：灰白 外：灰白	内：口コガ 外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ、ハラナデ		
165	SD2	2111	灰上	2	甕	C2b	口	1/7	口：18.8	口：5/36		英,角	内：鈍い緑 外：鈍い緑	内：コガ 外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
166	SD2	2117 2111	カタクロ 灰下	2	甕	C2a	口～底	1/6	口：15.5	口：10/36	大	長針,チャ,砂礫多	内：褐灰 外：明赤褐(5YR)	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハラナデ	(図上復元)	
167	SD2	2045	灰下砂	2	甕	C2a	口～体	1/6	口：18.6	口：6/36	小	英,長,チャ,角	内：明赤褐(5YR) 外：明赤褐(5YR)	外：スス	口：ナデ 体：ハケメ、ハラナデ		
168	SD2	2045	灰下砂	2	甕	C2a	口～体	1/7	口：16.5	口：11/36	小	角,英,長,チャ	内：灰白 外：灰白	なし	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
169	SD2	20110 20115	灰上 灰下砂	2	甕	C2a	口～体	1/3	口：14.5	口：10/36	大	英,長,チャ	内：緑(5YR) 外：緑(5YR)	内：コガ 外：スス	口：ヨコナデ 体：ハラナデ		
170	SD2	20114	灰砂 灰下砂	2	甕	C3	口	1/3	口：18.0	口：17/36		英,長,雲	内：鈍い緑 外：鈍い緑	内：スス 外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
171	SD2	21K16	灰下砂	2	甕	C3c	口～底	1/4	口：16.5	口：10/36	なし	英,長,チャ,雲	内：灰褐 外：鈍い緑	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
172	SD2	2116	灰下	2	甕	C3b	口～体	1/9	口：19.4	口：4/36	小	白砂	内：黄緑 外：黄緑	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハラナデ		
173	SD2	20115 2116 2117	灰下砂 灰下砂 カタクロ	2	甕	C3c	口～体	1/5	口：16.0	口：7/36	大	チャ砂～礫(中), 英長,角	内：褐灰 外：浅黄緑	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ、ハラナデ (甕土接合痕明瞭)		
174	SD2	21H22	灰下	2	甕	C3b	口～体	1/4	口：13.8	口：9/36	なし	角,英,チャ,砂礫	内：灰白 外：灰白	外：スス	口：ハケメ・ヨコナデ 体：ハケメ		
175	SD2	21116	灰下砂	2	甕	C3e	口～体	1/9	口：15.9	口：4/36	なし	英,チャ,角	内：明褐 外：鈍い緑	外：コガ 体：ハケメ	口：ヨコナデ ハラナデ?		
176	SD2	20115	灰上	2	甕	C3c	口～体	1/12	口：16.0	口：3/36	なし	英,長	内：鈍い緑 外：鈍い緑	内：コガ 外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
177	SD2	2045・10	灰下	2	甕	C3b	口～体	1/5	口：19.0	口：8/36	なし	英,長	内：灰白 外：灰白	なし	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
178	SD2	20115	灰下砂	2	甕	C3a	口*	1/2	口：15.4	口：24/36	中	チャ	内：鈍い緑 外：鈍い緑	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
179	SD2	2045	灰上	2	甕	C3d	口～体	1/10	口：16.0	口：4/36		英	内：明褐 外：明褐	内：コガ 外：スス	口：ハケメ 体：ナデ		

弥生～古墳時代土器観察表 (8)

報告 No.	遺構名	グリップ	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調整		備考	
															内面	外面		
180	SD2	20110 2116	灰下 灰上	2	甕	C5	口～体*	1/3	口：13.0	口：19/36	小	英,チャ,角	内：橙 外：橙	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ			
181	SD2	20115	灰下砂	2	甕	C3c	口～体	1/20	口：14.0	口：2/36		白砂,チャ,砂礫	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	口：ヨコナデ 体：ハケメ→ナデ			
182	SD2	20115 2111	灰上 灰下	2	甕	G1	口～体	1/4	口：17.0	口：20/36	なし	白砂,英,長角	内：明赤褐(5YR) 外：明赤褐(5YR)	外：スス	口：ヨコナデ 体：ナデ		S字頸B類	
183	SD2	20115	灰下砂	2	甕	G2	口～体	1/20	口：19.0	口：1/36	なし	英,長	内：明褐 外：灰褐	外：スス	口：ヨコナデ 体：粗いタテハケ			
184	SD2	20115	灰下砂	2	甕	G2	口～体*	1/12	口：14.5	口：13/36	小	白砂	内：橙 外：橙	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ			
185	SD2	2116	灰下	2	甕	G2	口～体	1/10	口：12.5	口：3/36		英,白砂	内：鈍い橙 外：鈍い橙	内：コゴ 外：スス	口：ヨコナデ 体：ナデ			
186	SD2	20J10・14	灰下砂	2	甕	G	体～脚	1/2	底：8.8	底：29/36	小	英,長	体内：明赤褐(2.5YR) 体～脚外：鈍い橙 脚内：鈍い橙	内：体コゴ 外：脚スス	体：ナデ 脚：ハラナデ			
187	SD2	2111 2117	灰下・上 カタクロ	2	甕	G	脚*	1/2	底：9.4	底：26/36	小	英,角	内：鈍い褐 外：明褐	なし	ナデ	ハケメ	S字頸の脚?	
188	SD2	20J5	灰下砂	2	甕	G	体～脚	4/5	底：7.0	底：23/36	小	白砂,白砂礫,英,長,角	内：鈍い赤褐(5YR) 外：鈍い橙(5YR)	なし	ナデ	ハケメ		
189	SD2	20114 20115	灰上 表下黒 灰上 灰下砂	2	甕	G	脚	2/3	底：7.6	底：23/36	大	チャ,砂礫,英,長	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	ナデ	ナデ		
190	SD2	20J15	灰下砂	2	甕	G	体～脚	1/1	底：8.0	底：36/36	大	英,長	内：褐 外：褐	なし	脚：上半ハケメ, 下半ハラナデ			
191	SD2	20J15	灰下砂	2	甕	G	体～脚	2/3	底：8.6	底：19/36	大	英,雲	内：鈍い赤褐(2.5YR) 外：赤褐(2.5YR)	なし	底：磨耗のため不明 脚：ハケメ→ナデ			
192	SD2	20J5・10	灰下砂	2	甕	J1	口～体*	2/3	口：15.6	口：24/36	小	チャ,砂～礫(中) 多,角	内：灰白 外：橙(5YR)	内：口コゴ 外：口～体スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ			
193	SD2	2111・6	灰下 灰下砂	2	壺	F	口～体	1/5	口：12.5	口：8/36	小	英,長,角	内：口 明赤褐(2.5YR) 体鈍い橙(2.5YR) 外：明赤褐(2.5YR) 内口・外：赤彩	外：口～体スス	口：ハケメ 体：ナデ			
194a	SD2	2117	カタクロ	2	甕	H	体*	—			なし	英,角	内：鈍い褐 外：鈍い褐	外：スス	体：タキキ→ハケメ 底：トーナツ状			
194b	SD2	2111	灰下	2	甕	H	体～底	4/5	底：4.8	底：36/36	なし	長	内：鈍い褐 外：鈍い褐	内：コゴ 外：スス	体：ハケメ・ハラナデ			
195	SD2	20J14	灰下砂	2	甕	J1	口～体*	1/7	口：17.5	口：5/36	なし	白砂礫,英,長,チャ	内：橙 外：橙, 灰褐	外：スス	口：ナデ 体：ハラナデ		口縁外面にハケメ原形(幅狭)による刺突	
196	SD2	20J10・15	灰下砂	2	壺	E	口～体*	1/4	口：11.9	口：25/36	大	英,長,チャ	内：灰白 外：灰白	なし	口：ハケメ・ヨコナデ, 体：ヨコナデ	口：ハケメ		
197	SD2	20J10	灰下	2	高杯	E2	杯	4/5	底：11.5	底：15/36	中	英,長,角	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	ナデ	口：ヨコナデ 体：ハケメ	外面赤彩剥落	
198	SD2	20115	灰下砂	2	高杯	B	杯	1/20	口：14.1	口：1/36	なし	英,長,チャ	内：明赤褐(2.5YR) 外：橙(5YR)	なし	ミガキ	ヨコナデ		
199	SD2	20J3 20J4 20J9	灰下 灰下砂 灰砂	2	高杯	C	杯	1/6	口：13.0	口：15/36	中	英,長	内：赤褐 外：赤褐 内外赤彩	なし	ミガキ	ミガキ	赤彩の色調は信州系	
200	SD2	20J15	灰下砂	2	高杯	C	脚	1/9	底：19.8	底：4/36	なし	英,長	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	ハケメ	ミガキ・細描文		
201	SD2	20J3	灰上	2	高杯	C	脚*	1/3	底：7.6	底：12/36	大	英,長,多	内：橙 外：橙	なし	磨耗のため不明	磨耗のため不明		
202	SD2	20J5	黒色灰上	2	高杯	B	脚	1/1			なし	英,長	内：橙 外：橙	なし	ナデ	ハケメ→ミガキ(タテ)	3孔	
203	SD2	20J10・15	灰上	2	壺	G	体～底*	1/2			小	英,長,角	内：橙(5YR) 外：橙(5YR)	なし	ナデ	ナデ	ミガキ	(図上復元)
204	SD2	2111	灰上	2	有孔鉢		口～底*	1/4	口：10.8	口：14/36	なし	英,長	内：褐灰 外：橙	なし	ミガキ	口：ヨコナデ 体：ハケメ・ミガキ 底：ケズリ		底部中央に雉成前穿孔あり(図上復元)

弥生～古墳時代土器観察表 (9)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調整		備考
															内面	外面	
205	SD2	20I4・5・9・ 19 20K5	灰下砂	3	甕	A2	口～体*	1/5	口：17.9	口：27/36	大	チャ砂礫～礫(大) 多	内：灰白 外：浅黄橙	内：口ゴケ 外：口～体スス	口：ヨコナデ 体：ハケム・ハラナデ	口：ヨコナデ→ハケム 体：ハケム	
206	SD2	20I15 20I20	灰下砂 灰上	3	甕	A2	口～底*	1/3	口：15.4	口：12/36	なし	英長角,チャ	内：緑 外：鈍い緑	外：スス	口：ヨコナデ 体～底：ハケム	口：ヨコナデ 体：ハケム、体 下半：ナデ、底：ナデ (図上復元)	
207	SD2	21I6・11	灰下	3	甕	A2	口～底	略空形	口：17.8	口：31/36	なし	英長,白砂角	内：明褐色 外：灰白	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ 体：ハラナデ (粘土接合痕明瞭)	口：ヨコナデ 体：ハラナデ	
208	SD2	21I11	灰上 灰下	3	甕	A4	口～体*	1/3	口：17.5	口：25/36	なし	英長,白砂	内：灰褐 外：灰褐	外：スス	口：ナデ 体：ハラナデ	口：ヨコナデ 体：ハラナデ(ケズリに近い)	
209	SD2	20I5 21I16	灰上	3	甕	C	口～体*	1/7	口：14.8	口：12/36	小	チャ	内：浅黄橙 外：浅黄橙	内：コゲ 外：体スス	口：ヨコナデ・ハケム 体上半：ハケム・ハラナデ 体下半：ミガキ	口：ヨコナデ 体：ハケム・ハラナデ・ナデ	
210	SD2	21I11 21I6	灰上 灰下 灰下砂	3	甕	A3	口～体	1/3	口：15.5	口：19/36	大	白砂多,英長,チャ, 角	内：鈍い緑 外：鈍い緑	剥落のため不明	ナデ	剥落のため不明	
211	SD2	20I15 21I11 21I6 21I11	灰下砂 灰下 灰下砂 灰下	3	甕	D1	口～体*	1/3	口：16.5	口：8/36	小	鉛英,チャ砂～礫 (中)	内：灰白 外：灰白	内：コゲ	ハケム	口：ヨコナデ 体：ハケム	
212	SD2	21H22 21I11 21I2	灰下 灰下 灰下	3	甕	D2	口～体*	1/7	口：15.8	口：6/36	小	英長,角,チャ	内：緑 外：鈍い褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ・ハケム 体：ケズリ(ハラナデ?)	口：ヨコナデ 体：ハケム	
213	SD2	20I15 20K5 21I21 21K1	灰下砂 灰下砂 カタ 灰上	3	壺	A	口～体*	1/2	口：15.7	口：33/36	なし	白砂～礫(中) 多,英長	内：褐色 外：鈍い緑	なし	口：ヨコナデ 体：ハラナデ・ハケム	口：ハケム 体：ハケム・ハラナデ, 下半ケ ズリ一部ミガキ	
214	SD2	21H22 21I11 21I6・7	灰下 灰下 カタ	3	壺	E	口～体*	1/3	口：10.6	口：6/36	小	英長	内：緑(5YR) 外：緑(5YR)	なし	口：ミガキ 体：ハケム	口：ヨコナデ 体：ハケム	
215	SD2	21H22・23	灰下	3	鉢	B	口～底	1/2	口：13.0	口：8/36	なし	チャ	内：鈍い緑 外：鈍い褐	内：口ゴケ 外：口～体スス	口：ヨコナデ 体～底：ナデ (粘土接合痕明瞭)	口：ヨコナデ 体：ハラナデ	
216a ～g	SD3a	22I13 22I12 22I7 22H21	灰・灰上 灰上 灰上	1	甕	B	口～体*	—			大	英長,角	内：緑 外：緑	外：スス	口端：柳突・縄文 口：縄文 体：縄文+柳突	口端：柳突・縄文 口：縄文 体：縄文+柳突	
217	SD3a	21F23 21G10	灰上 灰下	1	甕	A	体	1/8			小	英長	内：浅黄橙 外：鈍い緑	内：コゲ 外：スス	内：コゲ 外：スス	体：左回りに縦区画施文(縦面 波状文→横面波状文→縦面波状 文)→頭：縦面波状文	縦原体：5本/1.1cm
218	SX1	21F25	—	1	甕	A	口～体	1/8	口：17.6	口：5/36	なし	角	内：鈍い褐 外：鈍い褐	内：コゲ 外：コゲ	頭：縦面波状文(下→上) 体：縦面波状文(下→上)	縦原体：8本/1.7cm	
219	SD3a SX1 SX1	21F7 21F7 21F13	灰下 — —	2	甕	A2	口～底*	1/3	口：15.3 底：7.0	口：1/36 底：30/36	なし	角	内：暗褐 外：暗褐	外：スス	頭：右回り2連止の波状文→ 口：縦面波状文(下→上)、 体：縦面波状文(上→下) →体 下半：ミガキ・ケズリ 底：無調整(木の突狂痕?)	縦原体：7本/1.5cm	
220	SD3a	21E18 21E19 21E22 21E23	灰下・上 灰上 灰下 灰下	2	甕	A3	口～体*	3/4	口：18.6	口：24/36	小	英長,角,雲	内：鈍い緑 外：褐	内：口ゴケ 外：スス	上半：ミガキ 下半：ハラナデ	ハケム→頭：右回り2～3連止 の波状文→口：縦面波状文(下 →上) 体：縦面波状文(下→上)	縦原体：8本/1.7cm
221	SD3a	21F6・11・ 12・13	灰上	2	甕	A3	口～体*	1/5	口：18.0	口：9/36	なし	白砂,雲,英長,角	内：褐 外：褐	外：スス	頭：右回り2連止の波状文→ 口：縦面波状文(下→上) 体：縦面波状文(上→下)	縦原体：6本/1.3cm	
222	SD3a	21E24	灰下	2	甕	A4	体* 口	1/5 1/5	口：16.0	口：5/36	なし	英長	体内：灰褐 体外：鈍い褐 口内：鈍い褐 口外：褐	体内：コゲ 体外：スス 口内：コゲ 口外：スス	頭：縦面波状文 口：縦面波状文(上→下) 体：縦面波状文(上→下)	縦原体：5～6本/1cm	
223	SD3a	21F4	灰上	2	甕	A2	口～体*	1/6	口：15.5	口：6/36	なし	角,雲	内：鈍い褐 外：灰白	なし	口：ヨコナデ 体：ハラナデ	頭：右回り2連止の波状文→ 口端：口取 体：縦面波状文(下→上)	縦原体：7本/1.5cm

弥生～古墳時代土器観察表 (10)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色	付着物	整		備考
															内面	外面	
224	SD3a	21F1・7 21F17・18 21F19 21F23	灰下 灰上・下 灰下 灰上・下	2	甕	A5	口～体*	1/4	口：17.4	口：19/36	大	英長白砂	内：浅黄澄 外：浅黄澄	外：スス	口：縹波状文→口：縹波状文 (下→上)→口 体：縹波状文(上→下)	縹原体：8～9本/1.4cm	
225	SX1	21F13	—	2	甕	A	口*	—	—	—	小	英長	内：鈍い褐色 外：鈍い褐色	なし	縹波状文		
226	SD3a	21F3	灰下	2	甕	A	口	—	—	—	なし	角,チヤ	内：鈍い褐色 外：灰褐色	外：スス	縹波状文		
227	SD3a	21G10	灰上	2	甕	A	口	—	—	—	小	英長	内：鈍い褐色(2.5YR) 外：明赤褐色(2.5YR)	なし	縹波状文		
228	SD3a	21G3	灰上	2	甕	A	口	—	—	—	小	英長角	内：赤褐色(2.5YR) 外：明赤褐色(2.5YR)	なし	縹波状文		
229	SD3a	21F19 21F23	灰下 灰上	2	甕	A	体	—	—	—	なし	チヤ	内：鈍い褐色 外：鈍い褐色	内：コゲ 外：スス	器面荒れのため不明		
230	SD3a	21E24	灰下	2	甕	A	体	—	—	—	なし	英角,チヤ	内：鈍い褐色 外：灰褐色	外：スス	縹波状文		
231	SD3a	21F23 21G4 21G10	灰上 灰下 灰上	2	甕	A	体*	—	—	—	なし	英長雲	内：褐色 外：褐色	外：スス	ハケメ→縹波状文→ミガキ		
232	SX2 SD3a	24H24 21F18・22 21G3 21G8	灰上 灰上 灰下 灰下	2	甕	A	口～体*	1/8	口：16.0	口：1/36	小	白砂,英長雲	内：褐色 外：鈍い褐色	内：コゲ 外：スス	口：縹波状文(上→下)→口 端：縹波状文	縹原体：4本/1.4cm	
233	SD3a	21G4 21G8	灰上 灰下	2	甕	A	口*	1/5	口：18.5	口：10/36	中	角,英長雲	内：鈍い褐色 外：鈍い褐色	外：スス	縹波状文(順序不明)	同一面体破片に縹波状文、 体：波状文あり 縹原体：6～7本/1.7cm	
234a	SX1	21G10	—	2	甕	A	体*	—	—	—	大	チヤ礫(中)多, 長	内：灰白 外：褐色	なし	ハケメ 縹波状文	器壁9mmと厚く発泡した ような状態	
234b	SD3a SX1	21G10 21G15	灰下 —	2	甕	A	体*	—	—	—	大	チヤ礫(中)多, 長	内：灰白 外：褐色	なし	ハケメ 縹波状文	器壁9mmと厚く発泡した ような状態	
235a	SX1 SD3a	21F7 21G8	— 灰下	2	甕	B2	口*	1/10	口：21.0	口：16/36	なし	英雲	内：褐色 外：褐色	外：スス	ミガキ(ヨコ)		
235b	SD3a	21F7・12	灰下	2	甕	B2	体～底*	1/10	底：7.0	口：16/36	なし	英雲	内：褐色 外：褐色	外：スス	ハケメ→ミガキ 底：無調整		
236	SD3a	21F23	灰下	2	甕	D1	口	—	—	—	大	英,チヤ	内：灰白 外：灰白	なし	縹波状文		
237	SD3a	21E19	灰上	2	甕	C1	口*	1/2	口：16.4	口：27/36	中	チヤ砂～砂礫	内：浅黄澄 外：浅黄澄	なし	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケメ	
238	SD3a	21F9	灰上	2	甕	C2c	口～体	1/18	口：19.4	口：2/36	なし	チヤ砂礫,英長	内：灰白 外：灰白	外：スス	口：ヨコナデ 体：ケズリ		
239	SD3a	22E16	灰上	2	甕	C2a	口～体	1/20	口：17.0	口：2/36	小	英長角,チヤ	内：鈍い褐色 外：鈍い褐色	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハラナデ		
240	SD3a	21F7	灰下	2	甕	C3b	口～体	1/4	口：16.0	口：11/36	小	英長角	内：明褐色 外：明褐色	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ→ヨコナデ		
241	SD3a	21F18 21F19 21F23 21G4 21G8	灰上 灰下 灰上 灰下 灰上	2	甕	C3b	口～体*	1/6	口：17.6	口：18/36	なし	チヤ砂～礫(中), 英長	内：浅黄澄 外：浅黄澄	内：体コゲ	口：ヨコナデ 体：不明		
242	SD3a	21G3・4・10	灰上	2	甕	C3d	口～体	1/6	口：12.8	口：2/36	なし	英長白砂	内：明褐色 外：鈍い褐色	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ→ヨコナデ 体：ケズリ	口：ヨコナデ 体：上半ハケメ・ハラナデ、下 半ナデ	
243	SD3a	21E15	灰上	2	甕	C3d	口～体	1/4	口：15.6	口：2/36	小	英長角,雲	内：鈍い褐色 外：鈍い褐色	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ 体：ハラナデ	口：ヨコナデ 体：ハケメ→ナデ	
244	SD3a	21G25	灰上	2	甕	C5	口	1/15	口：13.0	口：3/36	なし	英長	内：鈍い褐色 外：鈍い褐色	外：スス	ヨコナデ	ヨコナデ	
245	SD3a	21G9 21H5	灰上	2	甕	H	体～底	1/3	底：6.0	底：15/36	なし	英長角	内：褐色 外：鈍い褐色	外：スス	ハケメ→ミガキ	体：タタキ→底近く：工具圧痕 巡る 底：ナデ	

弥生～古墳時代土器観察表 (11)

報告 No.	遺構名	グロット	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調		備考	
															内面	外面		
246	SD3a	21E22 21E23 21E24	灰下 灰上 灰上	2	鉢	A	口～底*	1/2	口：12.0	口：10/36	なし	角,チャ	内：縹 外：鈍い褐～橙	外：スス	ミガキ	ミガキ		
247	SD3a	21F13 21F17 21F18 21F19	灰上 灰下 灰上 灰上	2	鉢	A	口～底*	1/3	口：11.6	口：17/36	なし	角,チャ砂～礫 (大)	内：灰白 外：灰白	なし	ミガキ	ミガキ	(図上復元)	
248	SD3a	21E20 21F7・19	灰下 灰下	2	壺	G	口	1/7	口：13.6	口：5/36	中	英長,チャ,針	内：縹 外：縹	なし	器面荒れのため不明			
249	SD3a	21E20 21E23 22E16	灰上 灰下 灰上	3	高杯	A	杯*	1/2	口：18.2	口：16/36	なし	英長,角,チャ	内：赤(10R) 外：赤(10R) 内外：赤彩	外～口内面：ス ス	ミガキ	ミガキ		
250	SD3a	21F17	灰上	2	器台	B	杯	1/4	口：8.8	口：9/36	小	精良	内：鈍い縹 外：鈍い縹	なし	器面荒れのため不明			
251	SD3a	22E11・16	灰上	3	甕	G	口～体*	1/2	口：13.1	口：36/36	大	英長,角,雲	内：縹(5YR) 外：縹(5YR)	外：口～体コゲ 体：ナデ	口：ヨコナデ 体：ハケメ, 下半ケズリ			
252	SD3a	21E18	灰上	3	甕	B2b	口～体*	1/7	口：11.6	口：5/36	中	チャ砂～砂礫,英 長,角	内：縹 外：縹	なし	口：ヨコナデ 体：ハケメ			
253	SD3a	22E21	灰上	3	杯	E3	口～体*	1/5	口：12.0	口：7/36	なし	英長,角	内：鈍い縹 外：鈍い縹	なし	口～体：ミガキ 底：ケズリ	ミガキ		
254	SD3a	21E20 22E16	灰上 灰上	3	杯	E2	口～底*	1/2	口：17.0 底：3.0 器高：5.2	口：10/36 底：36/36	なし	英,角	内：明褐 外：明褐 黒斑あり	なし	ミガキ	ミガキ		
255	SD3b	23I21	—	3	須恵器 杯蓋		天～口	1/7	口：17.3	口：1/36	なし	白砂礫,英,角	内：灰(5Y) 外：灰(5Y)	なし	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ 天：切り離し後ナデ		
256	SX2	24H22	—	2	甕	D1	口	1/20	口：16.6	口：1/36	大	チャ砂～砂礫(大), 英長,角	内：鈍い縹 外：鈍い縹	なし	ヨコナデ	ヨコナデ(腰凹線)		
257	SX2	24H22	—	2	甕	C3a	口～体	1/12	口：14.0	口：3/36	大	チャ砂～礫(大), 英長,角	内：鈍い縹 外：明褐	なし	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ 体：ハラナデ?		
258	SD5a	25F2	IIb	2	甕	C3c	口～底*	1/4	口：16.0 底：5.6	口：15/36 底：36/36	なし	英長,角	内：灰褐 外：明赤褐(2.5YR)	内：コゲ 外：口～体スス	口：ヨコナデ 体：ナデ	口：ヨコナデ 体：ハラナデ 底：編台	(図上復元)	
259	SD5b	23F2	灰上	2	甕	C4b	口～体	1/12	口：17.1	口：3/36	小	英長,チャ	内：縹(5Y) 外：縹(5Y)	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ			
260	SD5b	23E8 23E12 23F2	灰上 灰上ク口 灰上	2	甕	C3e	口～体*	1/10	口：14.0	口：11/36	小	英長,角,チャ	内：灰白 外：灰白	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ			
261	SD5a	25E12	灰上	2	壺	G	口～体*	1/4	口：12.0	口：12/36	なし	英長,角	内：縹(5YR) 外：縹(5YR) 内口・外：赤彩	なし	口：ミガキ 体：ハラナデ	ミガキ		
262	汎1	13G13	8	0	甕		体	—			なし	英長,角	内：鈍い縹 外：鈍い縹	外：スス	横羽状文, 鏡刺突			
263	汎1	13G13	8	1	甕		体	—			なし	白砂,英長,角	内：鈍い縹 外：鈍い縹	内：コゲ 外：スス	縹羽状文 タテ→ヨコ(充填)			
264	汎1	13G7	8	1	甕		体	—			なし	精良	内：コゲ 外：鈍い縹	内：コゲ 外：スス	縹羽状文			
265	汎1	13G2	8	1	甕		体*	—			なし	英,角,白砂	内：灰褐 外：黒	外：コゲ	ハケメ→縹羽状文			
266	汎1	13G8	8	2	甕	A	体	—			大	英長,白砂	内：鈍い縹 外：鈍い縹	内：コゲ 外：スス	縹羽状文			
267	汎1	15G2	8	2	甕	A	体	—			大	白砂,英長,角	内：鈍い縹 外：縹	外：スス	縹羽状文			
268	汎1	13H3	8	2	甕	C3a	口～底*	1/10	口：14.0	口：3/36	小	英長,角,雲	内：明赤褐 外：明赤褐	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハラナデ	口：ヨコナデ 体：ハラナデ 底近く：ケズリ		
269	汎1	13G2	8	2	甕	C2a	口～体*	1/18	口：21.0	口：6/36	大	英長,白砂	内：縹(5YR) 外：縹(5YR)	外：スス	口：ハケメ→ナデ 体：ハラナデ	ハケメ→ナデ		
270	汎1	13G2	8	2	甕		体～底*	1/6	底：6.4	底：6/36	大	英長,白砂	内：鈍い縹 外：明赤褐(2.5YR) 外：赤彩	なし	ハケメ	ハケメ 底：ケズリ		

弥生～古墳時代土器観察表 (12)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調整		備考
															内面	外面	
271	—	18F18	カクラン	0	甕		体	—			小	英長白砂	内：橙 外：橙	なし	ナデ	条痕	
272	—	19F8	IIa	0	甕		体	—			小	英長角	内：橙 外：明褐	なし	ヨコナデ	条痕	
273	—	95 I 区西	表土	1	甕		体	—			小	英砂礫	内：灰褐 外：橙	内：コゲ?	ナデ	複合鋸歯文	
274	—	13K10	IIIa	1	甕		体*	—			小	英長白砂	内：鈍い橙 外：鈍い橙	外：スス	ミガキ	ハケメ→縹羽状文	粉跡
275	—	95 II 区	表土	1	甕		体	—			なし	英長	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	ミガキ(タテ)	縹波状文→縹波状文(タテ) →等間隔止め縹波状文	
276	—	13J25	IIIa	1	甕		体*	—			中	長白砂	内：褐 外：褐	外：スス	ミガキ	縹波状文	
277	—	13J25	IIIa	2	甕	A	体*	—			中	長白砂	内：褐 外：褐	外：スス	ミガキ	縹波状文	
278	—	18H8	II	1	甕	E	口	—			小	角	内：浅黄橙 外：浅黄橙	なし	ヨコナデ	口端：縹文LR 口：縹文LR地文、洗線	
279	—	13H6	IIIa	1	壺	B	口・底	1/5	口：11.7 底：5.5	口：7/36 底：11/36	大	白砂礫英長角	内：赤褐(5YR) 外：赤褐(5YR)	なし	ヨコナデ	口端：押さえ(大ぶりの刺突) ヨコナデ	
280	—	17L7	I II 砂上	1	甕	A	口~体	1/3	口：16.0	口：4/36	なし	角白砂	内：暗褐 外：暗褐	外：スス	ハケメ→ミガキ	口端：縹文LR、体：ハケメ→ 縹波状文→縹波状文(タテ) →等間隔止め縹波状文	縹原体：7~8本/1.8cm
281	—	18J24	地上	1	甕	A	口*	1/15	口：14.0	口：2/36	なし	白砂、英長角	内：褐 外：褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ	口端：縹波状文→縹波状文 縹波状文→縹波状文(タテ) →等間隔止め縹波状文	縹原体：5本/1cm
282	—	16L20	II	1	甕	F	口	1/10	口：12.8	口：4/36	小	英	内：鈍い橙 外：鈍い橙	内：コゲ 外：スス	ミガキ	口端：縹文LR	
283	—	17L7	I	1	甕	F	口	—	口：12.5	口：1/36	なし	精良	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	ミガキ	口端：縹文LR(多条?)、口： ミガキ	
284	—	17L6	I	1	甕	F	口	1/15	口：13.4	口：3/36	大	英雲	内：暗褐 外：スス	内：コゲ 外：スス	ヨコナデ	口端：縹文LR、口：ヨコナデ、 洗線	襖然
285	—	17L7	砂上	1	甕	B	口~体	3/4	口：15.8 底：5.4 器高：23.6	口：17/36	なし	精良	内：褐 外：褐	内：コゲ 外：コゲ	ハケメ→ミガキ	ハケメ→体：縹波状文→縹斜 条痕→体下半：ミガキ、口端： 縹文LR多条、底：無調整	縹原体：7本/1.4cm
286	—	19F4	IIa IIb	1	甕	D	口~体*	1/3	口：15.5	口：10/36	大	英多	内：鈍い橙 外：明赤褐(5YR)	内：コゲ 外：スス	器面荒れのため不明	口端：鏡刻み、体：複合鋸歯文	
287	—	94	表採	2	甕	A	体	—			なし	英長角	内：灰白 外：褐	外：スス	ハケメ	複合鋸歯文 縹波状文	
288	—	19G7	IIa	2	壺	H	体*	—			なし	白礫(中)、英長角	内：鈍い褐 外：褐	外：スス	ナデ	体：縹文LR斜位回転	「天王山式」?
289	—	19G7・12	IIa	2	壺	H	体~底*	1/4	底：5.0	底：15/36	小	英長角、白砂	内：橙 外：明赤褐(2.5YR)	なし	ナデ	体：縹文LR斜位回転 底：ミガキ	「天王山式」?
290	—	18J15 19J11	IIb	2	甕	A1	口*	1/9	口：17.5	口：12/36	なし	英長白砂	内：鈍い褐 外：鈍い褐	外：スス	ミガキ	口：ハケメ→ヨコナデ→縹波 状文 頭：右回り等間隔止め縹波状文	
291	—	19J25	IIb	2	甕	A1	口	1/8	口：17.6	口：2/36	なし	白砂、英長	内：鈍い褐 外：明赤褐	内：コゲ 外：スス	ハケメ→ミガキ	口：ヨコナデ→縹波状文、 頭：右回り等間隔止め縹波状文	縹原体：6本/1.4cm
292	—	18J24 18J3・4	地上・IIb IIb	2	甕	A1	口*	1/20	口：18.0 底：8.5 器高：(25.0)	口：8/36	小	英長白砂	内：濁灰 外：明褐	外：スス	口：ハケメ→ミガキ 体：ハケメ→ミガキ	口：ヨコナデ→縹波状文、 頭：右回り等間隔止め縹波状文	縹原体：7本/1cm (図上復元)
293	—	20G1 20G1・6	IIa IIb	2	甕	A4	口~底*	1/10	口：17.0 底：5.8 器高：23.8	口：1/36 底：20/36	なし	精良	内：鈍い褐 外：鈍い褐	内：コゲ 外：スス	ハケメ→ミガキ	ハケメ→口：縹波状文(下→ 上)、体：縹波状文(下→上) →頭：右回り2連止め縹波状文→ 体下半：ミガキ、底：ミガキ	(図上復元)
294	—	19F2	IIb	2	甕	A	口	1/18	口：16.5	口：2/36	なし	角、チャ	内：灰褐 外：褐	内：コゲ 外：スス	ミガキ	口端：縹波状文 口：縹波状文	
295	—	19H11・16・ 18・21	IIa	2	甕	A	口~体*	1/2	口：16.0	口：18/36	なし	英長角	内：鈍い褐 外：赤褐(5YR)	外：スス	ミガキ	口：縹波状文(下→上) →口 端：鏡状工具刺突	縹原体：7本/0.9cm
296	—	20F21	IIb	2	甕	A2	口~体*	1/7	口：18.7	口：5/36	なし	精良	内：浅黄橙 外：鈍い橙	外：スス	ハケメ→ミガキ	頭：右回り縹波状文→口：縹波 状文(下→上)、体：縹波状 文(上→下) →ミガキ	縹原体：8本/2cm

弥生～古墳時代土器観察表 (14)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調整		備考
															内面	外面	
334	—	23E23	地上	2	甕	G2	□	1/18	□: 14.4	□: 2/36	小	英角	内: 灰白 外: 灰白	なし	ヨコナデ 口: ヨコナデ 体: ハケメ		
335	—	18H15 19H16	IIa	2	甕	D2	□~体	1/7	□: 15.6	□: 16/36	なし	英・チャ・礫 (中)	内: 鈍い緑 外: 鈍い緑	内: コゲ 外: スス	□: ヨコナデ 体: ハラナデ・ナデ		
336	—	18I21	IIa IIb	2	甕	D2	□~体	1/5	□: 15.9	□: 8/36	小	英・チャ・砂	内: 浅黄緑 外: 浅黄緑	外: スス	□: ヨコナデ・体: ハラナデ・ ハケメ		
337	—	16L20	II	2	甕	D2	□~体	1/5	□: 14.5	□: 17/36	小	チャ・砂~砂礫	内: 鈍い褐 外: 鈍い褐	外: スス	□: ヨコナデ 体: ハケメ		
338	—	19G12・13	II上	2	甕	C2b	□~体	1/5	□: 17.0	□: 7/36	中	英・長針	内: 浅黄緑 外: 浅黄緑	外: スス	□: ヨコナデ 体: ハケメ		
339	—	23E19	地上	2	甕	C2b	□~体	1/5	□: 15.0	□: 7/36	なし	英・長	内: 明赤褐 (5YR) 外: 橙	内: コゲ 外: スス	□: ヨコナデ 体: ハケメ		
330	—	19I1・6	IIb	2	甕	C2a	□~体	2/3	□: 16.0	□: 21/36	小	チャ・砂礫・英・長角・ 針	内: 橙 外: 橙	内: コゲ 外: スス	□: ヨコナデ 体: ハケメ		
331	—	17L11・7 17L12・13・ 16・18	I II	2	甕	C2a	□~体	1/4	□: 17.5	□: 11/36	なし	英・長・チャ	内: 鈍い緑 外: 鈍い緑	内: コゲ 外: スス	□: ヨコナデ 体: ハケメ		
332	—	19F10	IIa	2	甕	C2c	□*	1/5	□: 16.0	□: 7/36	小	チャ・砂礫・英	内: 灰白 外: 浅黄緑	外: スス	□: ヨコナデ		
333	—	19I25	カクラン	2	甕	C3e	□	1/8	□: 19.0	□: 5/36	なし	白砂・英・長	内: 褐 外: 褐	外: スス	ヨコナデ		
334	—	17L12	II	2	甕	C3a	□	1/15	□: 14.0	□: 3/36	小	英・長	内: 鈍い緑 外: 灰褐	外: スス	ハラメ→ヨコナデ		
335	—	18H15 19H1・6・11	IIa	2	甕	C3a	□~体	1/2	□: 17.0	□: 16/36	小	英・長	内: 明褐 外: 明褐	内: コゲ 外: スス	□: ヨコナデ 体: ハラナデ 粘土接合・底明瞭 □: ヨコナデ		
336	—	16L4・8	II	2	甕	C3d	□~底	1/10	□: 18.0 底: 6.0	□: 2/36 底: 18/36	なし	英・長角	内: 赤褐 (5YR) 外: 赤褐 (5YR)	内: コゲ 外: スス	□: ヨコナデ 体: ハケメ→ミガキ 底: ハケメ→ナデ		(図上復元)
337	—	19I1・2	IIa	2	甕	C3a	□~体	1/2	□: 15.8	□: 32/36	なし	英・長針・チャ・砂礫 ~礫 (大)	内: 橙 外: 橙	内: コゲ 外: スス	□: ヨコナデ 体: ハケメ		
338	—	17L15	I	2	甕	C3b	□~体	1/20	□: 19.4	□: 2/36	なし	英・長角	内: 鈍い緑 外: 鈍い緑	内: コゲ 外: スス	□: ヨコナデ 体: ハケメ→ヨコナデ		
339	—	17L6	II	2	甕	C2a	□~体	1/4	□: 14.6	□: 9/36	大	チャ・砂礫~礫 (大), 英・長針	内: 明褐 外: 明褐	内: コゲ 外: スス	剥落のため不明 □: ヨコナデ 体: ハケメ		概熱
340	—	20F21	IIa	2	甕	C3d	□~体	1/5	□: 13.6	□: 7/36	なし	英・長	内: 鈍い緑 外: 鈍い緑	外: コゲ	□: ヨコナデ 体: ハケメ		
341	—	17K20	I カクラン	2	甕	C	体	1/10			なし	長砂~礫 (大), 英	外: スス	ヨコナデ	ハラメ→ヨコナデ		
342	—	19I1	IIb	2	甕	C3a	□~体	1/18	□: 15.7	□: 8/36	なし	チャ・砂礫・英・針	内: コゲ 外: スス	□: ヨコナデ 体: ハケメ			
343	—	17I5	IIb	2	甕	C3a	□~体	1/8	□: 14.7	□: 5/36	小	針・白砂	内: 鈍い緑 外: 鈍い緑	内: コゲ 外: スス	□: ヨコナデ 体: ハケメ		
344	—	16K16・21・ 22	II	2	甕	C3a	□~体	1/4	□: 15.4	□: 9/36	なし	英・長角・雲	内: 明褐灰 外: 明褐灰	外: コゲ	□: ヨコナデ 体: ハラナデ・ 下半ミガキ		
345	—	20G1	IIb	2	甕	C4a	□~体	1/7	□: 18.0	□: 5/36	なし	長・チャ・砂礫	内: 浅黄緑 外: 鈍い緑	内: コゲ 外: スス	□: ヨコナデ 体: ハケメ		
346	—	18I16	IIa IIb	2	甕	C5	□~体	1/4	□: 11.4	□: 9/36	中	チャ・砂~礫 (中), 英・長	内: 橙 (5YR) 外: 橙 (5YR)	外: スス	□: ヨコナデ 体: ハケメ		
347	—	14F24	IIIa	2	甕	C5	□~体	1/6	□: 12.0	□: 21/36	大	長・チャ	内: 鈍い黄緑 (10YR) 外: 鈍い黄緑 (10YR)	なし	ヨコナデ		
348	—	13I21	IIIa	2	甕	C3d	□~体	1/10	□: 16.0	□: 4/36	大	英・長・雲	内: 明赤褐 (5YR) 外: 明赤褐 (5YR)	内: コゲ	□: ヨコナデ 体: ハケメ		
349	—	14K8	IIIa	2	甕	C2a	□~体	1/7	□: 12.4	□: 5/36	大	英・長	内: 鈍い緑 外: 鈍い緑	内: コゲ 外: スス	□: ヨコナデ 体: ハケメ		器面荒れのため不明
350	—	17L7	I	3	甕	F	□~体	1/10	□: 19.0	□: 17/36	中	チャ・砂礫~礫 (大)	内: 鈍い緑 外: 鈍い緑	内: コゲ	□: ヨコナデ 体: ハケメ		ミガキ

弥生～古墳時代土器観察表 (15)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調整		備考
															内面	外面	
351	—	19I12	IIb	2	甕	J2a	口～体	1/20	口：14.0	口：2/36	中	内：灰白 外：灰白	外：スス	ヨコナデ	ヨコナデ		
352	—	19F3・4	IIb	2	甕	J2b	口～体	1/4	口：13.4	口：14/36	なし	内：灰白 外：灰白	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ	口：ヨコナデ		
353	—	19F3	IIa	2	甕	J2b	口*	1/36	口：14.6	口：1/36	なし	内：灰白 外：灰白	外：スス	ヨコナデ	ヨコナデ		
354	—	19G6	IIa	2	甕	II	口	1/36	口：14.0	口：1/36	大	内：灰白 外：灰白	外：スス	ヨコナデ	ヨコナデ		
355	—	17II0・15	IIa IIb	2	甕	II	口*	1/10	口：15.2	口：6/36	大	内：鈍い橙 外：鈍い橙	外：スス	ヨコナデ	ヨコナデ		
356	—	18I13	IIb	2	甕	II	口	1/7	口：10.0	口：5/36	小	内：浅黄緑 外：浅黄緑	外：スス	ヨコナデ	ヨコナデ		
357	—	19G5・9	IIa	2	甕	G	体～脚	1/2	底：8.2	底：7/36	なし	内：明赤褐(5YR) 外：明赤褐(5YR)	外：スス	体：ミガキ 脚：ヘラナデ	ハケメ		
358	—	19I1	IIa	2	甕	G	脚	4/5	底：8.2	底：17/36	大	内：橙(2.5YR) 外：橙(2.5YR)	なし	剥落のため不明 (ナデ)	剥落のため不明 (ハケメ)		
359	—	95I区	表土	2	壺	B	頸	1/5			英	内：明赤褐(5YR) 外：明赤褐(5YR)	なし	ハケメ→ミガキ	口：ヨコナデ 頸：ハケメ→ミガキ 体：ハケメ		
360	—	19I22	IIa	2	甕	C3c	口～体*	1/10	口：13.0	口：4/36	中	内：灰白 外：灰白	なし	剥落のため不明(ナデ)	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
361	—	22E22	地上	2	甕	C2b	口～体	1/6	口：14.0	口：1/36	中	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ハケメ 体：ハケメ		
362	—	17I15・20	IIa	2	壺	D	口～体	1/6	口：9.4	口：1/36	中	内：明褐 外：鈍い褐	内：コゲ 外：スス	口：ヘラナデ・ハケメ・ヨコナ デ 体：ナデ	口：ヨコナデ 体：ミガキ?		
363	—	20G11	IIa	2	壺	C	口	1/10	口：15.0	口：3/36	中	内：鈍い橙 外：浅黄緑	なし	剥落(ミガキ)	ミガキ		
364	—	18H15	IIa	2	壺	G	口*	1/7	口：10.5	口：11/36	なし	内：口、黒色処理 外：明褐 内黒	なし	ミガキ(ヨコ)	ミガキ(タテ)		
365	—	18H10	IIa	3	壺	G	口～体*	1/7	口：11.9	口：9/36	小	内：浅黄緑 外：浅黄緑	なし	口：ミガキ 体：ナデ	口：ヨコナデ→ミガキ 体：ミガキ		
366	—	21I13	カクラン	2	蓋	G	鈕～口*	1/3	口：11.0	口：15/36	なし	内：明赤褐(2.5YR) 外：明赤褐(2.5YR) 内外：赤彩	内：コゲ 外：スス	ミガキ	ミガキ		
367	—	29F25	IIb上	2	器台	B	杯～脚*	1/2			大	内：橙 外：橙	なし	ミガキ	ミガキ	3孔	
368	—	30G16	風倒木	2	器台	A	口～脚	4/5	口：8.0 底：13.0	口：5/36 底：35/36	なし	内：橙 外：赤 愛内、脚外：赤彩	なし	脚：ハケメ・ナデ 杯：ミガキ	ミガキ		
369	—	22K10 23J17	カクラン	2	高杯	D	脚	2/3			大	内：浅黄緑 外：浅黄緑	なし	器面荒れのため不明(ケズリ?)	器面荒れのため不明		
370	—	95I区	表土	2	高杯	C	杯	—				内：明褐 外：明褐	なし	ミガキ 細描写	器面荒れのため不明		
371	—	19G7	IIa	2	高杯	D	脚	1/1			なし	内：明褐 外：明褐	なし	ナデ輪縁顕明瞭	ミガキ(タテ)		
372	—	16L13	II	3	高杯	A	脚*	1/6			小	内：橙(5YR) 外：橙(5YR)	なし	ナデ	ミガキ		
373	—	18F18	カクラン	2	高杯	B	体～底*	1/5	底：10.2	底：16/36	なし	内：灰褐 外：褐	なし	ミガキ	ハケメ→ミガキ		
374	—	94-2トレンチ	—	2	高杯	D	脚	1/4	底：10.0	底：8/36	なし	内：橙 外：橙	なし	ヨコナデ	ヨコナデ・ミガキ		
375	—	19I6	IIb	2	鉢	C	口～底	略完形	口：12.1	口：22/36	なし	内：褐 外：鈍い橙	内：灰はじけ・ コゲ 外：スス	ミガキ	ミガキ (一部にケズリの痕跡)		
376	—	19F10	IIb	3	甕	A1	口～体*	1/2	口：16.0	口：21/36	なし	内：明褐 外：明褐	内：コゲ 外：スス	体：ヘラナデ 口：ヨコナデ	口：ヨコナデ・体：ハケメ 口：ヨコナデ 体：ハケメ		
377	—	19F4	IIa	3	甕	B2a	口～体	1/6	口：18.0	口：6/36	中	内：浅黄緑 外：鈍い橙	外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ	口：ヨコナデ 体：ハケメ		
378	—	13F24 13G4	I	3	甕	B1	口～体	1/4	口：16.2	口：8/36	なし	内：褐 外：褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ 体：ハケメ	口：ヨコナデ 体：ハケメ(ヘラナデ)		

弥生～古墳時代土器観察表 (16)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調		備考	
															内面	外面		
379	—	19J25	カクラン	3	甕	B2b	□～体*	1/7	□：17.0	□：5/36	なし	英長	内：明赤褐(5YR) 外：明赤褐(5YR)	内：コゲ 外：スス	□：ヨコナデ 体：ハケメ			
380	—	95I区	表土	3	甕	B1	□～頸	1/10	□：14.6	□：4/36		精良	内：黒 外：黒	外：スス	ヨコナデ(ハラナデ)			
381	—	16L13	II	3	甕	B2a	□～体* 体～底	1/4	□：14.9 底：7.0	□：10/36 底：9/36	大	英、チャ砂礫	□～体内：灰白 □～体外：鈍い橙 体～底内：褐灰 体～底外：灰白	外：スス	□：ヨコナデ 体：ハケメ 底：ナデ(ドーナツ状)	(図上還元)		
382	—	23E25	地上	3	壺	B	□～体	1/15	□：19.0	□：3/36	小	長、チャ	内：灰白 外：灰白	なし	□：ヨコナデ 体：ハケメ	元は内外赤彩? 裏の可能性あり		
383	—	18I25	II	3	壺	B	□	1/3	□：13.5	□：14/36	小	チャ砂礫～礫 (中)、英長	内：橙 外：橙	内：コゲ 外：スス	ヨコナデ			
384	—	17L11	II	3	鉢	A	□～体	1/12	□：18.0	□：3/36	大	チャ	内：褐灰 外：鈍い褐	剥落のため不明	ヨコナデ	剥落のため不明 (ヨコナデ・ハケメ)	被熱	
385	—	17L7	I	3	鉢	A	□	1/10	□：12.6	□：4/36	大	長角雲	内：褐 外：明赤褐(5YR)	剥落のため不明	ハケメ	被熱		
386	—	19I6	IIb	3	鉢	B	□～体*	1/4	□：14.2	□：17/36	小	チャ砂礫～礫 (大)、英長	内：橙 外：橙	外：スス	□：ヨコナデ 体：ハラナデ			
387	—	—	表土	3	壺	D	□～底	4/5	□：8.0	□：7/36	なし	英長角	内：鈍い橙 外：橙	なし	□：ヨコナデ 体：ハケメ			
388	—	18H20	IIa	3	壺	D	体	1/5			なし	角、英長、チャ	内：褐 外：褐	外：スス	ナデ	ハケメ→ミガキ		
389	—	18H15・19	IIa IIb	3	壺	C	体*	1/2			なし	英長	内：浅黄橙 外：鈍い橙	外：スス	体：ナデ・ケズリ、接合部残る 底：ハラナデ	ミガキ	(図上還元)	
390	—	12J17	IIIa	3	杯	A	□～底	1/2	□：11.6	□：8/36	大	英長、白砂	内：橙 外：褐	内：コゲ(火は じけ)	ミガキ	ミガキ		
391	—	17L9	I	3	杯	D1	□～体	1/12	□：16.0	□：3/36	中	英	内：明赤褐(2.5YR) 外：明赤褐(2.5YR)	なし	剥落ミガキ	ミガキ		
392	—	17L8	II	3	杯	D1	□～底*	1/2	□：13.5	□：16/36	大	長	内：褐 外：明赤褐(10YR)	内：コゲ 外：スス	剥落のため不明	剥落のため不明	被熱	
393	—	19I1	IIb	3	杯	D1	□～底	1/4	□：12.0	□：3/36	小	精良	内：橙(5YR) 外：橙(5YR)	外：スス	ミガキ	ミガキ		
394	—	19I6	IIb	3	杯	D2	□～体*	1/12	□：13.0	□：4/36	小	英長	内：橙 外：橙	なし	ミガキ	ミガキ		
395	—	19I1・6	IIb	3	杯	B	□～底	1/4	□：11.5	□：15/36	小	英長角	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	ナデ	ナデ		
396	—	18H20	IIa	3	杯	D3	□～体*	1/2	□：12.5	□：23/36	小	チャ砂～礫(大) 英長	内：赤褐(5YR) 外：赤褐(5YR)	なし	ミガキ	体：ミガキ 底：ケズリ		
397	—	18H10	IIa	3	杯	D2	□～底	3/4	□：10.5	□：2/36	小	チャ砂礫、英長	内：橙(5YR) 外：鈍い橙	外：スス	ミガキ	体：ミガキ 底：ケズリ→ミガキ		
398	—	17L14	II	3	杯	E1	□～体	1/2	□：13.5	□：8/36	大	英長角	内：鈍い褐 外：鈍い褐～黒褐	なし	ミガキ	ミガキ	被熱?	
399	—	19I6	IIb	3	杯	E1	□～体	1/5	□：13.3	□：7/36	なし	チャ砂礫、英角、針	内：浅黄橙 外：浅黄橙	なし	ミガキ	ミガキ		
400	—	18H19	IIa	3	杯	E2	□～底	1/2	□：14.2	□：4/36	なし	チャ、英、白砂	内：黒 外：明褐	なし	ミガキ	ミガキ	底外面：ハラ捕「×」	
401	—	16L8・14	II	3	杯	E3	□～底	1/3	□：13.9	□：5/36	小	英長角	内：鈍い橙 外：鈍い橙	なし	ミガキ	□：ヨコナデ、体：ハケメ、 底：ミガキ		
402	—	11K5	IIIa	3	杯	E1	□～体	1/20	□：(15.5)	□：2/36	小	英長	内：橙 外：橙	なし	ミガキ	ミガキ		
403	—	11J25	IIIa	3	杯	E3	□	1/20	□：(15.5)	□：2/36	なし	精良	内：黒色処理 外：明赤褐	なし	ミガキ	ミガキ		
404	—	12K2	IIIa	3	杯	E3	□～体	1/5	□：15.6	□：7/36	なし	英長角	内：橙(5YR) 外：橙(5YR)	なし	ミガキ	ミガキ		
405	—	17L7	I	3	杯	E2	□～体	1/20	□：16.0	□：2/36	中	英角	内：鈍い橙 外：口黒、体明褐	なし	剥落ミガキ	ミガキ	被熱?元は内面黒色処理	
406	—	19I1	IIb	3	杯	E4	□～底	1/4	□：15.0	□：7/36	小	英	内：黒色処理 外：鈍い橙	なし	ミガキ	ミガキ		

弥生～古墳時代土器観察表 (17)

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	分類	残存部位	残存率	法量cm	残存率 (法量)	磨耗	胎土	色調	付着物	調 査		備 考
															内 面	外 面	
407	—	19I6	IIb	3	杯	E3	口～体	略完形	口：16.0	口：30/36	大	精良	内：縹 (2.5YR) 外：縹 (2.5YR)	内：コゲ (火は じけ?) 外：スス	ミガキ	ミガキ	口端：丸棒状工具面凹圧 痕
408	—	20G1	IIa	3	杯	E1	口～体	1/18	口：12.0	口：2/36	なし	白砂	内：黒色処理 外：鈍い縹	なし	ヨコナデ	ヨコナデ	
409	—	19I6	IIb	3	杯	E3	口～底*	1/7	口：12.6	口：5/36	なし	英長チャ	内：黒色処理 外：鈍い縹	なし	ミガキ	ミガキ	
410	—	17L19	I	3	杯	E2	口～体	1/18	口：16.0	口：2/36	大	英	内：黒色処理 外：明赤褐	内：スス 黒色処理?	剥落ミガキ	剥落ミガキ	被熱
411	—	19J1	カクラン	3	杯	E2	口～体	1/4	口：16.0	口：4/36	小	英	内：黒色処理 外：縹	なし	ミガキ	ミガキ	
412	—	19I1	IIb	3	杯	E4	口～体*	1/4	口：14.0	口：11/36	なし	英チャ	内：黒色処理 外：鈍い縹	なし	ミガキ	ミガキ	
413	—	18I5 18I10 19I1	IIa IIb IIb	3	杯	C	口～底	略完形	口：9.2	口：33/36	なし	白砂,英長角	内：黒色処理 外：明赤褐 (5YR)	なし	ミガキ	口：ミガキ 体下半：ケズリ→ミガキ	
414	—	18H20	IIa	3	杯	F	口～底*	2/3	口：14.3	口：10/36	なし	チャ	内：黒色処理 外：明赤褐 (5YR)	なし	ミガキ	ミガキ	内外ミガキとも菱形の暗 文風になっている
415	—	19I1	IIb	3	杯	E2	口～底*	1/5	口：14.8	口：10/36	なし	英長針	内：明赤褐 (5YR) 外：明赤褐 (5YR)	一部 内：コゲ 外：スス	ミガキ	ミガキ	破損後一部破片だけ被 熱?
416	—	17I6	I	3	杯	F	口～体		口：(13.7)	口：(11/36)		白砂	内：黒色処理 外：黒色処理	なし	ヨコナデ	ヨコナデ	
417	—	12J12	IIIa	3	杯	F	口～底*	9/10	口：15.2	口：13/36	大	チャ	内：明赤褐 (5YR) 外：明赤褐 (5YR)	なし	器面荒れのため不明(ミガキ?)	器面荒れのため不明(ミガキ?)	
418	—	16L1	II	3	杯	G	口～底	3/4	口：13.5	口：17/36	なし	英長チャ	内：黒色処理 外：明赤褐 (5YR)	なし	ミガキ	口：ミガキ 底：ケズリ	
419	—	19I6	IIb	3	杯	E1	口～底*	1/3	口：13.0	口：16/36	小	英長角	内：縹 (2.5YR) 外：縹 (2.5YR) 内外：赤彩	一部 内：スス 外：スス	ミガキ	ミガキ	
420	—	16L3	II	3	杯	G	口～底*	3/4	口：14.0	口：20/36	なし	英長雲	内：明赤褐 (5YR) 外：明赤褐 (5YR)	外：スス	ミガキ	ミガキ	底外面：へう捕「×」
421	—	19G15	IIa	3	杯		底	—			なし	英長	内：鈍い縹 外：縹 (5YR)	なし	ミガキ	ミガキ	底外面：へう捕「×」
422	—	17H25	IIb	3	杯		底	—			なし	英	内：鈍い縹 外：鈍い縹	外：スス	ミガキ	ミガキ	底外面：へう捕「×」
423	—	19I1	IIb	3	須恵器 杯蓋		口～底	完形	口：12.1 器高：4.7	口：36/36	なし	白色砂礫	内：濁灰 外：濁灰 暗オリーブ (5Y) 自 然細か	なし	ロクロナデ	天：ロクロナズリ 口：ロクロナデ	
424	—	18I2	IIa	3	須恵器 杯蓋		口*	1/36			なし	精良	内：灰 (5Y) 外：灰 (5Y) 灰白 (5Y) 自然細か か	なし	ロクロナデ	ロクロナデ	
425	—	18J7	IIa	3	須恵器 杯身		体	1/10			なし	精良	内：灰 (5Y) 外：灰 (5Y)	なし	ロクロナデ	ロクロナデ	「TK10」
426	—	19G22	IIa	3	須恵器 杯身		体	1/9			なし	白砂礫	内：灰 (5Y) 外：灰 (5Y) 暗オリーブ (5Y) 自 然細か	なし	ロクロナデ	天：ロクロナズリ 口：ロクロナデ	「MT15」または「MT47」
427	—	17L11	I	3	須恵器 杯身		口	1/36			なし	精良	内：灰 (5Y) 外：灰 (5Y)	なし	ロクロナデ	ロクロナデ	
428	—	19II6	—	3	—		把手?	—			なし	英長雲,角	濁	なし			

古代・中世土器観察表

報告No.	遺構名	グリッド	層位	区分	器種	残存部位	残存率	法量cm	残存率(法量)	磨耗	胎土	色調	附着物	調整		備考
														内面	外面	
1	'94小礫集中域1	—	2	中世	珠洲焼製円盤		完形	長:3.7 幅:2.8	小	英白砂	内:褐灰 外:褐灰	なし	なし	平行タタキ目	裏破片	
2	'94小礫集中域1	—	2・2'	中世	珠洲焼製円盤		完形	長:4.6 幅:4.5	小	精良	内:褐灰 外:黒褐	なし	なし	ロクロナデ	裏破片	
3	'94小礫集中域1	—	2・2'	中世	珠洲焼製円盤		完形	長:3.1 幅:2.9	中	精良	内:褐灰 外:褐灰	なし	なし	平行タタキ目	裏破片	
4	'94小礫集中域1	—	2	中世	甕	体	—		小	英白砂	内:褐灰 外:褐灰	なし	なし	平行タタキ目		
5	'94小礫集中域1	—	2	中世	甕	体	—		小	精良	内:褐灰 外:褐灰	なし	なし	ロクロナデ 平行タタキ目		
6	SD1a	18F21	—	平	須恵器長頸壺	口	1/7	口:13.0	なし	白砂	内:灰(5Y) 外:灰(5Y)	なし	なし	ロクロナデ		
7	SD1e	17F11	II	平	須恵器長頸壺	頸~体	1/3		なし	白砂	内:灰(5Y) 外:灰(5Y)オリブ (5Y)自然釉かかる	なし	なし	ロクロナデ	把手付き	
8	SD1a	18F22	—	平	須恵器転用砥石	—	—		なし	精良	内:灰(5Y) 外:灰(5Y)	なし	なし	(ロクロナデ)	壺の体~底部片の周囲を 打ち欠き	
10	SD2	21I11	灰上	中世	珠洲焼部鉢	体	—		小	白礫(中~大), 英針	内:灰白(5Y) 外:灰白(5Y)	なし	なし	ロクロナデ	御目:5条/1cm	
11	SD3a	22J20	ク口	平	無台杯	口~底	1/5	口:13.0 底:6.2 器高:4.2	なし	英長	内:糖(5YR) 外:糖(5YR)	なし	なし	ロクロナデ 底:回転糸切り		
12	SD5a	24E19	—	平	小皿	底	5/7	底:3.8	なし	精良	内:糖 外:糖	なし	なし	回転糸切り	11世紀代	
13	—	21K11		平	須恵器甕	体	—		大	暗赤色(10R) / 英白砂	内:灰(5Y) 外:黒(5Y)	なし	なし	平行タタキ目		
14	—	16L10	II	平	須恵器蓋	口	1/36	口:(14.0)	なし	精良	内:灰(N) 外:灰(N)	なし	なし	ロクロナデ		
15	—	19G12	IIa	平	小甕	口~底	2/3	口:9.6 底:5.4 器高:8.5	なし	精良	内:明褐 外:明褐	内:コゲ 外:スス	なし	なし	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	
16	—	19G15	IIa	中世	珠洲焼甕	体	—		中	浅黄(2.5Y) / 針, 白砂礫	内:オリブ黒(5Y) 外:オリブ黒(5Y)	なし	なし	平行タタキ目		

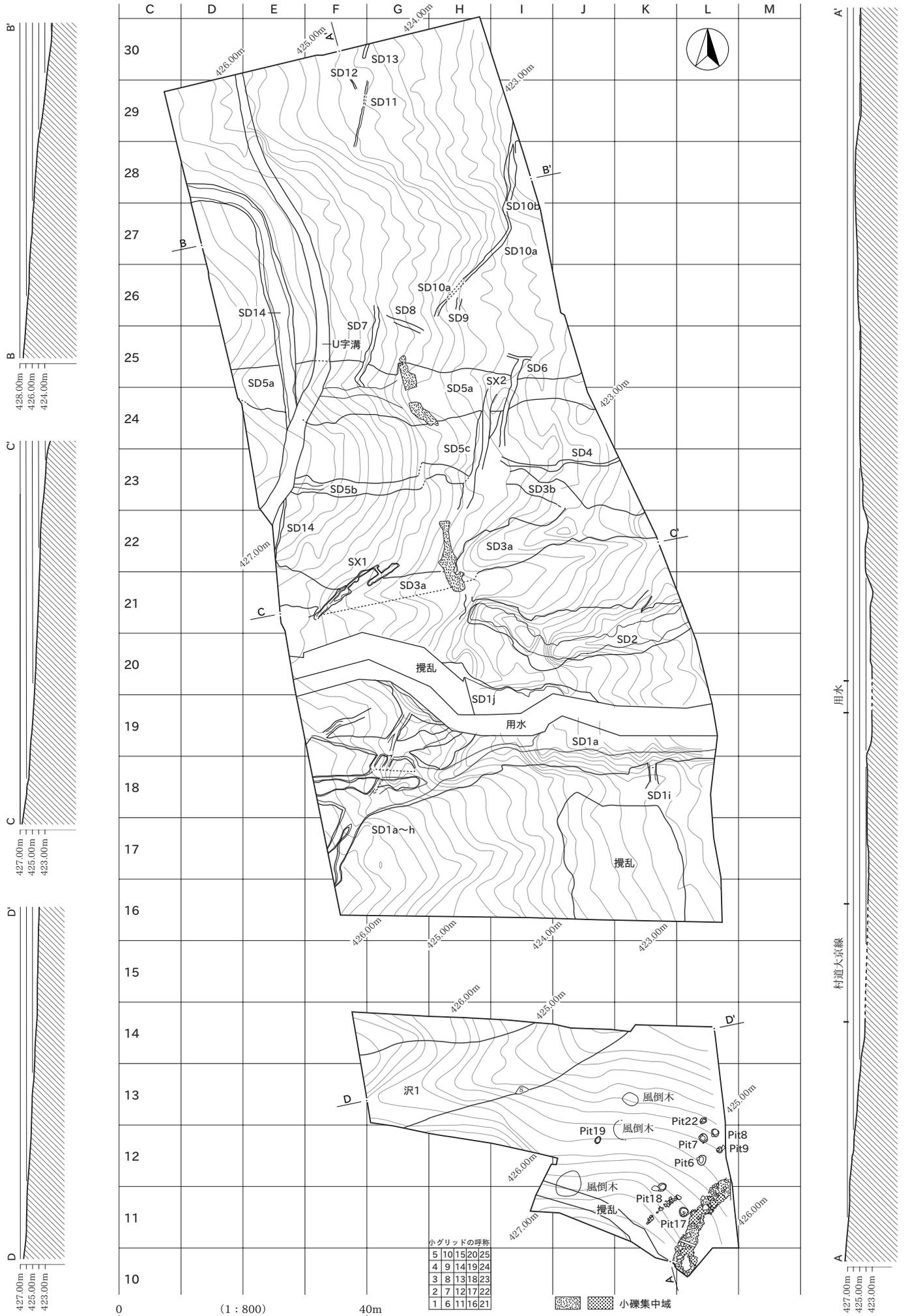
石器観察表

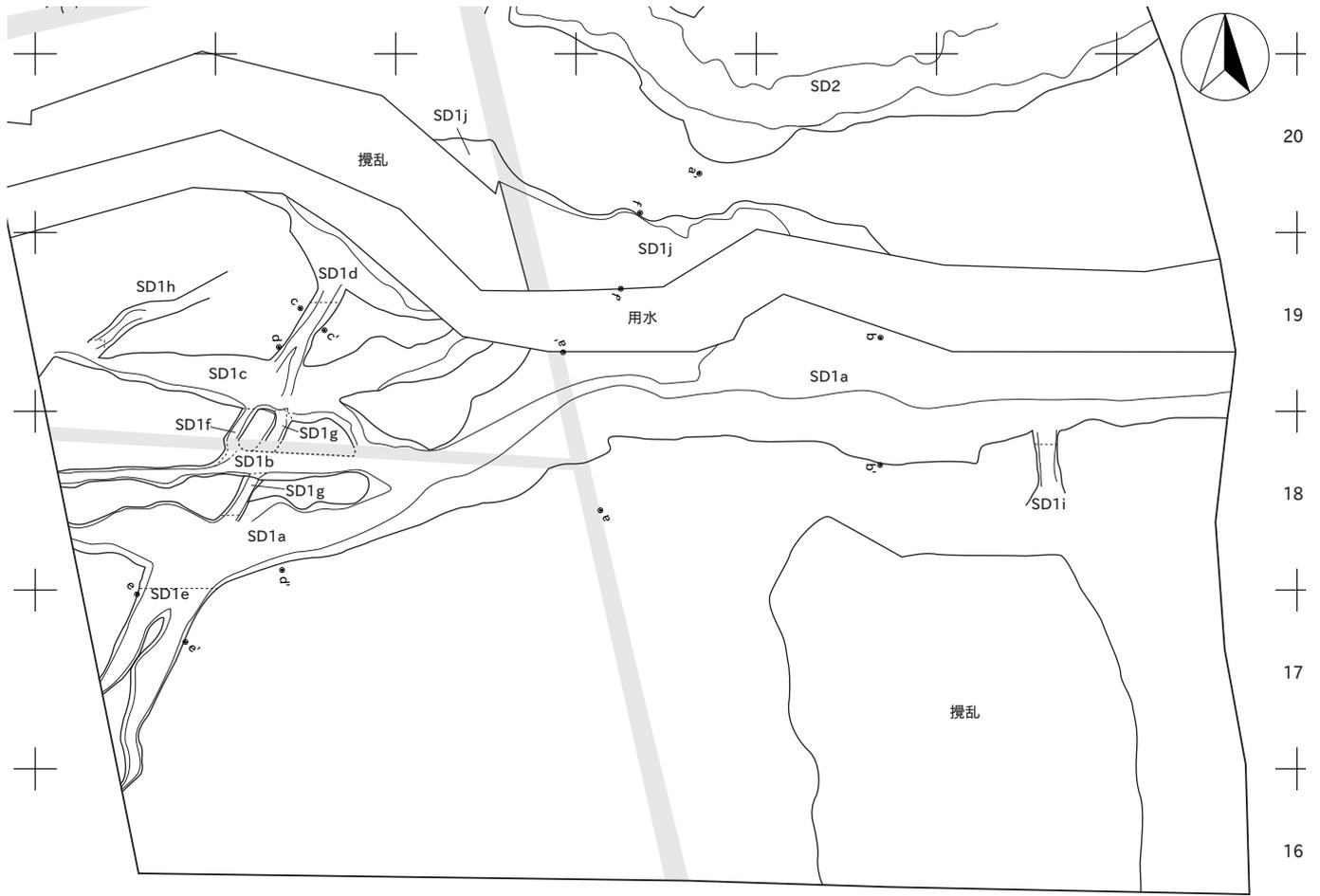
報告No.	遺構名	グリッド	層位	分類	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	被熱	破損	備考
縄文1	SD1a	19J1	灰上黒	不定形石器	31.25	10.70	12.62	珪凝	×	背面カジリ	石匙か?
縄文2	SD2	20K5	灰下砂	石籤	8.00	5.00	1.84	無安	×	先端欠	全体に磨耗している
縄文3	—	20K20	根	石籤	16.35	3.05	0.86	チャート	×	×	
縄文4	—	19F25	IIa	不定形石器	42.15	8.05	11.70	珪頁	×	×	打面礫面
縄文5	—	13J12	IIIa	両極石器	4.50	0.93	11.33	砂岩	×	×	全体に磨耗している
古墳429	—	19H7	IIb	紡錘車	37.00	12.00	21.66	蛇紋岩	×	×	
古代9	SD2	20I13	火山灰上	砥石	30.10	20.25	60.80	珪質凝灰岩?	×	×	

図 版

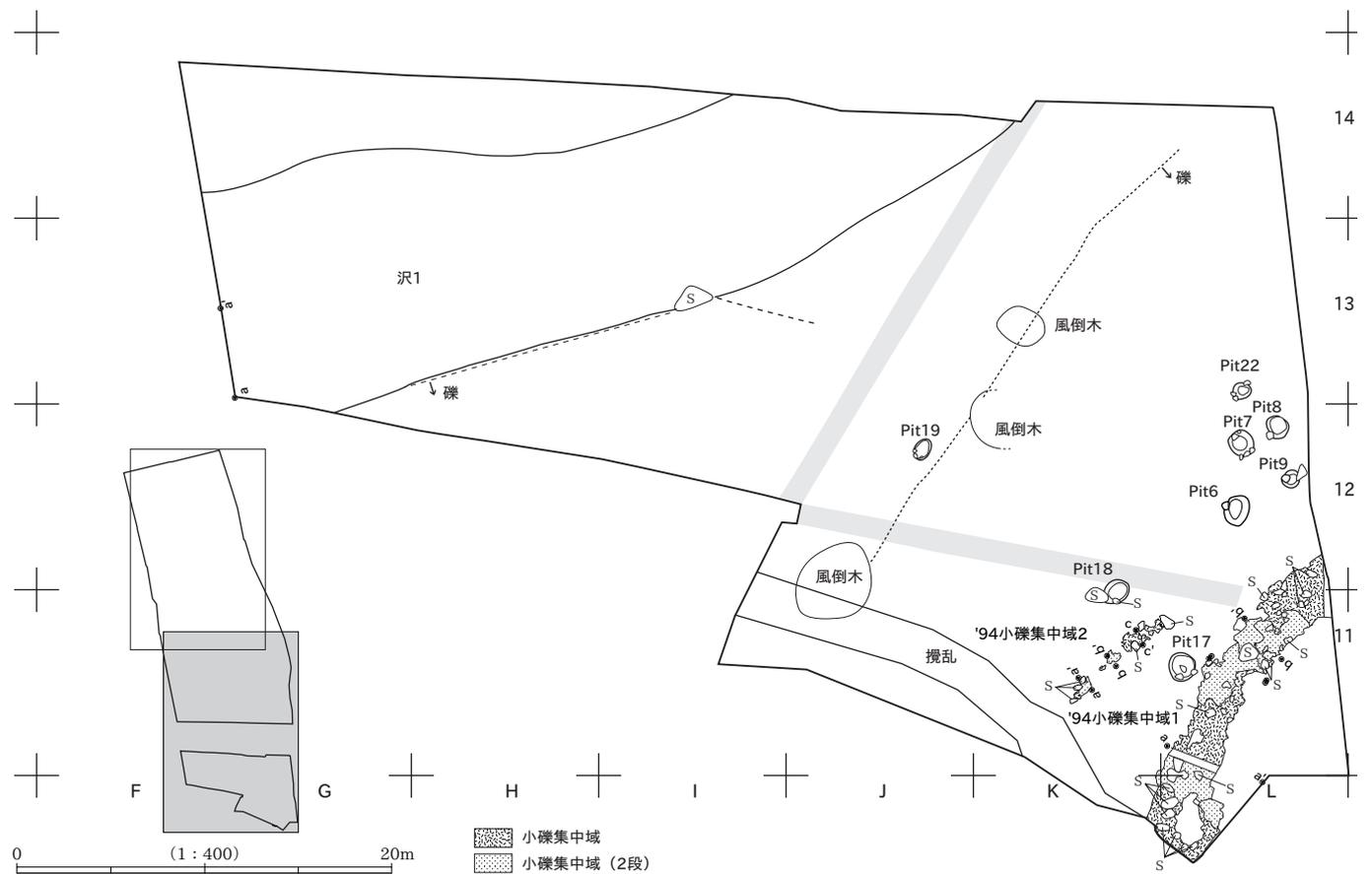
凡 例

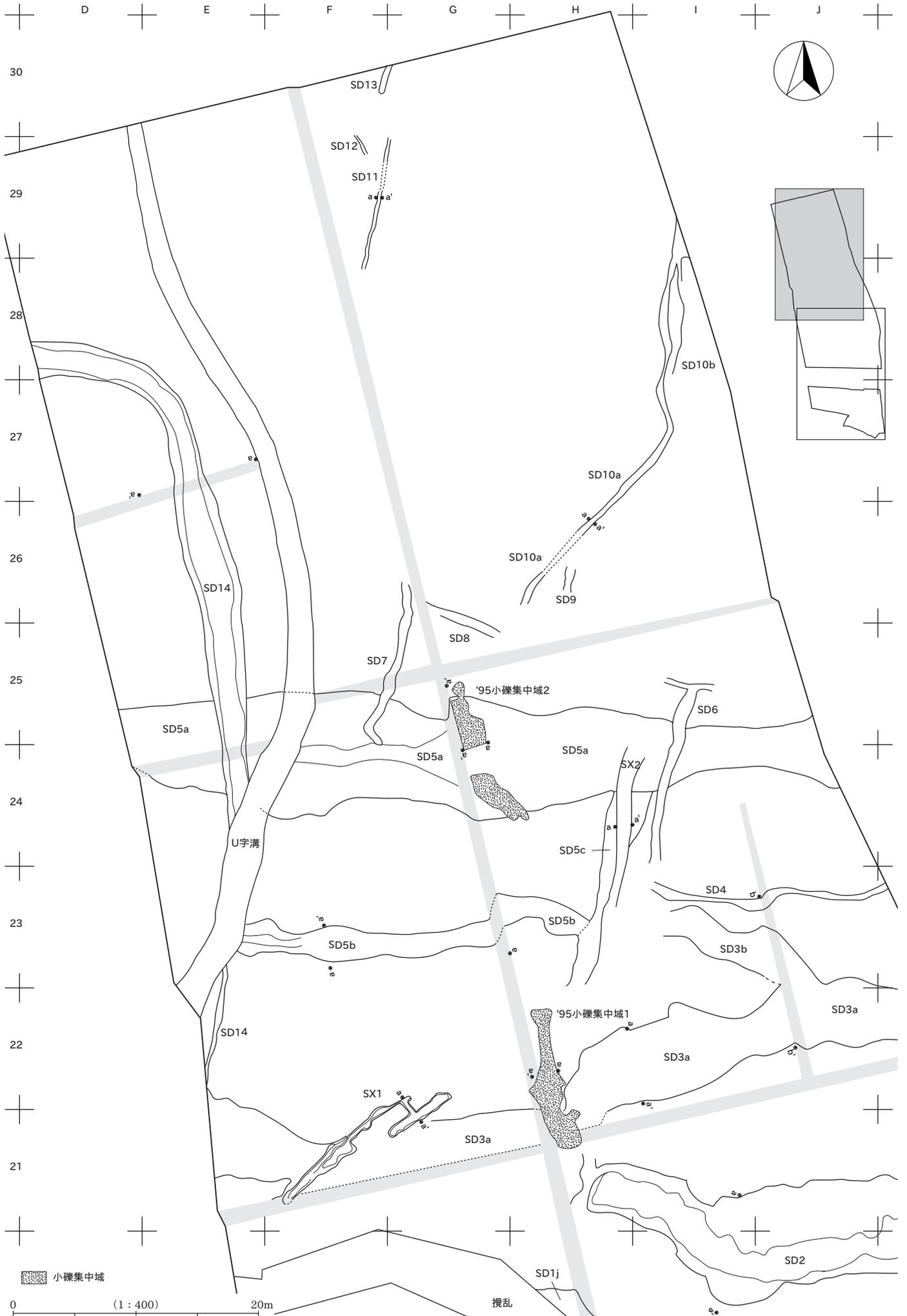
- 1 土器図版の網掛け凡例
 赤 彩
 黒色処理
- 2 須恵器の断面図は黒塗りした。
- 3 土器拓本は、断面図の左側に外面、右側に内面を配した。
- 4 須恵器・珠洲焼の拓本は、断面図の左側に内面、右側に外面を配した。

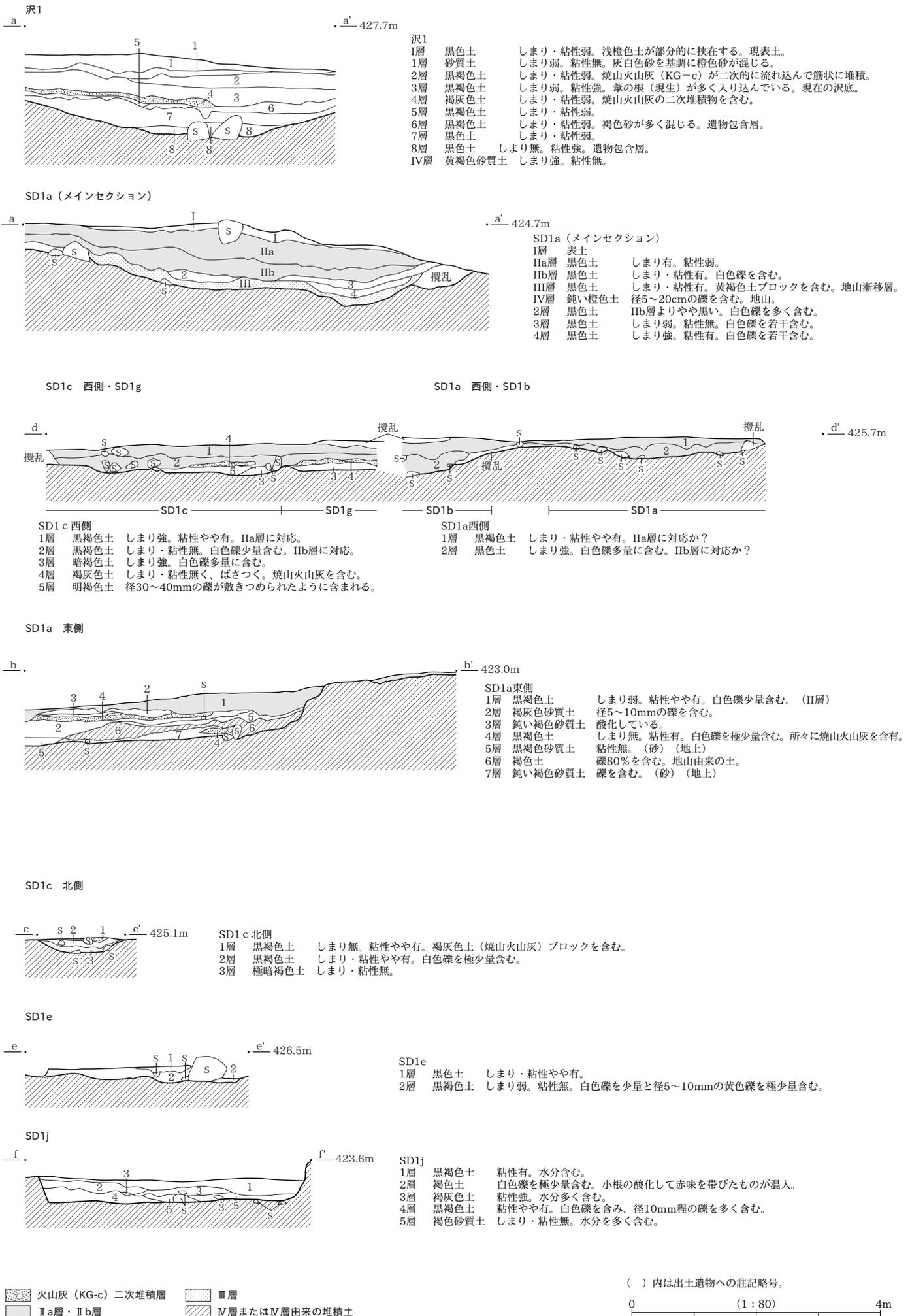




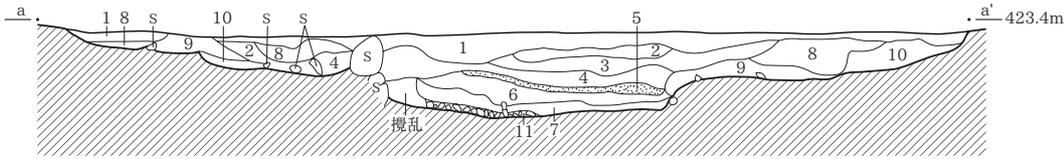
線京大村道







SD2

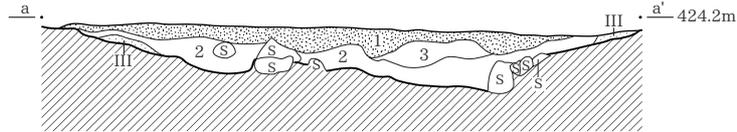


SD2

- 1層 黒褐色土 しまり・粘性やや有。白色礫を少量含む。
- 2層 黒褐色土 しまりやや有。粘性弱。白色礫を多量に含む。
- 3層 暗褐色土 しまり弱。粘性有。
- 4層 褐灰色土 しまり弱。粘性有。白色礫極少量含む。
- 5層 明褐灰色土 粘性無。粗粒の焼山火山灰土。
- 6層 暗褐色土 粘性有。水分多く含む。
- 7層 褐色の砂礫 径10mm位の礫を60%程含む。
- 8層 褐色土 しまり・粘性無。
- 9層 暗褐色土 しまり・粘性やや有。白色礫少量と径100mm~180mmの礫を含む。
- 10層 明褐色砂質土 粗粒で径30mm程の礫を少量含む。
- 11層 100mm程の礫が折り重なっている。

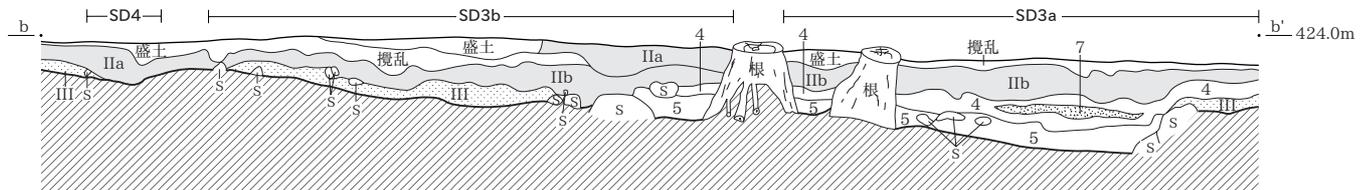
(5層を指標に、その上を「灰上」、その下を「灰下」。7層は「砂」)

SD3a



SD3a

- III層 明褐色土 しまり強。褐色土混入。地山漸移層。
- 1層 暗褐色土 しまり・粘性やや有。固い。白色礫を少量含む。焼山火山灰を含む。(灰)
- 2層 黒色土 しまりやや有。粘性無。白色礫を含む。
- 3層 黒褐色土 しまり・粘性無。白色礫を含む。

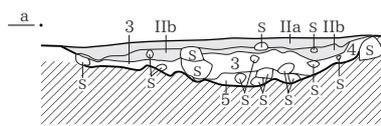


SD3a・SD3b・SD4

- IIa層 黒褐色土 しまり・粘性やや有。白色礫を少量含む。
- IIb層 黒色土 しまり・粘性やや有。白色礫を含む。
- III層 鈍い褐色土 しまり強。粘性無。褐色土が混じる。
- 4層 黒褐色土 しまり・粘性無。白色礫を極少量含む。
- 5層 黒色土 しまり強。粘性無。白色礫を多量に含む。
- 7層 灰褐色土 しまり・粘性無。褐色土(火山灰)が混じる。

(SD3a: 7層を指標に、その上を「灰上」、その下を「灰下」。7層は「灰」)

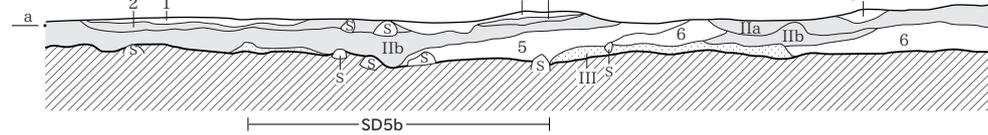
SD5b



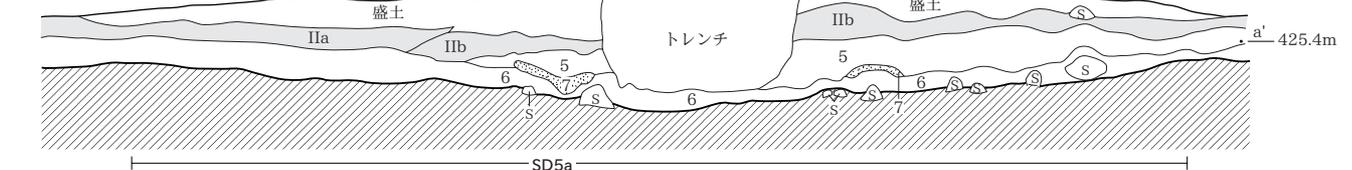
SD5b

- IIa層 黒色土
- IIb層 黒色土
- 3層 黒褐色土
- 4層 極暗褐色土
- 5層 褐色土

SD5b (メインセクション)



SD5a (メインセクション)

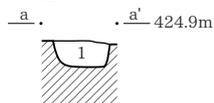


SD5a・SD5b

- IIa層 黒褐色土 しまり・粘性やや有。
- IIb層 黒褐色土 しまり強。粘性やや有。白色礫を含む。
- III層 褐色土 しまり有。粘性無。地山漸移層。
- 1層 黒褐色土 しまり・粘性無。
- 5層 黒色土 白色礫少量含む。
- 6層 黒色土 しまり無。粘性有。
- 7層 灰褐色土 しまり・粘性無。焼山火山灰。黒色土を約50%含む。

(7層を指標に、その上を「灰上」)

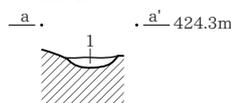
SD11



SD11

- 1層 黒色土 しまり有。粘性やや有。地山の土を少量含む。

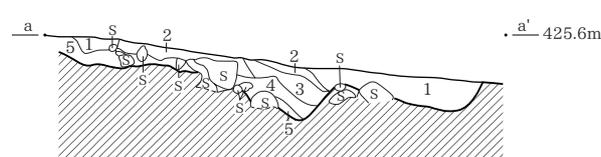
SD10a



SD10a

- 1層 黒色土 しまり・粘性無。地山の小ブロックを含む。

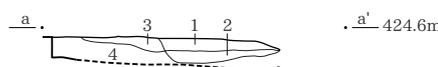
SX1



SX1

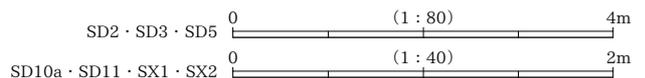
- 1層 灰褐色砂質土 径30~50mmの礫が約90%混入。
- 2層 暗褐色土 しまり・粘性やや有。
- 3層 暗褐色土 しまり無。粘性やや有。橙色土が混入。
- 4層 黒褐色土 しまり・粘性やや有。
- 5層 極暗褐色土 しまり・粘性やや有。

SX2

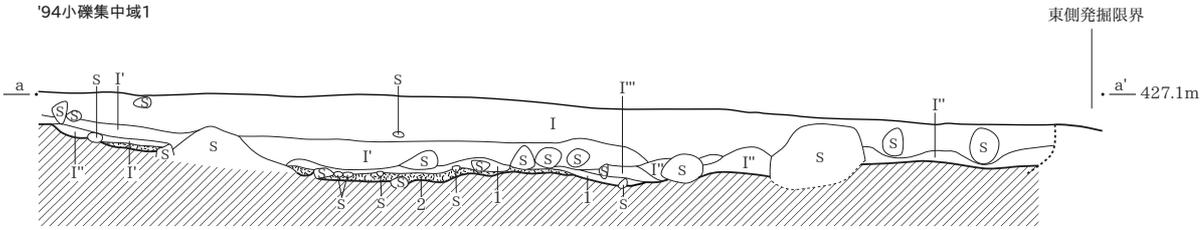


SX2

- 1層 径15~25mmの小砂利が敷き詰められたようになっている。
- 2層 鈍い褐色砂
- 3層 灰褐色砂質土
- 4層 黒褐色土 しまり無。粘性やや有。



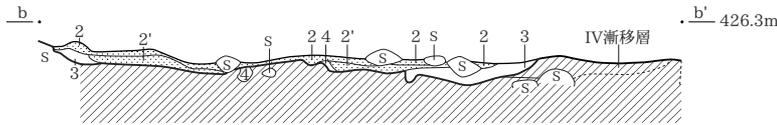
'94小礫集中域1



'94小礫集中域1

- 1層 黒色土 しまり弱。粘性無。細粒。Iaに対応する。
- I層 黒褐色土 しまりやや有。粘性無。細粒。Ibに対応する。
- I'層 黒色土 しまり・粘性弱。細粒。
- I''層 黒色土 しまり有。粘性無。径1~2mmの白色礫を含む。
- 1層 黒色土 しまりやや有。粘性無。
- 2層 上段黄褐色土 下段黄褐色土の厚さ約20mmずつの2段構造になっているところ有り。しまり非常に強。粘性無。径15~20mmの小礫と砂質土が固結している。

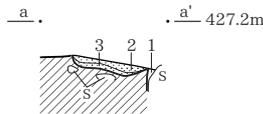
'94小礫集中域1



'94小礫集中域1

- 2層 黒色土 径15~20mmの小礫と黒色土が固結し掘ると板状に剥れる。珠洲焼片製の円板が含まれている。
- 2'層 黄褐色砂質土 径15~20mmの小礫と黄褐色砂質土が固結し、掘ると板状に剥れる。
- 3層 黄褐色土 しまり強。粘性無。粗粒。
- 4層 黒色土 しまり強。粘性弱。径1~2mmの白色礫を多く含む。

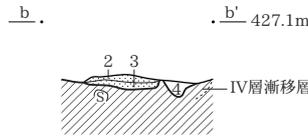
'94小礫集中域2



'94小礫集中域2

- 1層 黒褐色土 しまり強。粘性無。
- 2層 黒褐色土 径10~30mmの小礫と黒褐色土が固結。
- 3層 暗褐色土 径10~20mmの小礫と暗褐色土が固結。2層よりは礫の量は少なく、上面に多く含まれる。

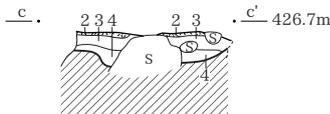
'94小礫集中域2



'94小礫集中域2

- 2層 黒褐色土 径10~30mmの小礫と黒褐色土が固結。
- 3層 暗褐色土 径10~20mmの小礫と暗褐色土が固結。2層よりは礫の量は少なく、上面に多く含まれる。
- 4層 黒色土 しまり弱。粘性無。

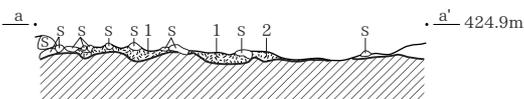
'94小礫集中域2



'94小礫集中域2

- 2層 黒褐色土 径10~30mmの小礫と黒褐色土が固結。
- 3層 黒色土 しまり強。粘性無。径2~3mmの白色礫をわずかに含む。
- 4層 黒褐色土 しまり強。粘性無。径2~3mmの白色礫をわずかに含む。

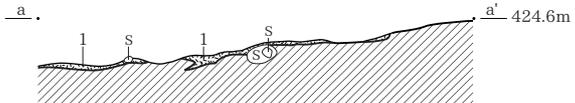
'95小礫集中域1



'95小礫集中域1

- 1層 径140~180mm程の礫が敷き詰められたようになっている。
- 2層 暗褐色土 径80~120mm程の礫が混入している。

'95小礫集中域2

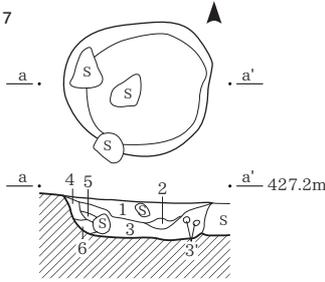


'95小礫集中域2

- 1層 径20~40mmの礫が敷き詰められたように並んでいる。

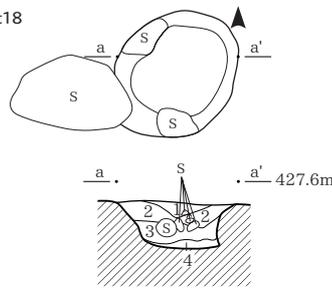


Pit17



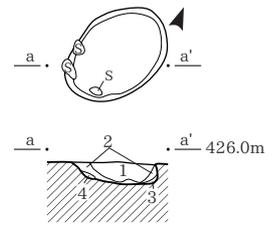
- Pit17
- 1層 黒色土 しまり有。粘性無。径1mmの白色礫をわずかに含む。
 - 2層 黒色土 しまり・粘性弱。径1~5mmの白色礫をわずかに含む。
 - 3層 黒色土 しまり・粘性無。径1~3mmの白色礫を多く含む。
 - 3'層 黒色土 しまり・粘性無。径1~3mmの多量の白色礫と明褐色土ブロックを含む。
 - 4層 明褐色土 しまり強。粘性無。
 - 5層 黒褐色土 しまり強。粘性無。径2~3mmの白色礫を含む。
 - 6層 黒色土 しまりやや強。粘性無。径1mmの白色礫をわずかに含む。

Pit18



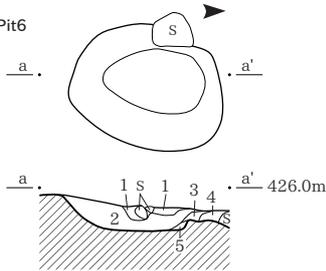
- Pit18
- 1層 黒色土 しまり弱。粘性無。径1mmの白色礫をわずかに含む。褐色土ブロックを含む。
 - 2層 黒色土 しまり非常に強い。粘性無。径1~5mmの白色礫を多く含む。
 - 3層 黒色土 しまり有。粘性強。暗褐色土が混じる。径1~2mmの白色礫を含む。
 - 4層 褐色土 しまり無。粘性強。径10~20mmの角礫が多く混じる。

Pit19



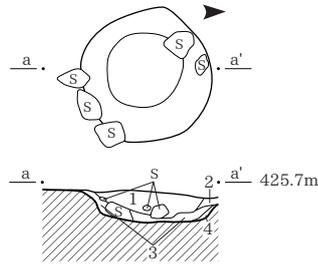
- Pit19
- 1層 黒色土 しまり弱。粘性あり。
 - 2層 黒色土 しまりやや弱。粘性無。径1~3mmの白色礫を含む。
 - 3層 黒褐色土 しまり弱。粘性無。褐色土が混じる。
 - 4層 明黄褐色土 しまり強。粘性無。

Pit6



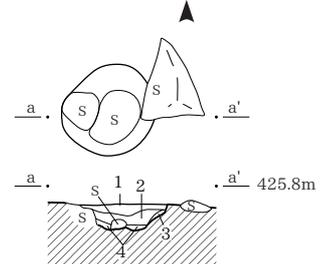
- Pit6
- 1層 黒色土 しまり有。粘性強。極細粒。
 - 2層 黒褐色土 しまり有。粘性無。極細粒。径1mmの白色礫を含む。
 - 3層 黒褐色土 しまり有。粘性有。粗粒。
 - 4層 黒色土 しまり有。粘性弱。粗粒。
 - 5層 黒色土 しまり弱。粘性無。細粒。

Pit7



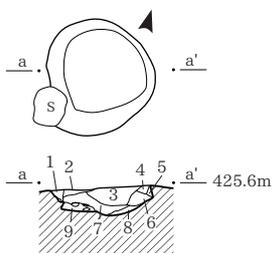
- Pit7
- 1層 黒色土 しまり有。粘性弱。径1~3mmの白色礫を多く含む。
 - 2層 黒色土 しまり・粘性無。褐色土が混じる。
 - 3層 黒色土 しまり強。粘性無。径1mmの白色礫を含む。
 - 4層 黒褐色土 しまり強。粘性弱。径10mmの礫を少量含む。

Pit9



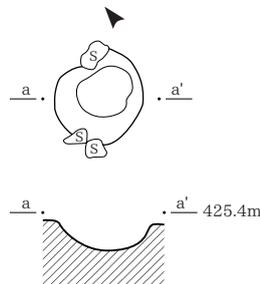
- Pit9
- 1層 黒色土 しまり有。粘性強。極細粒。
 - 2層 黒色土 しまり有。粘性無。極細粒。径1mmの白色礫を多く含む。
 - 3層 黒色土 しまりやや強。粘性無。極細粒。
 - 4層 黒色土 しまり有。粘性強。極細粒。

Pit8



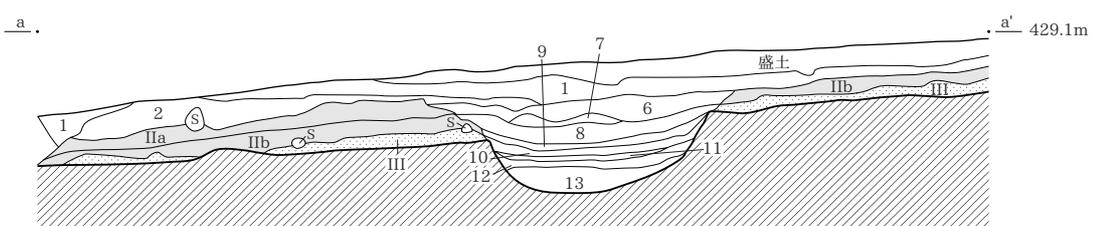
- Pit8
- 1層 黒褐色土 しまり弱。粘性無。細粒。黄褐色土が混じる。
 - 2層 黒色土 しまり弱。粘性無。細粒。
 - 3層 黒色土 しまり有。粘性弱。細粒。径3~5mmの白色礫を少量含む。
 - 4層 黒色土 しまり無。粘性弱。細粒。径3~5mmの白色礫を少量含む。
 - 5層 黒褐色土 しまり強。粘性無。粗粒。
 - 6層 黒褐色土 しまり無。粘性有。細粒。
 - 7層 黒色土 しまり有。粘性弱。細粒。
 - 8層 黒褐色土 しまり強。粘性無。粗粒。径1mmの白色礫を含む。
 - 9層 黒色土 しまり有。粘性弱。細粒。小礫含む。

Pit22

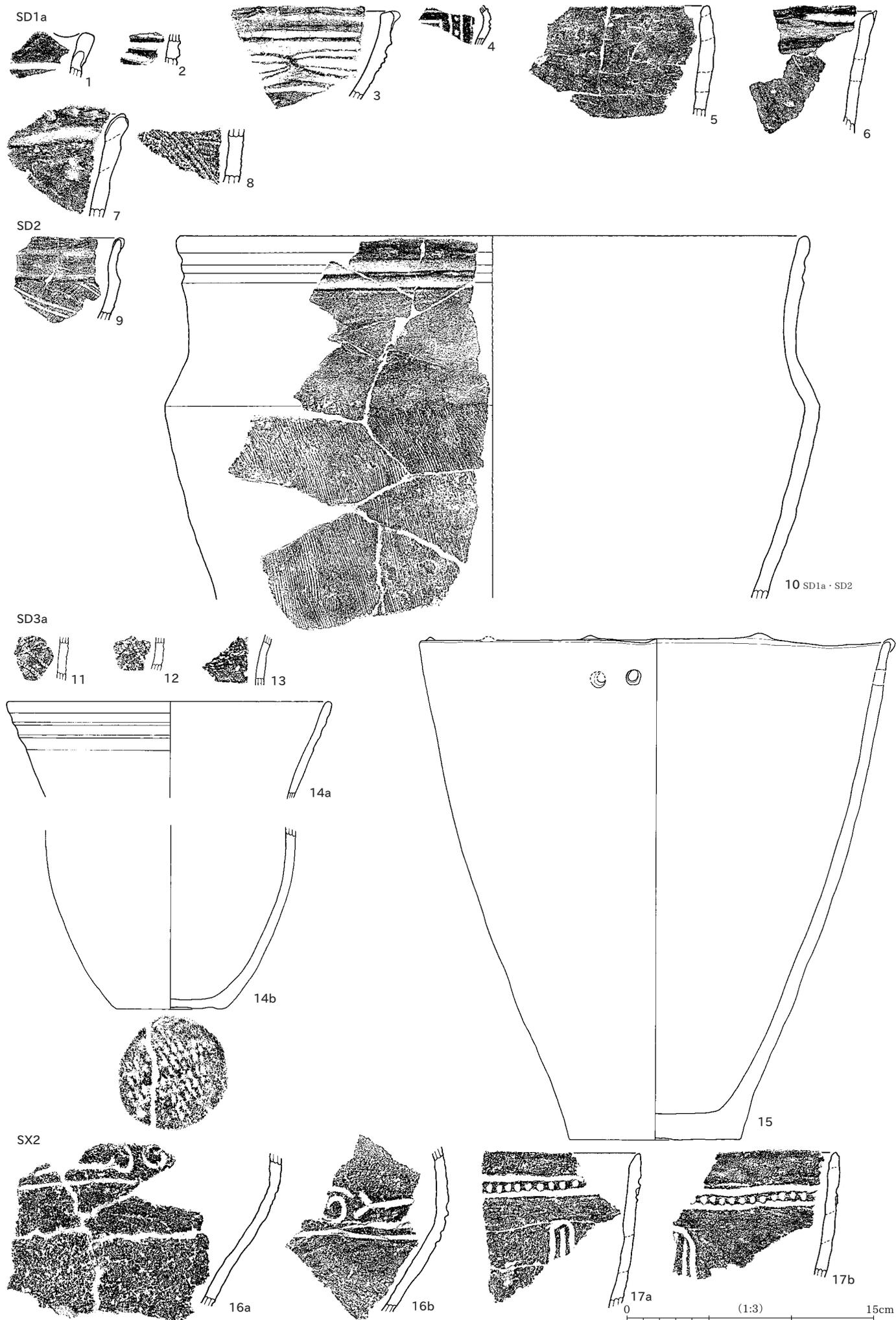


- Pit22
- 覆土 黒色土

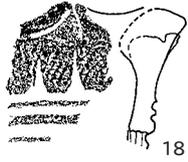
SD14



- SD14
- IIa層 黒褐色土 しまり・粘性やや有。白色礫を含む。
 - IIb層 黒色土 しまり弱。粘性やや有。白色礫を少量含む。
 - III層 褐色土 しまり弱。粘性無。黒褐色土が混入。地山漸移層。
 - 1層 黒褐色土 しまりやや有。粘性無。白色礫を少量含む。
 - 2層 褐色砂質土 径10mm程の礫を少量含む。
 - 6層 暗褐色土 しまり・粘性ややあり。白色礫を含む。
 - 7層 黒褐色土 やわらかく。粘性あり。
 - 8層 黒色土 粘性あり。細粒。
 - 9層 灰褐色土 しまり・粘性なく。ぼさつく。
 - 10層 褐色土 しまり・粘性なく。ぼさつく。灰褐色土がまじる。
 - 11層 灰褐色土 粘性・しまりなく。ぼさつく。褐色土がまじる。
 - 12層 褐色土 粘性・しまりなく。ぼさつく。灰褐色土が筋状にまじる。
 - 13層 黒褐色土 しまり強。粘性ややあり。細粒。



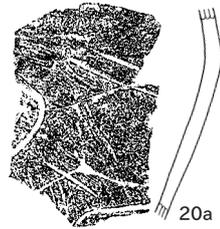
包含層ほか



18



19



20a



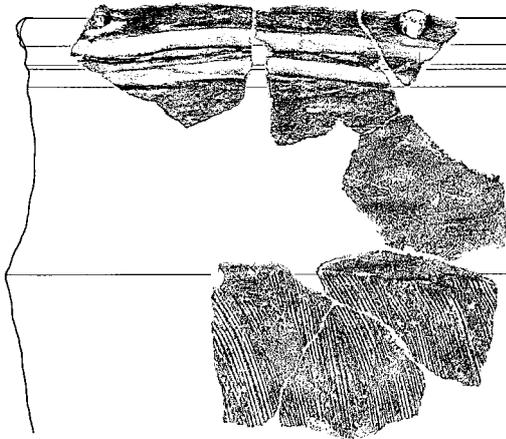
20b



20c



20d



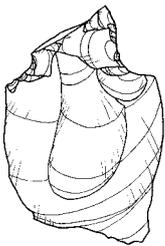
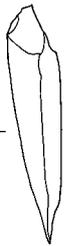
21



22

(18~22) 0 (1:3) 15cm

SD1a



1

SD2

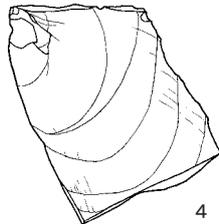
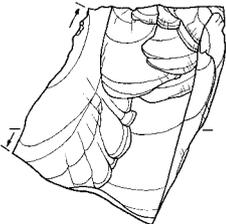


2

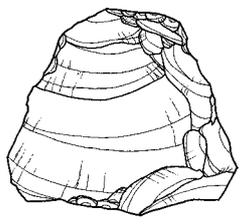
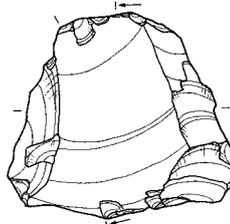
包含層



3



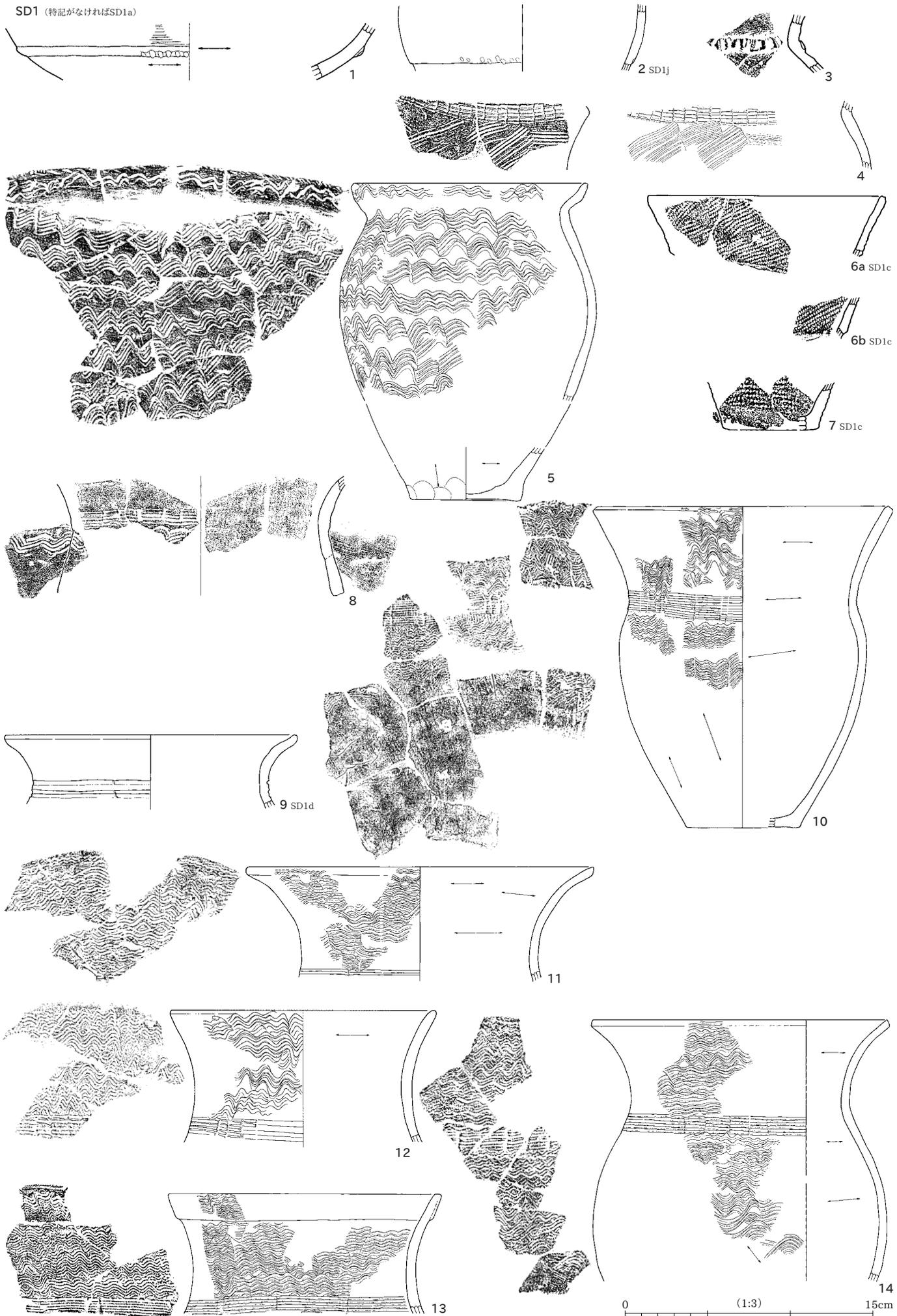
4

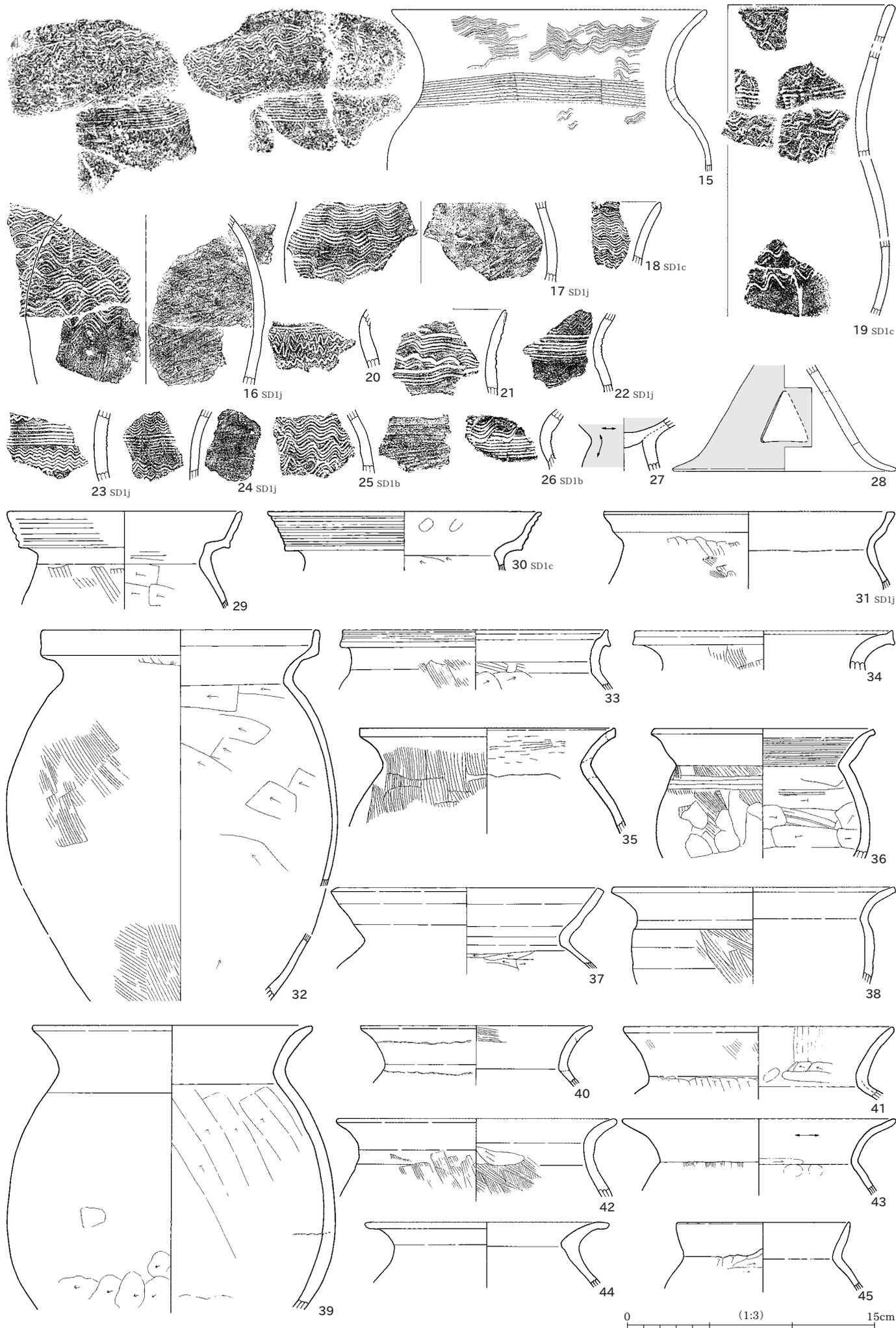


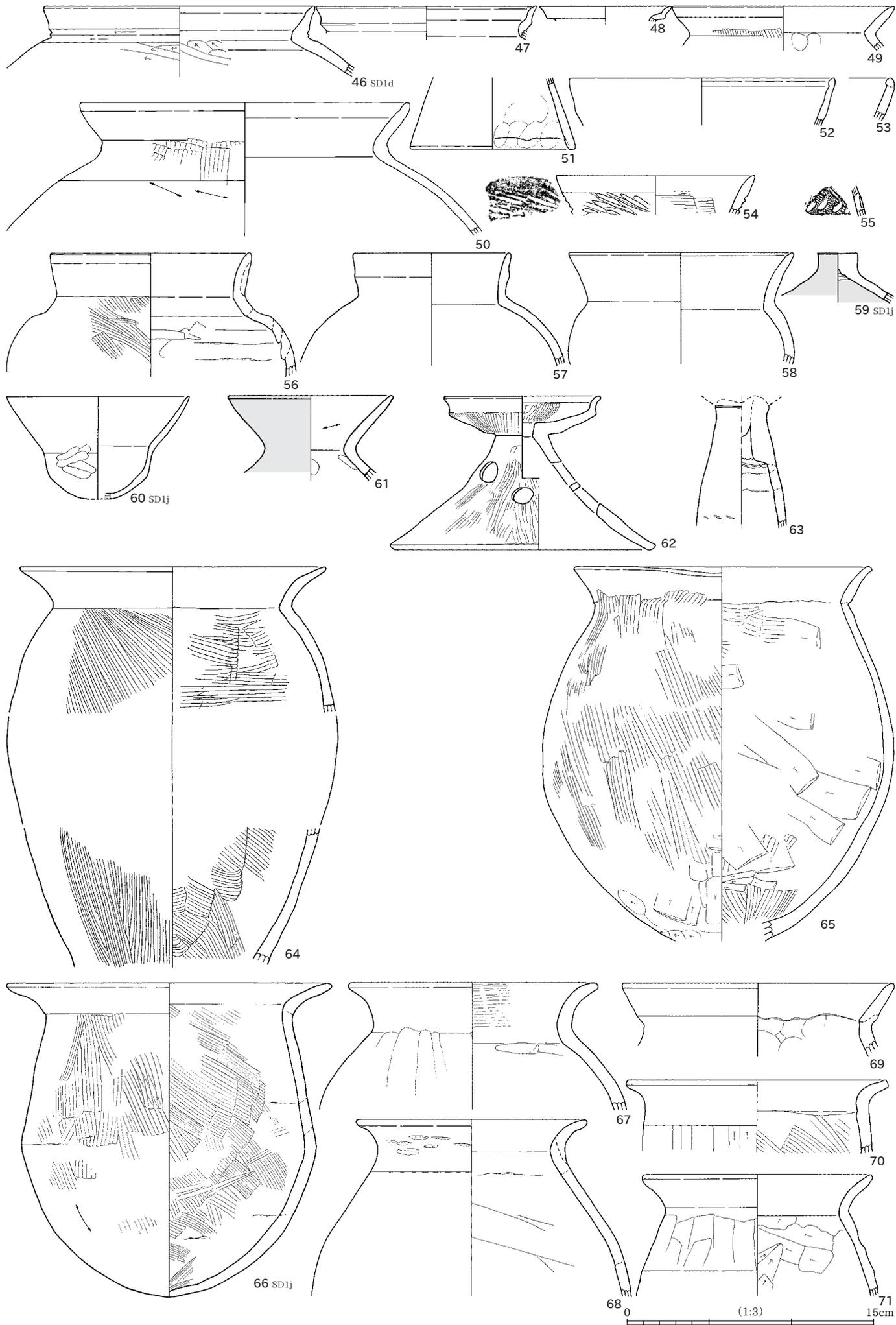
5

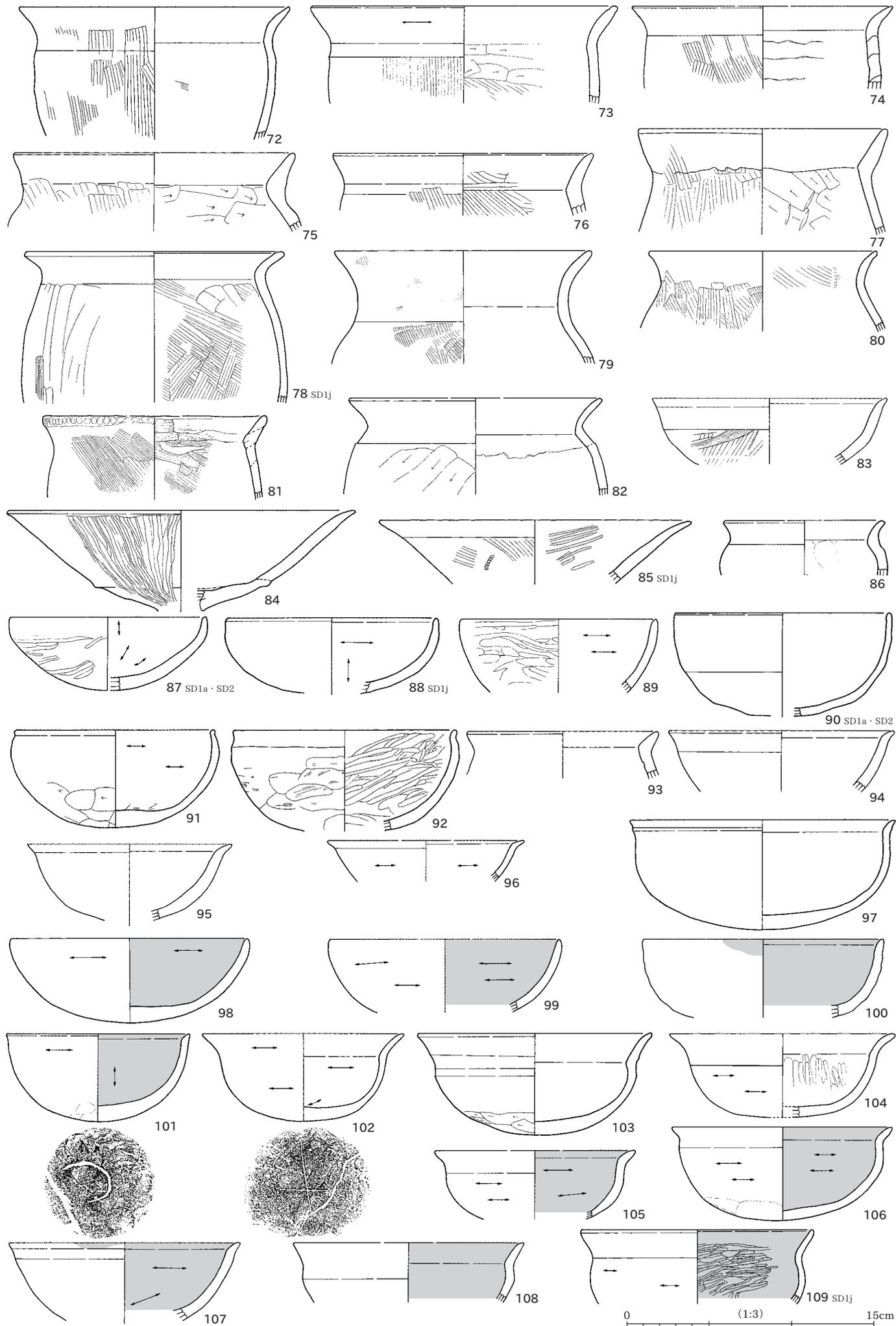
(1~5) 0 (2:3) 10cm

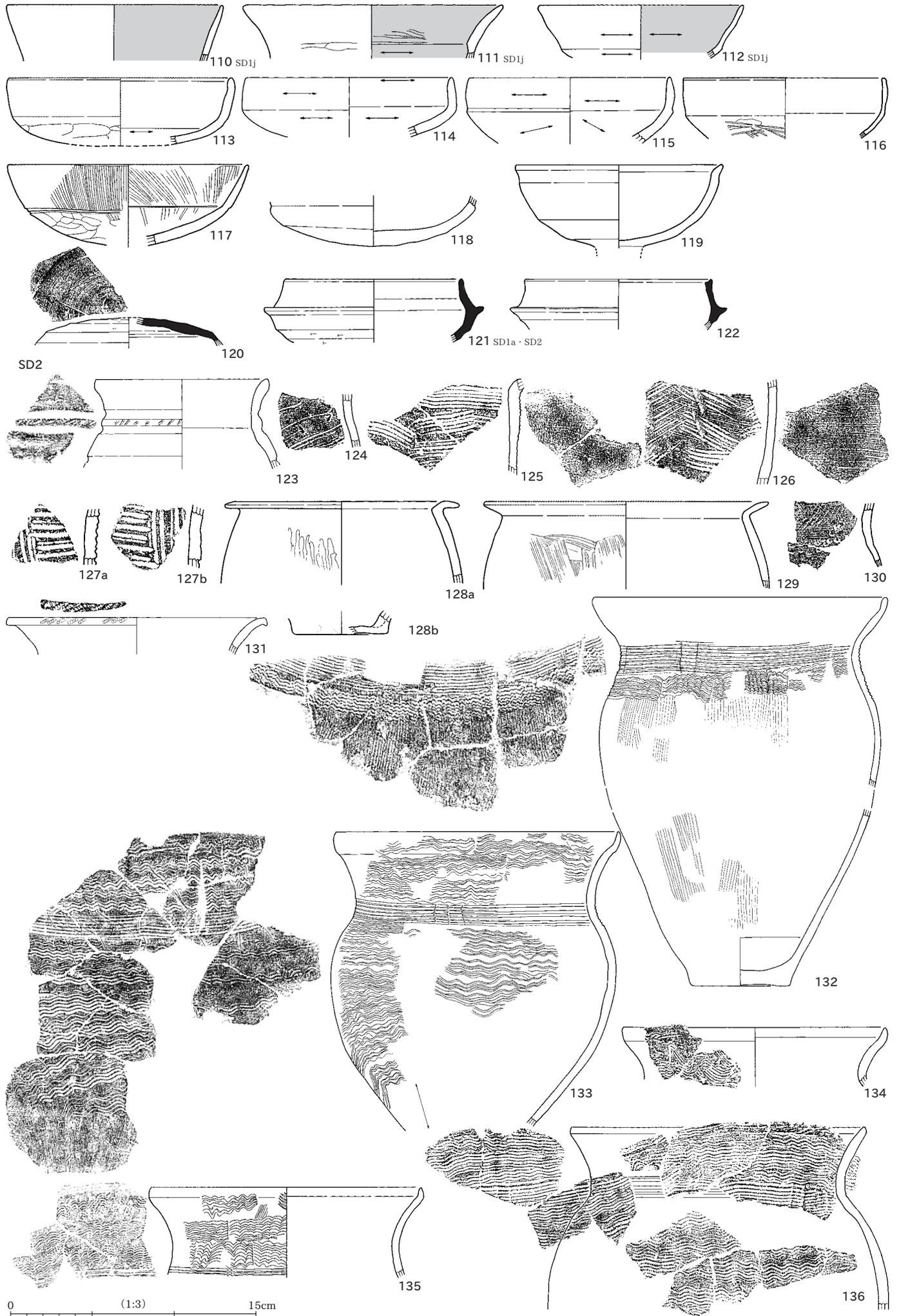
SD1 (特記がなければSD1a)

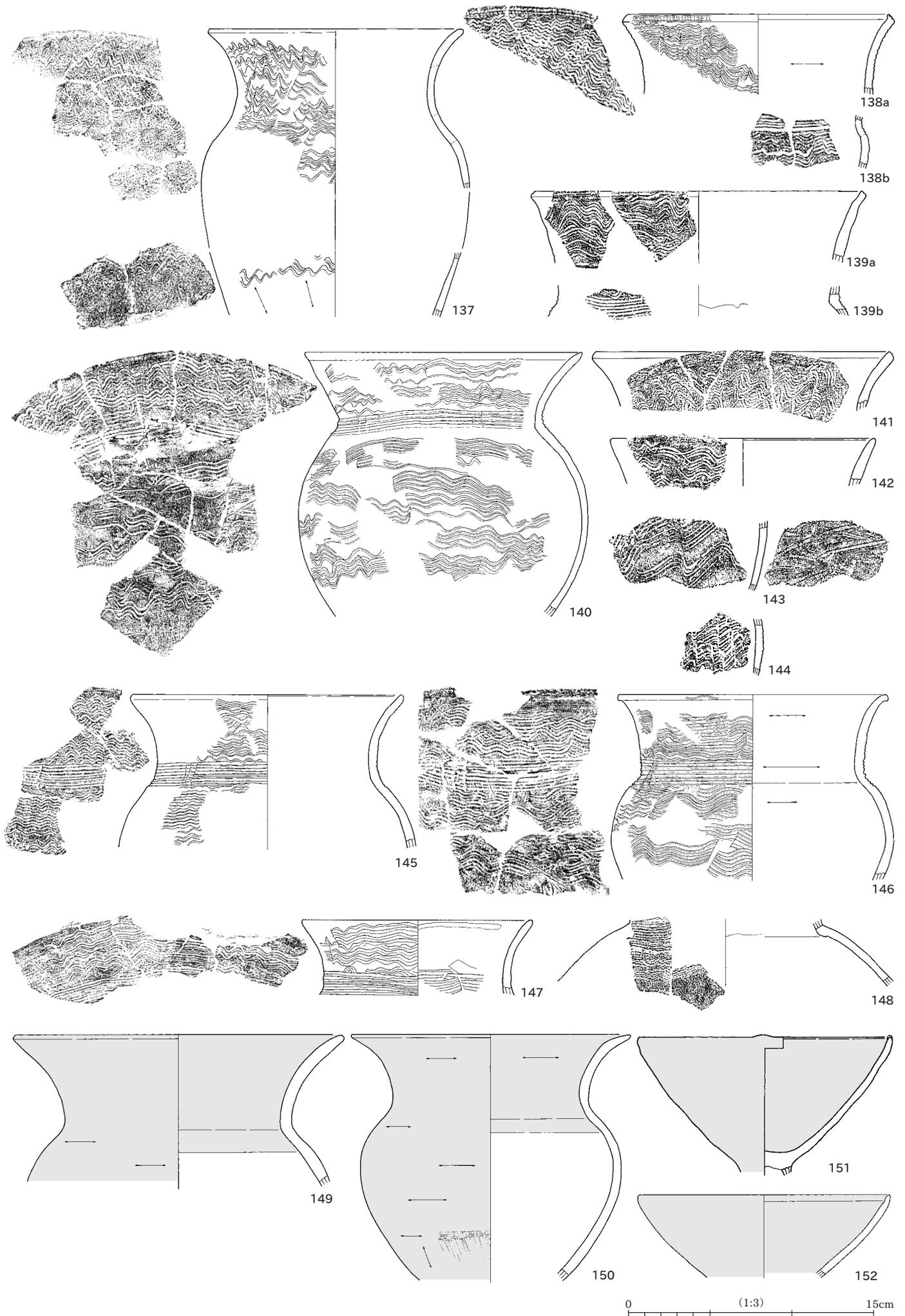


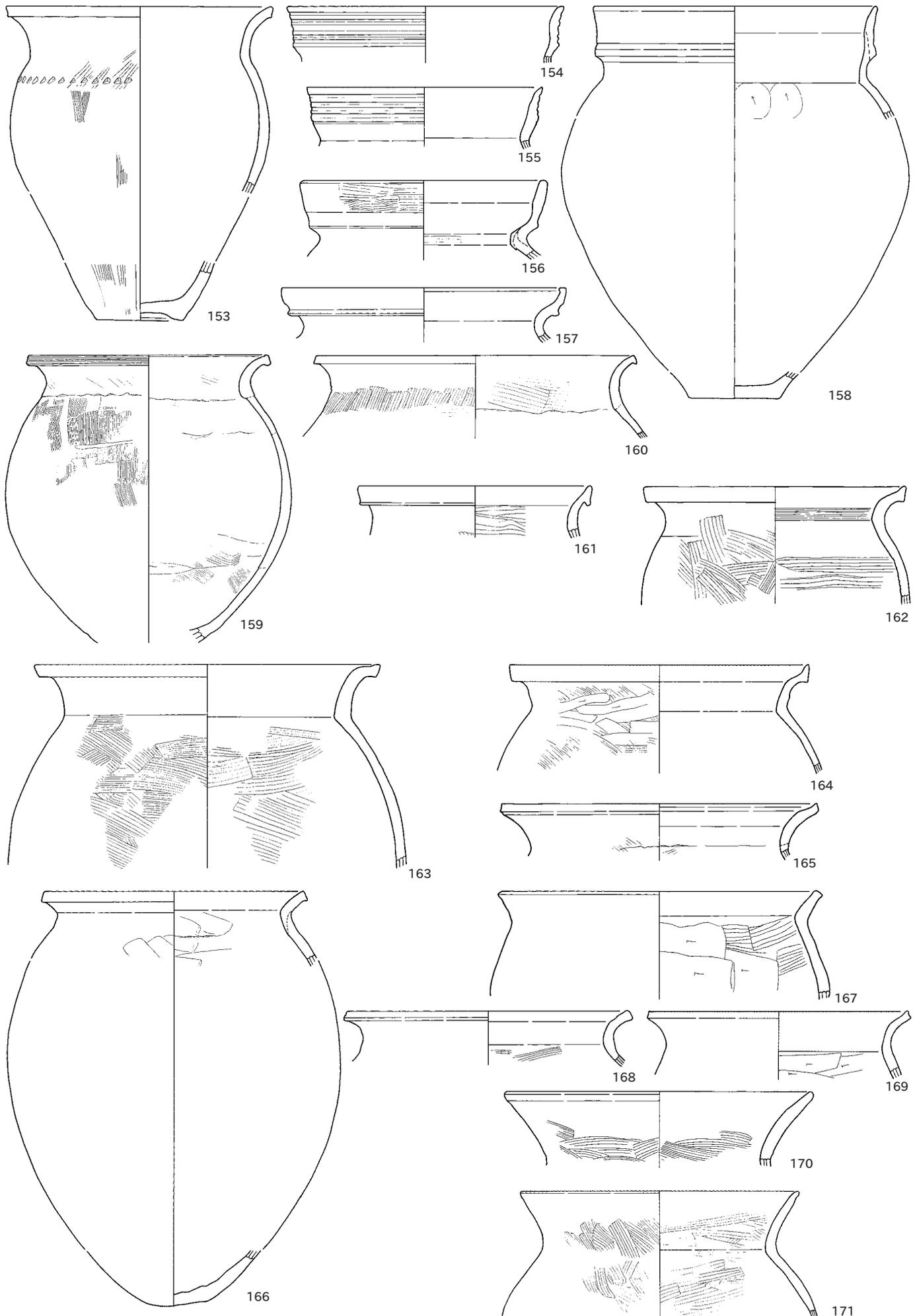


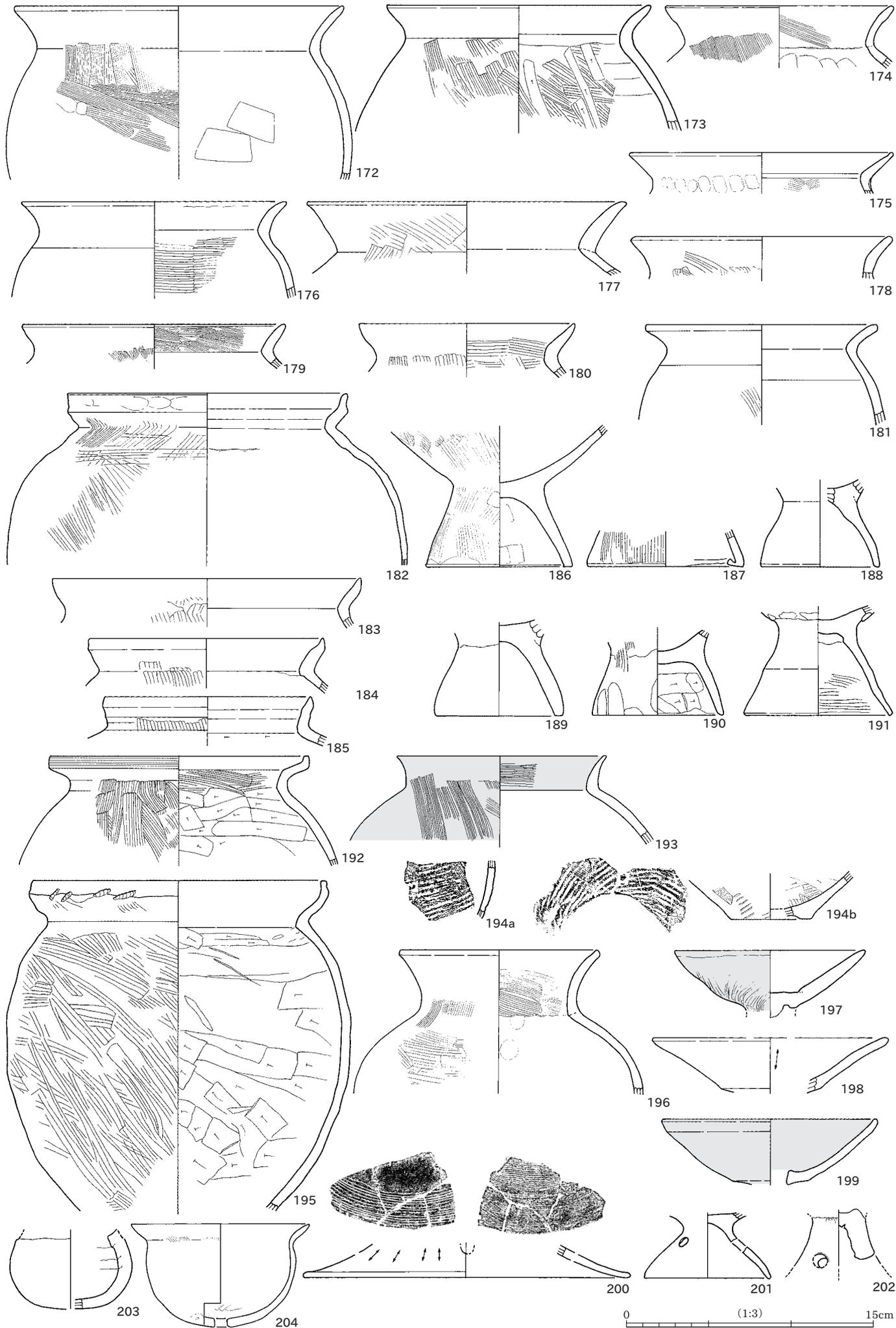


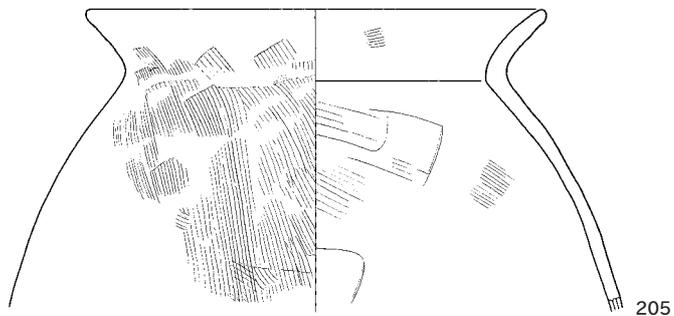




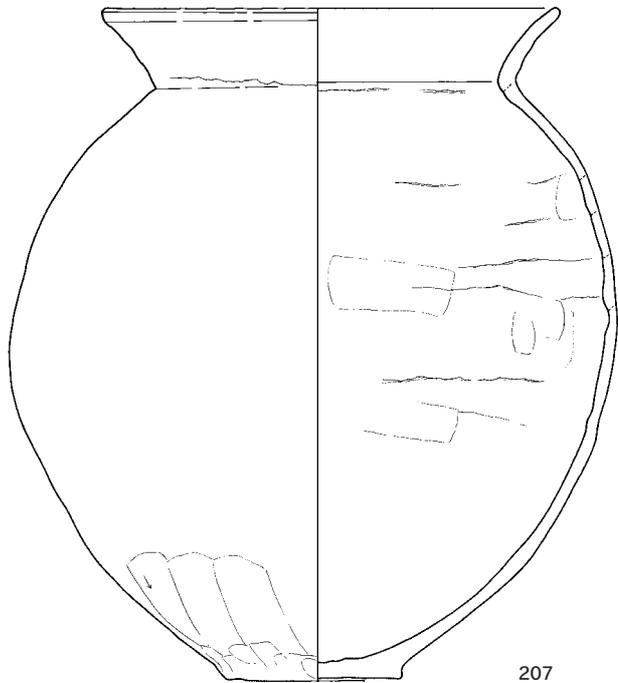




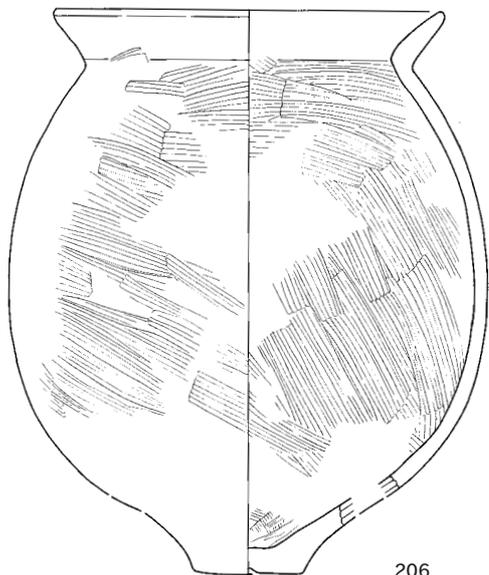




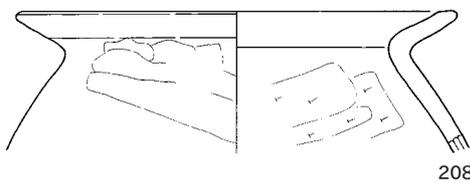
205



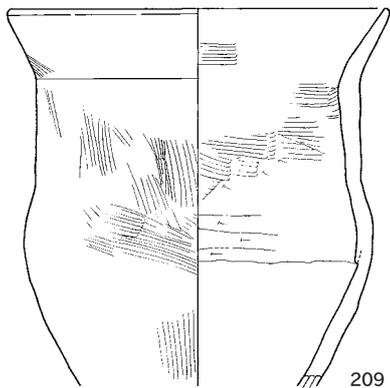
207



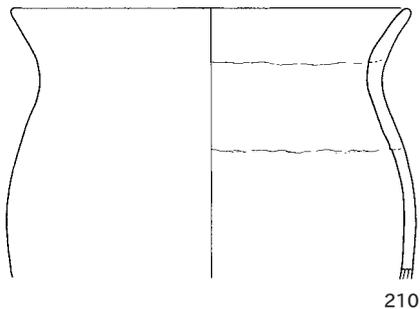
206



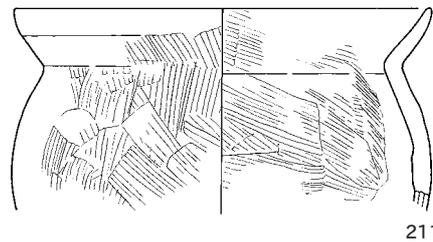
208



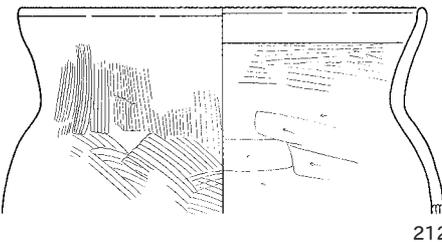
209



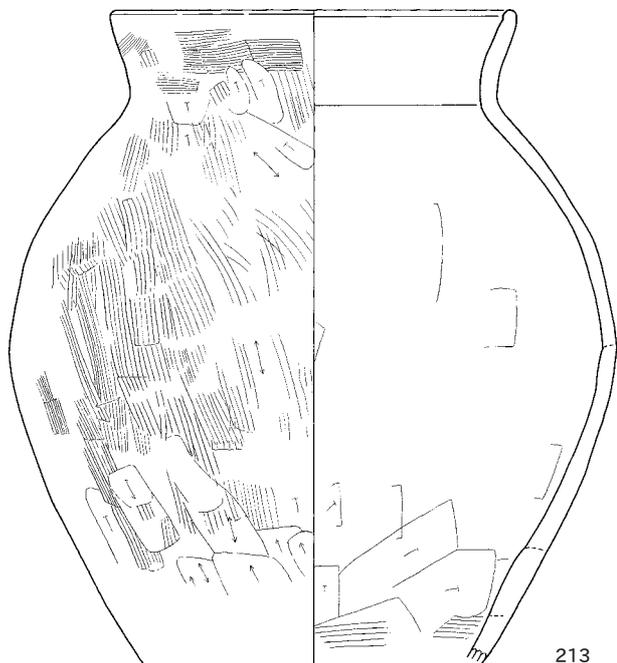
210



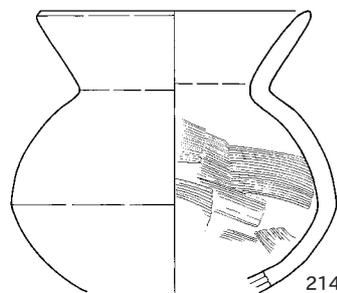
211



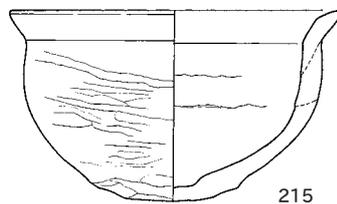
212



213



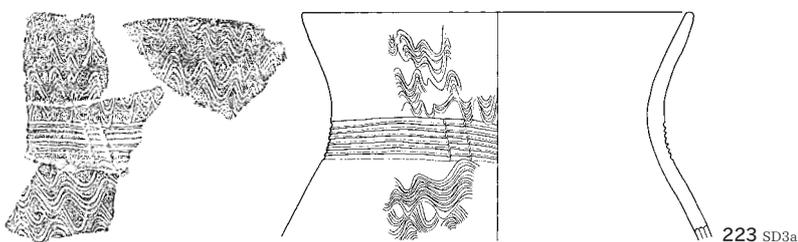
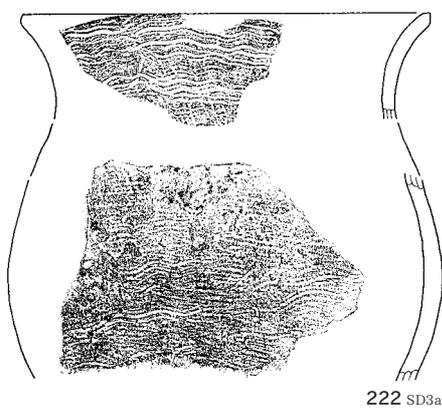
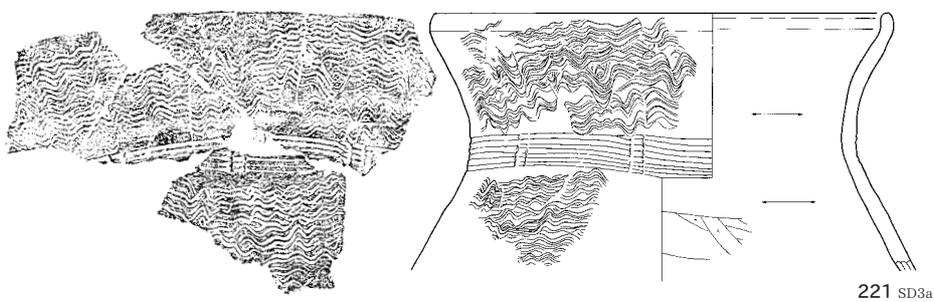
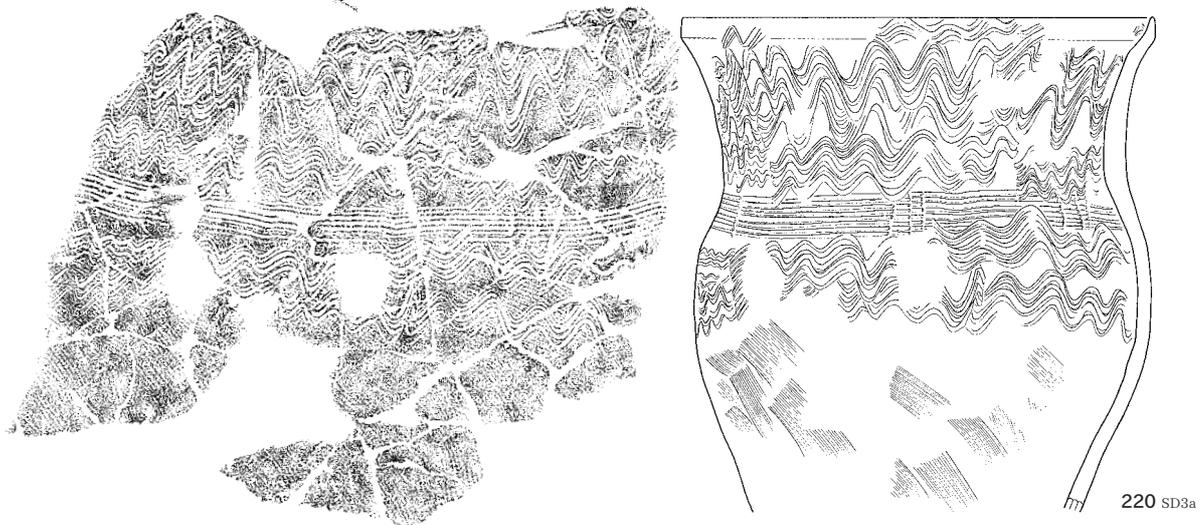
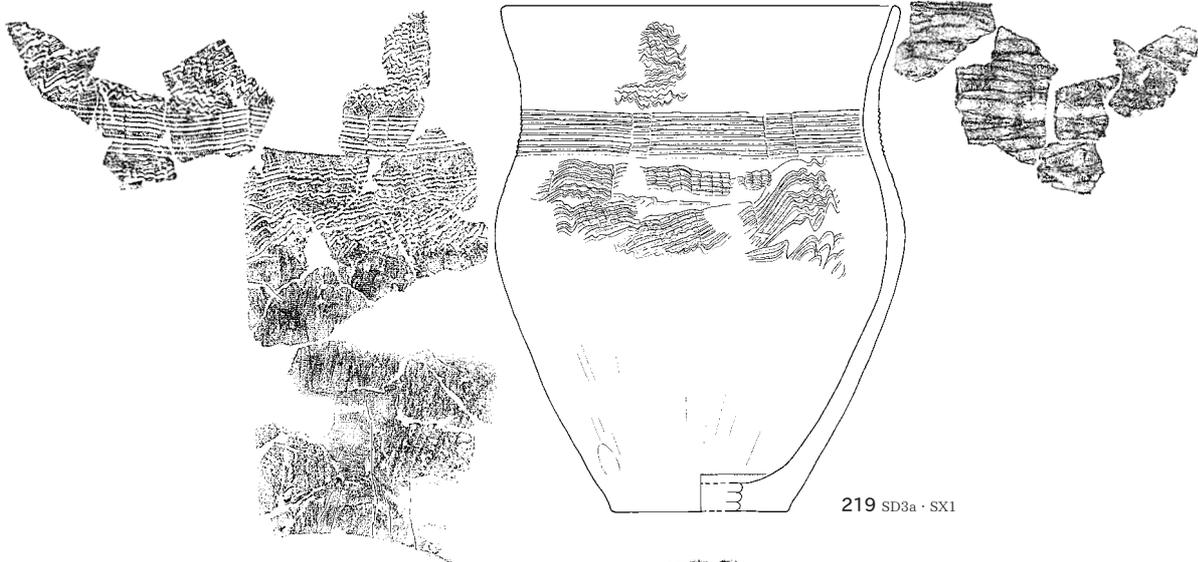
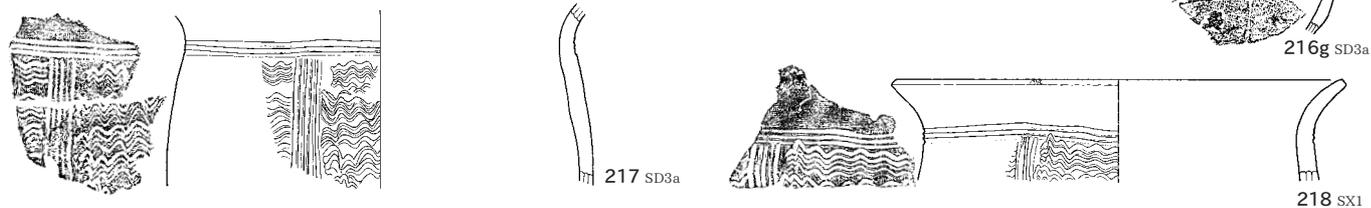
214



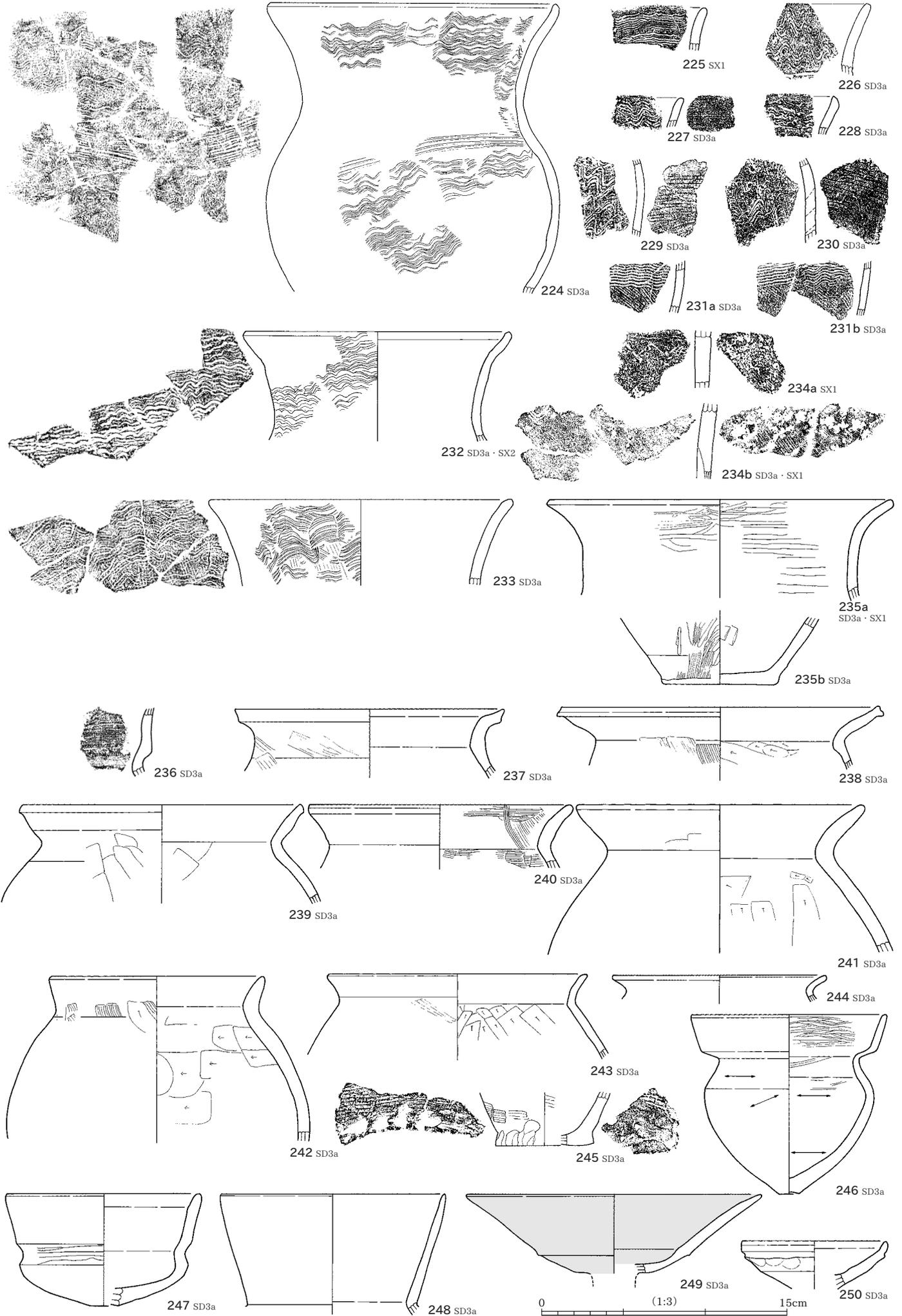
215

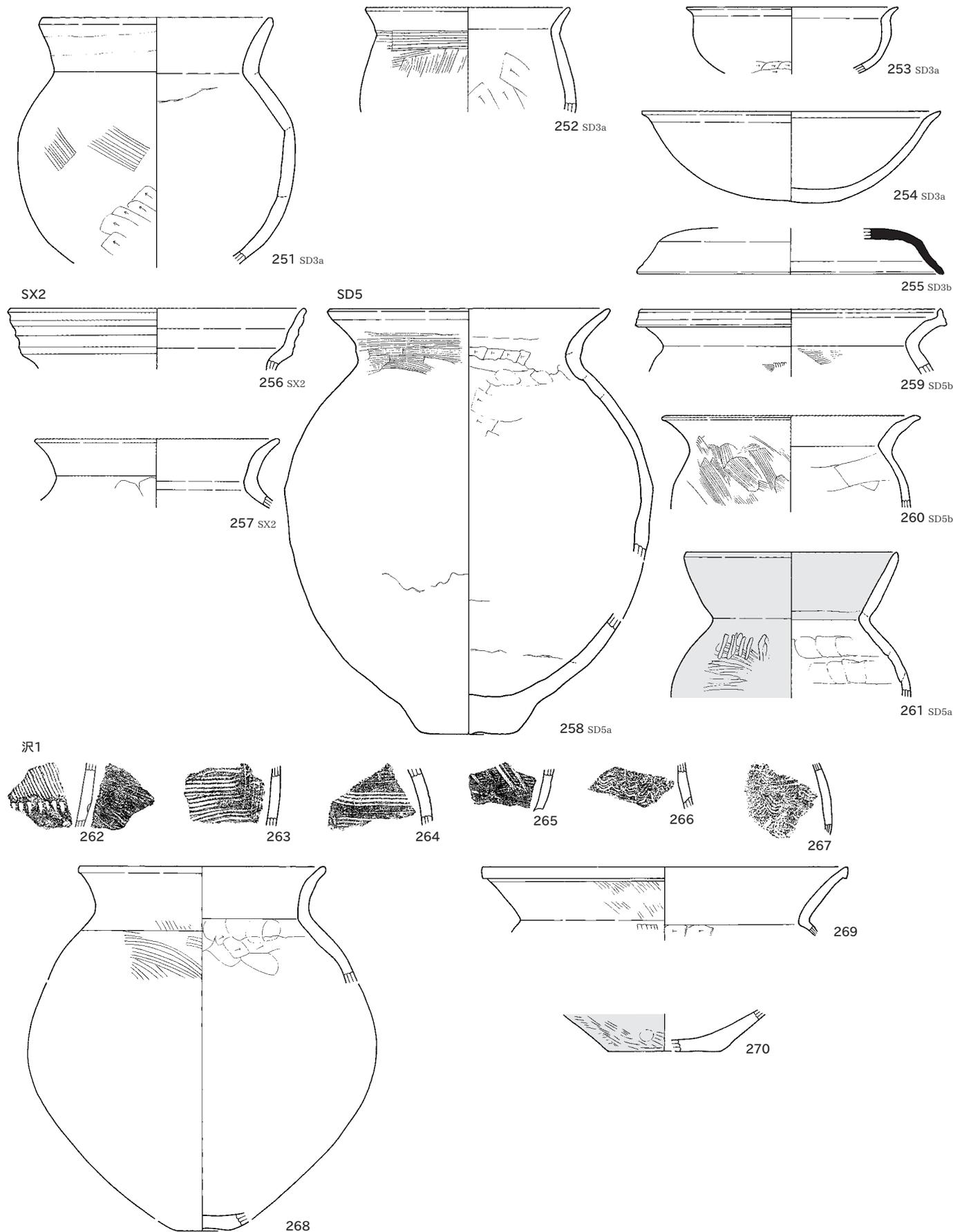


SD3・SX1

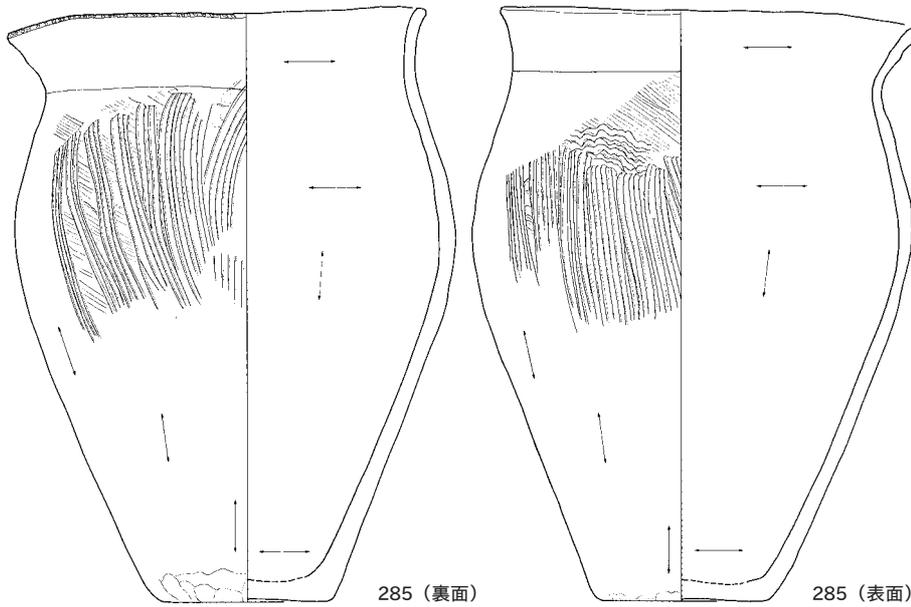
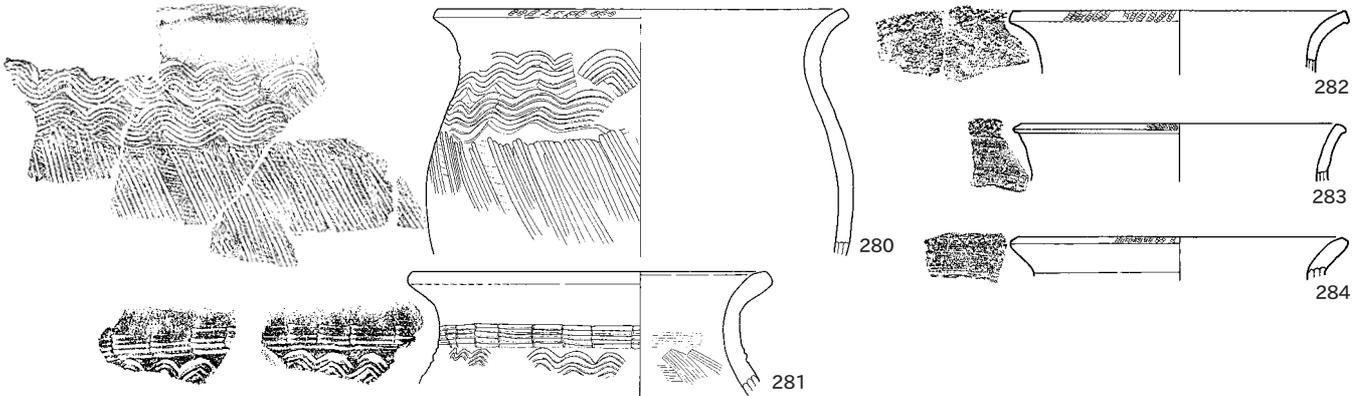
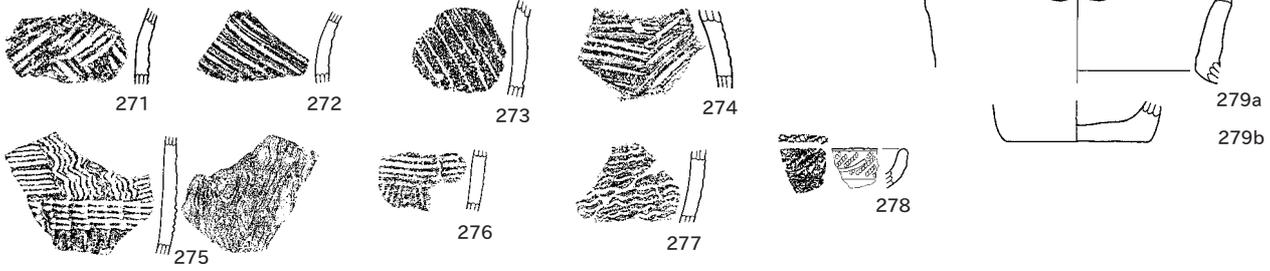


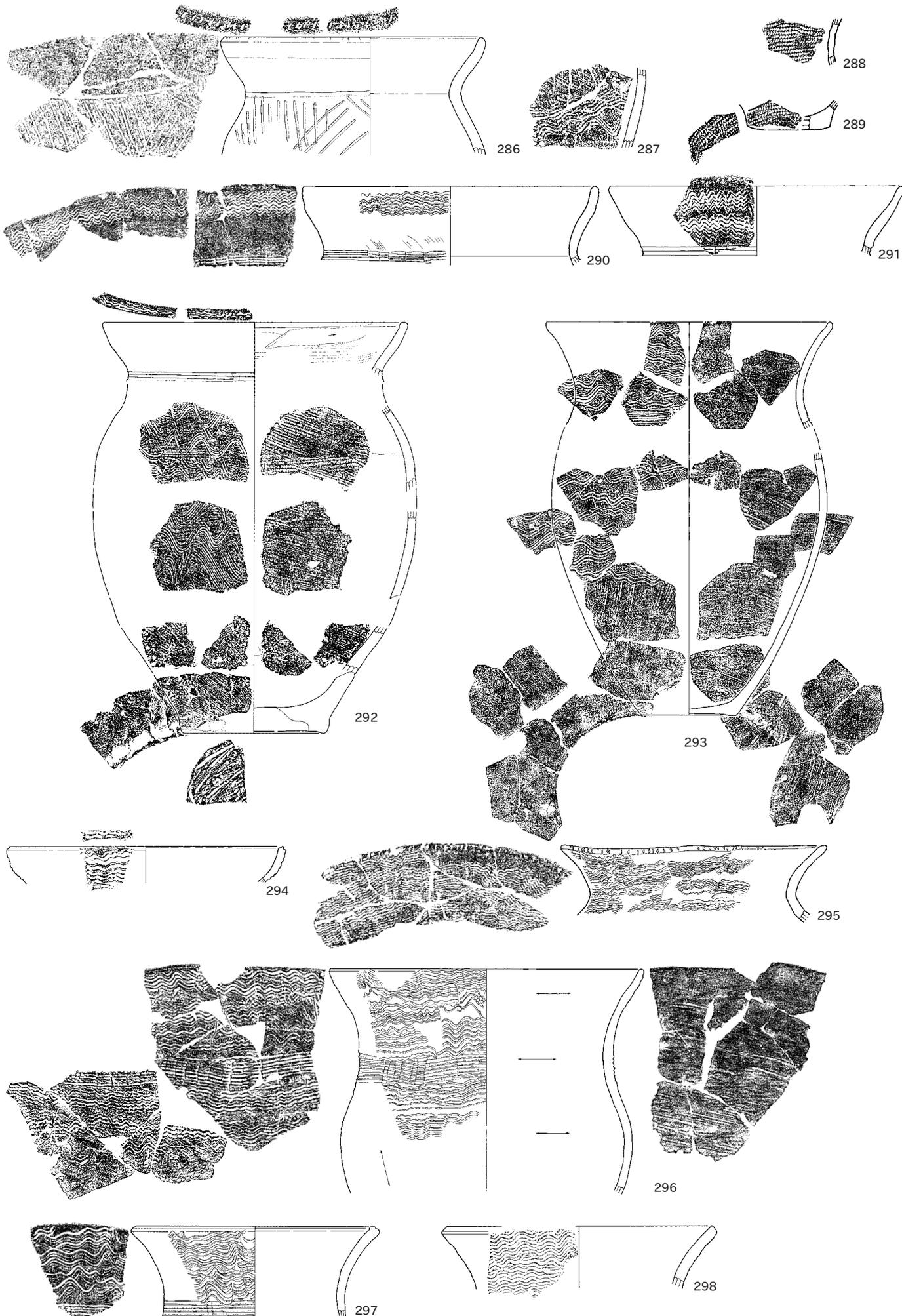
0 (1:3) 15cm

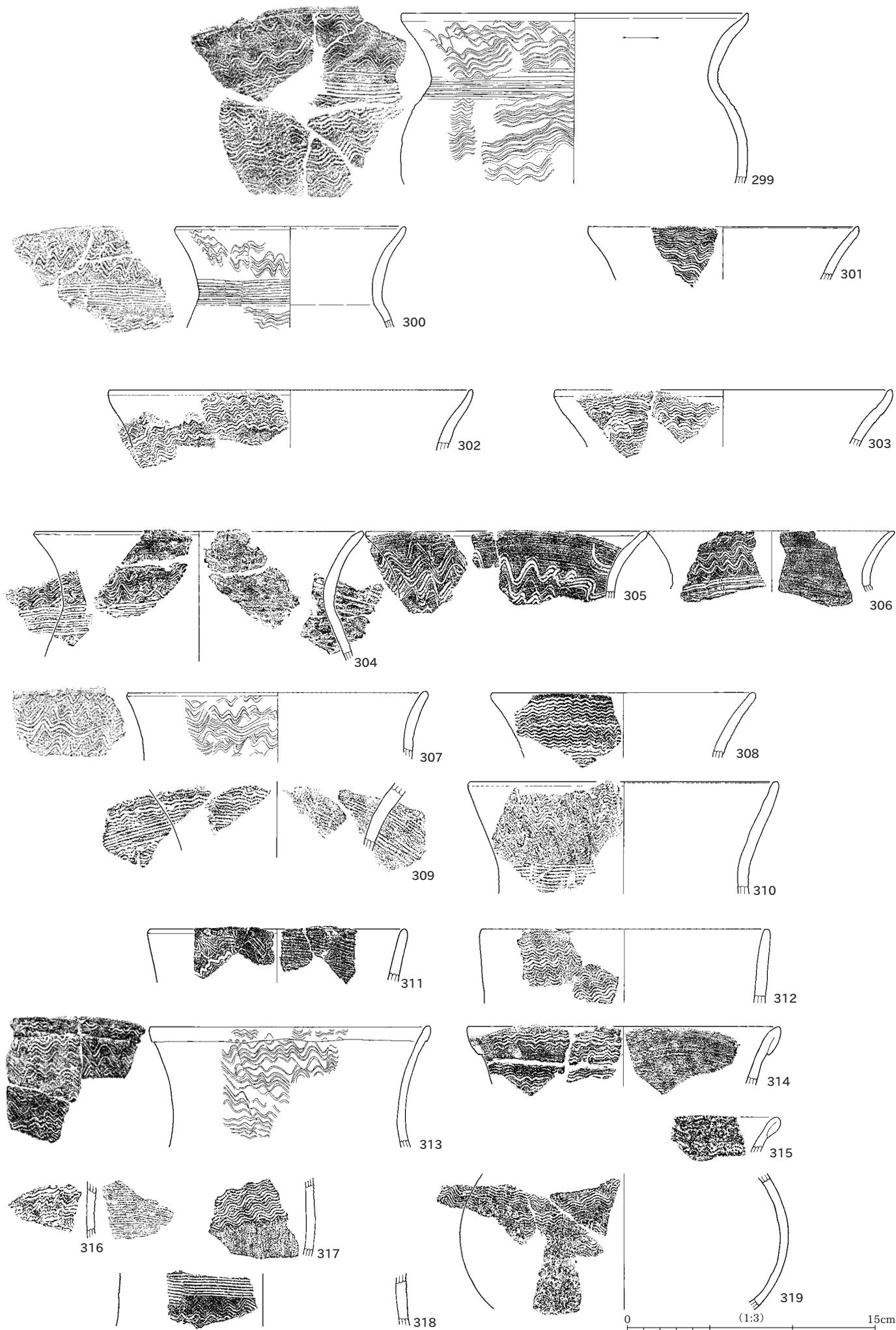


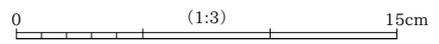
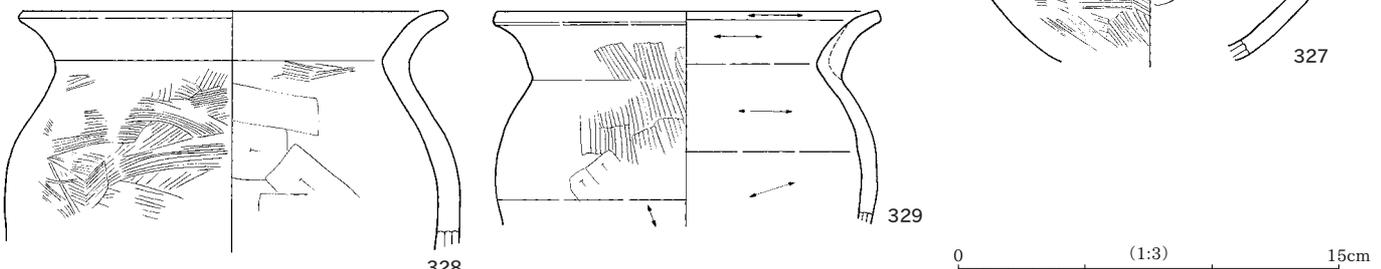
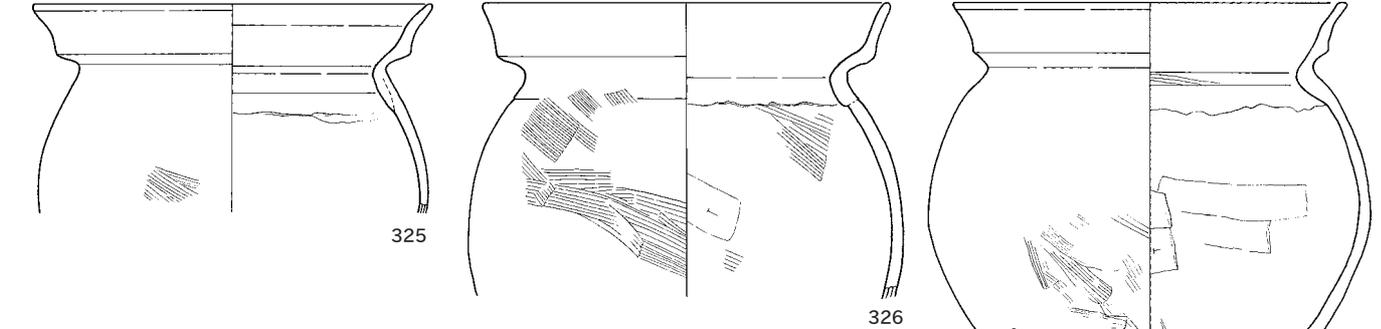
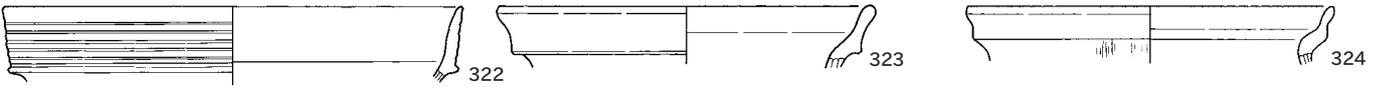


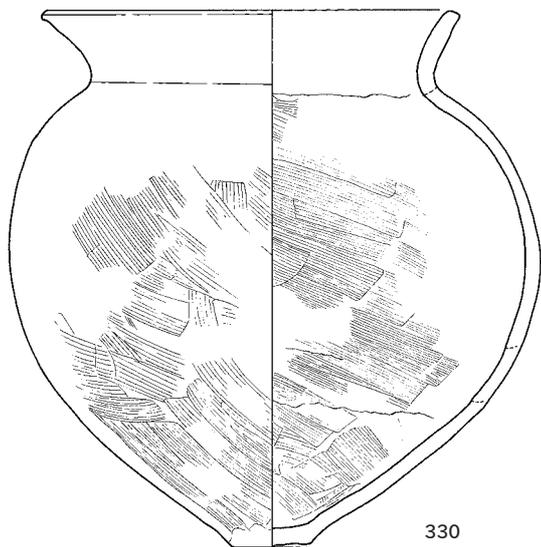
包含層ほか



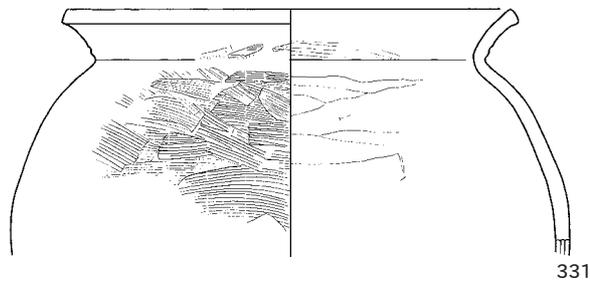




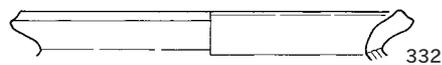




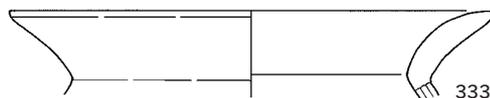
330



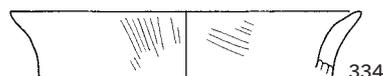
331



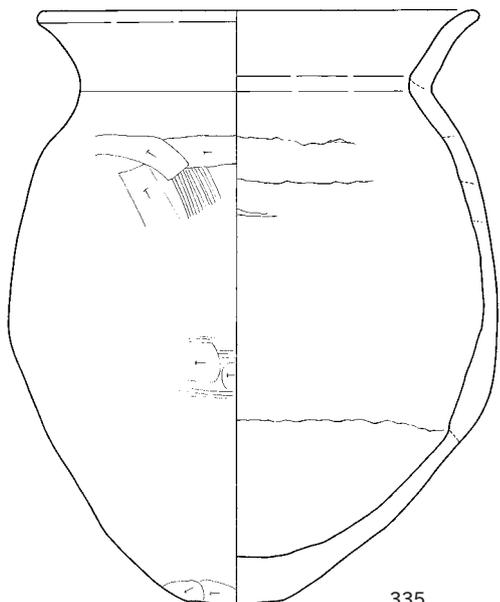
332



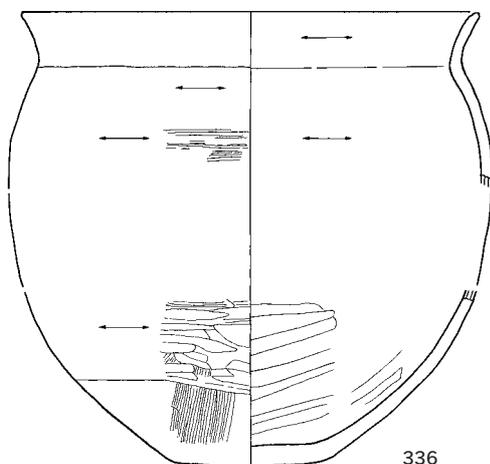
333



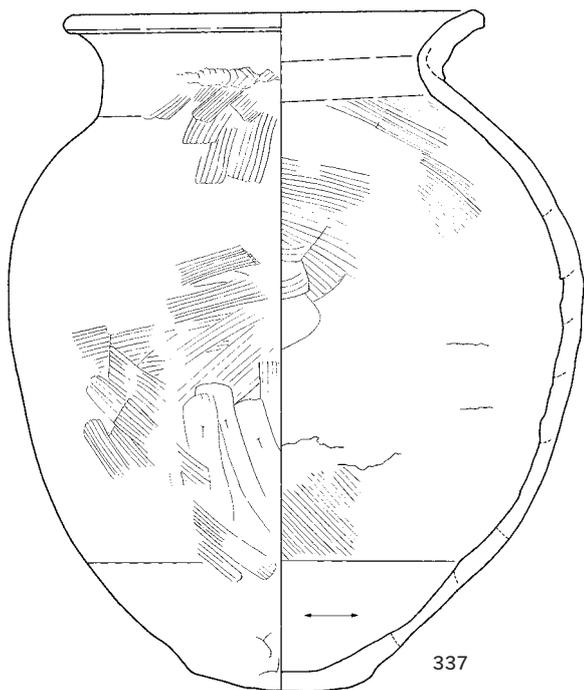
334



335



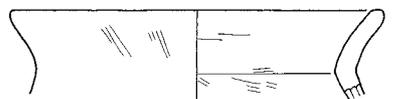
336



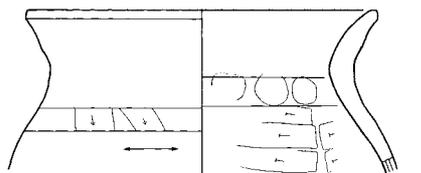
337



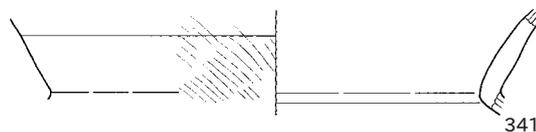
338



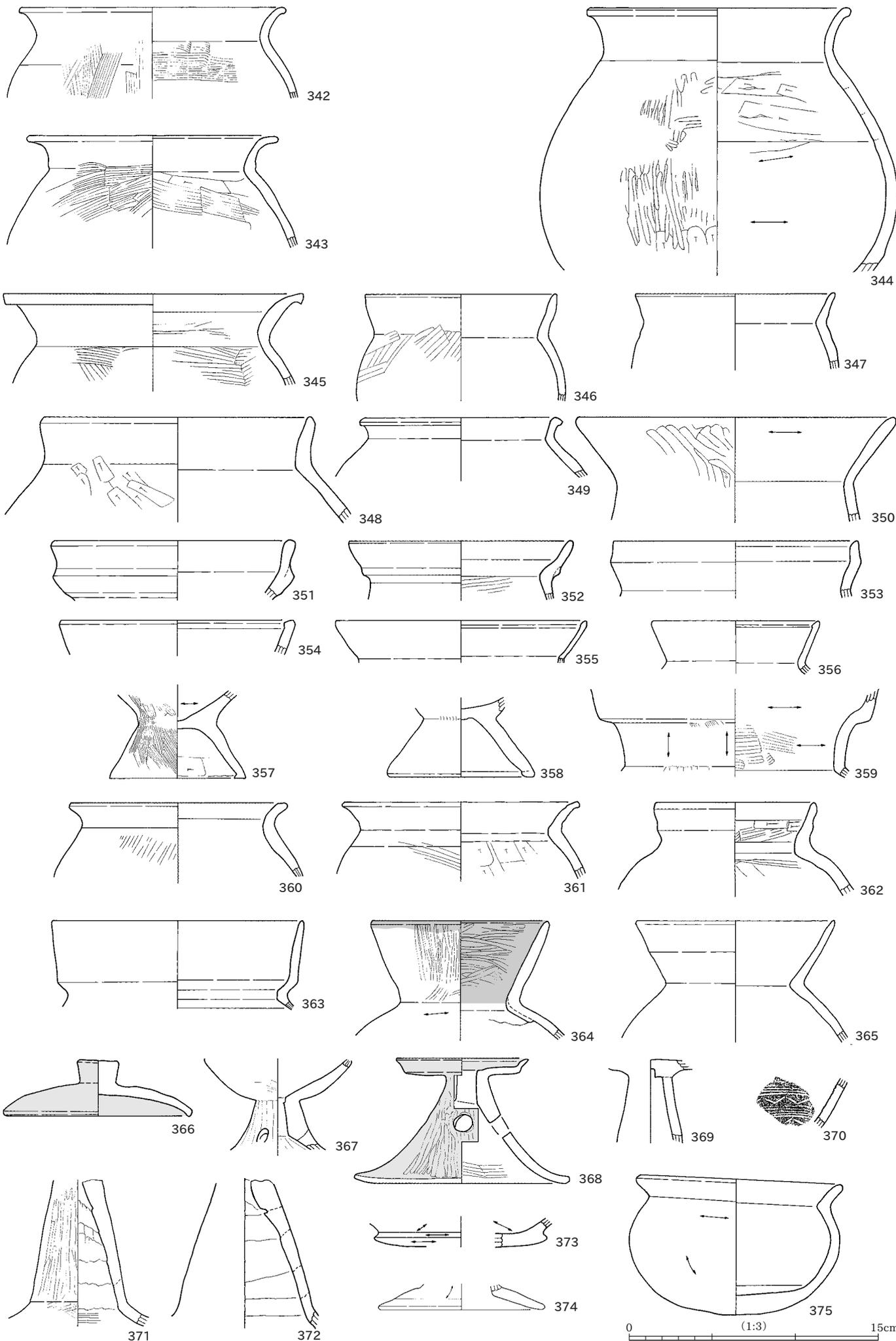
339

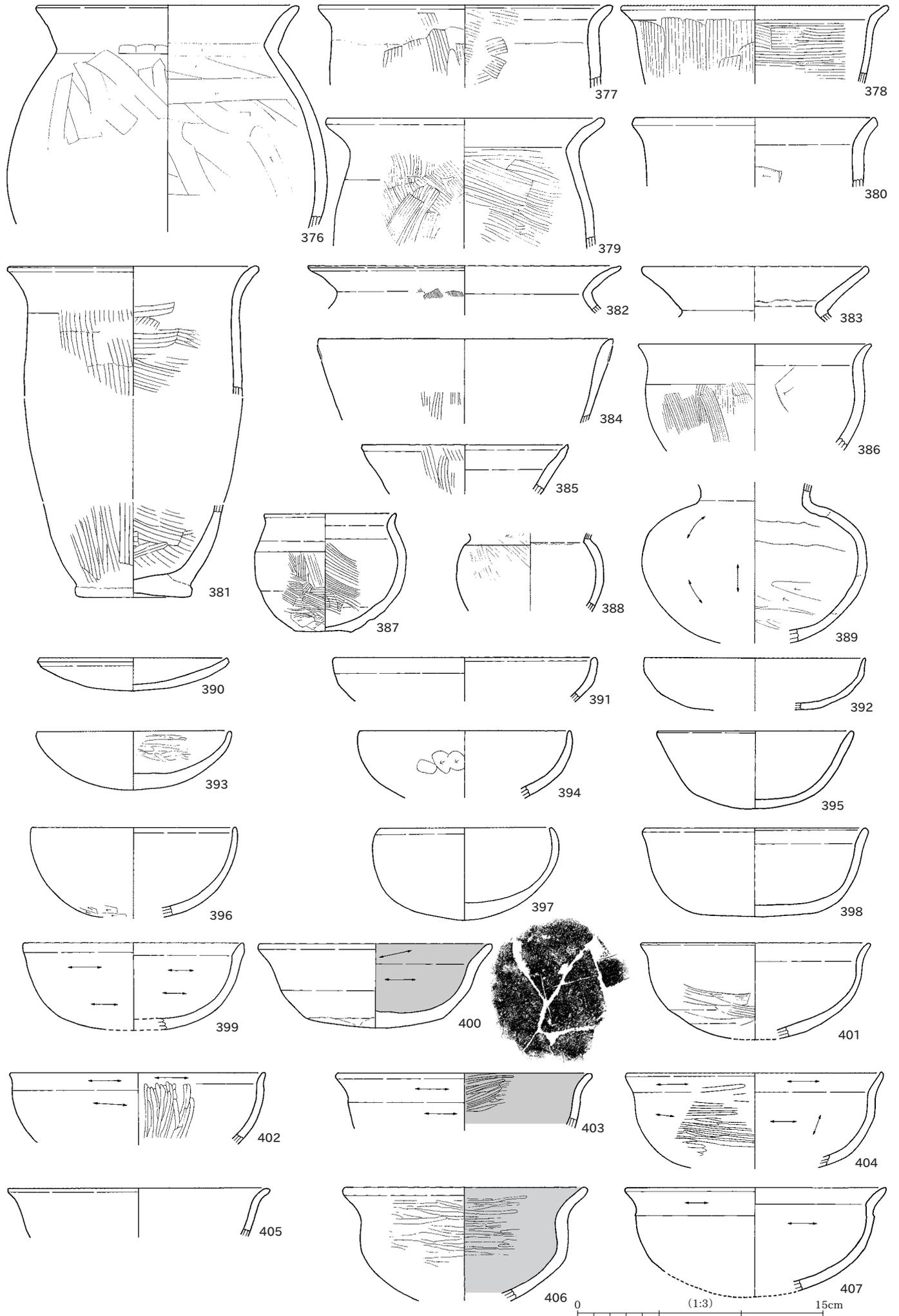


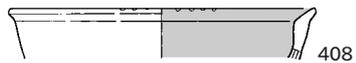
340



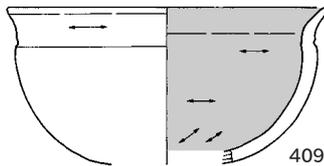
341



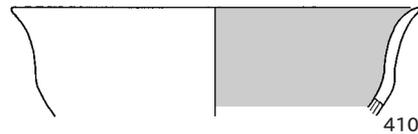




408



409



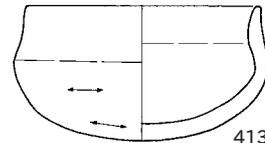
410



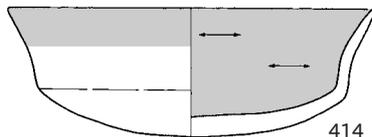
411



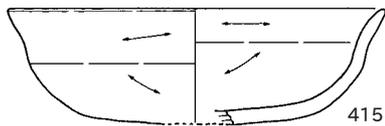
412



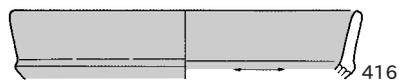
413



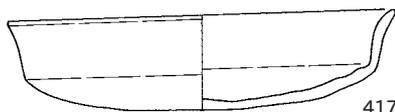
414



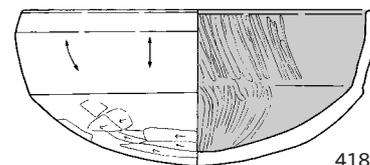
415



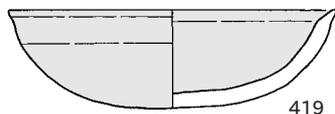
416



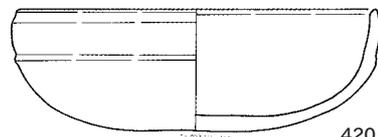
417



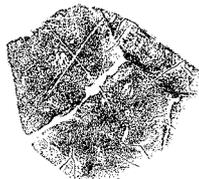
418



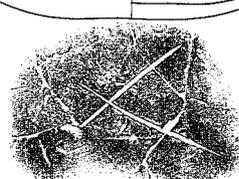
419



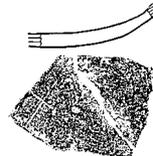
420



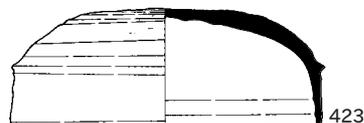
421



422



423



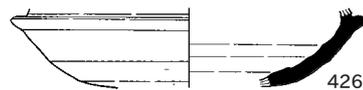
423



424



425

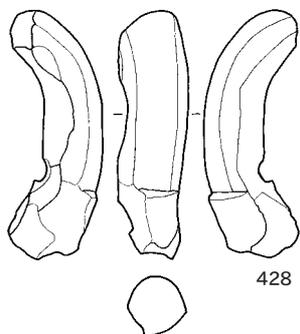


426

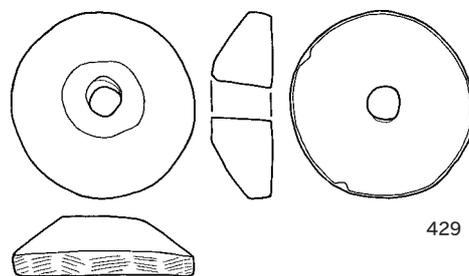


427

(408~427) 0 (1:3) 15cm



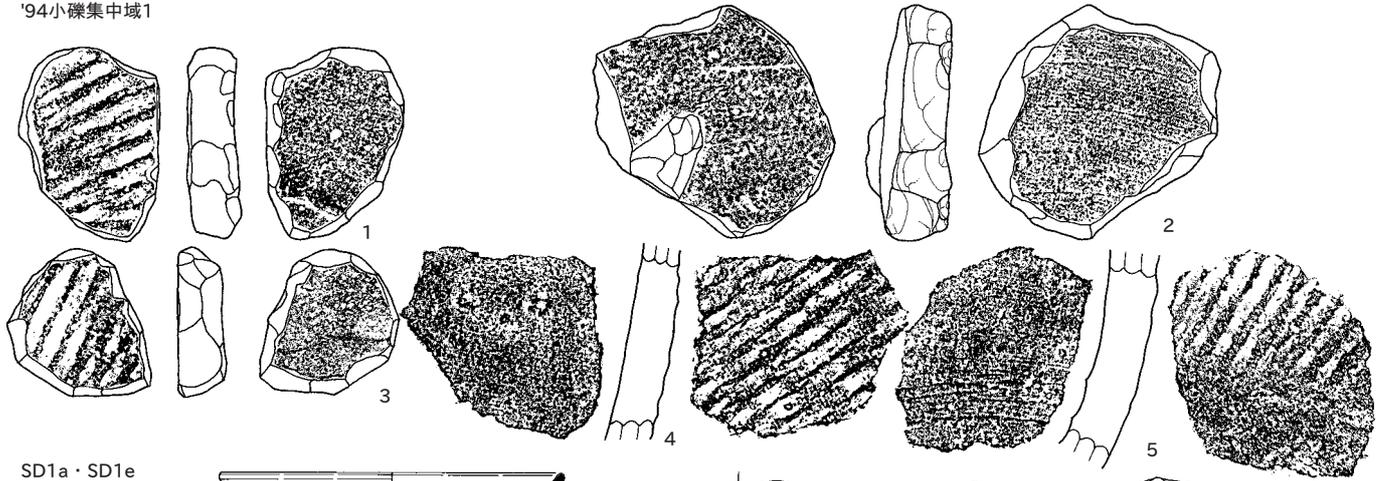
428



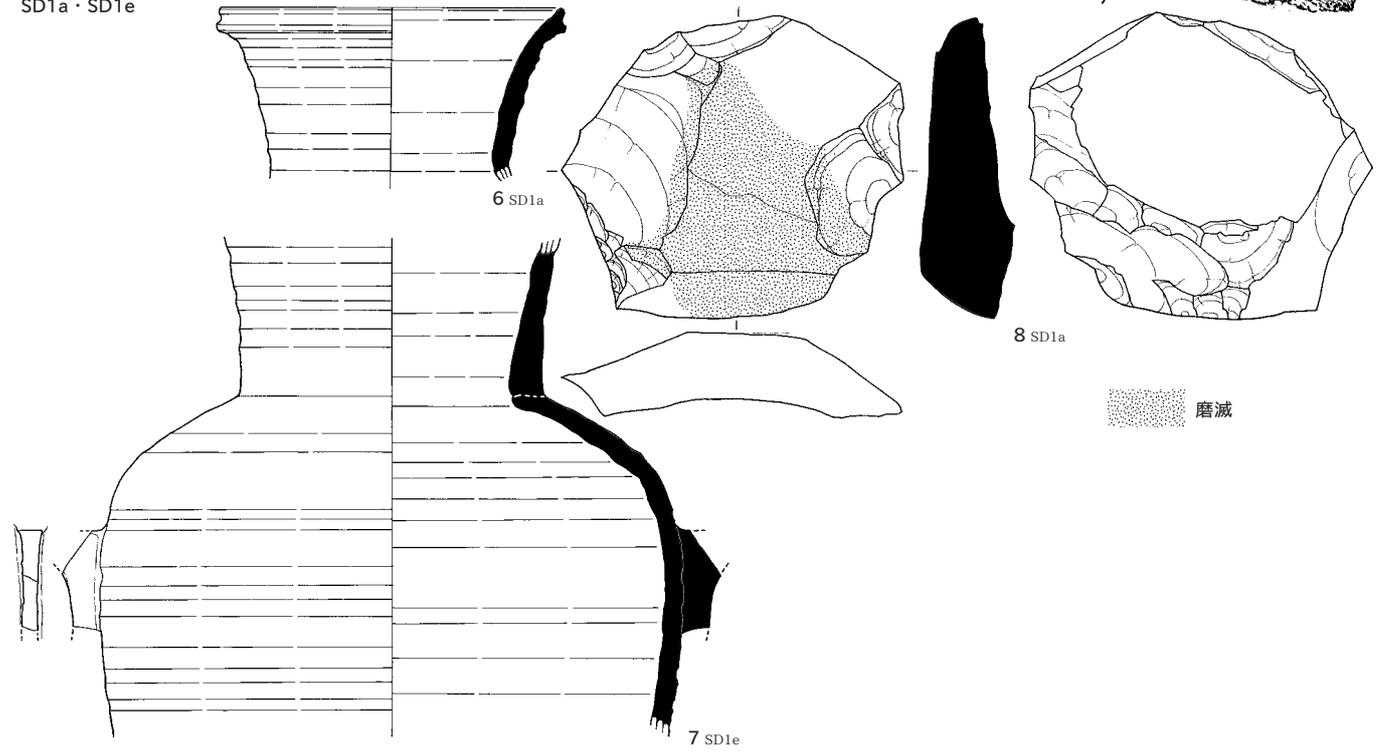
429

(428・429) 0 (2:3) 10cm

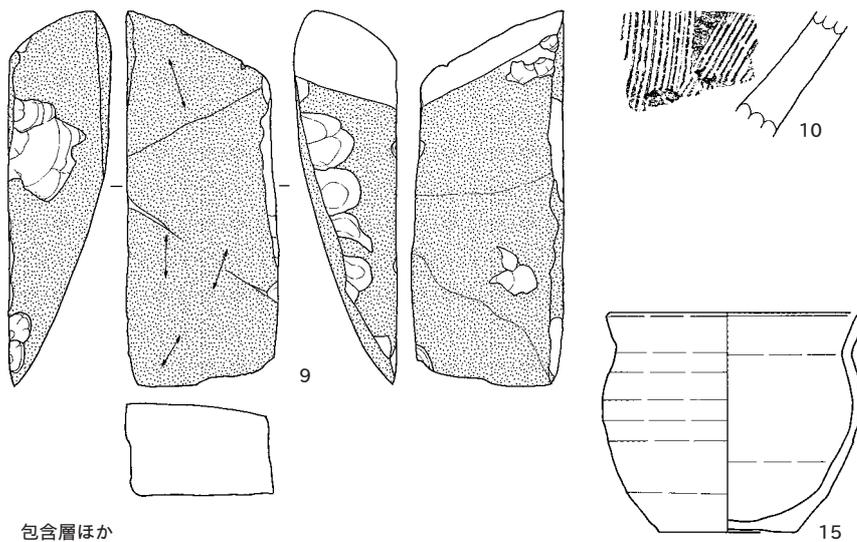
'94小磯集中域1



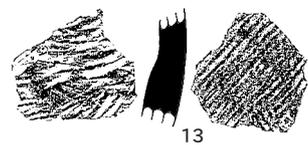
SD1a・SD1e



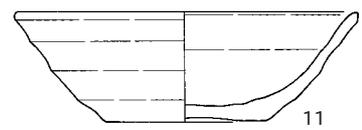
SD2



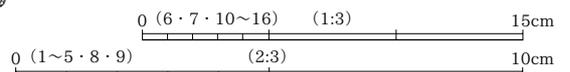
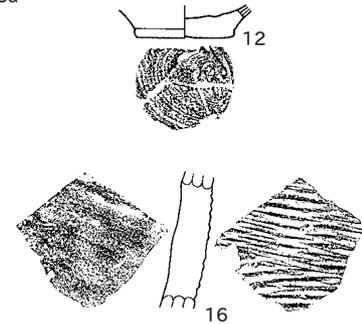
包含層ほか



SD3a



SD5a





遠景 (東から)



'94調査区 完掘 (西から)



'95調査区 (I区) 完掘 (西から)



'95調査区 (II①区) 完掘 (西から)



'95調査区 (II②区) 完掘 (北から)



'95調査区 (II③区) 完掘 (南から)



'95調査区 (II③・④区) 完掘 (南から)



'94基本層序① (14K)



'94基本層序④ (11J)



'95基本層序① (17I)



沢1 a-a'セクション (東から)



SD1a 東側 (b-b') セクション



SD1c 北側 (c-c') セクション (南西から)



SD1c 西側 (d-d') セクション (西から)



SD1a・1b 西側 (d-d') セクション (西から)



SD1e 小礫検出状況 (南西から)



SD1j f-f'セクション (西から)



19H21・16 土器出土状況 (北から)



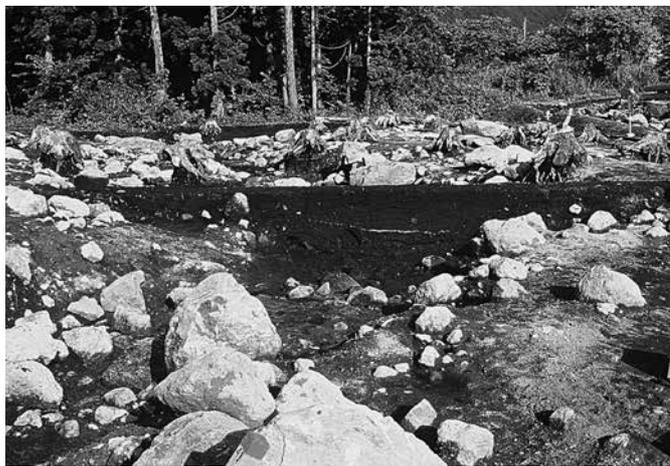
19H6 土器出土状況 (北から)



19F10 土器出土状況 (西から)



SD2 全景 (西から)



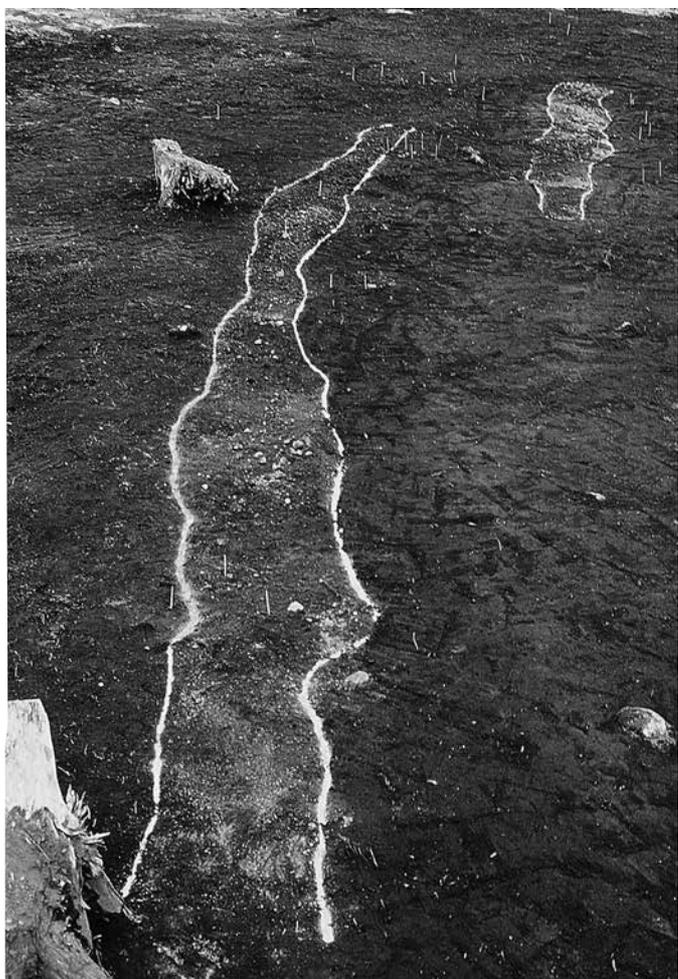
SD2 a-a'セクション (西から)



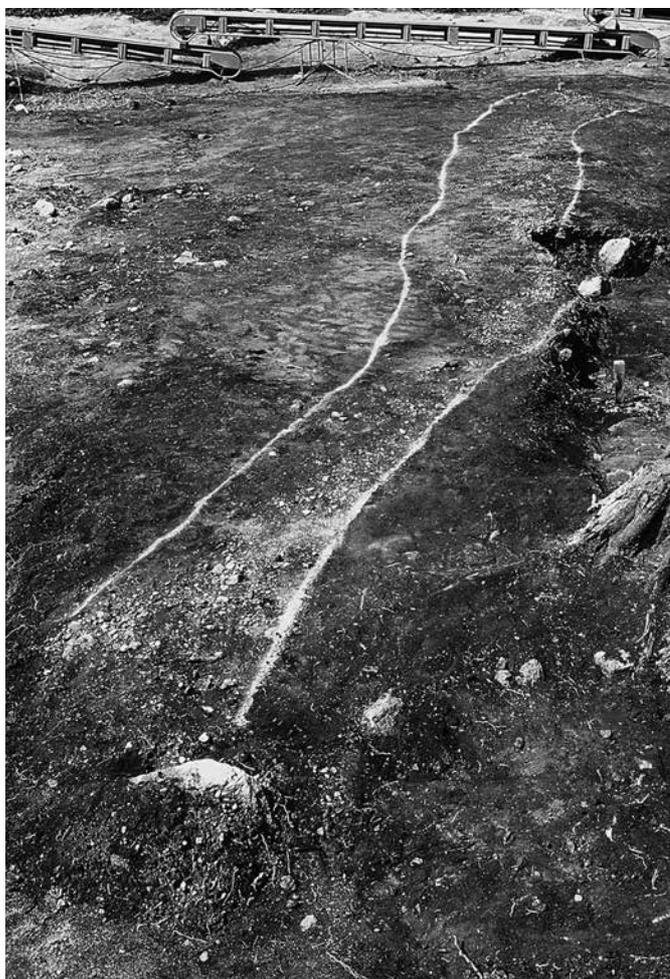
SD3 セクション (西から) (手前: a-a'、奥: b-b')



SD5 検出状況 (西から)



SX1 検出状況 (西から)



SX2 検出状況 (南から)



SX1 セクション (西から)



SX2 セクション (南から)



'94 小礫集中域1 部分 (東から)



'94 小礫集中域2 部分 (東から)



'95 小礫集中域1 部分 (北から)



'95 小礫集中域1 セクション (北から)



'95 小礫集中域2 検出状況 (南から)



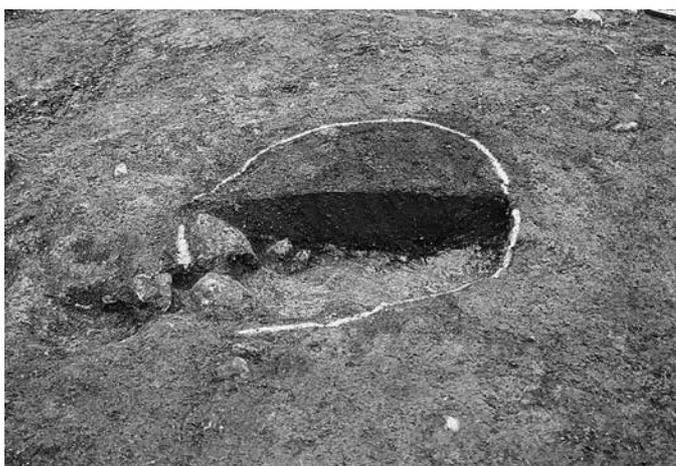
'95 小礫集中域2 セクション (南から)



'94 Pit17 セクション



'94 Pit18 セクション



'94 Pit19 セクション



'94 Pit8 セクション



'94 Pit7 セクション



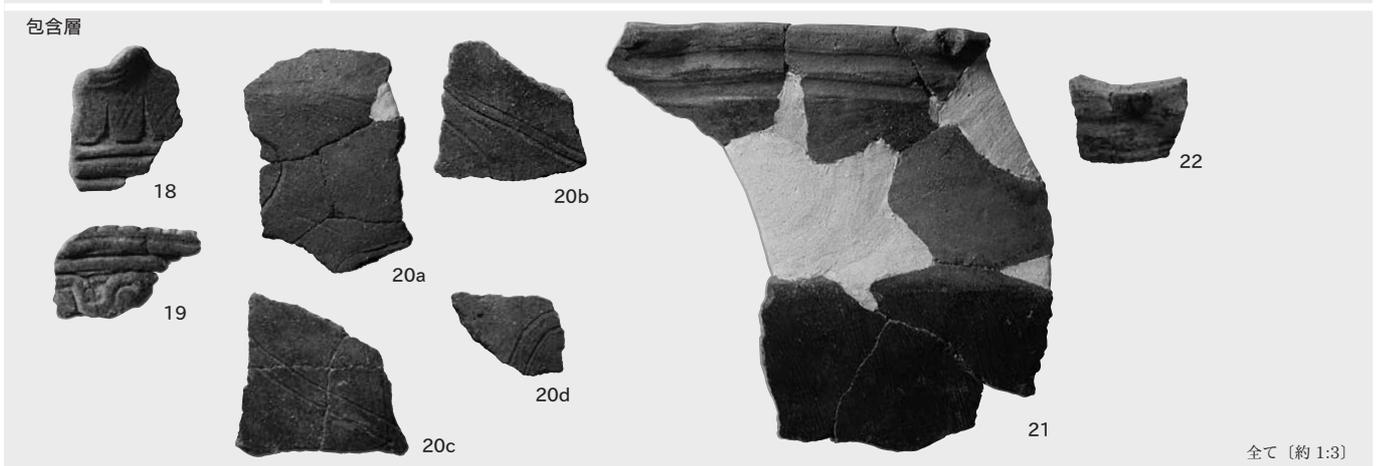
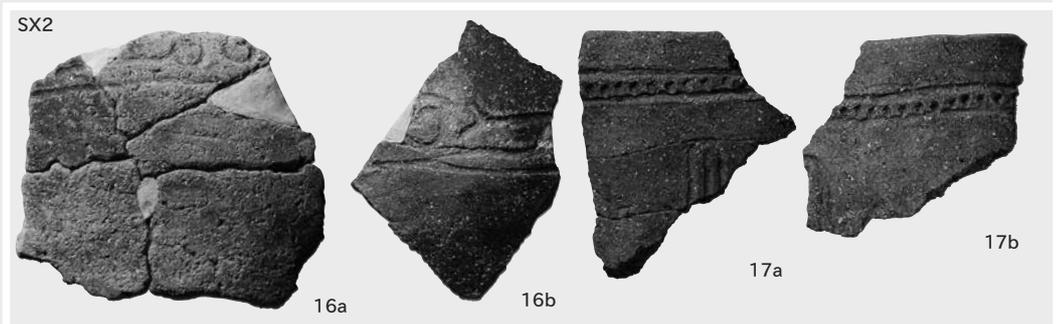
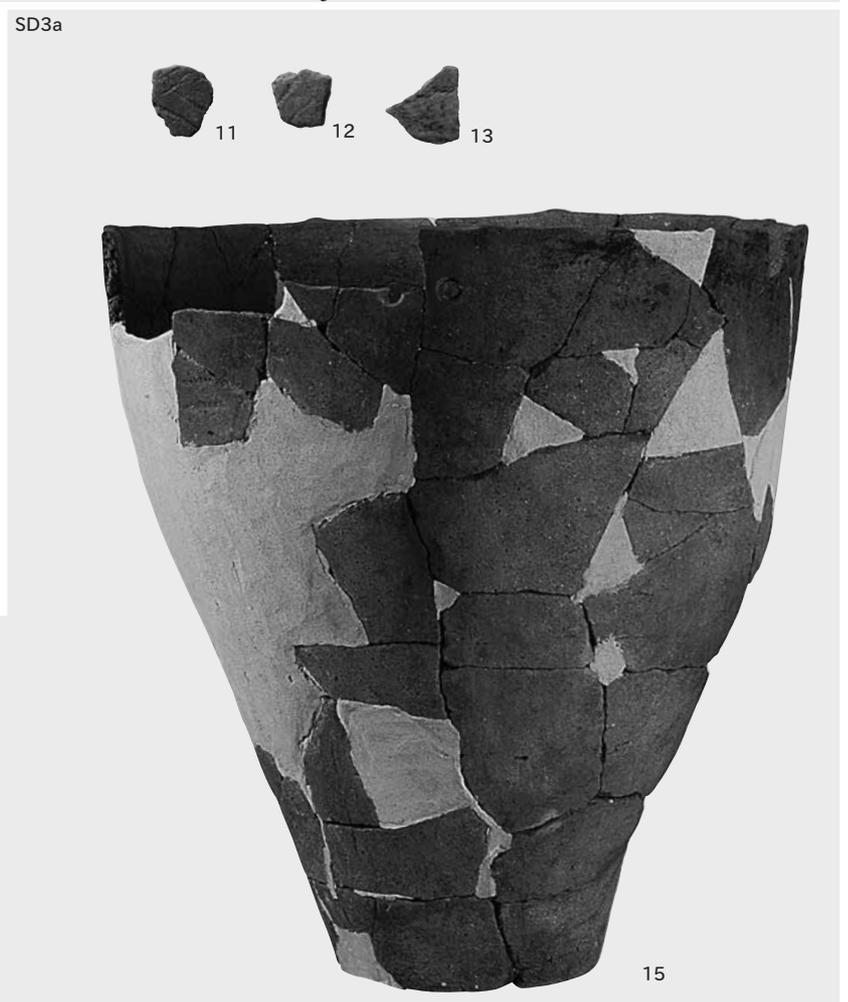
'94 小礫集中域周辺 完掘

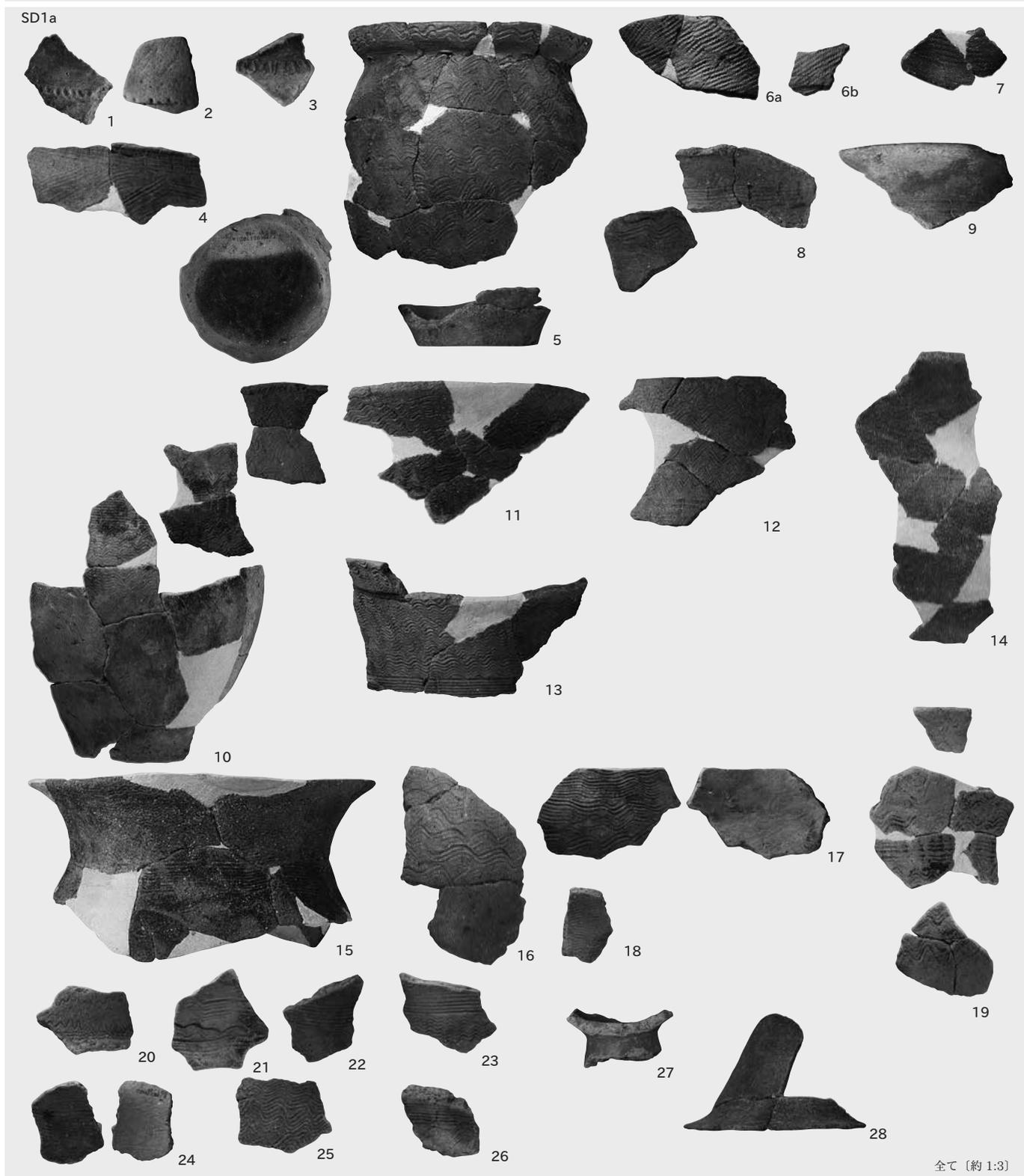
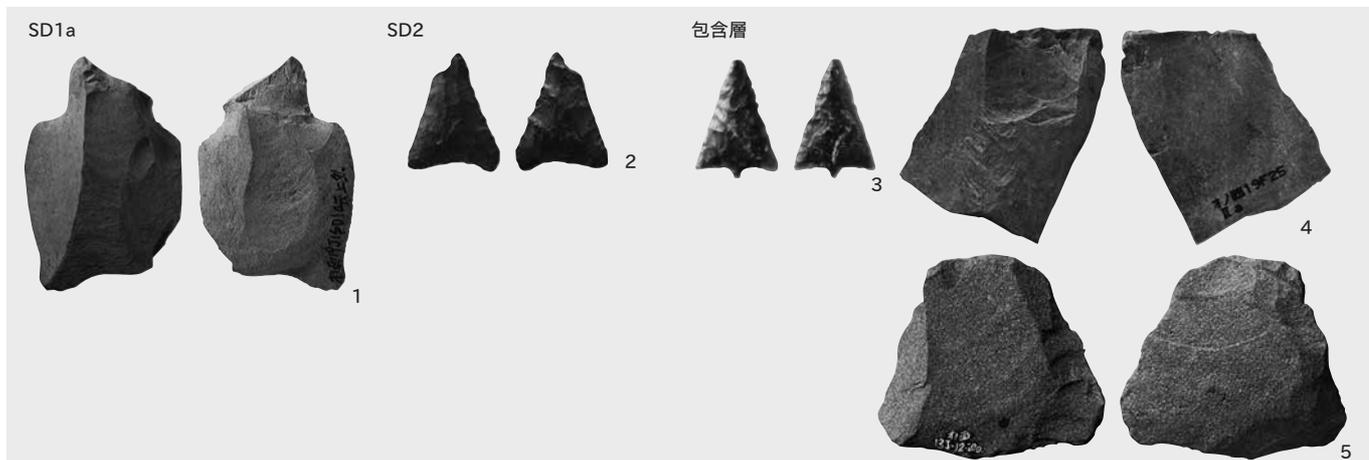


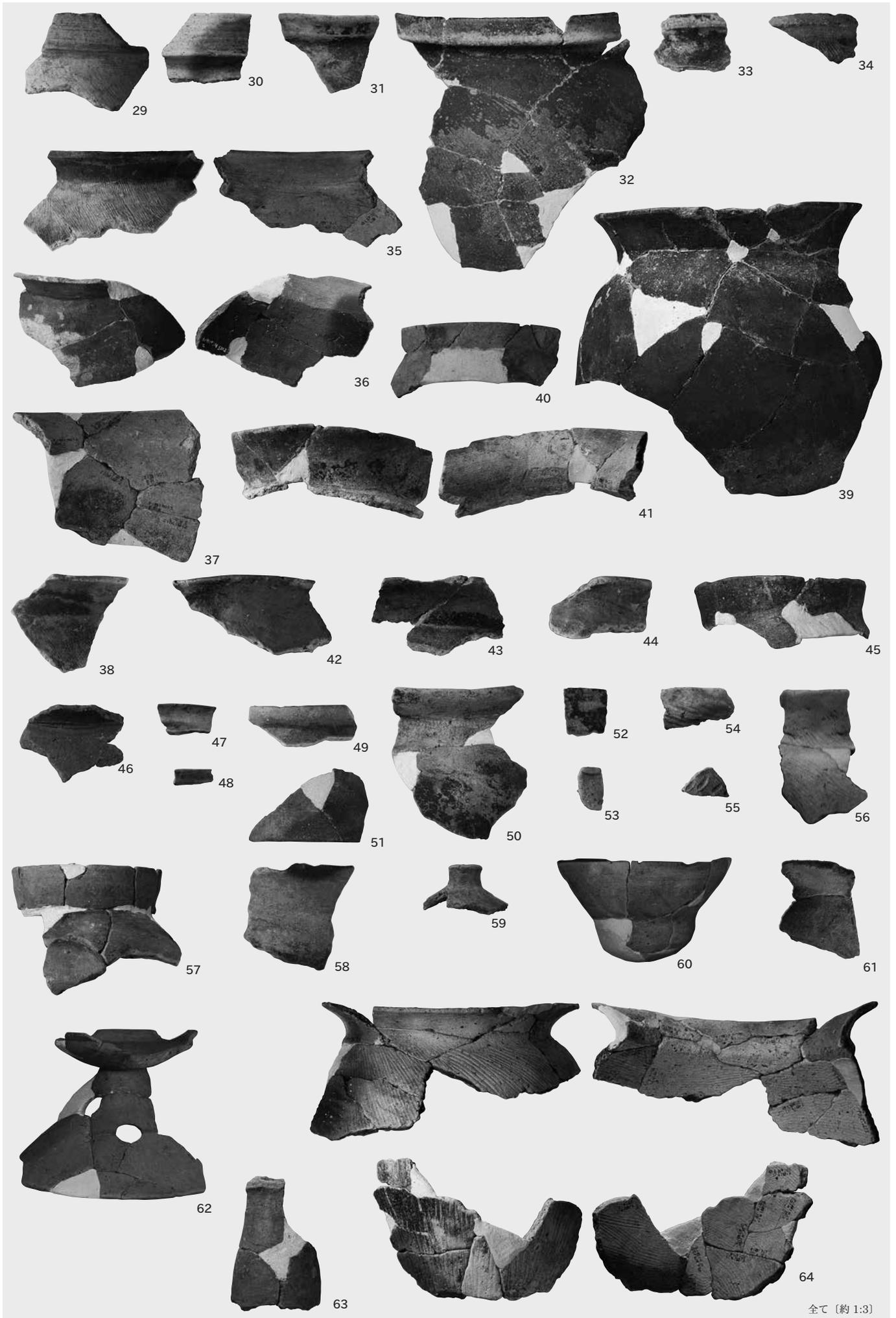
'95 SD14 北側部分 (東から)

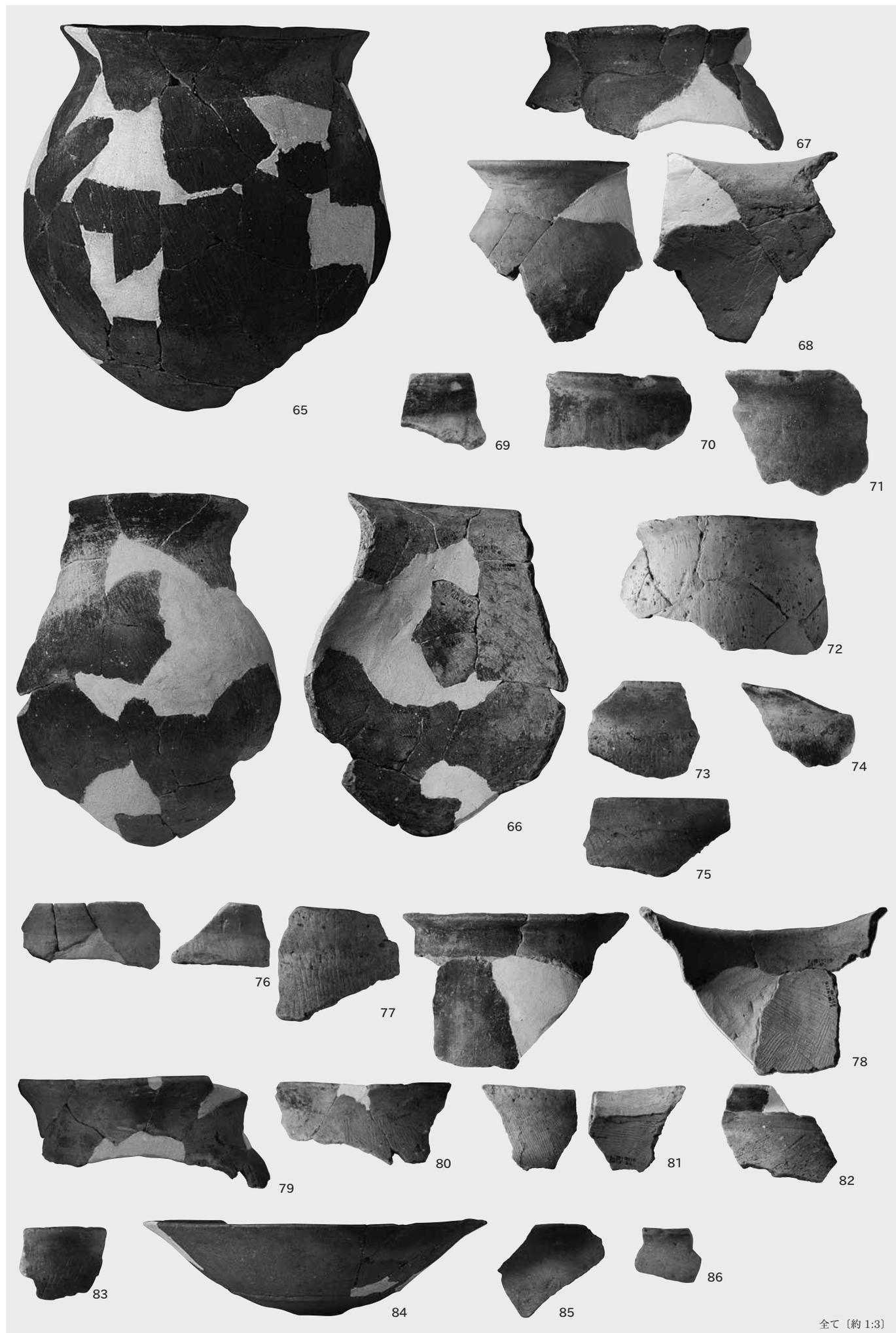


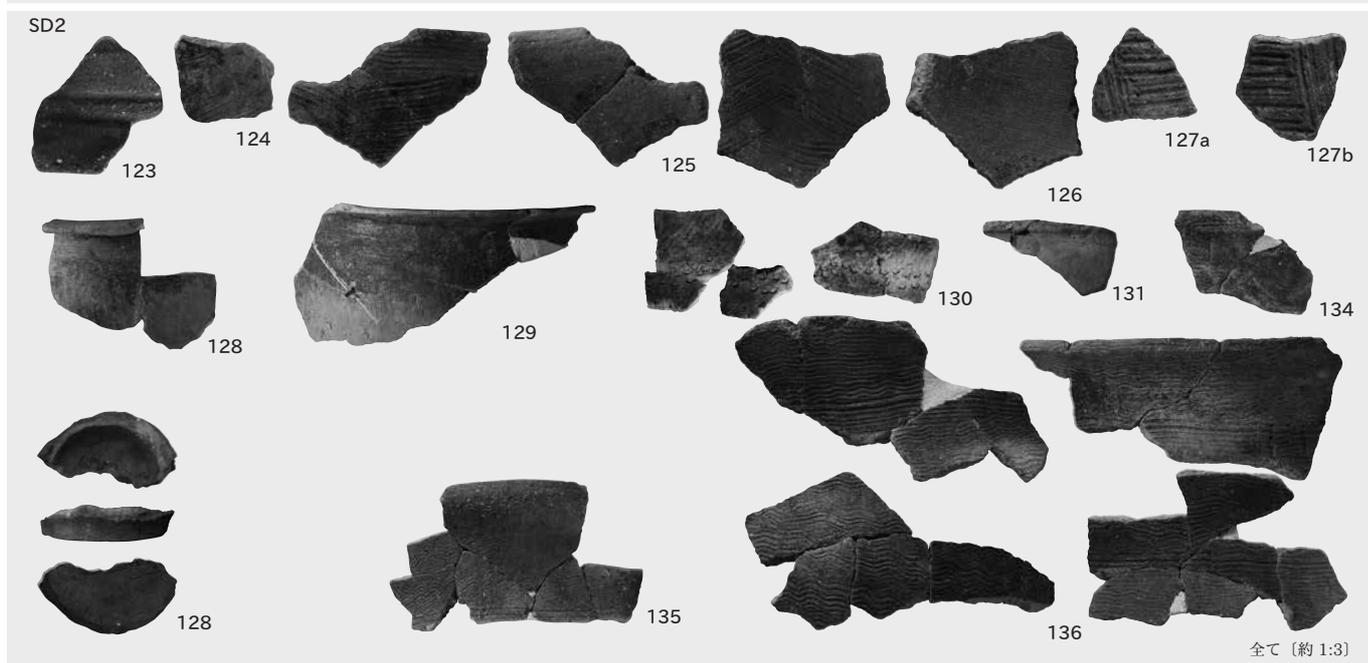
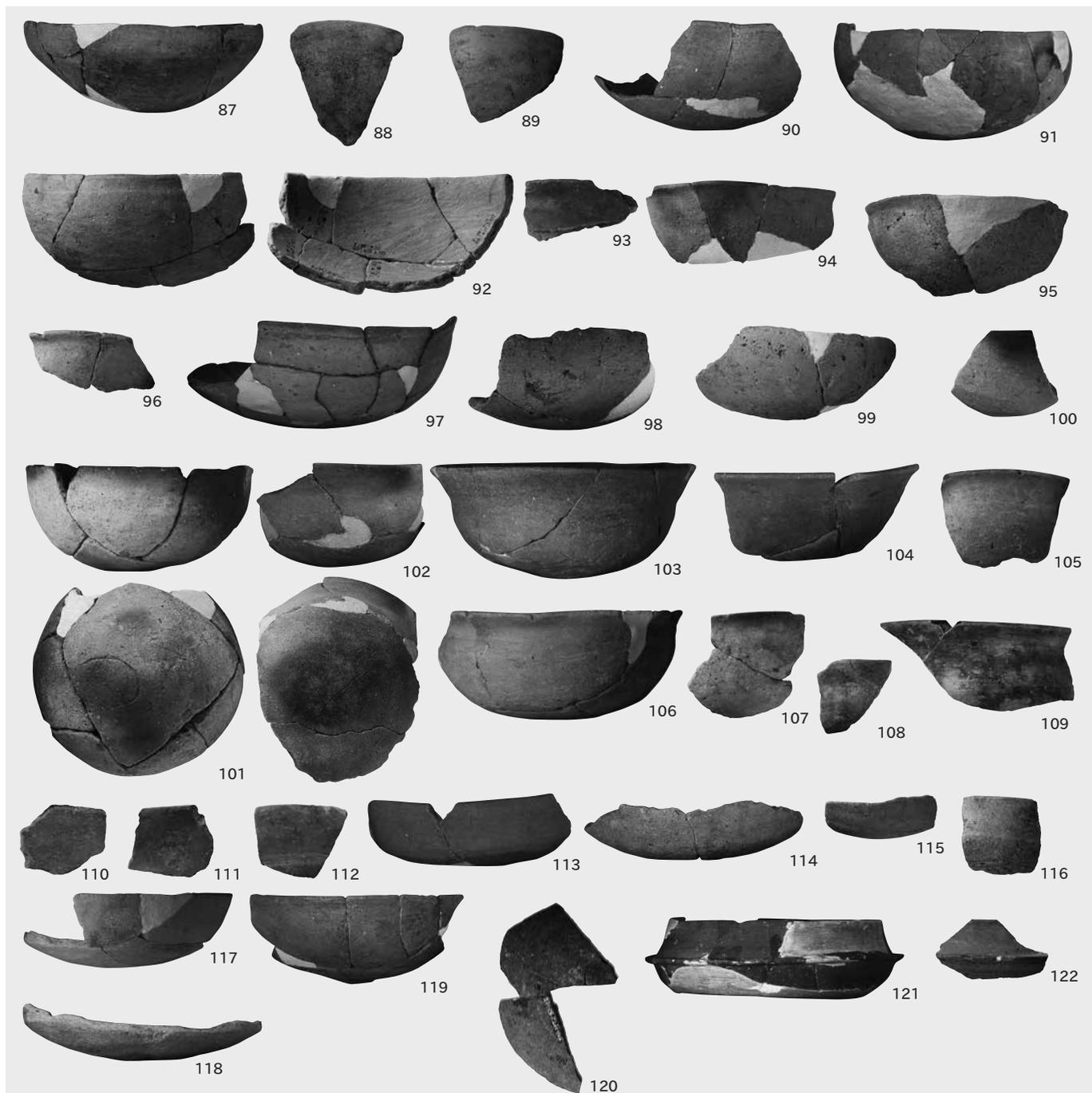
'95 SD14 セクション

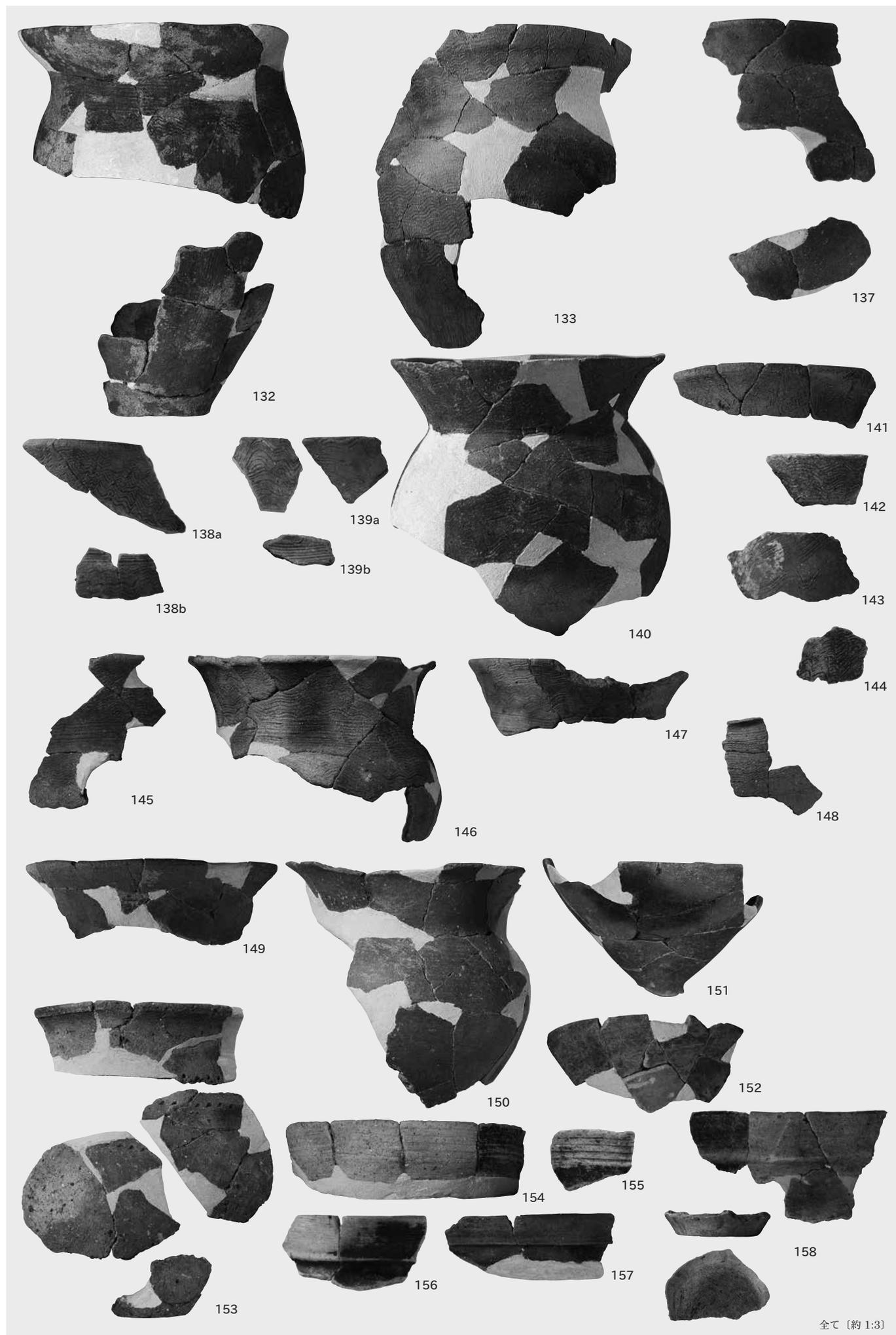


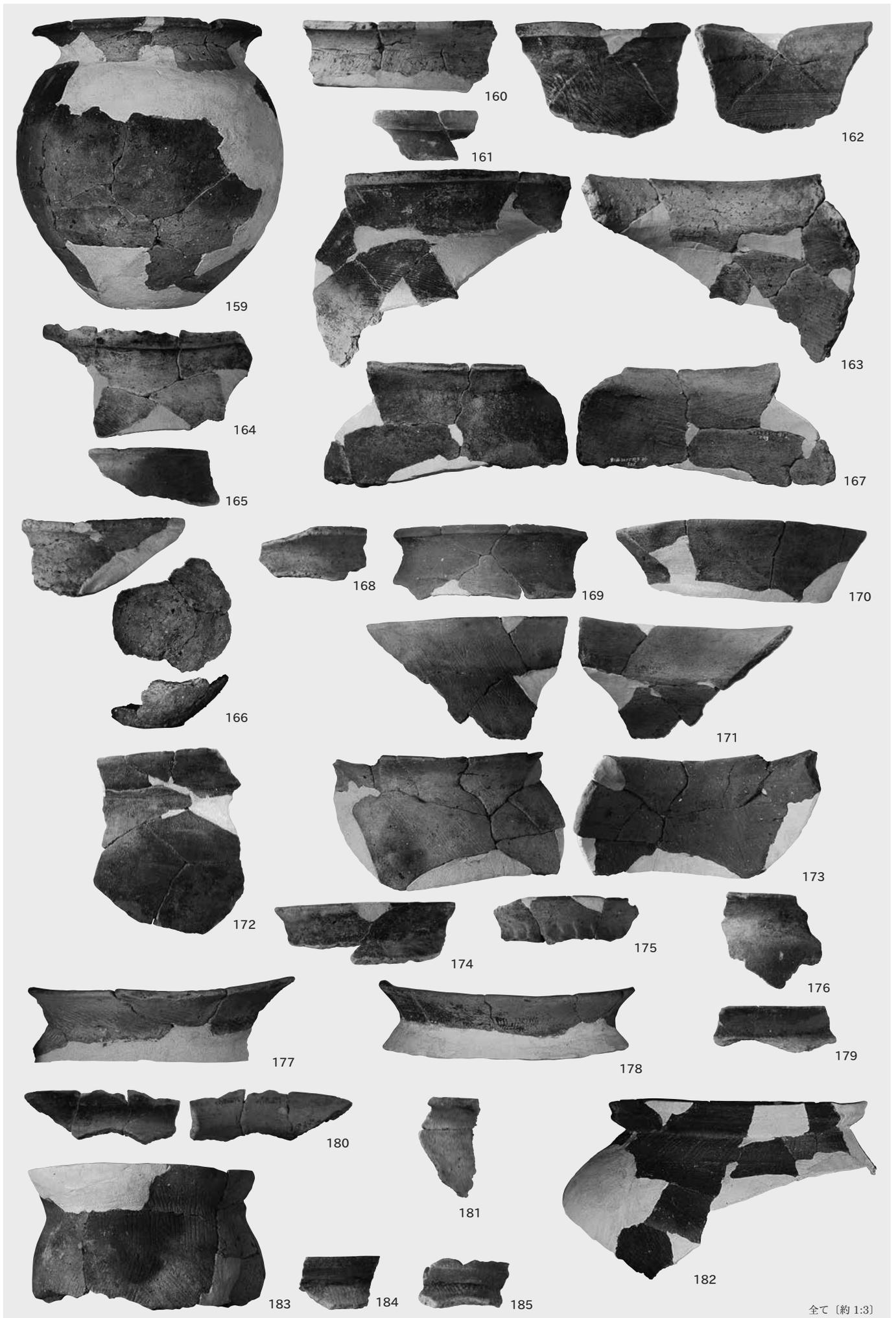


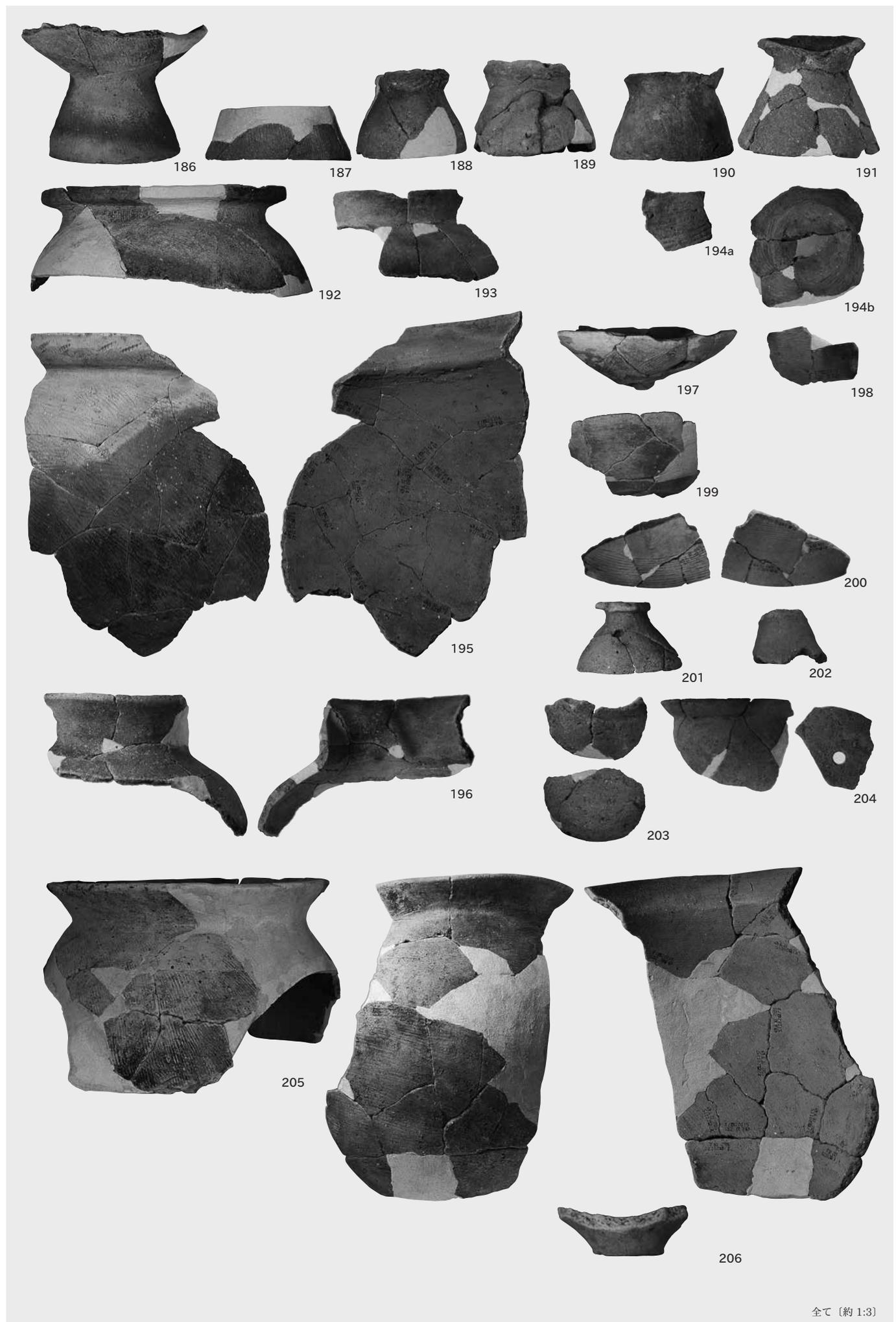


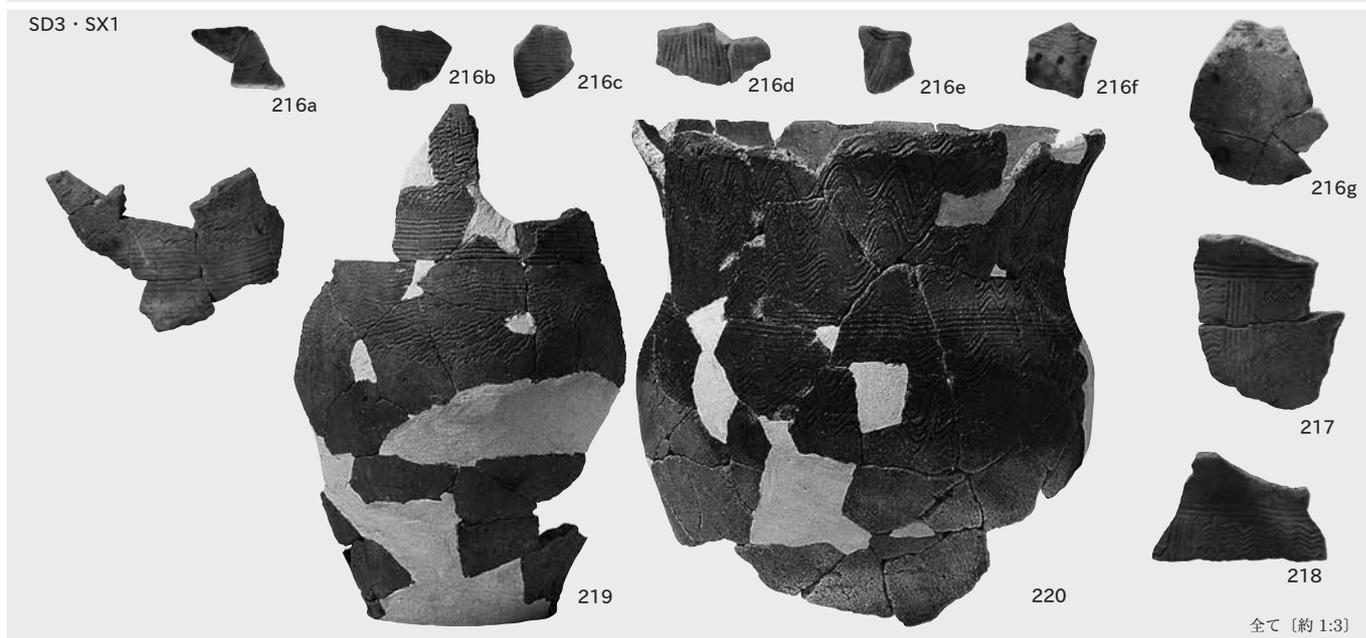
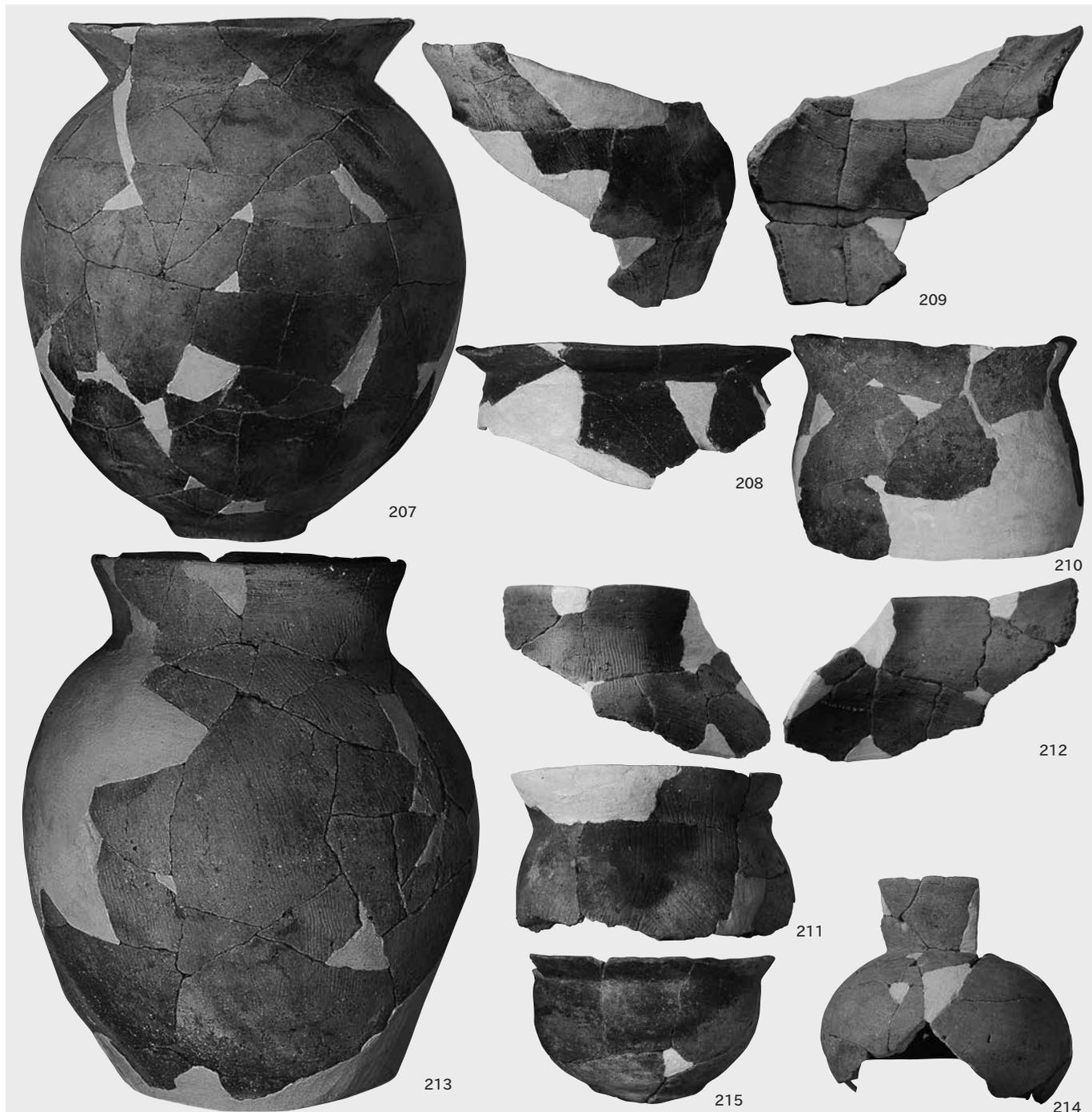


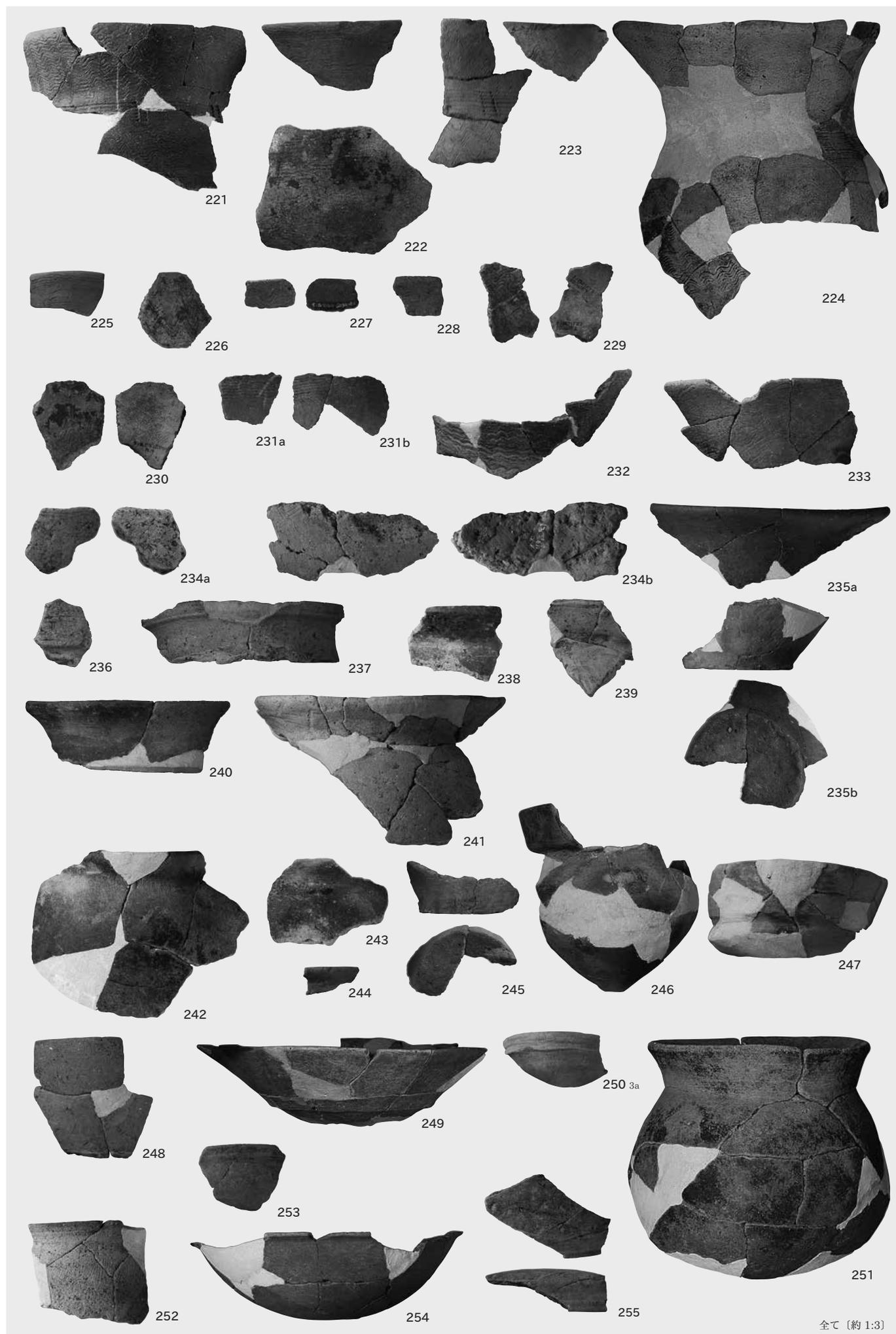




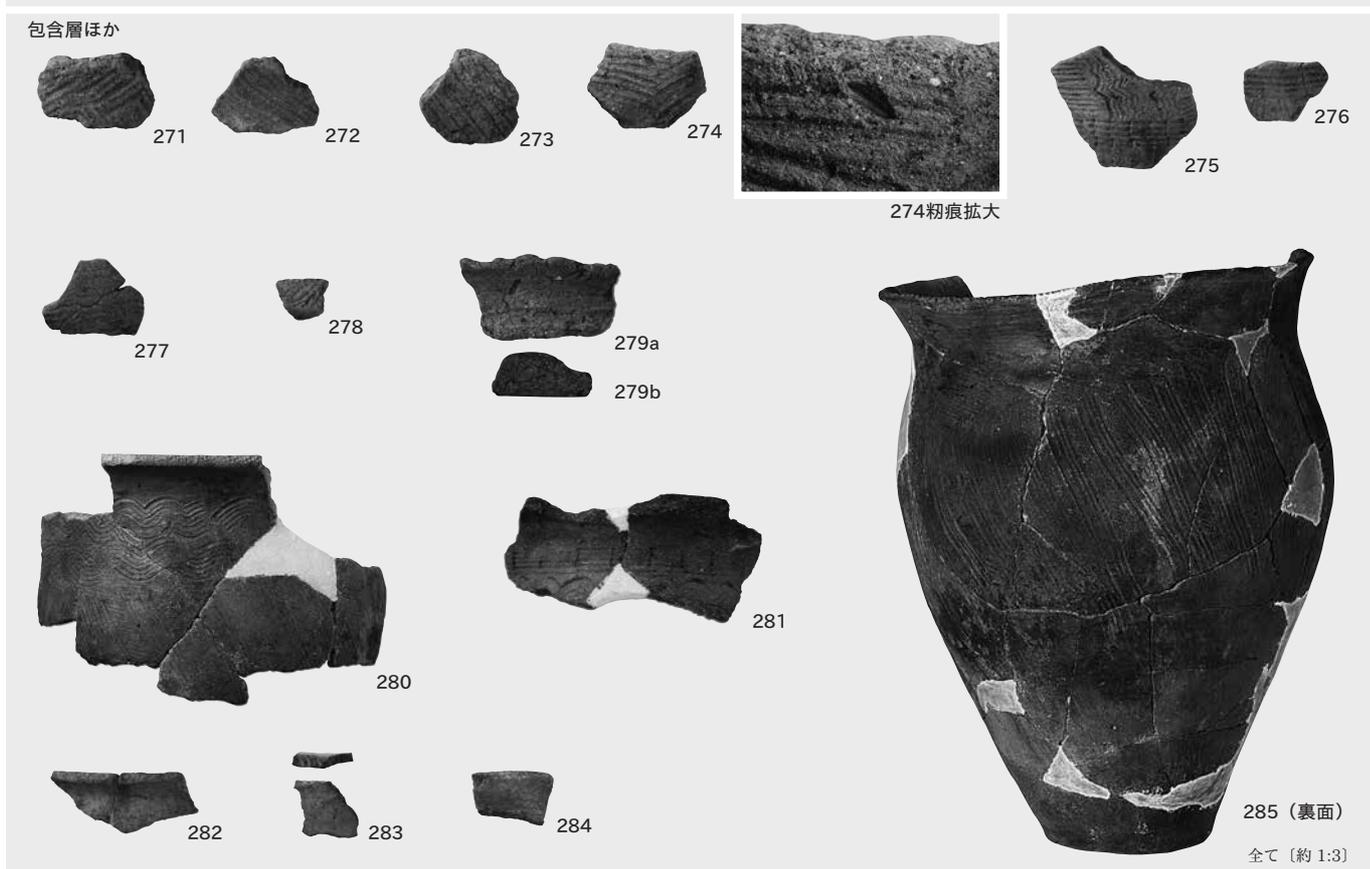
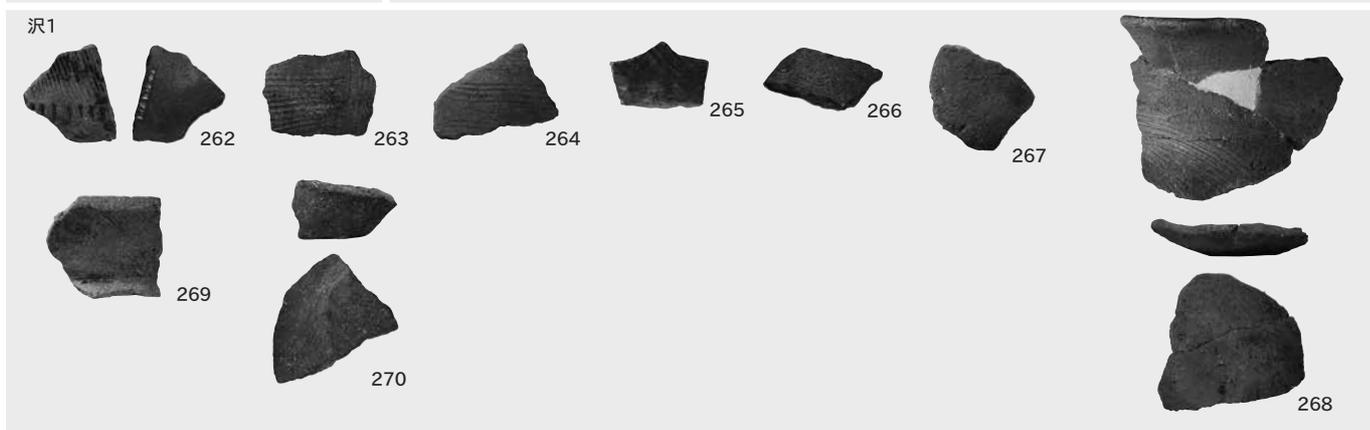
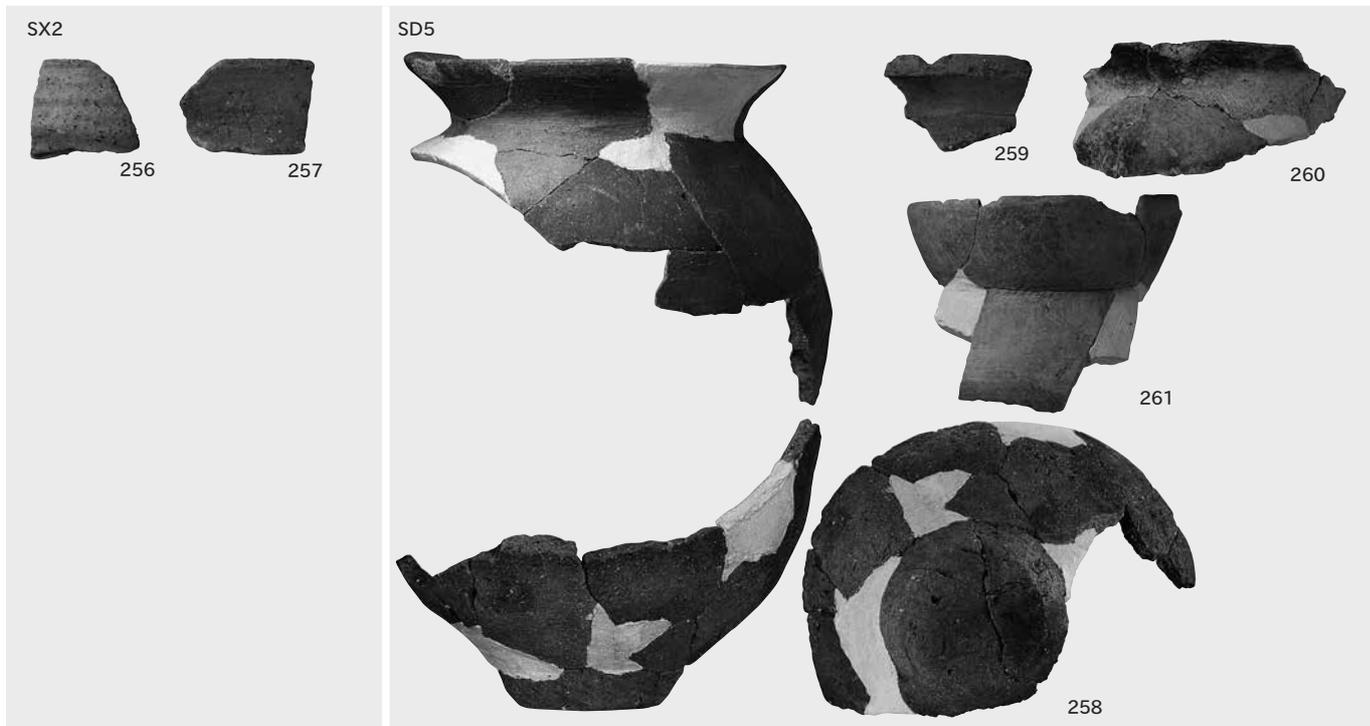




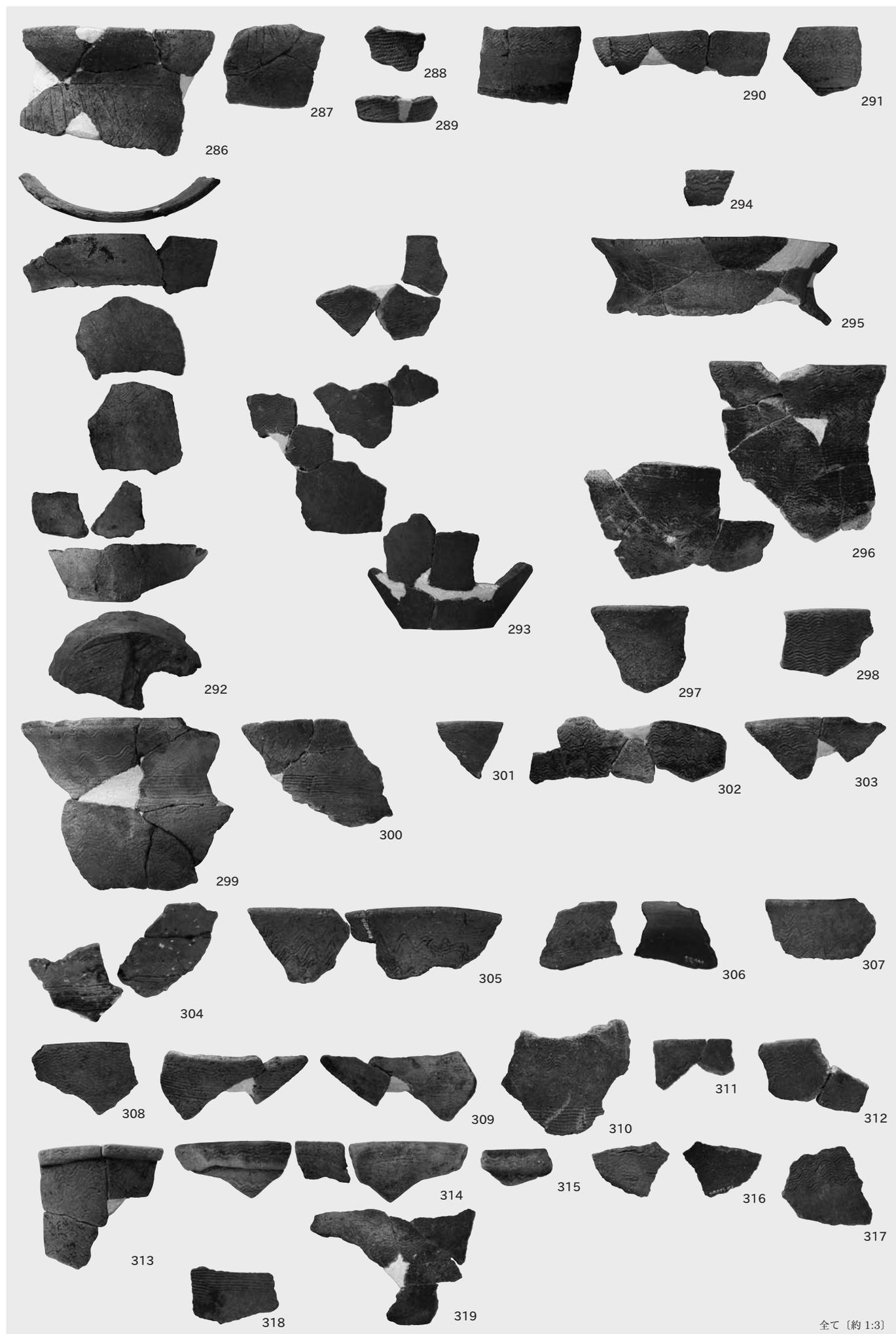


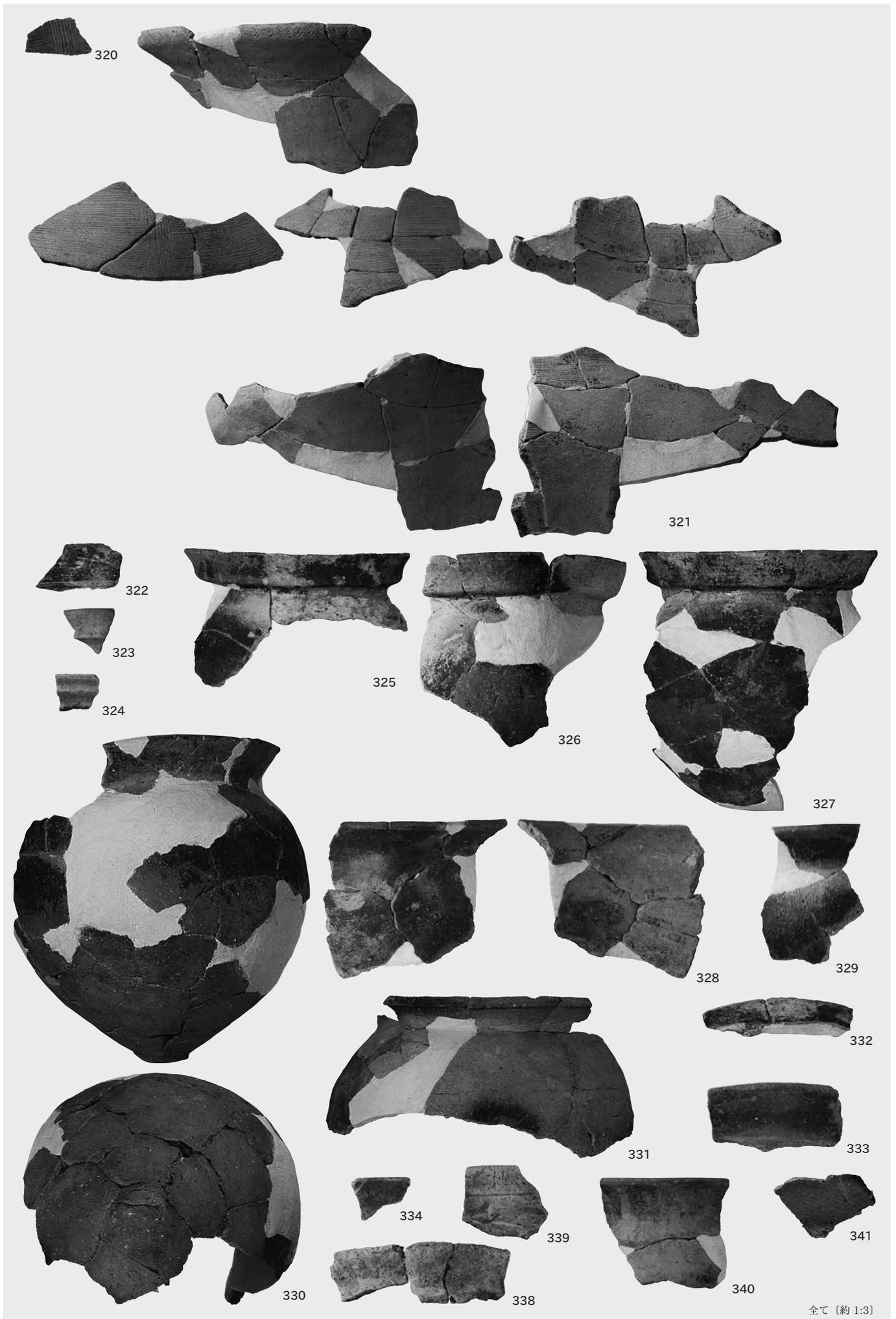


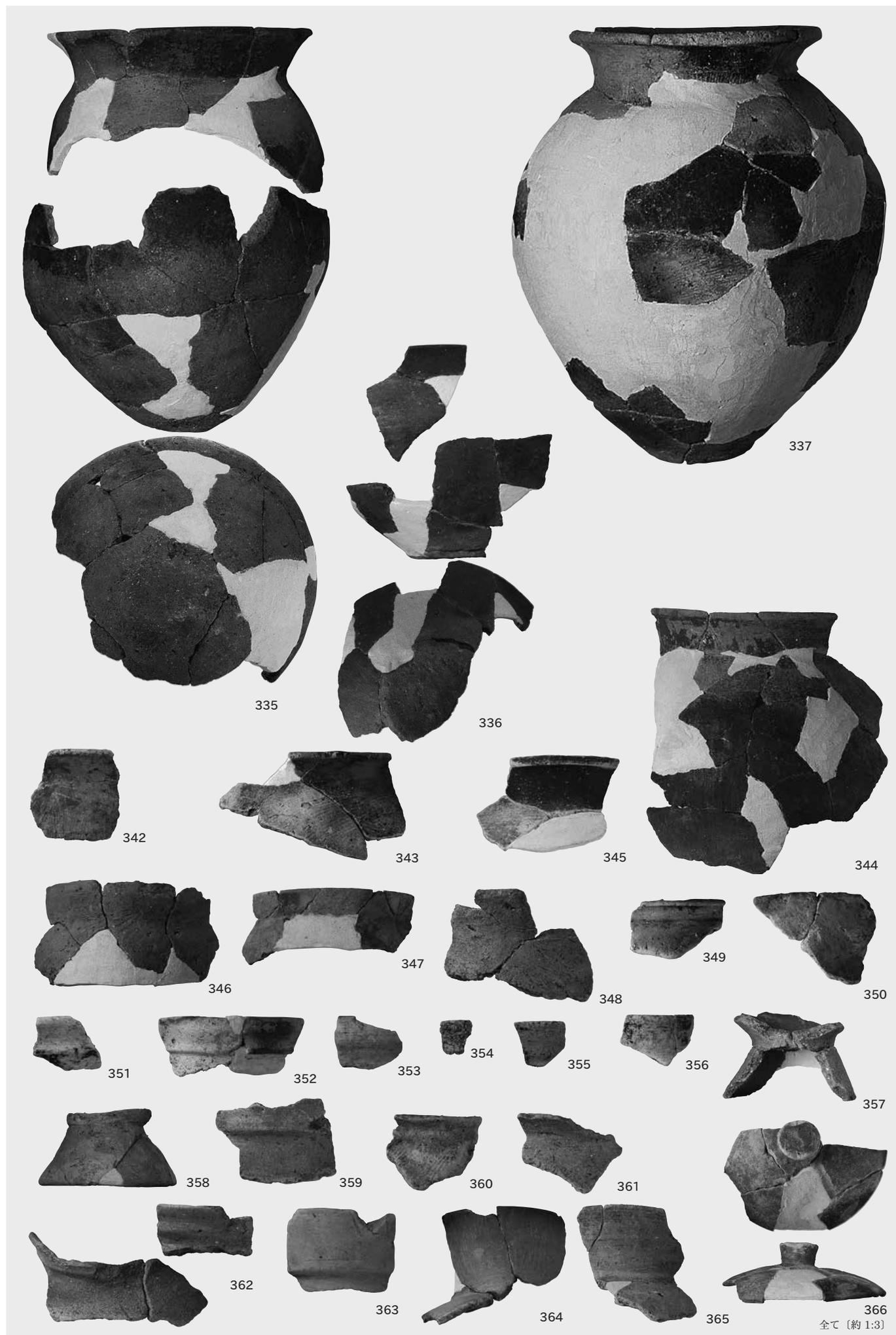
全て (約 1:3)



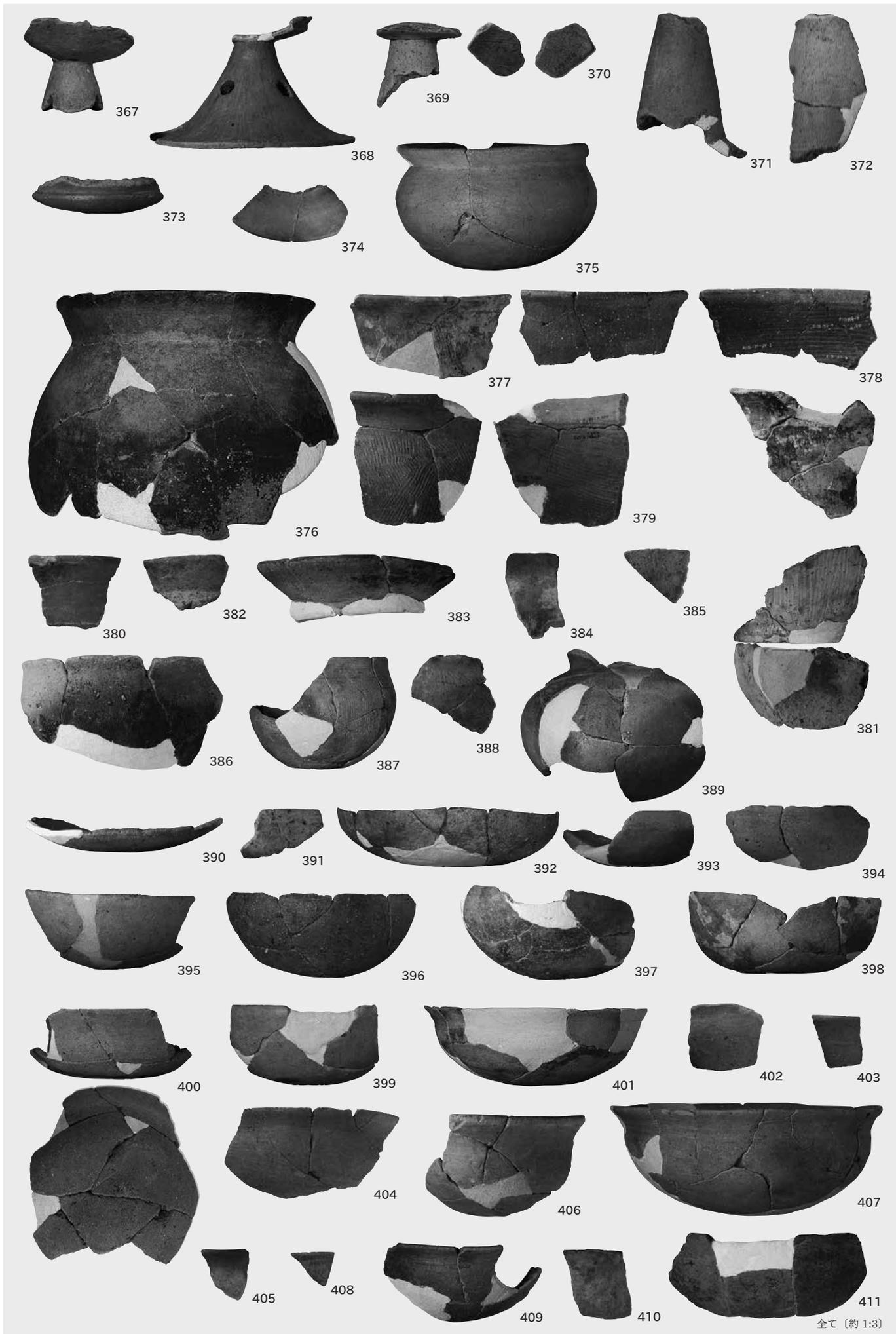
285 (裏面)
全て (約 1:3)

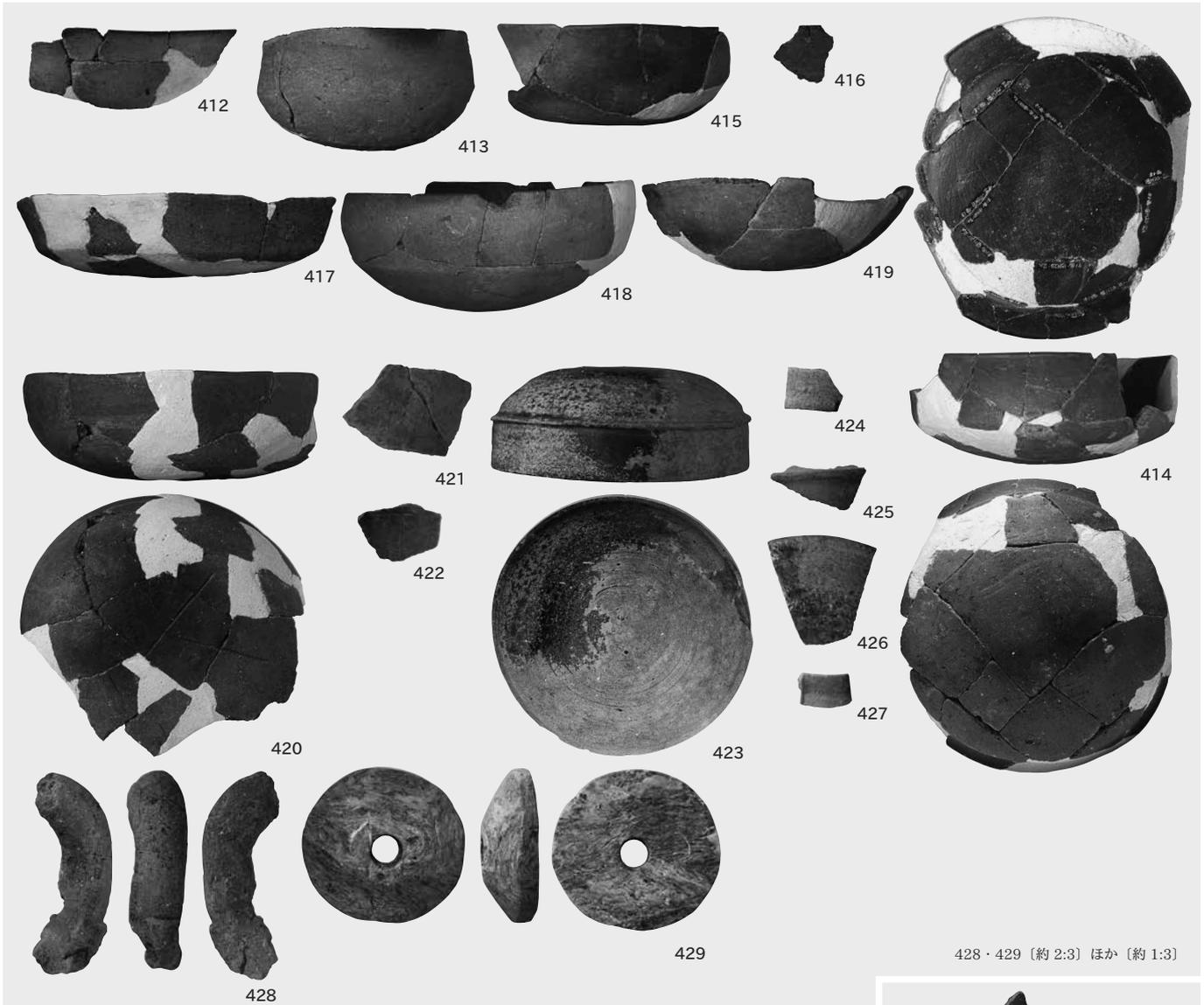




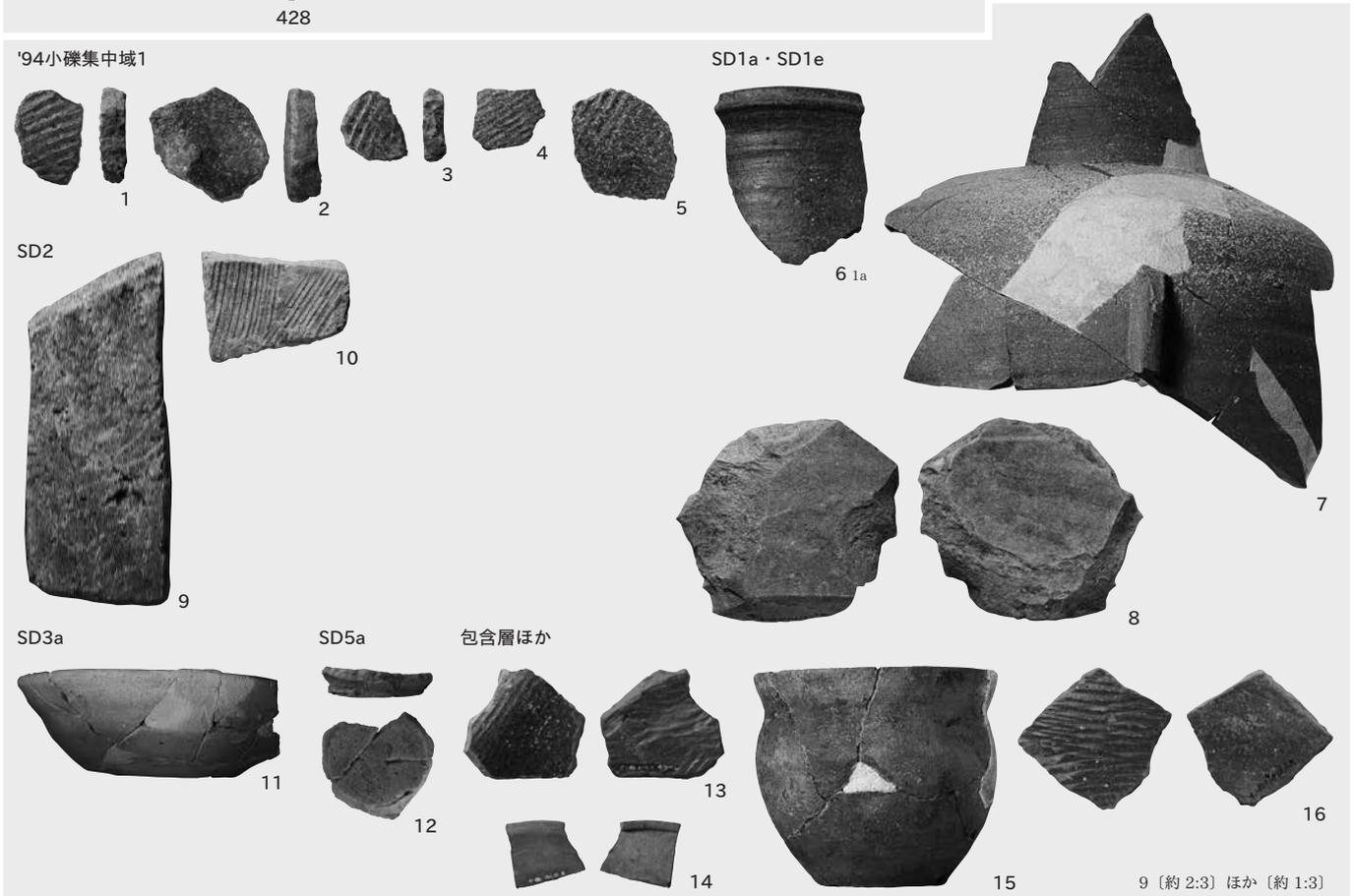


366
全て (約 1:3)





428・429 (約 2:3) ほか (約 1:3)



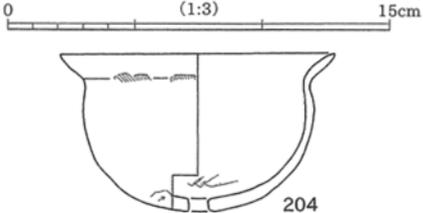
9 (約 2:3) ほか (約 1:3)

報告書抄録

ふりがな	おのざわにしいせき							
書名	小野沢西遺跡							
副書名	上信越自動車道関係発掘調査報告書							
巻次	XIII							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第131集							
編著者名	土橋由理子							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981							
発行年月日	西暦2004(平成16)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おのざわにしいせき 小野沢西遺跡	にいがたけんなかぐび 新潟県中頸 きくみんみょうこうむら 城郡妙高村 おおあざせきやまあざ 大字関山字 おおみね おの 大峯・小野 ざわにし 沢西ほか	15547	74	36度 55分 04秒 (旧座標)	138度 13分 06秒 (旧座標)	一次調査 19931025～19931029 19931108～19931111 19940620～19940628 二次調査 19940907～19941118 19950424～19951018	13,870	上信越自動車道の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小野沢西遺跡	散布地	縄文 弥生 古墳 古代 中世	自然流路10条、ピット8基、溝5条、		縄文土器・石器 弥生土器 土師器・須恵器・紡錘車 土師器・須恵器・砥石 珠洲焼			

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第131集	
上信越自動車道関係発掘調査報告書 XIII	
小野沢西遺跡	
平成16年3月30日印刷 平成16年3月31日発行	編集・発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市新光町4番地1 電話 025 (285) 5511 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新津市大字金津93番地1 電話 0250 (25) 3981 FAX 0250 (25) 3986 印刷・製本 北越印刷株式会社 〒940-0034 新潟県長岡市福住1丁目6番27号 電話 0258 (33) 0306

新潟県埋蔵文化財調査報告書第131集 『小野沢西遺跡』 正誤表

頁	正	誤
3 第3図 スケール	(1:800) 50m	(1:3200) 80m
図版17		スケールとNo.204の土器の一部が欠損